八月一日發行

明治四十五年七月二十三日印刷納本
毎月一回二十三日印刷納本
明治三十三年十二月二十五日
第三種郵便物認可

女學世界



第十二巻
第十一號

博文館

淑女のみまへに參らす歌

海行かば　肌身離さな
レート粉白粉　水の後先き
粧よく召した　美しき化粧姿
浴むかに　ゆめな忘れぞ
レート粉白粉　波打際の
逍遥に　手柄にいけた
賑やかな　化粧心地



「コレ以上のものは無し」

ご仰せらるゝほどに、最も氣が利いて、最も涼しさうなる御支度は

透縞明石の御召物が第一なるべし、價は十六圓内外。明石地に縞の處を強く現はしたれば、地の透きて見ゆるもの。これに、

明石丸帯を締め給はゞ、寸分の隙なかるべしと思ふ。柄合は縞風を變化せしめたる瀟洒させるものが多く、價廿二三圓。次に

越後縮の**長襦袢**には當世流行のドローンオークにて流れに撫子などの模樣を巧みに出せば、此上もなき上品なる好みなり價十七八圓。

かくて五六十圓にて、立派なる酷暑用の御召物一式を調へ得らるべし
御注文被下度奉願上候。

東京駿河町

三越吳服店

女學世界 第拾貳卷第拾壹號 銷夏號目次

クラブ新聞

●電車の中

某實業家夫人談

暑くなりましては車より電車の方です車は窮屈な上に日除けの幌はあつても、頭を壓へられるやうで、如何にも狹苦しい暑い感じが致します。

電車も込んではいけませんが夕方お勤めの方々が一通りお歸りになつた時分すいた電車にゆる〳〵と座を占めて、大川端や丸の内、濠端などを、そよ〳〵と涼しい風に吹かれながら走る時の心持と言つたら、何とも言へず、すがすがしい氣分がします。

それにしてもお化粧ですねえ。車に一人で乘つてゐるなら、まあどんなお化粧をしようと勝手と言へば勝手な譯ですが、電車の中などで、人様の向ふ側に座つてゐる時に、あんまりコテコテとしたお化粧をしてゐますと嘸人様に暑苦しい感じを與へるだらうと存じます。

ですから、私なども、こんな不器量では厶いますが、せめてお化粧でゞも人様に暑苦しい不愉快の感じをおさせ申したくないと思つて、いつもクラブの薄化粧を致してをります。

四季いづれにも適ふお化粧だとは存じてゐますが、クラブのお化粧は殊に夏が好いやうに思はれます。

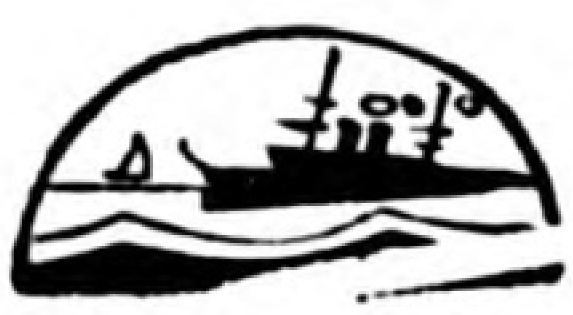
禁轉載

- クラブあらいこ
- クラブおしろい
- クラブはみがき
- クラブ美身クリーム
- 煉香油クラブ美髪用ポマード

本店新案

山と海





夏のあつさを山に避け
影も澄みたる眞淸水に
朝な〳〵の口すゝぎ
クラブ齒磨つかふ身は
塵の浮世をのがれ來て
玉の宮居に入るこゝち

夏のあつさを海に避け
いさごを洗ふさゞ浪に
夕べ〳〵の水づかり
クラブ洗粉つかふ身は
潮のにがりも物ならず
肌柔かにつや〳〵として

扇の風

夏の外出に片時も忘るべからざるものは扇ぞかし。

青葉の風は涼しけれど、雲低く蒸しては風鈴の音にだに立たぬ折もあり。

建物の陰、障子の關に隔てられて、あたら涼しき風の室に通はぬ所もあり。

さる折柄に、風を送るたゞ一つの賴みは、座に備へたる團扇ならずばこの扇なりけり

あゝ、嬉しき扇の風？ つれて立つゆかしき香なしのばすや。

クラブ洗粉のゆかしきかなり
クラブ白粉のゆかしきかなり

和歌

、初夏の三味線堀の夕月夜往來の人のクラブにほへる　青山　杉廼舍生

、ぬれ羽色クラブの匂ふ黑髮に灯影よろしき初夏の宵　麹町　磯山波子

○初夏の若葉の匂ふ朝窓にあぢさゐめきてクラブ溶く君　同人

○ふとさめてクラブの馨るやはらぎにまたも樂しき夢を追ふ哉　越後　谷内雪娼

◎初夏の夜の乘替繁き須田町やポマードの香の揺れては消ゆる　府下　巴



なつかしき姉君の手紙

暑い午後の獨りのつれ〴〵に倦いてうつとりと椽に坐つてゐた靜子は、郵便の一聲に驚かされて玄關に出て見ると、一目見てそれと判るなつかしい姉上の手紙、イソ〳〵と手に取上げて封を切ると避暑地のことども何くれと認めた、何時もながら美はしい水莖の跡、あゝ羨ましい姉様は……と今更の様にいつそ憎らしい程に思つた、色の白きは七難隠すといふ、それは容貌の上、藝の上では字の巧みなのが七難も八難も隠せると言へやう靜子の姉を羨むのも無理はない、けれども靜子は失望するには及ばない、茲に

大日本習字速進會（神田區駿河臺鈴木町）

といふ會がある。此會はたゞ化學を應用して器械的に字を上達させる許りでなく支那西洋日本の習字法の長所を取り根本的に字劃の智識を得させる最新式最正式の習字法を行ひ既に著しき成績を擧げ斯道大家の賞讃を博して居る筆者は女文字の泰斗大口鯛二先生、靜子さんの様な人は速に入會すべきである。目下入會者には種々の特典あり、葉書で申込次第見本付規則書を送るとのことである。

女（いの二）

金張懐中時計…景品付き…大廉價發賣



時間正確ならざれば時計の効なく金張にして瞬時變色すれば眞の金張にあらず本品は夙に聲れ高き米國時計會社美人商標刻印付特製品にして兩蓋純宪斜子刻み中蓋付三枚蓋龍頭巻引出し針廻し機械最新アンクル式寶石入四拾時間持紳士用15 16 17 18形貴婦人用金張梨地片硝子13形均一特價

五圓五拾錢

本品は製造會社が多年の實驗と嶄新なる化學を應用して十八金張に製造したるものにして普通瑞西製メッキ側等の粗製品と異り眞の金張故に金色燦爛として**十八金側**を凌駕し尚ほ機械の要所には寶石を以て優に精巧を極めたるものなれば完全無欠にして進遅振止の憂なく故に弊舗は責任を重じ**廿ケ年**の保險を附す

景品には舶來鎖、美術眼鏡入時計メタル及鹿皮の三品を進呈す望の方は女學世界廣告に依り御注文の旨御申越次第代金引換小包郵便にて送る途費貳拾錢

爲替生注意 弊舗は信用を重んじ遠隔の購客にして現品御覧なく御購求後万一貴意に適せざる時は無割引他品交換又は代金返戻す

玉局宛 ▲大阪市東區上本町五丁目 ▲振替大阪一四一八五番

貴金屬時計商 **夏目時計商舗**

從二位勲二等伯爵 鷲尾隆聚閣下題字 池の坊小西照月宗匠著

和洋頗美本全二冊 圖畫百數個入 定價四拾錢 小包送料八錢

池の坊流 生花の手びき

本書は一般有觸れたる生花指南書と異り既に巻を開けば悉く圖畫を挿入れ手を以て教ふる如く輕妙なる行文に獨特の趣味多大の價値を感ずべし蓋し生花上の心得は此書に網羅して漏さなし是非一本を求められよ

宮城千代子編 **實用裁縫手ほどぎ** 價廿五錢 郵税八錢

本書は婦女子に極分り易き様圖畫二百八十有余も加へ詳しく説明し尚背敎紐止等は一々彩色して糸の縫方迄示したれば裁縫を學ぶに最良書

赤松登美子編 **西洋料理の仕方** 價卅五錢 郵税八錢

秋本久子編 **女子普通早學問** 價拾五錢 郵税四錢

販賣所 大阪市西區九條北通二丁目三九 振替貯金口座大阪一七七八五番 **岩崎浪速堂**

大阪小笠原病院長實驗 皮膚病專門新劑

皮膚石鹸（びふしやぼん）

夏と皮膚石鹸!!

皮膚石鹸を常用し玉はゞ巧妙に配伍されたる藥効により眞に肌の色を白く艶かにしアセモに罹る事なくナマズ、タムシ、インキン、ヒゼン等の**皮膚病**を豫防し各種の傳染病毒を豫防消毒す肌を荒さずして垢落見事なり從て浴後の爽決他に比すべきなし今や皮膚石鹸は其品質の精良なるに於て其効力の卓絶なるに於て其價格の低廉なるに於て衞生と經濟上不可缺物として何れの家庭にも常備せらるゝの光榮を有するに至れり

定價 一個五錢送費貳錢、半打廿八錢送費四錢、一打五十錢送費八錢

▲効の謝狀數多けれど今左に其一例を掲ぐ

帝に倍舊の愛用を祈る

略文御免老生過日御地南區上町觀友守本氏方にて貴店發賣の小笠原皮膚石鹸二個貫受試用致候處是迄の十年餘も年々夏期に至れば身體諸所に腫物出來殊にいんきんに甚數痒みを生じ困難致候處只二個の石鹸使用の爲めか本年は今至るも痒きを知らす依て充分使用致度候如何なる手續爲せば御送品被下候哉此段及御照會候也

東京市淺草區聖天町五十番地 新見牧助

大阪東區本町一丁目 本舗回天堂御中

本舗 大阪東區北久太郎町四丁目 **回天堂** ●東京小石川武島町廿一 **回天堂出張店**

●到る處の藥店に有り品切の節は本舗又は出張店へ御注文あれ





田中製版所三色版

武田 壽 畫



最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾八年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
醸造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一番 振替口座五〇二一番

(その一)

美術

造花材料

教授科目

梅の花、忘れな草、八重櫻、つゝぢ、藤の花、桔梗、朝顔、すみれ、南天、庚申ばら、菊、撫子、百合、牡丹、スヰトピー、チユーリツプ、薔薇二種、其他和洋花簪數種　材料の製法等より完全に教授し且器械材料見本迄皆添へてありますから誰にも出來ます。

定價裏御入用ノ節ハ郵券貳錢御送ノ丁

東京市淺草區駒形町十四番地

三國屋

關口商店

電話下谷四〇五二番
振替口座東京一一六四二番

第四回新學期

美術造花通信教授

講義の特色

花瓣の裁ち方、造り方、葉の造り方、花簪の組立方等總て造花に要する染色法並に器械の使用法に至る迄一々圖解を施して説明がしてありますから全く素人の方でも前記器械を以て形を造り見本と比べて組立つる時は容易に熟達します

本會規則希望者は送料二錢送れ
製品見本附き規則書は拾錢送れ

東京神田區西小川町一ノ一

美術造花講習會

電話本局四五四七番
振替東京九一四八番

催眠術

通信教授

全學期教授料二圓八十錢
三回分納隨意■貸書貸與
等の大特典あり■卒業後
帝神得業士の稱號認許す
詳細入會案内書無代送呈

大阪市東區生玉町

帝國神秘會通信部

男 ちゞれ 女 くせ 毛

赤毛は何程の難毛も自然に矯正黒化良き艶の出る最新發見專賣特許奇液を郵券封入申込の方に教授し誓て美髪に治して差上升

東京千駄ケ谷五九五

岩阪澄子

◎產婦人科 ◎小兒科

宅診 午前
往診 午後

病室並ニ產室ノ設備アリ隨時入院ノ需メニ應ズ

院長 女醫 鷲山改姓 吉岡彌生

東京市麴町區飯田町四丁目卅一番地

東京至誠病院

電話番町(二二五七)

女(ろの三)


海水浴と
千代田にスワン
海水浴や溫泉へ
避暑なさる御婦人方
男子方には、是非共
千代田香油を
お勸め致します。本品は
毛髮を養ひ、癖毛を矯し、夏季は
香水の代用ともなる
高評嘖々たる佳品です
定價 七十錢 卅五錢 廿五錢 十七錢 郵稅四錢
英國リバー會社製造 最良の浮石鹼は
スワン石鹼
本品は泡立ちよく肌ざはり滑かにして經濟と衛生に適す
千代田香油本舖
スワン浮石鹼輸入元
山岸三之助
東京……馬喰町
大阪……鹽町
振替東京二〇五〇〇番

女(その四)



佐々木林風畫

最見易き琴の譜本

生田流 箏曲新譜

井上胡蝶著

四版巻一定價壹圓卅錢送料六錢再版巻貳巻三定價各金壹圓拾錢宛送料各金六錢 代金引換各金拾六錢増

曲譜目次

巻壹 ―― 四季の花 門松 鶴の聲 黒髪 六段 亂 八段 金剛 夕顔 新高砂 越後獅子 千鳥 茶音度 春の曲

巻貳 ―― 小督の曲 春日影 朝外出 六段 前歌 難波獅子 末の契 松竹梅 殘月 秋風 八重衣

巻三 ―― 冬の曲 松蓋萬歲 八千代獅子 雪 九段 巖上の松 新雪 月花凱旋喇叭の曲 四季の詠め 夏の曲 秋の曲

生田流 山田流 新譜 箏曲之栞 第一輯

曲譜 定價金壹圓送料六錢 代金引換十六錢増

門松 ことぶき 春雨 六段 七草 瀧盡し 御製の曲水 は器 千鳥 菊水 那須野 御國の譽 外數曲

山田流譜本

江の島 住吉 松上鶴 初若菜 四季の艶 今樣朝妻船 松風 菊水

卅五錢 同上 同上 同上 同上 四十錢 三十錢

ほとゝぎす 櫻狩 那須野 春の宮 子の日遊 山田流手ほどき 六段外七曲合本

三十錢 四十錢 同上 卅五錢 五十錢

送料各貳錢

本書の特色と購求者の便利

一 以上各種の譜本は何れも調子の合せ方や音符休止符左右手法其他彈琴に必要の事は悉く平易明瞭に記載しあれば直接師に就きて習ふ通りであります

一 此譜本は西洋樂譜の心得無き人でも直ちに了解せられ且つ言葉記號を附記しあれば音符を知らぬ人も之に依りて彈奏せらる事を得べく自然の間に完全なる樂則を覺え給ふに至るべし

一 本書の購求者は曲中の不詳は返信料添へ質義あれば無料之が說明敎授をなすべし苟も琴を習はんと欲して師を得給ふに難きか或は一渡習ひて忘れたることを歎かせ給ふこと勿れ本書は是等の人々に大の滿足を與へ得べしと信ずればなり

琴調子笛六十錢 一圓五十錢 二圓 送料各八錢宛 琴糸入器其他琴及附屬品一切

發行所 福岡縣福岡市外馬出 東公園博多座横 箏曲通信教授所

女(はの一)

女（はの二）

わきが
ラヒヨン

本劑は現今の最も進歩せる學說と幾多の實驗とに依り發見したる純理想的製劑にして是れを患部に塗擦すれば其主成分の力に依りて痛みなくして其組織を變更し依て惡臭を發する原因たる毒素の分泌を止むる作用を有する特種の製劑なるが故に如何程頑固劇烈の難重症と雖も必ず奏効す本劑の力に依り根治し得るも決して他病に變る恐なし速に用ひて病因を根治せよ 內價七拾錢乙壹圓卅錢特別製貳圓五拾錢五圓

通經新劑 白下り
著名 ニピルタ

本劑に了く[illegible]を痛めず如何ほど長き月經とまりも必ず通經す二三ヶ月位のは試に壹劑も用ゆれば効を奏す二三ヶ月以上のとまり又は血塊ある[illegible]に全く流經す本劑は効能確て強きも毫も子宮身體に害なく安く通經す月經不順よりおこる諸病の適方なし古血を一掃す近頃怪き類似藥種々顯る用藥者館名に注意を乞●半劑六拾五錢壹劑壹圓廿錢特別製貳圓卅錢參圓五拾錢

ぢを治す

從來迂遠なる內服藥に治療を委ね適切なる治方を講ずる者少し本劑は近世醫學界の貴重なる新藥を以て座藥に調製したる肛門內に挿入する疼痛を覺えず[illegible]溫の爲めに少しも徐々適切に溶解し直接病部に作用し穴痔いぼ痔烈痔蓮痔脫肛又は痔瘻の初期の痔病一般に對して偉大なる効驗を奏す特製半劑八拾錢壹劑壹圓五拾錢特別製貳圓八拾錢

にきび・そばかす の一二[illegible]

男女青春の時期に多く發生し吹出物に對し容貌を醜く[illegible]化粧のにきびなどを[illegible]從來の姑息なる外用藥に依らず內服藥の力を以て皮膚間の組織に及ぼし根本的療法たる[illegible]皮膚病學博士サンナ氏の學說に基き調製したる新劑にして內服日ならずしてにきびそばかす効著しく試に輕きは一劑重きも特製にて奏効す本劑は色を白く美貌を全ふせよ速に用ひて天賦の美貌を全ふせよ●半劑五拾錢●壹劑壹圓●特製貳圓

注意 一各藥共に小包料拾錢と●ラピヨン●ハンドコロン●ベクトス●ニキビ●ぢの藥を御注文の方は外に小包實費二拾錢と郵合拾五錢藥價の外に拂込下され度△爲替は神田振藥町局振宛

色の白くなる
ハンドコロン溶液

本劑は歐米貴婦淑女粹士間に大に評判を博したる新材料に依り組織したる新成液にして有觸たる白色藥とは性狀を異にし本劑の力に依り皮大に謝を盛にし漂白性あるを以て其新陳代謝し且つ新陳代謝と共に次第々々に白色艶美となるB印特製壹圓五拾錢A印並製壹圓

毛のはへる
毛原名 髮生養液 ベタネス

本劑は最も進歩せる發毛劑にして藥液を塗擦すれば皮下に吸收せられ毛根を刺戟し毛髮の發育を速にし完全なる毛髮を生ず又本劑は拔毛を止むる効能著しく又常に香油に混用すれば生際の毛をきれいにす●眉毛●口ひげ●其他にも適合する怪しき無名の實藥に迷ふ[illegible]特製壹圓卅錢特別製貳圓

りん病
キーロン

本劑は最新の治淋藥にして急性慢性の淋病を治す痛みを止むも速に輕快を覺え膿血が漸々に止り輕きは一劑重きは二劑分の惡性慢性には特製を用ゆ速に奏効す本劑を內服すれば強度の殺菌防腐液となりて小便と共に排泄せられ自然の洗滌法となりて淋菌を驅逐し人知れず治療を全せよ輕症用六十五錢重症用一圓廿錢特製重症用貳圓卅錢

梅毒
ギーン

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる新劑にして全身の毒も大小便により永年痼疾劇烈の梅毒●そうふう●よこね●かんそ●骨うづき其他如何なる惡性の梅毒にも大効あり輕症は半劑を重症には二劑用ゆ醫して奏効す藥價半劑八拾五錢一劑一圓六拾錢二劑參圓

らい病
ヒヒー發見の

本劑は最近歐洲の大家が最良藥と認めたる有力藥品の成分にして何人にも容易に服藥し得る様製劑の調劑の實驗に鑑み丸藥となしたる有効なる本劑に優るものなしにして試に一劑分丈けも用ゐるよ見大効を奏す一劑廿日分三圓二劑四分拾圓●郵券三錢送れば明書進呈す十日分五圓特別製九十日

專賣 東京神田區小川町四十
オリエンタル藥館

女(はの三)



何時も變りなき價値を保つものは
無疵にて光り良き金剛石なるべし
東京京橋
南傳馬町
大西白牡丹
大西白牡丹にては永久の信用を重んじ
選良の寶石を貯へて御高命を待てり
電話京橋
三十番 三十一番 二九七五番
振替口座東京九二九三番
イ 金剛石一個入 白金製 四百卅圓
ロ 金剛石一個入 金及白金 二百卅圓
ハ 金剛石一個入 十八金 九十五圓
ニ 金剛石一個入 白金製 百五十圓
ホ 金剛石一個入 白金製 壹百圓
ヘ 金剛石七個入 十八金 八十五圓
ト 金剛石二個入 十八金 五十圓
チ 金剛石入 金及白金 彫刻 八十五圓
リ 金剛石一個入 十八金 七十圓
ヌ 金剛石三個入 白金製 五十圓
ル 金剛石一個入 十八金 廿八圓
チ 金剛石一個入 金及白金 卅二圓
ワ 金剛石一個入 金及白金 三十圓
カ 金剛石入金製 透彫刻 廿九圓



阪田耕雪畫

婦女界

八月號
一冊十五錢郵税一錢五厘

◎子供の遊ばせ方

▲子供はどう遊ばせるがよいか　高島平三郎
▲私の子供はかうして遊ばせる　川瀬富美子
▲日本の遊戯と西洋の遊戯　甲賀藤子
▲暑中休暇をどうして遊ばすか　杉浦恂太郎
▲子供の室内遊戯は何がよいか　雨森さへ子

▲親ごころ……鳩山春子
▲壯烈なる國士の母　福本日南
▲これからの女……澁澤男爵
▲熊本籠城中の初產　與倉鶴子
▲小兒の嘔吐はどうして起るか　豐福學士
▲避暑と夏の飮食物　伊藤學士
▲敍勳された跡見花溪女史　記者
▲良人の職業を理解する妻　村上靜人
▲家庭講談 細川忠興の夫人　天野雉彥

▲名著梗概「ベッタ」　野上臼川
▲小說「月影」　秋山三郎
▲美しき友情……
▲お伽「母のこゝろ」
▲新髮形ローマの結び方
▲經濟なる衣服の裁ち方
▲日常の作法……
▲婦人の內職……
▲おも白い夢の判斷……

笹木幸子

◎見ても涼しい料理法……よし子

しら露

東京神田表神保町
振替東京第一三五
同文館

女(にの一)

THE LADY'S GRAPHIC

婦人畫報

八月一日發行　八月卷　一冊廿五錢　郵税二錢五厘　三冊八十錢　六冊一圓五十三錢　十二冊二圓九十四錢

畫報

■（附錄）河添柳（鏑木清方畫伯筆 二頁大三色版）
▼阿部夫人と筆蹟 ▼杉子爵と愛孫三孃
■綠蔭濃なる御庭に於る賀陽宮二女王殿下
■竹田宮妃殿下と恒德王殿下
■鍋島島津岡部諸令孃
▼八丈島のお嫁入り ▼女學生の米販賣
▼マーベルボードマン ▽露西亞女學生觀光
■時代の髮 ■ボート ■美容術

■驢馬と西鄉侯爵令息令孃
▼夕すゞみ ▼大谷伯盆栽
■跡見女史叙勳
▲名譽ある能樂少年少女
■小鳥と三井令孃
▼婦人と馬 ▼浦和婦人會
■蓮池と美人
■洋裝の江木夫人

綠蔭臥榻の好伴侶▲家庭必備の淸凉劑

讀物

■母の見識　三宅博士
■歷史の裏面に働らく女の力　黑板博士
■誤られたる親の愛　中島德藏
■新しい意味の夏　三輪田元道
■癇癪持の子供　岸邊福雄
■常夏　三宅花圃　野上彌生　長谷川時雨　岡田八千代

▽博識な近衞公爵母堂……ゆかり
■手紙に現れた女の面影　山の樺
▼夏の流行と趣味……黑田學士
▼八月を樂しく暮さん……嘉悅孝子
■十内より其妻に　桑田春風
▼男まさりの婦人春▲美容體操
▼古ネクタイ利用▲この頃の料理
■或婦人に與ふる手紙（小説）　島崎藤村
▽眞夏のすがた▲流行の心理……
▼夏の育兒衞生……加藤博士

東京麴町區飯田町四ノ四　電話番町二三三九番
東京社
振替東京一一八一八番　各地到る處の書店に在り

女（にの二）

THE GIRL'S GRAPHIC

少女畫報

第一年第八號　定價拾五錢郵税一錢五厘

[illegible]

▼金魚　石川寅治氏筆　彩色石版口繪　編輯顧問　高島平三郎先生

畫報

◎虫籠◎朝顔◎假裝◎寫生◎園藝◎虫干◎夕涼◎作法◎お出迎◎女の使り◎ピンポン◎遊動圓木◎裁縫と割烹◎編み◎金魚の色々◎休暇中の仕事◎八丈島少女◎センターボール◎テニス◎ゲーム◎何して居ろう？◎名媛の御令嬢達◎何れ客やら主人やら◎ボートと乘る

◉いよいよ出ていよいよ清新なる内
◉容と鮮麗なる寫眞とを御覧下さい

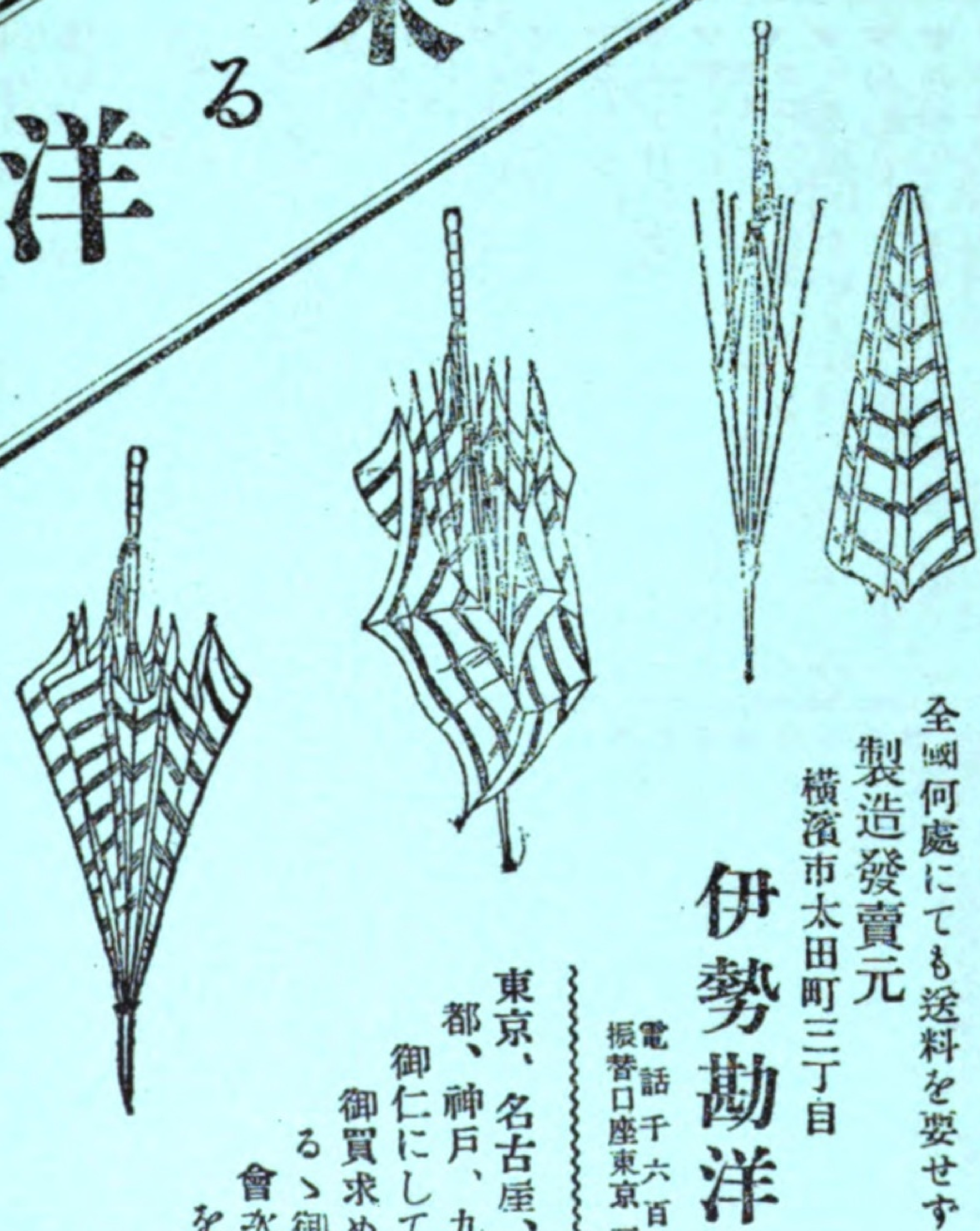
讀物

▼暑中妙藥　きちやうめん丸……倉橋顧問
▼少女小説　やどり木……尾島菊子
▼少女家庭　御子嬢とお松……手塚かね子
▼探偵女……中川浪
▼心がけのやさしい女學生……鶴見李子
▼小説　わかくさ……國木田治子
▼實話　鳥の心……太田三郎
▼眼の裁判……佐々木邦
▼白鳥行……堀内新泉
▼女學生……谷紀三郎
▼少女小品　白い雲……小野小峡

◉忘れ得ぬ人々の物語……夢二
◉少女し……
◉女學校參觀記……我川
◉昔の小笠とアカシヤ……思水
◉蠅と蚊……記者
◉描寫的の柄……
◉寄せ書の作り方……迎子
◉少女ノートブック……鈴木
◉帝謡子買……夢二
◉氷は斯うして出來る……
◉讀者と記者……
◉一口噺……
◉編輯だより……
◉其他懸賞種々……

▼潮音　井川洗厓氏筆　彩色石版口繪　編輯顧問　倉橋惣三先生

東京麴町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九　振替貯金口座東京一一八一八



なりひきご



うきぐさ



字が下手で困る

『字が下手でこまる、どうかして上手になりたひ』とは始終口癖のやうに言つて居る言葉であります。殊に御婦人の方は筆蹟の美事なると醜きとによつて其生涯の幸不幸はどれ位でせう。併し從來の方法で手習されても一年や二年では到底上手になることは出來ません。所が大變評判の高い專賣特許習字速成法で練習なされば性來どんな惡筆の方でも僅か此一夏の間に驚く程上達致します。それに同會は先々月專賣特許になりました「水書草紙」を無料で差上げるそうです。この草紙は白紙に墨で書いたのと同一に現はれて、暫くすると消えるので幾百回でも書けるのです。實に不思議なものであります。東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會(電話下谷三二一〇番)に「ハガキ」にて申込めば奇麗な見本附會則を無代で送つて來ます。尚近頃同會の盛況を羨んで類似の會が出來たそうです御注意なさい。



(ほの一)

新婦人叢書

新刊

第六篇

臙脂傳

長谷川時雨女史著

袖珍型クロース表紙
正價金四拾錢
郵税金四錢

材を狂言綺語に取りて反つて劇や淨瑠璃よりも麗はしく描き出したる美人の月旦にしてローマンチックの筆の妖冶なる巧みに過去の美人を捉へて之を紙上に活躍せしむ曩に女史の編みたる日本美人傳は專ら史中の美人を選びたりしが本書は全く正史上の人を取らず寬平より安永に至る間に小唄に顯はれ稗史の材となりたる錦木塚の政子山神郡司の女葛義太夫笠星三勝額の小三天滿お初二十五美人を拉し來り女史が縱橫の才筆を以て品隲したるもの筆々皆臙脂の痕ならざるはなし

既刊

長谷川時雨女史著
小島文子女史著
大平野虹氏著
兒玉花外氏著
黑公子著

第一篇 **日本美人傳**
袖珍型クロース表紙 正價金四拾錢 郵税金四錢

第二篇 **現代男性觀**
袖珍型クロース表紙 正價金四拾錢 郵税金四錢

第三篇 **名媛日記**
袖珍型クロース表紙 正價金四拾錢 郵税金四錢

第四篇 **日本艷女傳**
袖珍型クロース表紙 正價金四拾錢 郵税金四錢

第五篇 **現代女性觀**
袖珍型クロース表紙 正價金四拾錢 郵税金四錢

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 電話下谷四〇七九番 電話下谷一六七二番 **聚精堂**

女(ほの二)

八月の巻發行

定價 壹冊貳拾八錢郵稅貳錢五厘 六冊前金郵稅共壹圓七拾錢

新婦人

油取附紙白粉添附

急務たる夏季肺病手當　原醫學博士

夏季自宅美容法……　北原東京美容院長

癖毛縮毛を全癒した經驗　松下春子

八月の婦人好み……　あふち子

女子大學評判記……　宇宙兒

女の自覺病……　朧君子

書道自宅獨習法　加藤しげ子

男に騙され易き女の缺點　澤田撫松

頭髮の福音 ニンゼル香油の效果　市原蝶子

浴衣がけ 石版極彩色油繪……　石川寅治筆

リボンの薫……　コロタイプ極彩色入

表紙 川村清雄畫伯筆(蘇武の友)極彩色

鐵道沿線名勝案内
附錄電報賴信紙添

小說 崖くづれ　文藝協會女優林ちとせ孃作

寫眞版口畫は内藤千代子孃以下所謂新らしい女の肖像卅二葉名媛の手形は珍中の珍……

巻末附錄 家庭日誌 八月分 溫度表晴雨表獻立表來客控●九星與暦添

新婦人見本 郵券卅錢

賣捌所は全國著名の書林雑誌店

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 聚精堂 電話下谷一六七二番 電話下谷四〇七九番

女(三の三)


温泉場
何處の温泉で使つても
変化せぬ大學白粉は
全く鉛分のない
証據ですわ、
夏期の友としては
大學水白粉と
ツバメ香水が
てけてちつかしいのよ、

九條男爵夫人武子



夫人は九條道實公の令弟良致男の夫人にして本派本願寺法主伯爵大谷光瑞師の令妹なり

新婚の人



東京株式取引所理事伊藤幹一氏令息欣二氏夫人文子（大橋新太郎氏令嬢）

歯を大切と思はば

如此特色ある歯磨を
常に使用すべし

此モデル歯磨は歯科醫三百餘名の合議製劑に成合理的歯磨也

此モデル歯磨は殺菌作用を有し病原細菌を殺し齲歯を豫防す

此モデル歯磨は口内を清潔にし悪臭を消し爽快を感ず

此モデル歯磨は化學的作用により汚物を除き歯を白色美麗にす

現代醫學と化學との
進歩により生れたる此**モデル歯磨**

（往復葉書にて御申越になれば歯の衛生と題する册子を進呈すべし）

東京日本橋區小傳馬上町
日本歯科製劑株式會社



▶有名なる和洋小間物店藥店にて販賣す◀

女子大學家政講義

編輯所 東京小石川區高田目白臺 日本女子大學校通信教育會

家庭の和樂と幸福なる生涯は家政講義に得らるべし、開講以來空前の好評を博したるは本講義の優秀なる所以なり、講述が如何に懇切に平易に實際的なるか、科目の選擇と解説の方法の如何に注意せるか、先づ内容見本によりて本會の趣旨と講義錄内容の一班を知られよ。

◎會員募集

會則附き 内容見本 申込次第進呈

學科目及講師

○修養談 ○修身講話 ○教育 ○實驗心理學 ○兒童研究 ○法制大意 ○經濟大意 ○社會衛生 ○家庭理科 ○家事

諸名士教育大家

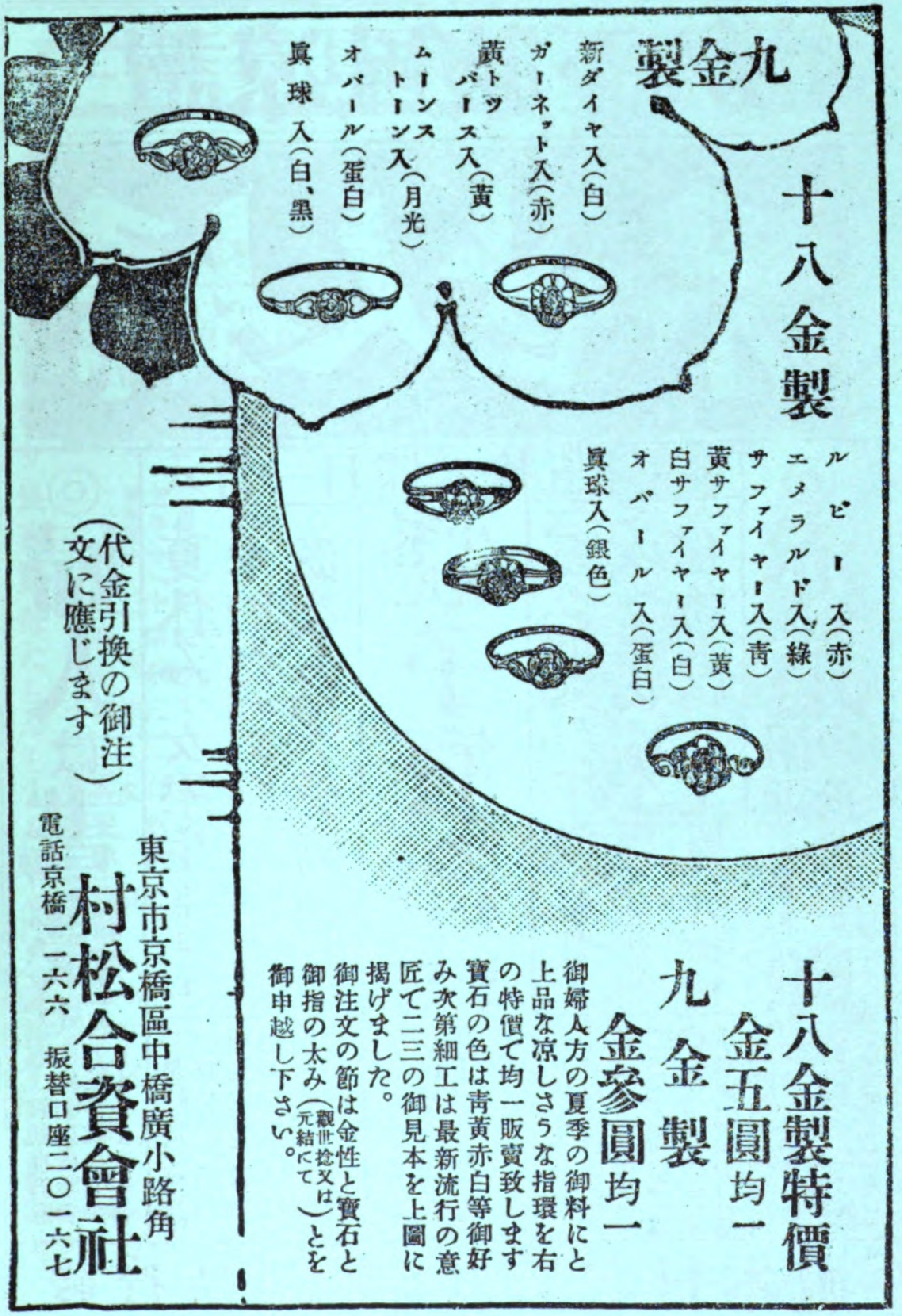
成瀨仁藏
麻生正藏
文學博士 松本亦太郎
高島平三郎
法學博士 奥田義人
文學士 中隈敬三
醫學博士 三宅秀
近藤耕藏
井上秀子

○作法 小笠原清務
○日本料理 笹木幸子
○西洋料理 手塚かね子
○裁縫手藝 櫻楓會研究部
○挿花 兒島晩翠
○家庭園藝 農學士 佐々木祐太郎
○自然研究 大橋ひろ子
○文藝 文學士 武島羽衣
○美文評釋 文學士 下村莢

○科外講話 女子演劇歌劇結婚問題家庭衛生問題等

◉將來家政を執り良妻賢母たらんとする婦人は本講義を讀め

發行所 東京小石川 精美堂
振替口座東京二八三八



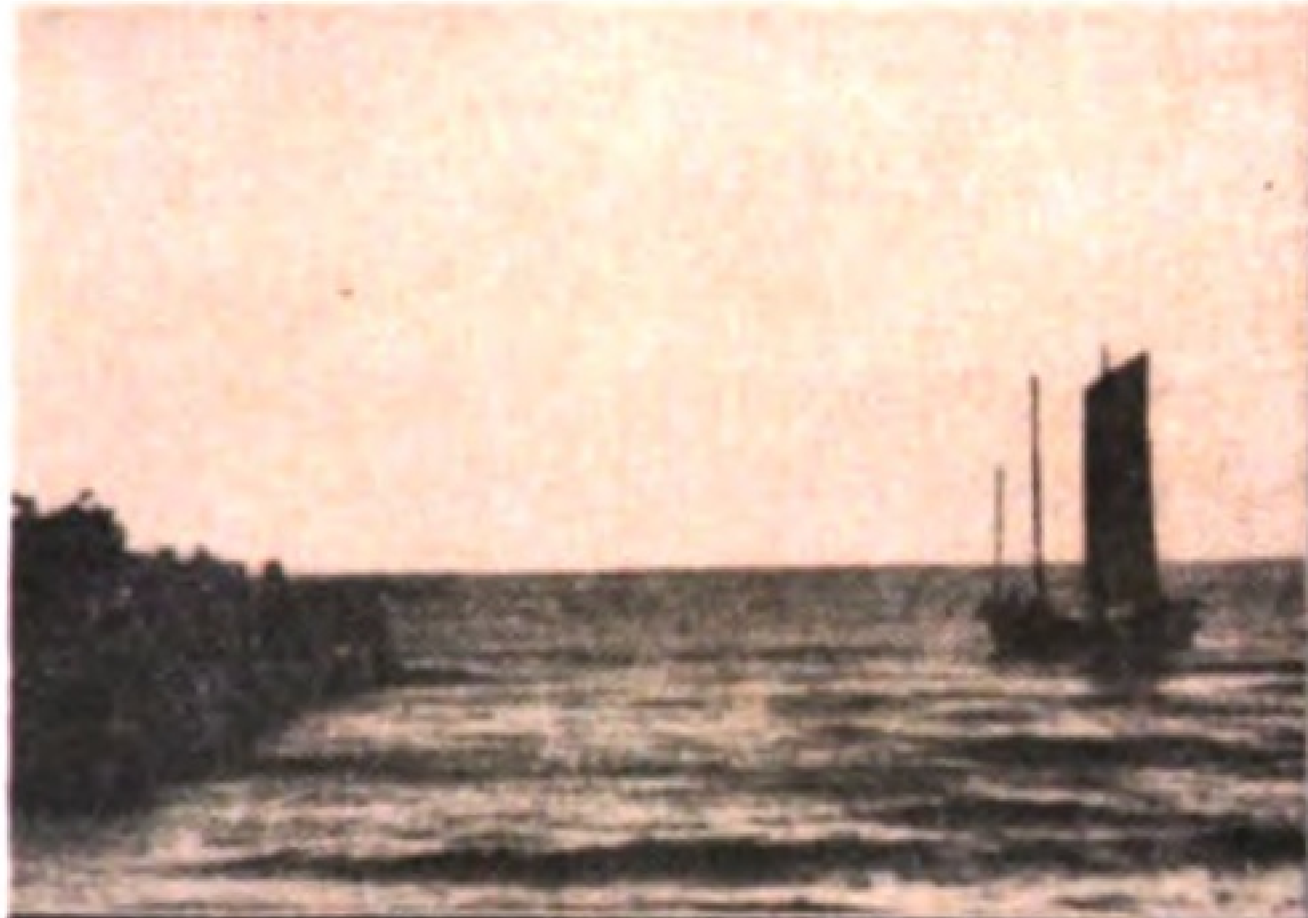
九金製
新ダイヤ入(白)
ガーネット入(赤)
黄トツパース入(黄)
ムーンストーン入(月光)
オパール(蛋白)
眞球入(白、黒)
十八金製
ルビー入(赤)
エメラルド入(緑)
サファイヤー入(青)
黄サファイヤー入(黄)
白サファイヤー入(白)
オパール入(蛋白)
眞珠入(銀色)
十八金製特價
金五圓均一
九金製
金參圓均一
御婦人方の夏季の御料にと上品な涼しさうな指環を右の特價で均一販賣致します寶石の色は青黄赤白等御好み次第細工は最新流行の意匠で二三の御見本を上圖に掲げました。
御注文の節は金性と寶石と御指の太み(觀世捻又は元結にて)とを御申越し下さい。
(代金引換の御注文に應じます)
東京市京橋區中橋廣小路角
村松合資會社
電話京橋一一六六　振替口座二〇一六七

汐風

子爵橋本長俊氏夫人つむ子



清風吹衣









右圖、茂木愛子（野田醬油釀造家茂木氏令孃、三輪田出身）、左圖、内田幸子（實業家内田直三氏令孃、棚橋高女出身）



ニキビ

吹出物を治療して色白く美しくする內服藥

ニキビ吹出物油顏其他皮膚ドス黒く色澤惡しく薄穢き等は概ね體內胃腸の變化より生ずる一種の毒素に原因す故に之を治するには必ず內服藥を以て體內より治療するを要す然る時は奏效確實にして外用藥の如く內攻の恐れなし是現今皮膚病學上の定論なり本劑は此理由に依り製出せる內服藥にして既に醫藥の成書に於て確實に効能を記載せられたるに係はらず先般報知新聞大阪每日其他八大地方新聞に於て社會的試驗の計畫を發表し多數の患者に試驗し續々好成績を報告せらる最早學理に於ても又實際に於ても疑ふの餘地なき有効藥たる事を確信するに至り茲に發賣す患者は只十錢郵券三枚封入申込あれば直ちに送藥すべし

藥價 四日分三十錢●一週間分五十錢●十五日分一圓
市內は電話かハガキにて御通知次第無料配達
地方は成るべく爲替又は振替の事

東京市下谷區上根岸町百十一番地
本舖 藥學得業士 金澤巖
振替東京四六七番電話下谷二二五九番

(その二)

艶麗無比の　第一巻第五號　八月一日發行

淑女畫報

四六倍判　口繪光澤紙寫眞版四十頁　石版三色版數頁　本文百頁

正價廿五錢　郵税二錢

六冊壹圓卅五錢　十二冊二圓六拾錢　税外要

◀畫報▶

■海樓の曉風　羅衣を吹く佳人高樓に倚る（彩色石版）川崎蘭香畫

□竹田宮妃昌子内親王殿下□保子子爵夫人□前田侯爵夫人□小澤男爵令孃□日野西子爵令孃□鳥尾子爵令孃□橋本子爵夫人□伊藤家の新粧□堀田伯爵家庭□岩倉子爵夫人□中川男爵令孃□平山宮中顧問官家庭……

■百花のなかに……（原色版）橋口五葉畫

■露國觀光團の婦人……■帝劇女優の遠足會……■黄道吉日……■新婦の調度……■山姿水態……■叙勲されたる跡見花蹊女史……■新郎新婦揃ひ……■盛大なる合巹式……■舞踊のいろ／＼……

■令孃かゞみ　□繪うちは□夏ぐさ□星の露□竹の影□百日紅□夕顔□涙の花□露草□蟬しぐれ□水葵……

◀讀物▶

▼結婚の儀式を重んぜよ……文學博士　井上哲次郎

△女の姿美……鏑木清方　△涼み臺……松露

△婦人禮服の濫用……佐方鎮子　△蚊遣ばなし……窓の月

△美顔術を受けて見た記　妻波　八重子　△避暑の栞……上田陽子

△大連に於ける内地婦人の生活……

▼嫁入前の修養……棚橋絢子

▼小説　土産の盆……田口掬汀

△婦人と小兒の眼病　ドクトル　井上豐太郎　△旅のしほり……小桃

△一般に通じた禮式作法……鶯渓女史　△風俗蓋簪記……

△三面記者に睨まれた女……白眼集史　△八月のお惣菜……

△瀧見覺え帳……坪谷水哉　△身上の判斷……加納須磨子

▼理想に適ふた我家の娘……子爵夫人

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座東京二四〇番　博文館

女（その二）



チエリー香水 價 大八十錢 並二十五錢

高等香油チエリーオイル 價 大八十五錢 中四十五錢 小二十五錢

高等煉香油チエリー 價三十錢

フエス白粉 價 三十五錢 二十五錢

發賣本舖 東京日本橋本町 高橋[illegible]次郎 特電話本局四一三

宮內省御用達

ヒゲタ醬油

千葉縣銚子港 田中玄蕃釀造

(との四)

こぼれ萩

實業家織戸正作氏令孃はな子



孔雀草



右、音樂家天谷鎮子女史、左、高谷夫人澤子

宮内省御用達

天下一品

最上醬油

釀造元
千葉縣野田町
茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候



ランラン香油は
毛髮の艶が
見違ひる程に
美しくなり升
一度御ためし
下さい

定價 廿錢 三十錢

大阪新町三
福田源次郎
東京馬喰町三

博文館編輯局編纂

明治四十五年夏季休暇用

女學生日誌





各女學校
高等小學校

生徒夏季休暇中必需書

目前に迫り来れる子女の夏季休暇を如何に利用せしむべきかを究めざるは父母の罪なり教師の過ちなり然り而して其豫期の好果を收め得たるや否やを檢するは日誌を作らしむにあり

各冊洋裝菊判石版表紙美裝
紙數五拾頁　石版口繪挿入

（甲）三、四、五年用
（乙）一、二年用各一册

正價各金拾貳錢　郵税各四錢

割引

▼五十册以上　一册送料共　金拾一錢五厘
▼百册以上　一册送料共　金拾錢五厘
▼二百册以上　一册送料共　金九錢五厘

注意

一、臺樺淸鮮送分は一册に付三厘増の事
二、內地代金引換小包送分は同三厘増の事
但臺樺淸鮮行は代金引換小包送りは注文者の負擔を減する爲前記三厘増の外割增爲さゞる事ゝなる





博文館

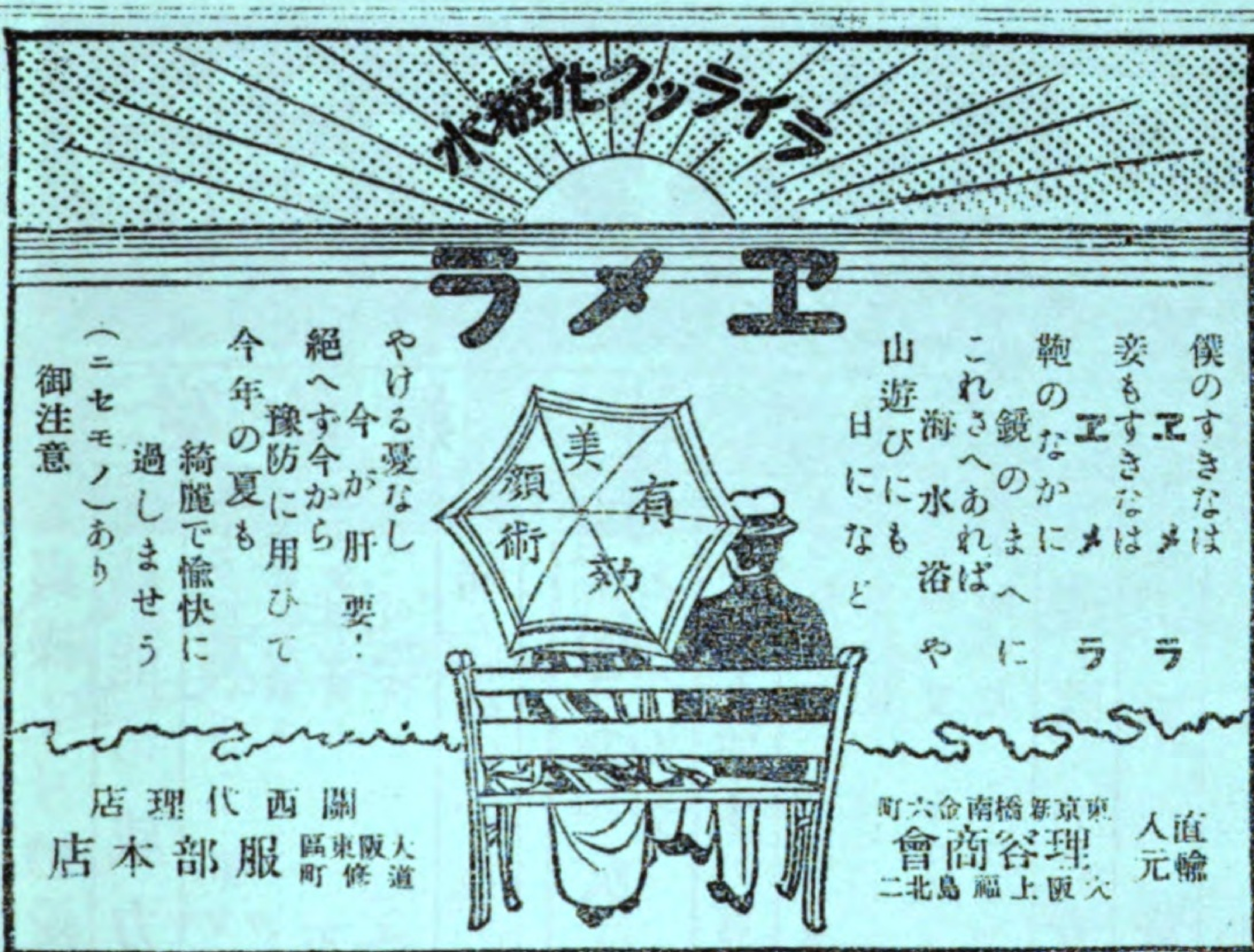
東京日本橋
本町三丁目

振替口座
東京二四〇

淑女かゞみ

模範的婦人雜誌八月の巻

定價一部廿錢送料一錢半年一圓廿錢
東京京橋弓町 朝報社内 入念舍
電話京橋四〇二番 振替東京二萬二百番



美顔術要具（ゴム製品の部）

新荷着御案内

（美麗なる説明書御申越次第進呈）

カップ

美顔術要具の一にして顔面毛口内のアカゴミ等を總て吸收して一段とお顔を美ふす

定價　一號壹圓廿錢　二號八十錢　送料八錢

顔面マッサージ用ルーラー

美顔術要具の一にして廻轉自在常に顔面に摩擦用として用ふれば血色美くなり自然美を發揮す

定價　金九十五錢　送料八錢

フェシアルブラシ

美顔術要具の一にして風呂用洗面用として朝夕用ふれば皮膚をなめらかにし艶麗ならしむ

定價　金壹圓　送料八錢

コンプレキションブラシ

美顔術要具の一にしてシワ伸し用として歐米にて盛んに愛用せらる

定價　金八十錢　送料八錢

ライラック化粧水

六本入一箱無代進呈

右之一組（四個）御買の御方に廣告の爲最少六本入一箱進呈す
但し數量に限りあり至急注文を乞ふ

理容白粉本舗　東京新橋竹川町十二　理容館
電新二三〇二番　振替口庭一四一〇〇番

女（ちの四）

新婚の人





右、辯護士藤苗代氏と夫人とし子(女子大學出身)。
左、大阪高等工業學校教授高島誠一氏と新夫人縫子

令孃かゝみ



右、歌川たゑ子（本郷）副島住枝子（日本橋）左、稲垣きよ子（神田）


日やけを防ぎ
色を白くする
ゼオゾーンクリーム
發賣元
東京日本橋室町
三共合資會社
ウンナン博士効果確認報告郵呈

女（りの一）

玩具新案懸賞募集

玩具の兒童教養上頗る重大なる關係あるは固より論を俟たず而も一般家庭に於て最も適良なる玩具を要求するの聲近會喧しきに至る仍て遍く新案の玩具を募集し其適良なるものを選擇し以て社會の需要に應ぜんとす有志の諸彥續々投案せられん事を希望す

募集規定

一、玩具は其種類の何たるを問はず兒童に適當なるものとす但し材料は木、金屬、綿、紙、粘土、裂地其他應募者の隨意たるべし

二、應募者は必ず試作品に詳細なる說明書を添へ住所氏名を明記して東京市日本橋區本石町二丁目十七番地文運堂宛送付せらるべし

三、受理したる試作品及說明書は一切返却せざることゝす

四、應募玩具に對し審査の上左の順次により賞金を贈呈す

一等　金貳百圓　　貳等　金壹百圓
三等　金五拾圓　　四等　金參拾圓
五等　金貳拾圓

五、當選したる玩具の意匠及製造販賣の權利は總て主催者に歸すべきものとす

六、應募期限は本年七月一日より八月三十一日迄とす

七、審査の結果は十月發行の雜誌「少年世界」及「少女世界」其他博文館發行の雜誌上に發表すべし

八、審査委員は左の如し

……(イロハ順)……

「少年世界」「少女世界」主筆　巖谷小波君
三井病院小兒科醫長　唐澤光德君
東京高等工業學校教授兼文部省視學官　吉武榮之進君
日本女子大學校教授　高島平三郎君
東京高等師範學校教授兼東京教育博物館主事　棚橋源太郎君
畫家　武内桂舟君

東京帝國大學教授 理學博士　坪井正五郎君
農商務書記官兼農商務省商品陳列館長　鶴見左吉雄君
前日本大博覽會事務官　山脇春樹君
東京美術學校長兼文部省美術審査委員會主事　正木直彥君
東京女子高等師範學校教授　下田次郎君
贊助員貴族院議員 男爵　目賀田種太郎君

以上

東京本町　博文館　—主催者—　日本橋本石町　文運堂

貴婦人達はナゼ美しいでせう!!!
▲其れはこの様にしてみがき立てるからであります

美顔と化粧法

定價送料共
金三十七錢
切手代用は
金四十錢

目次の大略 ▲色白くなる方法 ▲赤き顔を櫻色にする方法 ▲シワのよらぬ方法 ▲キメを細かにツヤを出す方法 ▲日にやけるを防ぐ方法▲齒を白くする方法 ▲手の色を白くする方法 ▲髮の毛を黑くする方法▲毛のぬけるを止める法▲毛をのばしつやを出す方法 ▲ふけを去る方法▲ちゞれ毛くせ毛赤毛を直す方法 ▲あるべき所に毛なきを生ずる方法▲やせる法ふとる法▲鼻を高くする方法 ▲聲をよくする方法▲入浴の方法▲化粧品の選び方▲おしろいのつけ方 ▲衣服の模樣と縞柄▲衣服の縫ひ方▲衣服の選び方▲衣服の着方

此外いろ／＼の事が書いてありますが皆どなたにもすぐ出來る事ばかりで其效果も面白い程あらはれます。私方へ二錢切手十五枚又は一錢五厘切手廿枚御申越し下されば一千部限り特別に御分ち申上げませう

本書著者　東京神田錦町三ノ二　高柳孝子

◉色白くなる

色黑き方、靑き方、赤すぎる顏の御方は郵便切手二錢封入御手紙下さい、必ず色白く美しくなるよい藥を御知らせ致します、わけて日に燒けて黑くなつたなどはすぐ白くなります。皆樣に御實驗を願ひました所、澤山の御禮狀をいたゞいて居ります。

東京神田錦町三ノ二　高柳こう子

毛はえ藥の大王

リンドン

本劑は毛髮專門家醫學博士リンド先生の苦心發明せし新藥にして未だ我國に廣く行はれずと雖毛生藥中効能最確實なるものにして他藥を用ひて無効失望せる者にもよく偉効を奏す。乞ふ安心して御用ひあれ。

本劑を患部に塗布する時は偉大なる効能を表はし皮下に至りて毛根を刺戟し以て毛髮の發育を旺盛にす婦人のはえぎわの惡しきを直し毛髮眉毛の薄きを濃くし、ぬけ毛を止め新毛を發するには並瓶を用ゐ、ハゲ（禿頭病）無毛等には特瓶を使用せよ、完全なる毛髮を發生し其苦惱を去り幸福の身となるべし。此の如く藥効偉大なるも劇毒藥を含まず、皮膚を損せず、毛の發生すべき所なれば本藥にて發毛すべし御安心の上一日も早く此新藥を用ゐ蘇生の喜びを得よ●藥價送料共並瓶一圓十錢●特瓶二圓十錢●注意藥價の高きは世にありふれたる無効の藥品と相違し原料高價なればなり。

わきが

わきがの臭ひは他人には甚だしく同室に堪へず、故に甚だしく人に嫌はれ、交際上の親密を欠き立身出世の妨げともなる、故に一日も早く之を全治せしめざるべからず。
本店發賣のワキガの妙藥は最近の學理と幾多の實驗とにより研究發見せられたる理想的新藥にして効能最も顯著なれば他藥にて無効の方ら失望落膽する事なく速に本劑を用ゐて其苦惱を脱せよ●藥價送料共一圓十錢慢性用二圓十錢切手代用一割增

◉やせ藥◉



男にても女にてもでぶ／＼とふとりたる者は肥胖病といひ甚危險なる病症にて時に生命を失ふ事ありまして婦人の肥滿せるは殊に見苦しきもの故速に全治せしめざる可らず、郵券二錢封入申込の方には醫學博士筒井先生の學説肥滿病自宅療法及其良藥を詳報すこれによりて療養せば少しの害もなく程よくやせて速に美容强壯の身となるべし。

東京神田錦町三丁目
電話本局四五六七番
振替東京八六四二番
東雲堂藥房

女（りの三）

女(りの四)



女學世界

第拾貳卷 第拾壹號

銷夏號



婦人と保守性の美德

文學博士　芳賀矢一

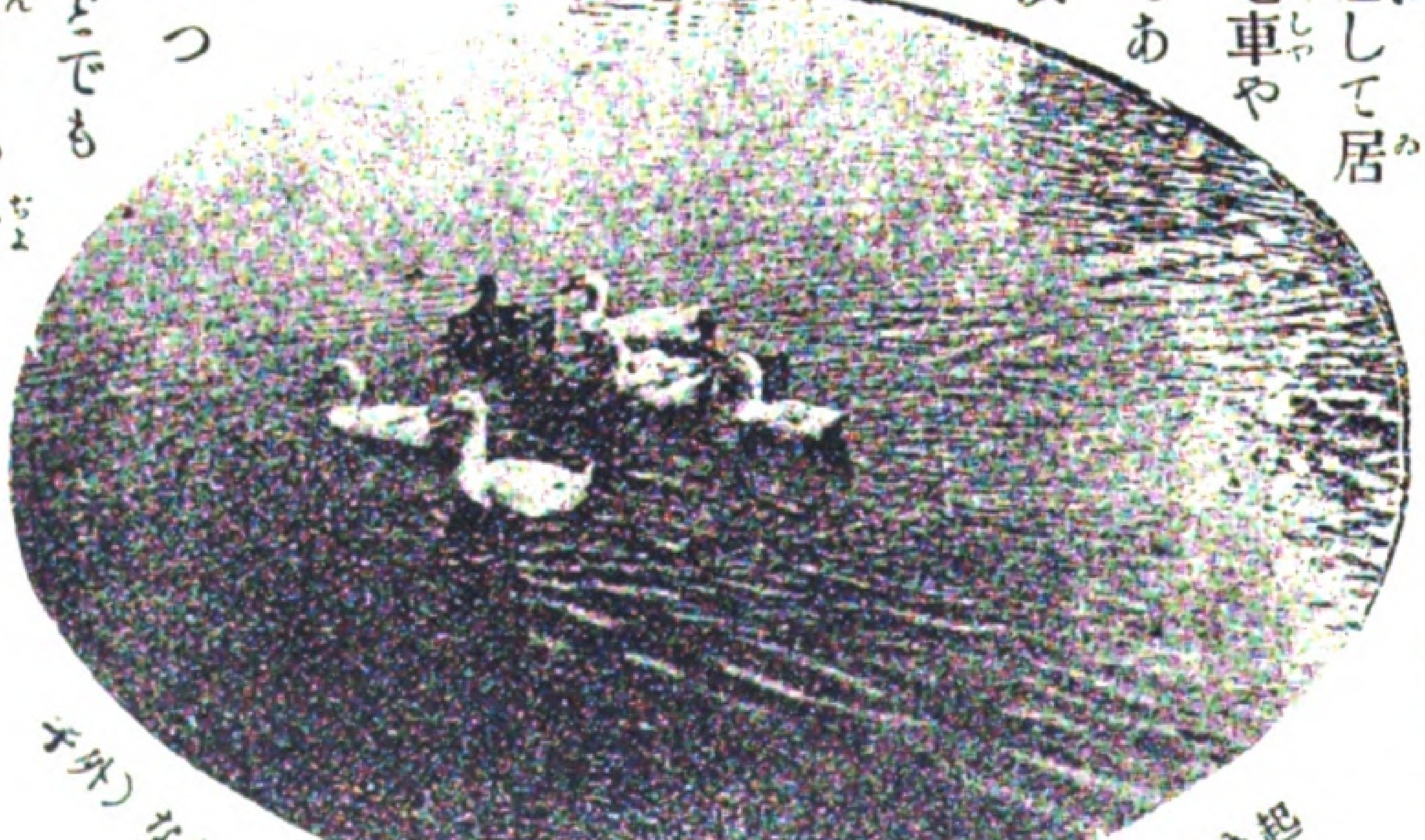
△花嫁は純日本式

凡そ流行が婦人の世界を風靡して行くのは極めて早いが、文化の潮流が婦人を動かすのは一般に男子に及すよりも遲い。これはいふまでもなく文化を左右することが男子によつて爲され、女子は常に裏面に生活するからである。丁髷は夙の昔に男の頭から無くなつて仕舞つたが、女の髷は中々動かない。明治の初年に男の散髪の始まつてから十年以上も遲れて、束髪論が出たが、さうしてそれが次第に行はれたに拘らず、婦人の結髪は中々止む様子も見えない。男は日本服に山高帽子、夏は麥稈帽子を被つて歩行くが

女の帽子は一向にはやらぬ。今は洋服一着もたぬ男子は無いが、女の洋服は中々行はれぬ。靴をはくことも女學生の外はまだ流行らぬ。マッフをはめたり、ボルトモネーを持つたりする些細の點が行はれて居るのみで、服装の根本は、年とゝもに純日本式を發揮するやうである。こゝに於て花婿花嫁は一は純西洋式一は純日本式で、日本現代の文明が直ちに新夫婦の上に發見し得られるといふ奇觀を呈して居る。服装ばかりでは無い。住居でもさうである。電車や汽車の中へはいつて、まづ行儀よく座るのは婦人である。腰を掛けることに慣れぬからである。學校で慣れても、家庭では慣れぬのである。富豪の邸宅でも、婦人の居室は日本造の方が多い。食物でも、婦人はやはり日本料理の方を喜ぶ。書籍などでも婦人向のは大和綴に仕立てることがまだ往々にして見受けられる。

△女の歩む道は異る

婦人の推移の遲いのは社會がさう仕向けるのが一つの原因であることはいふまでも無い。例へば教育などでも男子と同等には取扱はない。まして職業上の方面でも、女



起き出てむかふ外山の朝づくひ心もそらに晴れわたるかな（外子）



豐後鮎返の瀧

子には成るべく家を守る本分に向かせて、大抵は男子が占有する、要するに進んで行く文化の風潮は、女子には餘り影響を及さずに、どん／＼と前へ行くやうになつて居る。これは西洋でも同じ事で、西洋の近代文學に覺醒した女とか、新しい女とかいふのはつまり婦人が男子よりも一歩後れて居るといふことを證明する聲に過ぎぬ。日本は正に新舊過渡、東西混淆の最も著しい時代であるから、殊更に之が目立つのである。思想上のことは一寸解らぬが、服裝や風俗の不調和は外人の目などにも、すぐに映ずるのである。

併し余は思ふのに　婦人の保守的であることは社會の境遇　男子の專横から來るばかりでは無く、幾分か婦人の性質に由ることであらうとおもふ。殊に日本婦人には、それが勝つて居るのでは無からうか。婦人は謙讓を以て其の德行の大事なことゝする謙讓は男子にも必要であるが、男子は或場合には隨分はげしい競爭に從事しなければならぬ。婦人はまづそんな事が無いので、飽くまでも謙讓で、出しやばらぬのが立派に見える。人格が高いと見られる。座作進退も活潑なのよりもしとやかな方がよい。言語でもテキパキするよりもおとなしい方がよい。男子の直線的なのに對して、婦人はすべて曲線的である。進むよりも。止まる。日向よりも　陰に居る。これには昔からの習慣も交つて居るが、昔からさういふ習慣の出來たといふことも、婦人美がそれと伴ふからであらう。小娘のはにかむ、

恥かしがる性質は即ち出しやばるの反對であつて、これが萬事を支配し、趣味をも嗜好をも形造つて居るのでは無からうかと考へる。言ひ換へれば、婦人は唯だ男子に壓迫されて保守的に傾くのでは無く、男子と別な道を歩むといふ必要から自然に保守的になるのでは無いか。

△日本婦人の長所は謙讓


攝津箕面の瀧

男子が漢文漢詩を學んだ時代に純粹の國文學を發達させたのは平安朝の婦人である。男子とは同じ方面に進まない所に婦人の特色を發揮する。男子の名は漢字で書くのに婦人の名は假名で書く。同一で無い所に其の面白味がある。西洋かぶれの男女同權論が一時唱へられたがこれは、束髪の行はれたよりも遲々として行はれない。唐犬と間違へた洒落などが、圓遊などの落語集に名殘を留めて居る。近頃の支那の革命騷ぎに女子の參政權運動があるといふことを聞いたが、日本には自由民權説の盛な當時にもさういふ運動は無かつた日本の婦人の活動が盛で無いのは、婦人の教育の足らぬ爲でもなく、無氣力の爲でも無い。維新前後には愛國的婦人が輩出した。又志士の妻や母や、隱れた婦人は當時にも、又は逆つて武家時代にも數へ切れぬ程あつた。但し飽くまで謙讓で、急燥的で無いのがむしろ日本婦人の長所であらうと思ふ。形にあらはれた風俗の上にも尙ほ純日本式が保存されるのを見て、余は甚だ心強くおもふのである。

乙女時代の思ひ出

伯爵母堂　後藤雪子

▲悲觀せぬ内判斷がつく

私は今日までに様々な難場を切拔てまゐりましたがその難場に居る間に、つひぞ一度も愚痴をこぼしたことはなく、餘り平氣で張合のない人だと言はれた位でございます。老年に及んでからも人様がさぞと仰つて下さる程の打撃に遇ひましたけれども吾身を反省するばかりで、左して悲觀しませんでした。これと申すも乙女時代から患難を味はつたお陰で、イザ切ば詰つた場合に、判斷が早くつき、世の中を悲觀せぬ内にチヤンとお腹が据つて了つたからであらうと思ひます。暴い風に當らずに育つて平穩に暮した奥様方が、一朝身の上の變化に遇ふとお氣の毒のやうにうろたへ、悲しまれるのを見る度に、平易の心で難關を切拔た自分の幸福を感謝するのですが、私がかやうに鍛へられたのは、幼い内に感化を受けた養母の賜でございます。



美濃養老の瀧

▲孝心深き養母

私は幼い折に京都の商家へ養子娘に貰はれたのでございますが、その家の相續人は放蕩で稼業を修めず、身代も追々傾いてまゐりましたので、妹娘が奮發して自前藝妓となつて兩親のために働らき夫婦養子をして家を興さうと云ふ考へで、私を養子娘に貰つたのですその頃の京都藝妓は、昔の白拍子風があつて態度も上品でありますし、宴席に侍する稼業に似合ず、氣骨のあるものが多く、業をやめてから悟道の門に入り風流三昧に暮す者もあり、京の清水邊に庵を結で手づくねの陶器を作るものもありました。夫も浮た一時の道樂ではなくつて、一旦其道に入つた者は生涯節を易へずに終つたのです。私の養母も矢張り節操の堅い人で、非常に孝心厚く己れを捨てて凡てを兩親の犠牲に供して居りました。私はこの養母から孝道の大切なこと、人に交はる信義の道、世に處する覺悟等を朝夕懇ろに説き聞かされ又親しく行つて見せられましたので、幼い内から深くこれらのことを心に銘じて居りました。又この養母は折々進歩的な話をいたし、世界には私共のやうな人間の他に、色の眞白な人間や、眞黒な人間、赤い人間があつて、今に日本へ來るやうになる、さうすると大騷動が起つて世の中が引くり返るかも知れぬと申し、異人の着物はこんなものとヅボンなど見せてくれた事もありました。未だ私は十一二今から六十年近も前に、婦女子が夢にも知らぬ世界人種や、日本の



下野般若の瀧

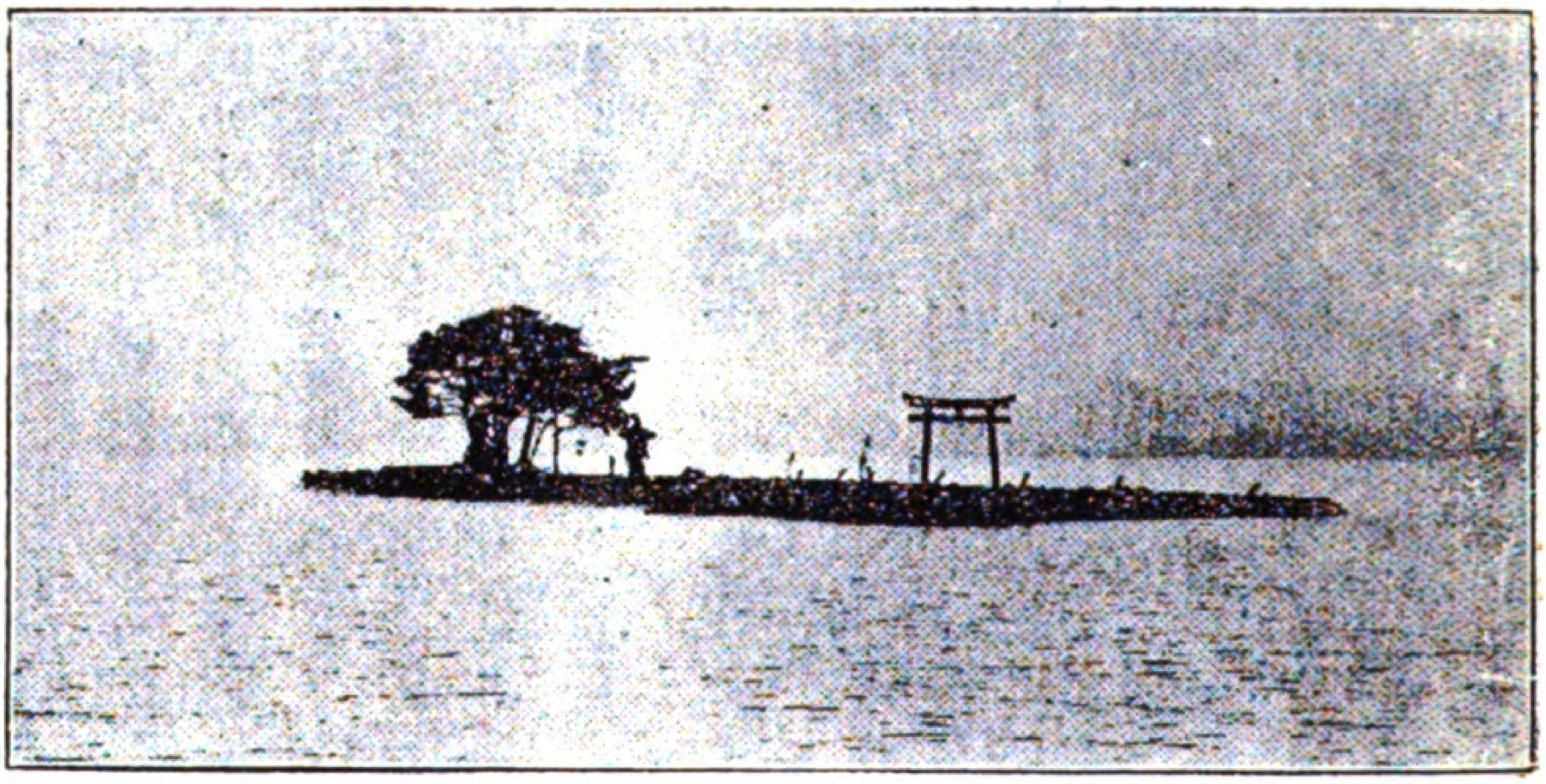


下總銚子犬吠岬

將來をおぼろげながら知て居たのも不思議な次第で、大方志士の宴席に侍して洩れ聴たのでございませうが、私を敎育する注意は綿密なものであつたと後に感心したのでございます。

▲肝に銘せし遺言

養母はこんな人でしたから、稼業に就いて居たのもホンの僅の間で、直に退いて了ひましたが、豫て養母を懇望して居た大阪の豪商が妻に迎へたいと申込みました。先は未だ無妻ですから丁度好都合と悦ぶ筈ですのに養母は苟且にも一度花柳の巷に出たものが、多勢の奉公人を御する大商人の妻となる資格はないから、生涯妾となつて兩親の側に居たいと申しまして正妻に入ることを斷りました。紳商は養母の意を察してよく兩親に盡してくれたのですが、その内養母は肺病にかゝつて三十三歳で身まかりました養母は臨終の際に私に卷紙をのべさせ、顫ふ手に筆を執つて老いたる兩親の世話を賴むと云ふ一語をかいて私に與へましたが、私はうるはしい水莖の跡を見る度に身を捨てゝも祖父母に事へやうと云ふ決心が堅くなつたのでございます。



出雲宍道湖

▲十五歳から一家の切盛

養母の死後引つゞいて祖父も身まかり、家計は追々困難となりましたので、私は遂ひに意を決し、聊さか覺えた遊藝を力に養母の業をつぎましたのは、十五歳の時でございました。丁度世が動き初めて京大阪に入こむ諸藩士の足繁き頃でしたから、未熟の私も大層繁昌いたし、老祖母を樂に過す位の收入がございまして餘程心丈夫になりました。併し十五の少女でも主人となつては却々うつかりして居られませず、忙しい勤めの間に衣服の見計らひから世間の行渡り、收支の調べまで一切合さい切盛いたしましたが、先づ人に後指さゝれずに通しました。このお蔭で今日この老年になりましても帳簿の整理は若い者に負けません。

▲幾度もくゞりし白刄の下

二十歳の時、象次郎の許へ後妻に入るまでの五年間には、世のさわがしいのにつれて樣々なことに出遇ひまして、隨分白刄の下も度々くゞりました。何にいたせ大改革前のことですから、氣の立つた諸士が宴席に議論の火花を散らし、果は一刀を引拔て生死を決する喧嘩も毎々ありました。私は大事の方々に怪我があつては大變と、危い〳〵と止められるのも肯かず

にいつもこの間に割つて入り仲裁しましたが、妙なもので、いくら血氣に早つた場合でもかよわい女が白刄の仲へ入ると、幾らかいたわる心が起ると見えて、案外穩やかに濟むことが多うございました。武士同志が切結ぶ刄の上へ着物をかぶせて、マア待つてと留める芝居もこんなところから取つたものでせう。ナアーに恐れる心がなければ怪我もないもので、却つて刄に怖ぢて逃げ惑ふ者が傷を受けるのでございます。

▲信心

神參りは熱心にいたしましたが、その中にも伏見の稻荷、淸水の觀世音など、遠道を厭はず一生懸命に參詣しました。後藤の家へ參つて後は家風に從つて中止して居ましたが、隱居した今日では又候參詣を何よりの樂しみにいたして居ります。一番の賴り所は佛教ですけれども何の神々でも禮拜を怠りません。私は孫達に、學校出の者は兎角神信心を迷信と斥けるが、宗教と名のつくものに道德を含まぬものは一もない。おろそかに思つてはならぬ」と申聞せて居ります。

▲人の美點ばかり見える

私は人の美點ばかり見える方で、世間で爪彈きされる人でも本當に惡人だと思つたことはありません。どんなやくざな人だつて、よく觀察すれば何かしら一つの取どころがあるものだと思ひます。又人樣と痛くも痒くもないことを言爭そうのは大嫌ひです。針一本でもいはれなく自分の身體に刺れたら默つては居られますまいが、何と言はれても痛くも痒くもない下らぬことを顏を赤めて言ひ爭ふ婦人が多いのはどう云ふわけでせう。而して自分が無學だからと云つて學問のある人との交際を遠慮するのも馬鹿氣た話しで、無學でも樣樣の境遇を經たものは學者の知らぬ經驗を握つて居るのですから、互に智識を交換したら良さゝうなものです。私はあの有名な中島俊子女史にもこの主義で平氣につき合ひ實驗談など秘密なく話して上げましたので女史も大層悅んで居ました。





松かぜ潮かぜ

敷島の道に遊ぶものは居ながらにして名所を知るといひしも昔のこと、草鞋くひにいたき足をひき、暑き日に菅の小笠を傾けずとも、一瞬千里の鐵路の路、朝に都門の塵をいとひし身は、夕に須磨、明石の月を賞づべし 六旬の夏季休暇を熱閙の地に送らんは心利かぬことの限りならずや。

西須磨にて汽車を下れば是より海邊一帶須磨の浦、後には鐵拐ヶ峰、鉢伏の山高み、前には渺漫たる海を隔てて、和泉、紀伊の山、夢の如く連り、右には淡路島山指呼の間にあり。

行平卿の衣掛松、松風、村雨が鹽汲みけると傳ふる舊跡、須磨の關屋の跡など、昔をなつかしむ、情け知り人のたづぬべきところなるべし。又平家三年が間のこもり居のあととて須磨寺、義經腰掛の松、敦盛の首塚あり。賤しき蜑の乙女が雲の上人を慕ひて涙のよる〳〵月にあこがれけむ詩の如き戀の跡、雲霞とむらがる源氏の軍兵を前にひかへつゝ、春まだ淺き二月上旬の夜を管絃に明かせし花の如き平氏の公達の夢



の跡などとりぐに、そゞろ昔のしのばるらめ。

さなきだにも沙白く松青きところ、昔し乍らを空に澄む月に懐ひをやり、千里をわたる海上の清風に袂をひろがへせば、さながら九夏三伏の暑さを忘るに足るべし。

近くは江の島、鎌倉のあたり、西に不二、足柄・箱根より伊豆の天城につゞく白雪青嶺をふくんで、相模灘の鹽風を一帯に浴び、海水浴に、そゞろあるきに一日の暑を消すべし。金澤街道にそへる頼朝の屋敷跡、八幡宮の大公孫樹、寶戒寺境内の北條氏が邸跡、三世の興亡九代の盛衰、舊跡歴々訊ぬべし。

殊に一日此ところにあそんで、去つて西の方須磨の浦をたづね、源家の發祥、平氏の末路を對照すれば、山光水色の間おのづから、兩家興廢の或消息を心に會得するものあるべし。而も何れも幾百年の夢、征矢の叫びは松吹く聲に名殘をとゞめ、宵の管絃の歎聲は沖に遠鳴る浪の音にのみ今は聞くなり。

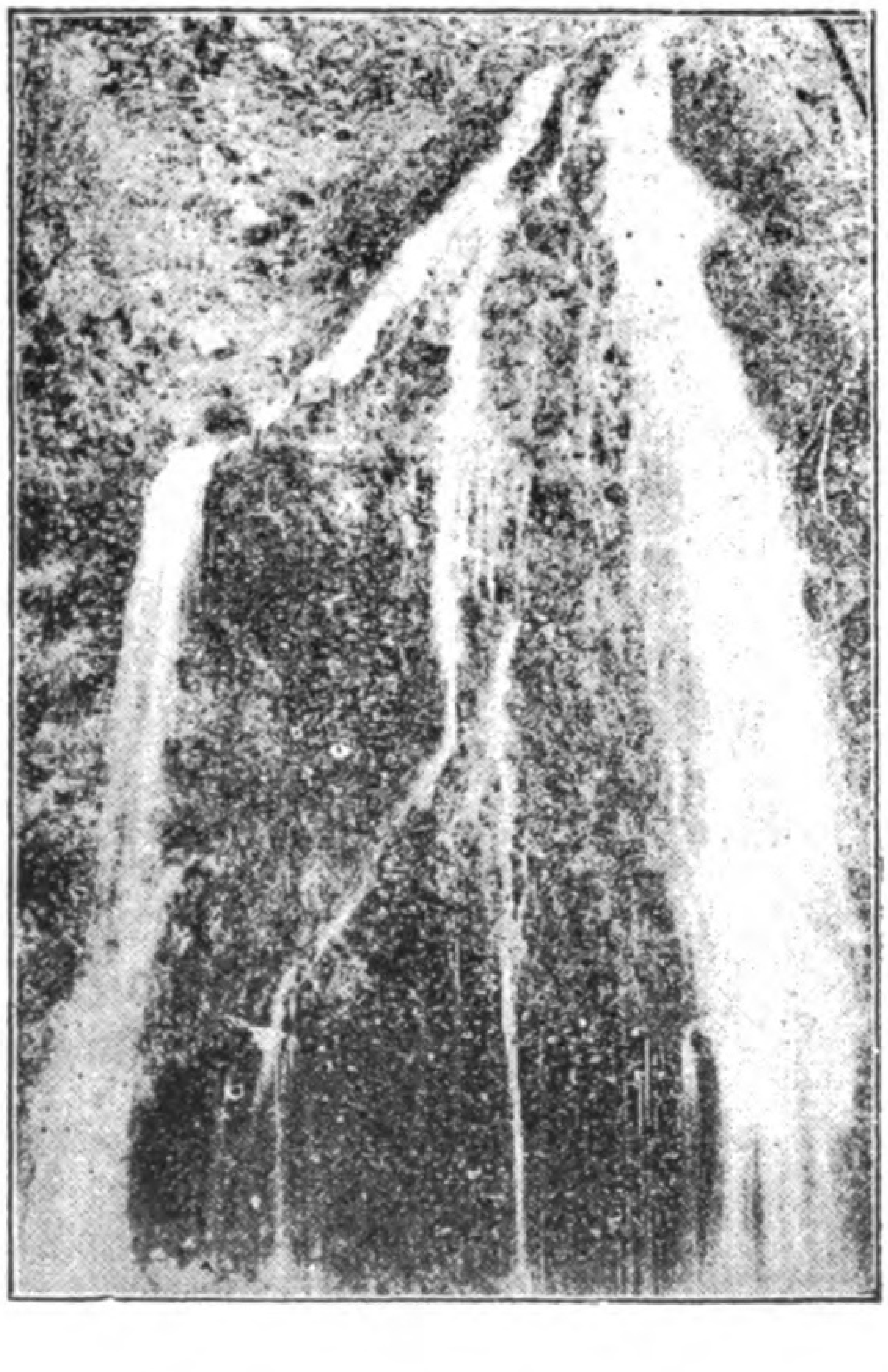
神經過敏は生命を削る刄物

矢野とし子

私は神經質で、何か一寸氣にかゝると、夜分眠られなかつたり、人樣とおつきあひいたすにも、こんな事を申上たら惡く思召しはなさるまいか、かうしたら惡く言はれはしないかなどゝ、餘計な苦勞ばかりいたしまして、下婢にちよいと何か言ひつけるのまでいやに氣兼を爲ましたから、始終言ひたいことが咽喉につかへて胸がむしやくしやいたして困りましたが、或時主人から良いお藥を貰ひまして、それを服用し始めてから大分治つたやうでございます。そのお藥は

▲心學叢書

で、極ありふれたものでございますが、私には妙に效目がございました。心學叢書は御承知の通り、鳩翁、松翁其他昔の諸先生方の道話を集めた古めかしいものですけれど、近頃の雜誌類を讀み耽つた私の頭腦には却つてこれが新らしく又嬉れしく感じられ、夢が醒めたやうに心持がはつきりとなつたのでございます。心學の話の中に夫婦喧嘩の直つた面白いお話があつていい數へ草と感心しましたが、そのお話は、(どなたも御

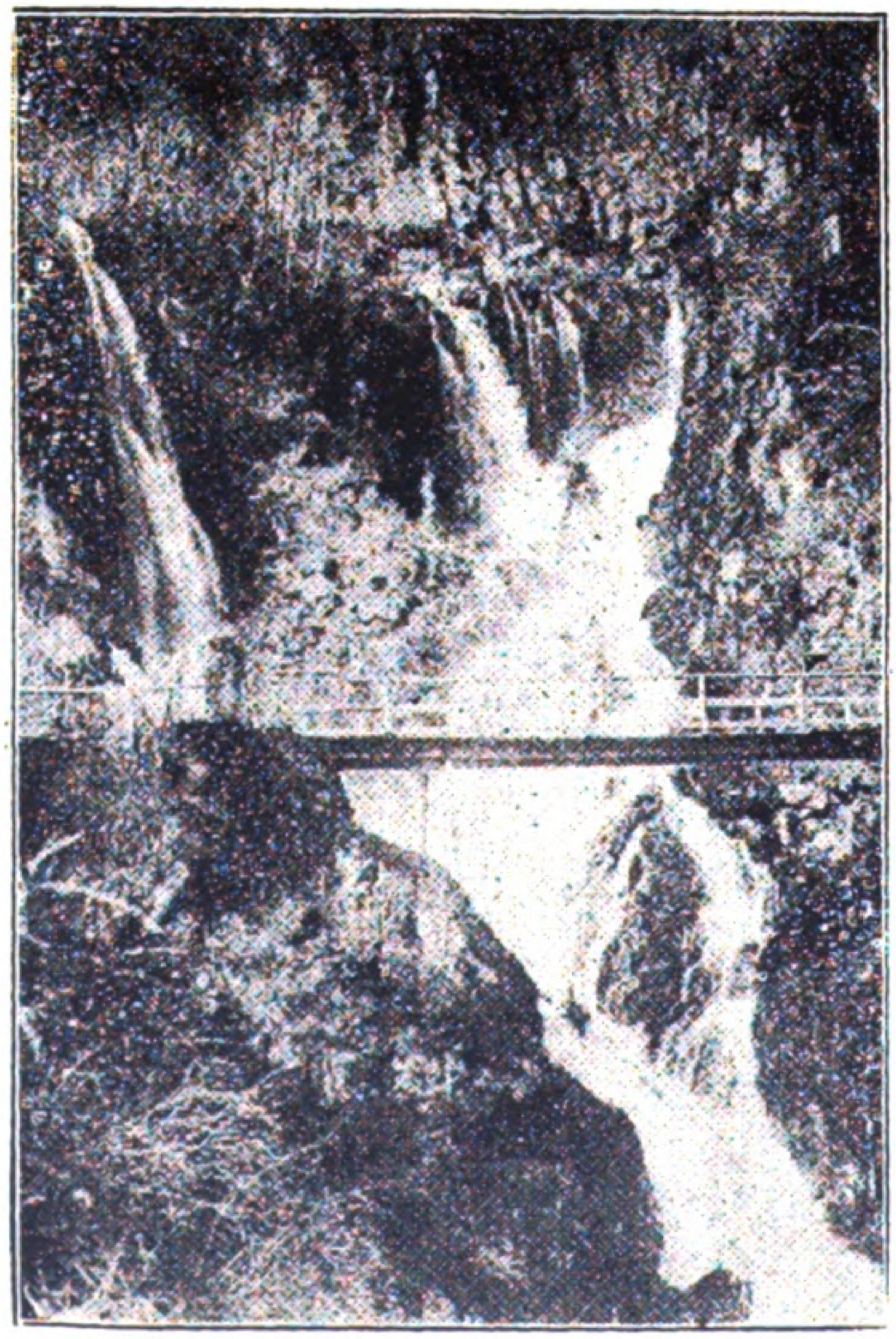


下野那須溫泉高雄の瀧

存じでせうが)、他から歸つて來た主人が、上りばなにあつたどびんに躓いて、こんな所に置く奴があるかと妻を罵ると、郎君は眼が何處へついて居るのです。足許に在る物が見えませんかと妻がやりこめる、果は喧嘩になると云ふ風で始終もめてばかり居ましたが、兩夫婦揃つて居る隣りの家ではつひぞ爭ひの聲も聞えず、樂し氣に暮して居るので、或時どうしてさうお靜かでせうと聞くと、皆馬鹿ばかり揃つて居ますからと答へた。その後、喧嘩好の妻が隣へ話しに往つて居ると、他から歸つた老爺が上りはなの煙子盆に躓いたが、これはとんだ粗匆をしましたと家族にわびる。息子は私がつひ不精で上りはなで煙草を呑んだのでお父さんを躓かせ、すまぬことでした。お怪我はありませんかと心配さうに尋ねる。嫁は、イエ私が早く取片づけなかつたのが惡うございました　申譯ありません。サゾお痛うございましたらうと恐縮する。そこへお婆さんが飛んで出て、若い者は忙しいから行屆かぬのは當りまへ、こんなことに注意する役目の私が、うつかりして居たのはすまなかつたと云つて、家内中が皆自分の粗匆を詫び合つたので、熟々感じ入り、和合の基はこゝぞと悟つて、其後は丸で違つた良い家庭を作つたと云ふ話、その他こんな類の道話が大分お藥になりました

▲快よく眠られる

宗教は誠に結構でございますが、良人の家の宗旨と



下野白雲の瀧



伊豆三島藍壺の瀧

違つたものですと、萬事不都合でございますし、又私共のやうな至らぬ人間には、難しい宗教の理窟より、却つて日常生活に近い、手早く判る、心學の話を味はつた方が直接の養ひになるやうに思はれます。

而して夜分小説や雜誌を凝つて讀むと段々眼が冴えて頭腦を刺戟しますが心學の本は興奮した心も落つけ、快よく眠らせますから、衞生上にも至極よいと思つて居ます。

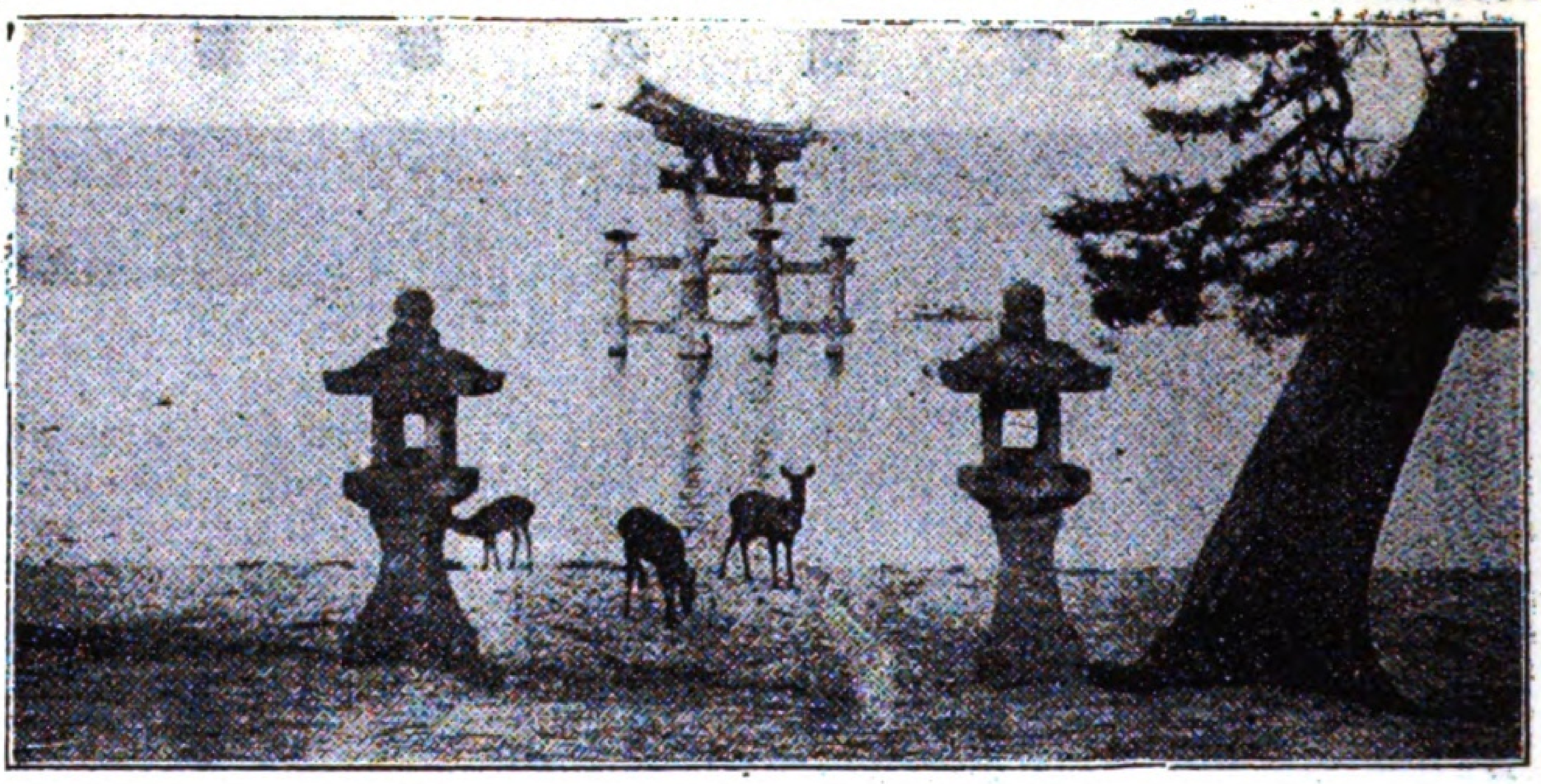
▲赤切符でも平氣になつた

自分や子供は近い處へ往くには三等汽車で澤山だと、家に居る時は定めて居ましても、停車場へ入つて來合はせてお出の御懇意の奥樣方が青切符をお買ひになるのを見ますと、つひ決心がくづれて了ひましたが、今日では平氣で赤いのを買へるやうになり、そのほかかう云つた風の心づかひがとれて、重荷を下した心地になりましたのは全く例のお藥のお陰と悦んで居ります。

▲言ふだけ言つて清々する

近頃は、下婢達に注意をいたすのに、つまらぬ遠慮をしないで、ズン／＼言はれるやうになりました。下婢の方でも一時の雷樣のやうで迷惑か知れませんが、あとは夕立の晴れたやうにがらりとして働き方もきつぱりと判る、

安藝の宮島

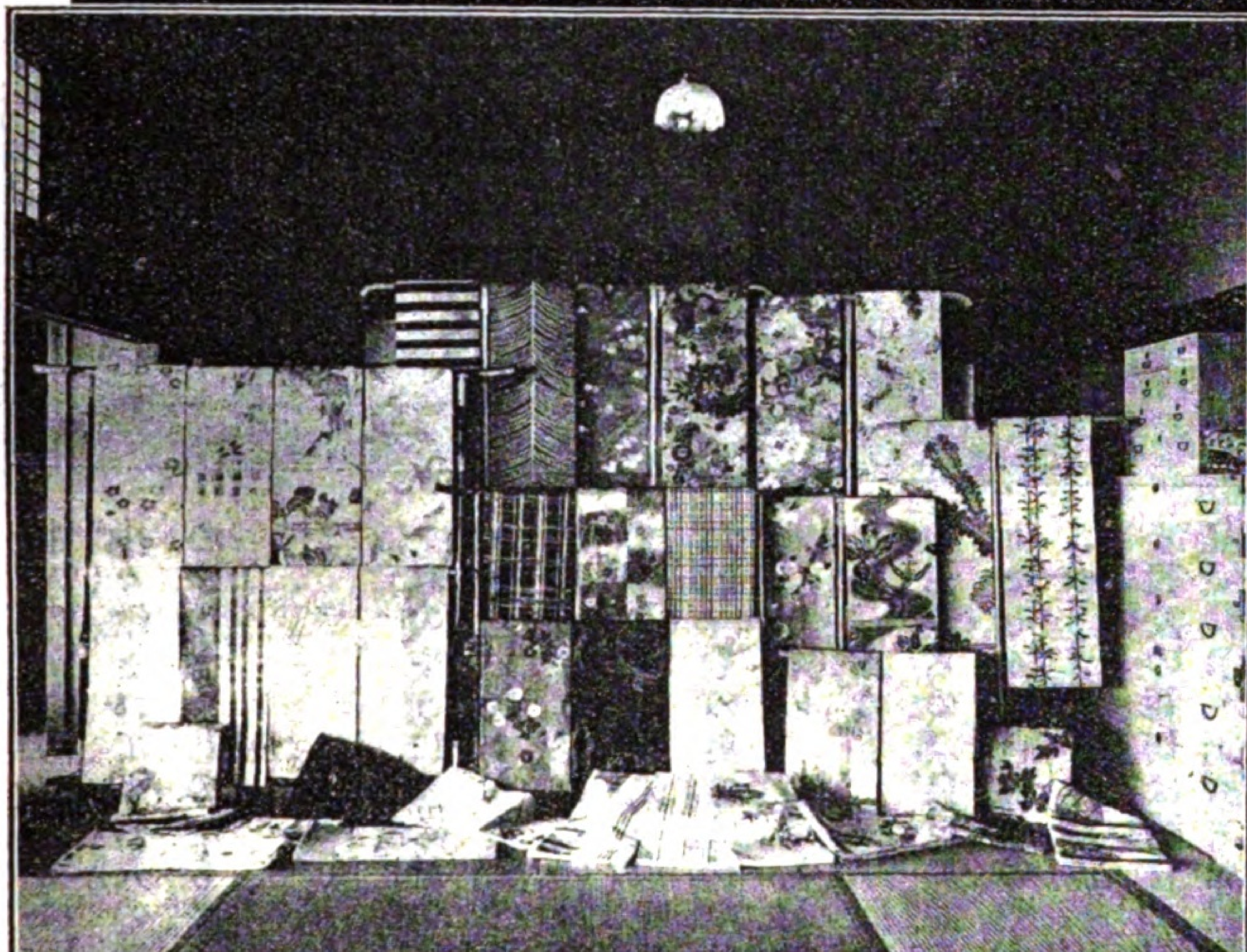


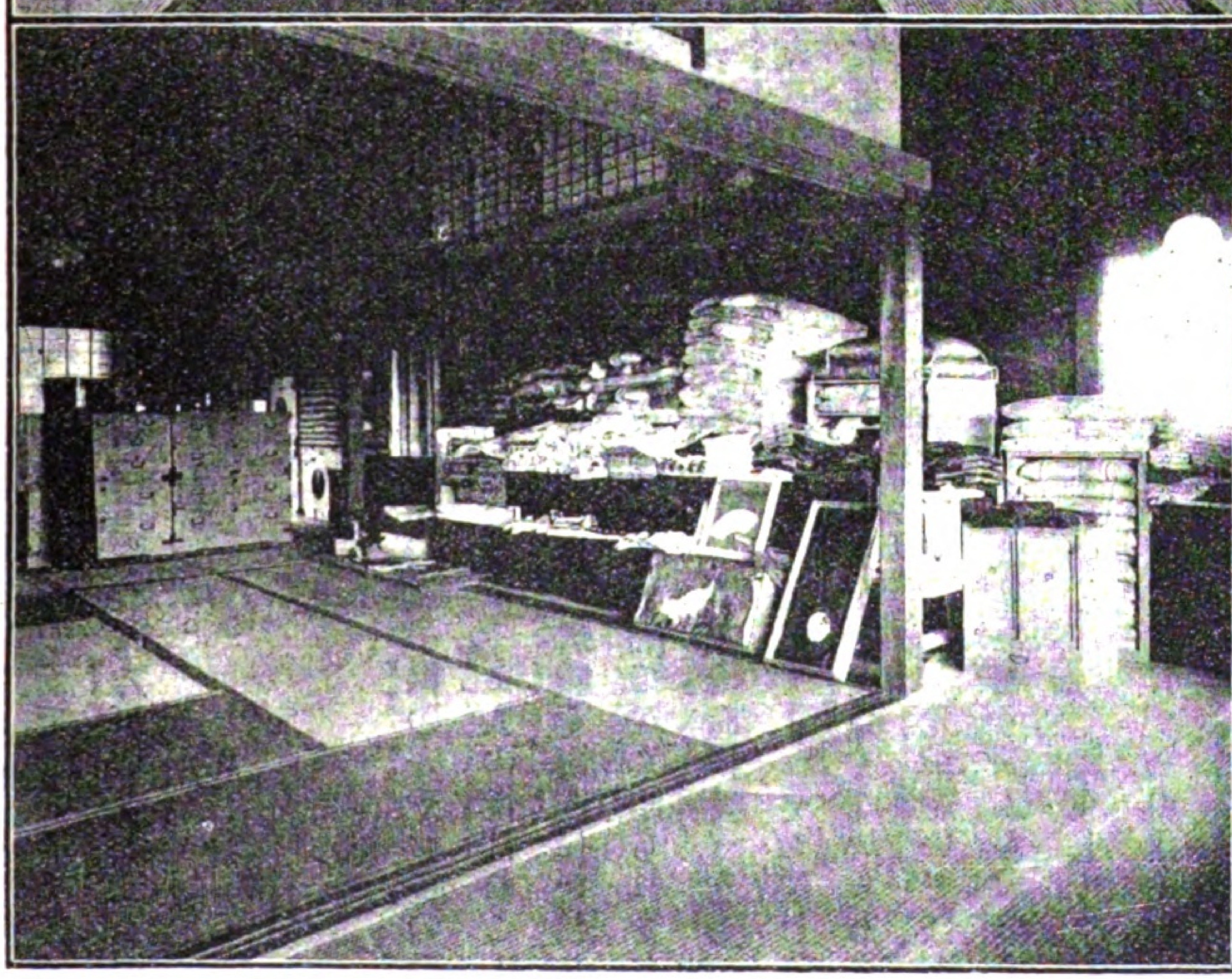
主人の氣心が解らずに困る心配もなく、却つて勤めいゝやうでございます。少々憎まれても當人の爲にならぬことなら、言つてやつた方がいゝと云ふ決心がつきましてから誠に下婢を使ふのが樂になりました。

▲竈の番人が天職

私のやうに交際社會へも出ず、お芝居も觀ないで、唯子供の守やお釜の番人をして居るものは、全く時代後れの片輪でございます。良人の悦ばぬことを無理にあがいていたすほどのこともないと存じ、竈元忠義を專門にいたして居ります。先頃或奥樣がお出になり　同窓の間柄とて隔てなく語られましたが、その奥樣は私のしめて居る帶を御覽になつて、「貴女今時黒繻子をお締めになるの、皆さんが黒繻子の帶側なんぞ廢物にしてゐますよ」とお笑ひになり、「貴女も、最早四十に近いのに何時まで左樣引こんで燻つてばかりゐらつしやるの。良い加減に諦らめてお芝居でも御覽なさいな　先が短いではありませんか。貴女のやうに竈元ばかり守つて居るのは猫忠義と云ふものですよ」と被仰いましたが、私に新時代の空氣を吸はせたいと、かく勵ましてくれる舊友の親切は嬉しうございますが、私は又華やかな場所に、後れとらじと患らはしい心をつかふ樣なことは嫌ですから、猫忠義に甘じて居られる自分の境遇をありがたく思ひ　この稱德表を忝く頂いたのでございます。

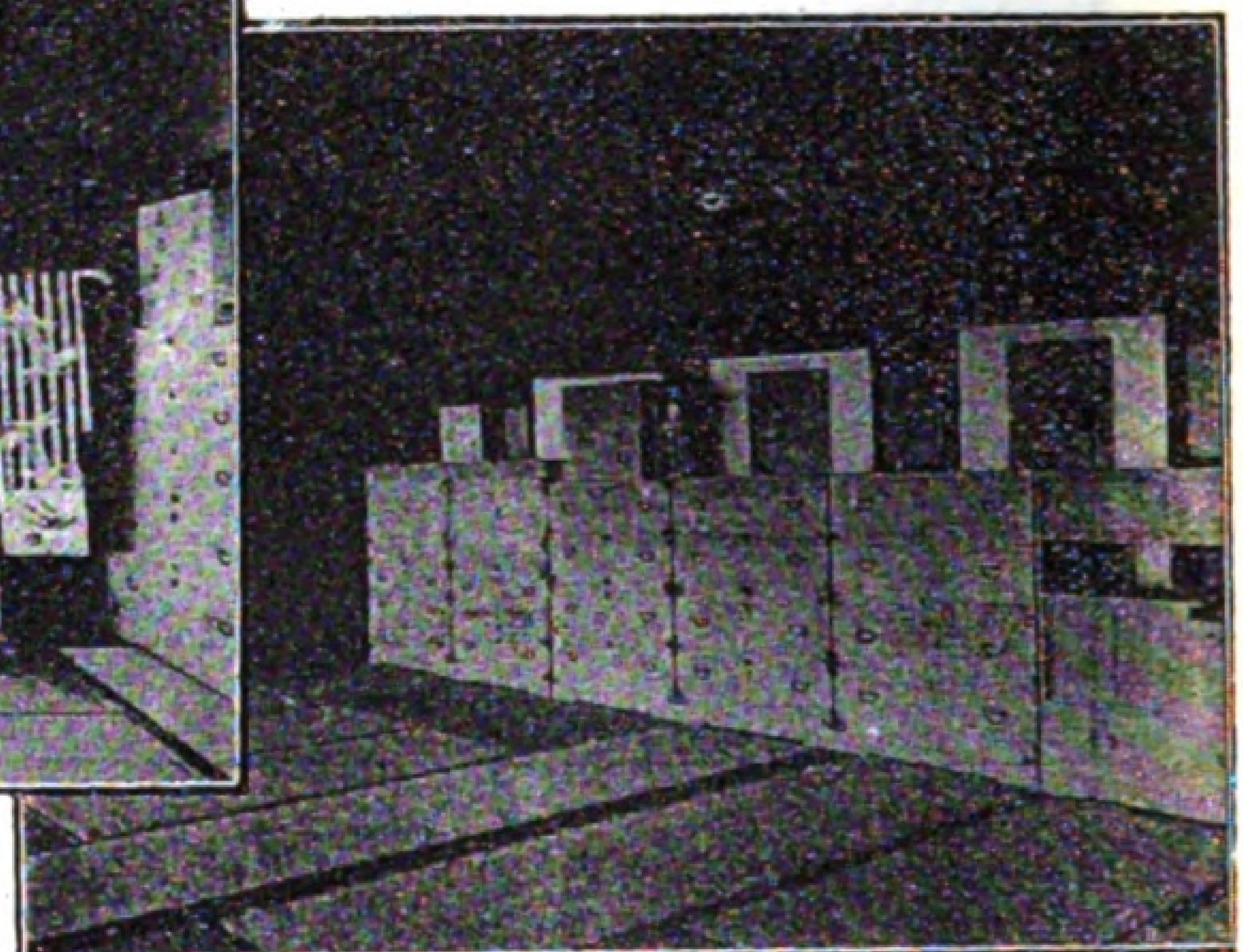
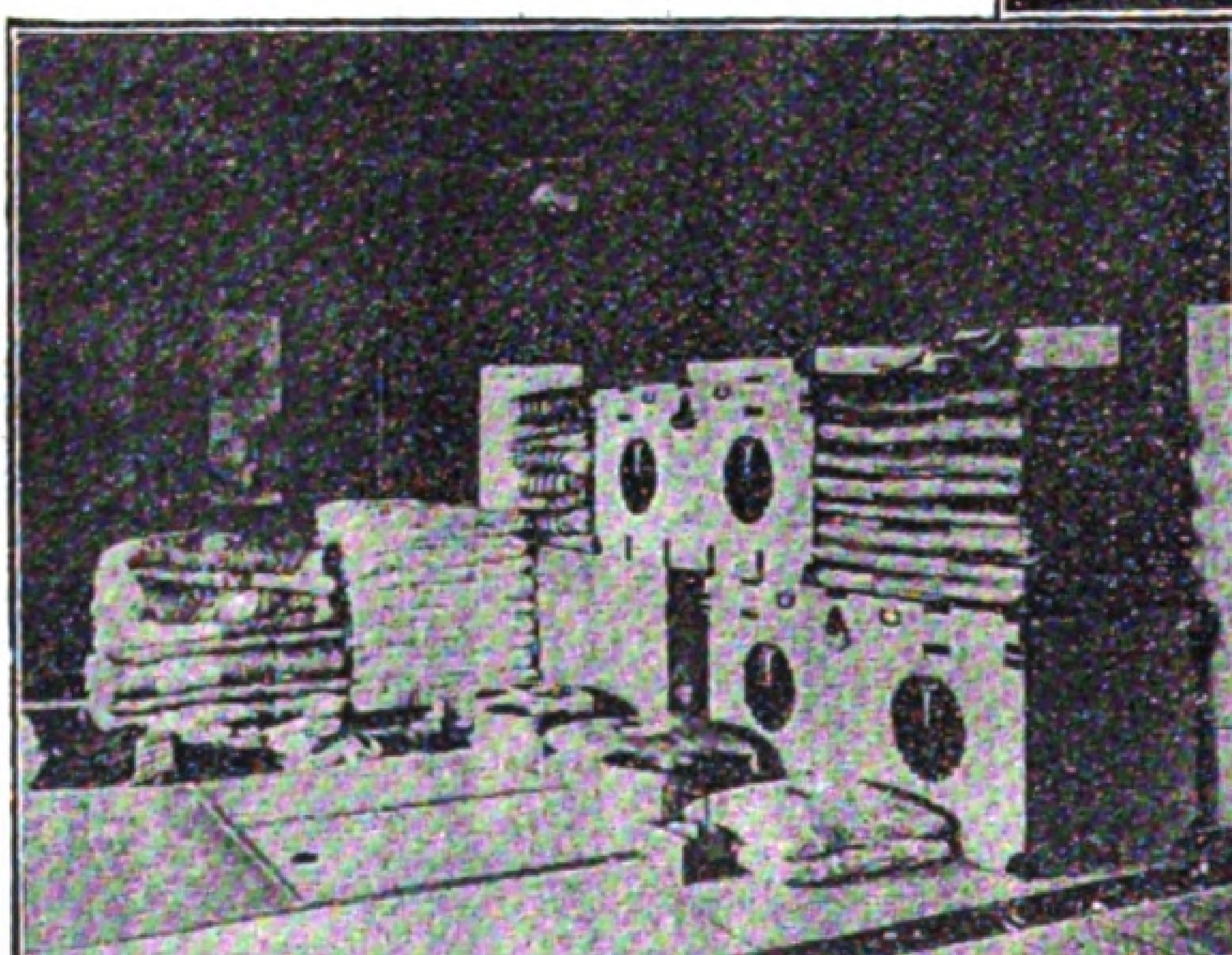
新婦の調度（其一）

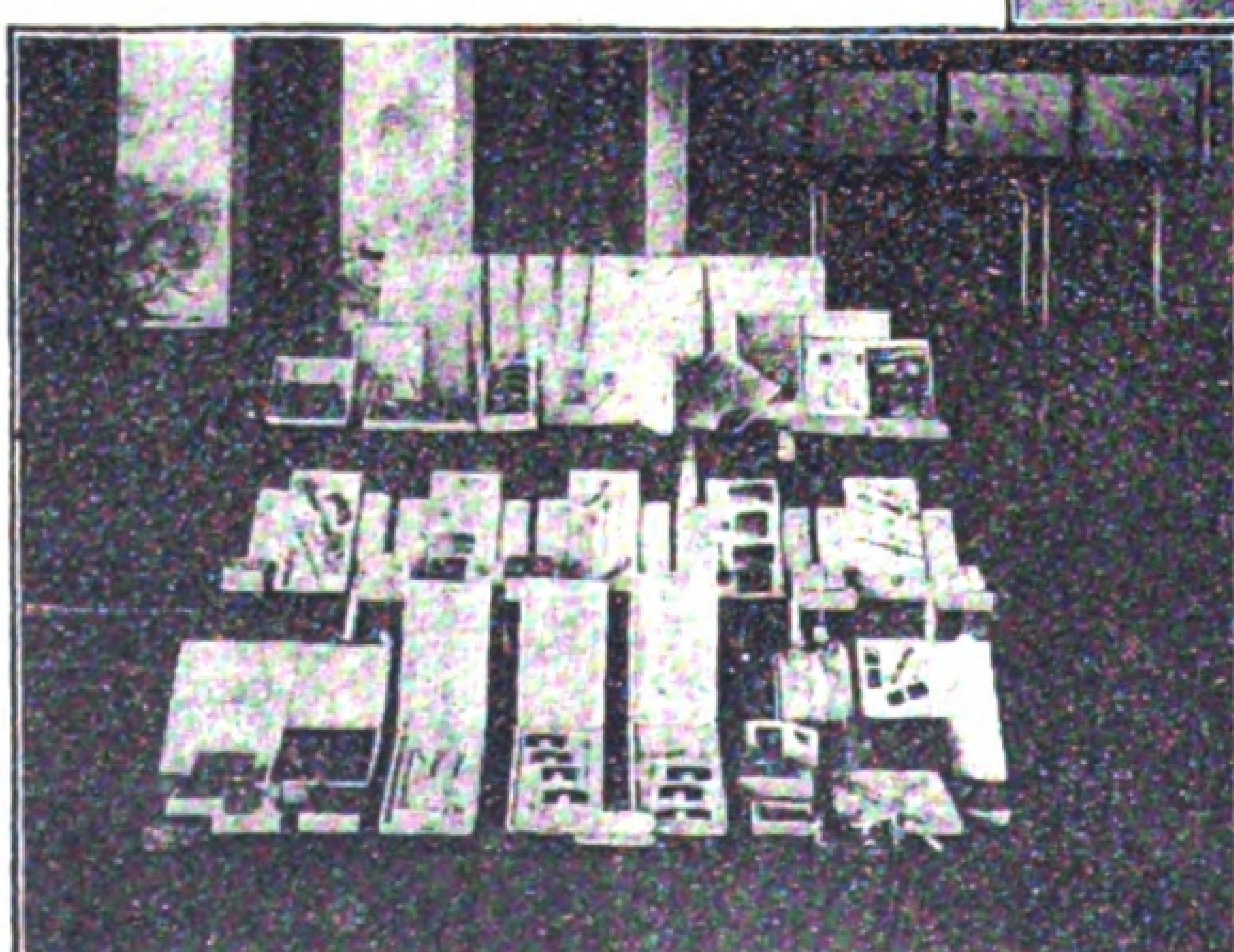




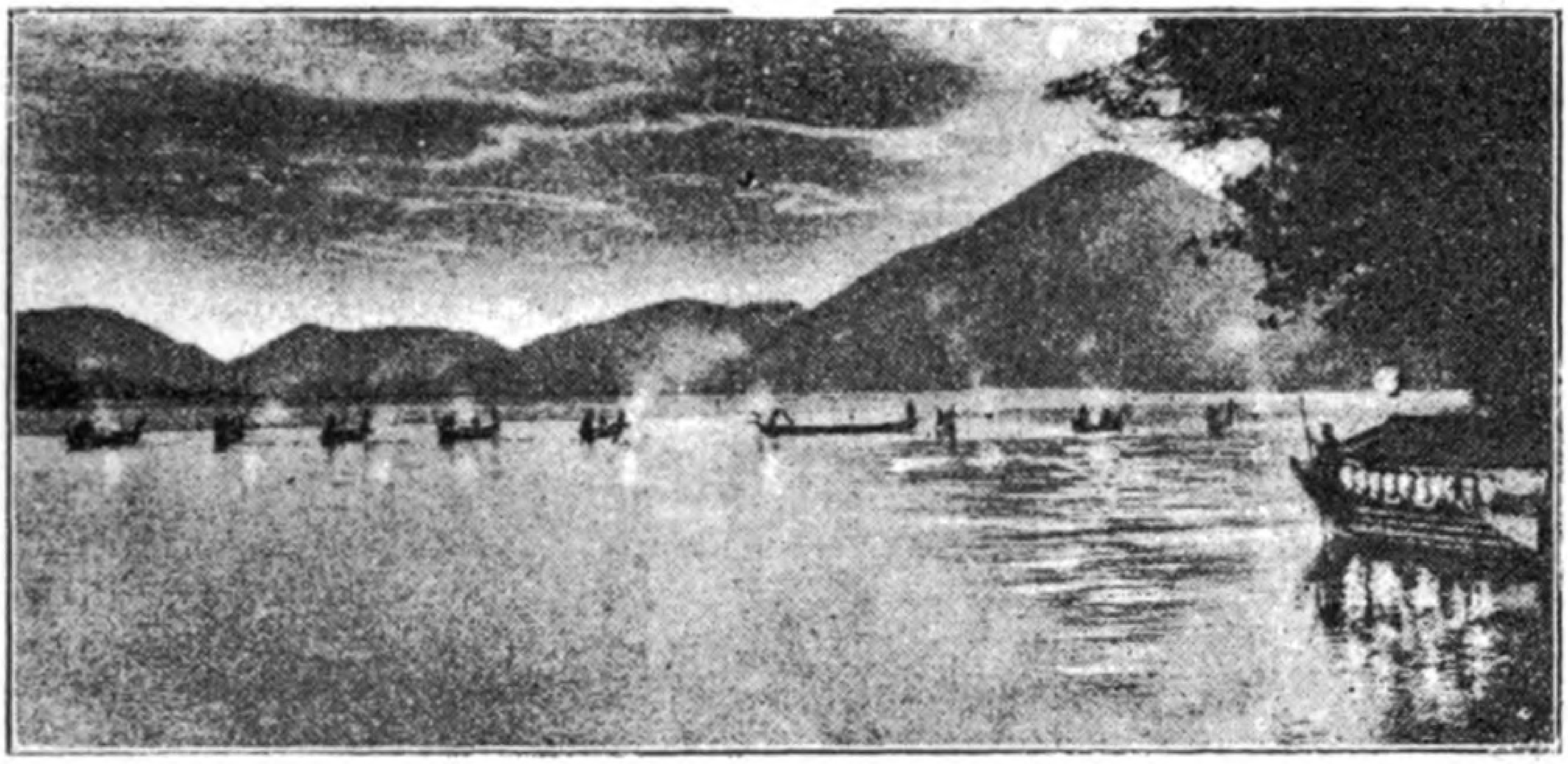
すめらぎの御代さかえもとあづまなるみちのく山にこがね花咲く（大伴家持）

新婦の調度（其二）




圖は今回華燭の典を擧げられし大橋文子孃が入輿の際調達されし嫁入支度の一部を掲げしものなり。



岐阜長良川の鵜飼

簾の蔭から

田村とし子

私の生活は比較的に自由な生活である。私の家庭私の夫――それは少くも私に苦痛を與へるだけの壓迫は加へてはゐないのである。私の家庭は私の心が世間に對してゐると同じ程度に開けつ放しである。家庭の門を閉ざしてその中に秘め込まなければならない。大切なものは私にはない。随つて私はその大切なものによつて煩はさるゝ束縛も顧慮もない。私は自分の家庭を考へるのも外のカフエーを考へるのも同じである　放縦な私は自分の家庭をかく放縦に取扱つてゐる。私は敢へて家庭を中心とした樂しみを求めやうともしたことがない。

私は又、ある意味において夫よりもゝつと自身に於ては親しさを感じてゐる男性の友達を持つてゐる。私はそれ等の人に對して自由な手紙を書く。さうして久しく不沙汰し合つて男の友達に久し振りで逢つた時、なつかしいと思ふ心情から私は夫の前でその男の友達の頰を扇子で突いたりする事もできる。それ等の男性との交際――それは如何にも善なものであると私は信じてゐるからである。私が自身の友達として、もつとも利益のある、



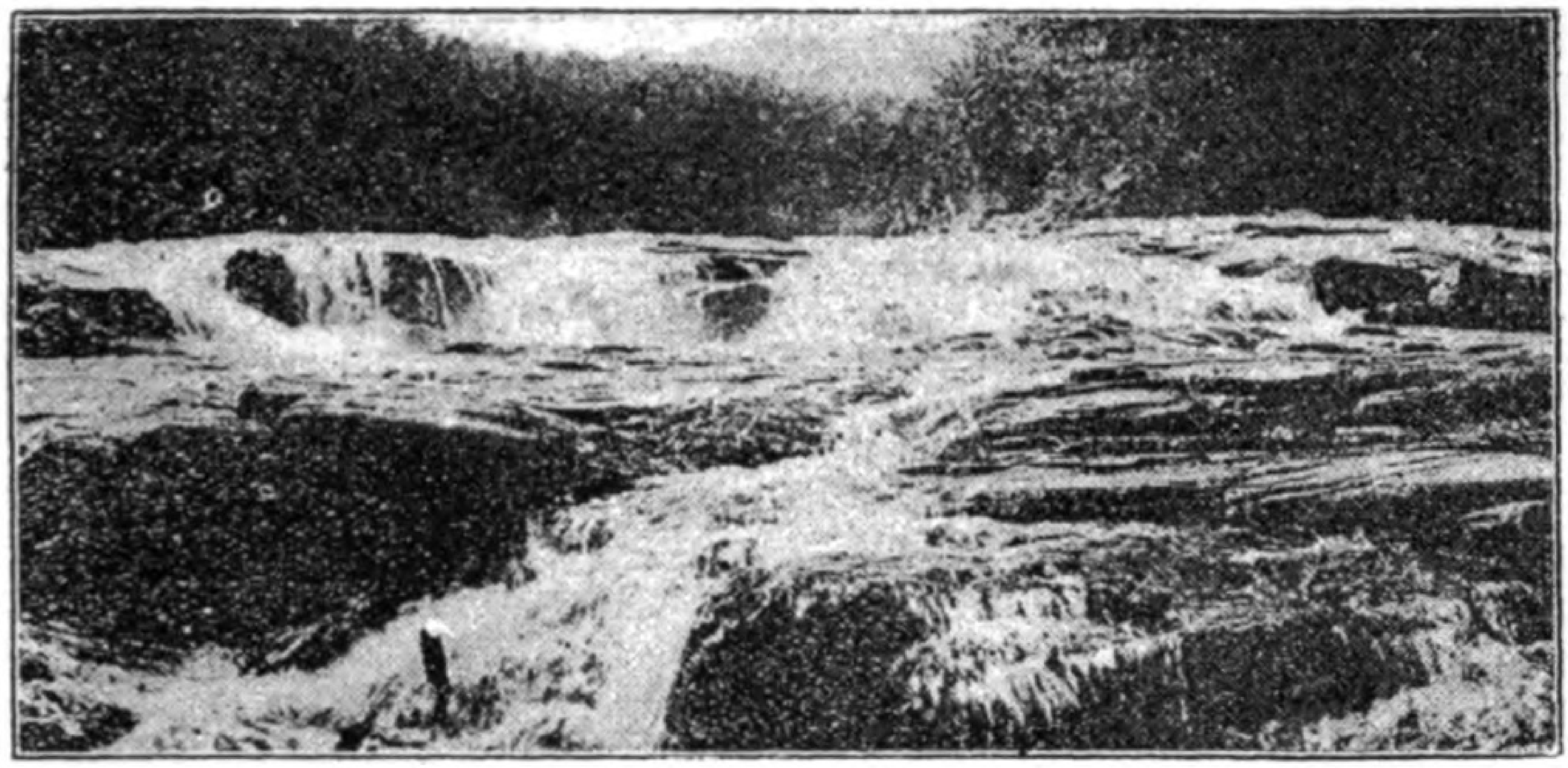
信州木曾寢覺の床

又もつとも趣味の一致した人を撰ぶ時、私にはその性の上に男女の差別を認めてゐないのである。

私の夫はそれに對して相當の理解を持つてゐてくれる。さうして文藝上に就て私どもは全然同一の見解を有してはゐないけれども、然し他方においては可なり親密の一致がある。自己の藝術の爲には自然夫との衝突は免れないが、其の代り家庭的物質問題に對しては私はいつも夫の意見に從つてゐるからである。甘んじて從つてゐるからである。私はそれ等の服從は、私の意志に何の强制するところもないと信じてゐる。

さうして、私が物質問題に對しては凡て夫の意見に任せてゐると同時に、夫も私の藝術的自由に就いては少しも壓迫を加へてはゐないのである。共同活動の上に、共同生活の上に、私どもはある理解からそれ〴〵の權利をお互に認め合つてゐるのである

さうして又私どもの間には斯う云ふ約束がある。それは何れかが他に向つて新な戀を得た時、二人は何時でも自由に別れ去ると云ふ約束である。然しそんな事はいざと云ふ場合にはいろ〳〵な複雜した心の要求から、然う無造作にも行かないかも知れない。唯お互の思想なり感情なりをお互の心と心に無理强ひに密着けておかうと爲ないでいつも自由に引きはなしておかうと云ふ拘束のない氣分を求めて約束した言葉であるかも知れない。


安藝深山溪

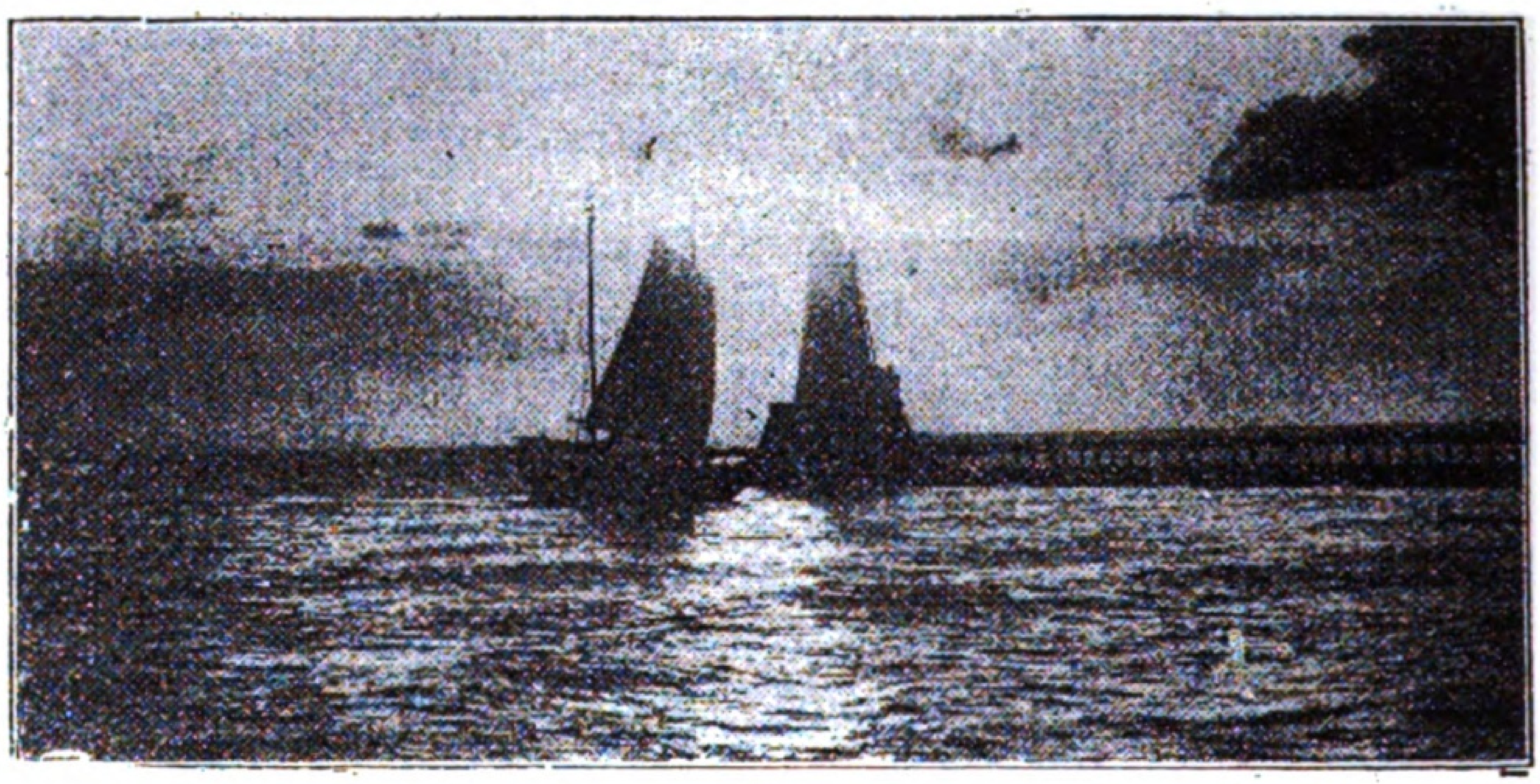
兎に角私どもの間にはある程度までは許し合ひ、了解し合つた自由があるのである。

私の生活は自由である。

然しそれと同時に私の生活は無秩序である。

親族の安寧の爲に家庭を設へ、家庭を樂園として夫婦の幸福、親族の平和を樂しむ人たちから考へたなら、こんな無秩序な紛亂した生活は唾棄しても足りない樣に思ふかもしれない。妻らしい女性が家庭を整理して行くのでない以上、秩序ある生活は到底營めないに定つてゐる。金錢に就いて打算のない私は悉く不經濟な事をやつてゐる。男性が經濟などに就いて考慮のないのは當り前の話なのである。秩序のない生活は其所から生じてくるのである。

私は自分の藝術的氣分から起る絶對の自由がある意味において、斯うした下等社會のくつゝき合ひの夫婦が厭氣が差すまで一緒になつてゐて其所に巣を食つてゐる樣な、劣等の生活狀態になつて現されてくる事を思ふと、何とも云へぬあさましさと苦痛とを覺える。さうして私は家庭における妻の務めと云ふ事に就いて心の痲痺れるまで考へる。然しそれは何かに打つ突かつた時に生ずる極りきつた問題で、私は直ぐ平素の私に返つてしまふ。さうして私は夫の理解に乘じて再び放縱な生活に浸つてゆくのであ



泉州堺大濱の夕陽

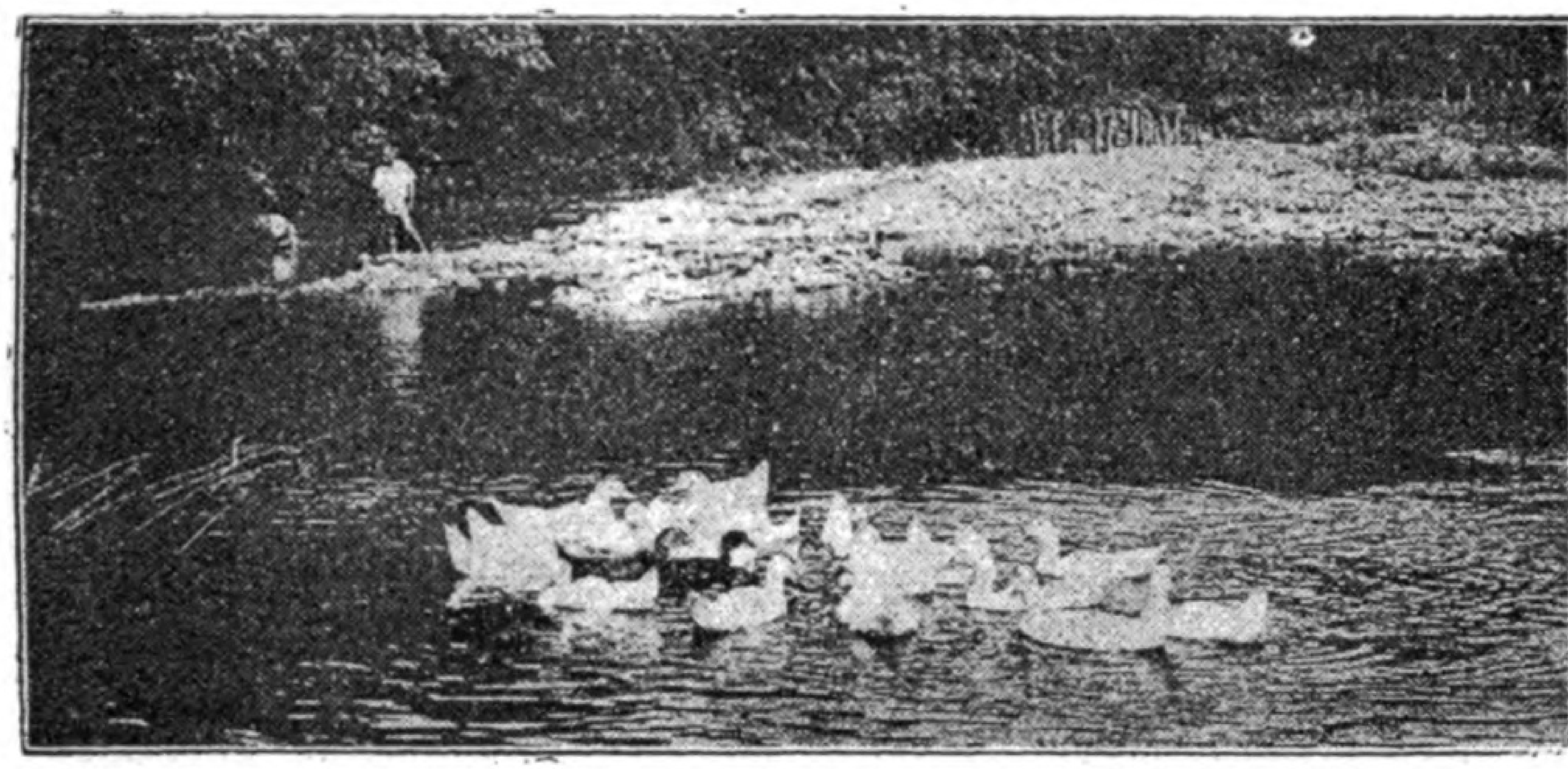
る。

私にはこの生中な自由が今では却つて時折に苦痛をもたらしてくるばかりなのである僅な自由の隙から思想の放縦は放縦を追つて何所まで落ち込んでゆくかも計られないからである。私にはそれが恐しいやうにも思はれるのである。

遂に身動きもならない、程の絶對の束縛、私はそれが欲しくてならない私は飽くまで男の手に服從を強ひられて見たい。さうして利不盡な壓迫を受けた時、私は始めてそこに眞實の自由が見出されてくるかも知れないと思つてゐる。私の今の、生活は自由な生活と云ふよりは、むしろ放縦な生活と云ふにとゞまつてゐるのである。

青踏社の一部の人は鴻の巣へ行つて強い酒を飲んだり、吉原へ遊びに行つたりした事が一寸した問題になつて、この樣に上つ調子な「新がり」を見ると嫌惡の感が募るばかりだ社會の一團から追ひ除ける必要があると云はれたりしてゐる。

さうして強い酒を飲むのは男の眞似をしてゐるのだと云ふ人もある。何も強い酒を飲むのが男の眞似と云ふ譯でもない。男で甘いものを好く人は女の眞似をしてゐると云ふ譯でもないだらうから。——然しあの若い


伊豆三島加茂川の群鴨

女の人たちは何を考へて殊更に大つぴらに酒を飲んだり、女を買つたりして遊ぶのでらう。奇行を衒つて自分たちの名をひろめやうと云ふ策からでもあるまい。酒が好きで〳〵仕方がなくつて飲むのだらうか。女が好きで好きで仕方がなくて、吉原まで出かけたのだらうか。懐手をして銘酒屋を素見して歩いたところで、其れは唯人の惡るい男性から下劣な嘲笑を浴びせられるだけのものである。

あの若い女の人たちは男性と云ふものを馬鹿にする心算で、男性の向ふに廻つて負けずに強い酒を煽るのかも知れない。男性をおどかす心算で吉原の貸座敷などに平然と押し上つたのかも知れない。長い髮をたくはへて柔らかい皮膚をもつた女が、いくら男の向ふを張つても夫れは唯、皮肉な男性の笑ひを買ふだけにとゞまるのである。

あの若い女の人たちは本當にお孃さんだと思ふ。何と云ふ可愛らしい、さうして又男を知らないと云ふ事を無邪氣に表白してしまつてる事だらう。男性をおどかすなら、又男の度膽を引き拔かうと云ふのなら、新橋一流の美妓にでも有頂天になられるやうな情事を作らなくつちや駄目である。吉原の貸座敷へおづ〳〵一と晩ぐらゐ宿るぐらゐな事ではおもしろくない。それから又男の文士たちの行く鴻の巣などへ行つて強い酒を飲むから男の眞似をすると云はれるのである。居酒やでゝもどぶろくを煽りつけ



山城嵐峡

て大道を酔つて歩かなくちや男たちは驚かない。社會の一團から追放さうと云ふ様な侮蔑的批判を受けてゐるうちは駄目である。然う云ふ人たちの所を管を巻いて歩き廻らなければ徹底しない。

兎てもやるなら、男のやり得ない事を遣つて見せるがいゝ。女にしてやり得ない事を遣つたところで、其れは唯擯斥と嘲弄とが殘るばかりである丸つこくふつくりした肉に包まれた女が、男の生活と同じ生活をして見せたところで、其所には唯女を知りきつた男の愚弄があるばかりである。

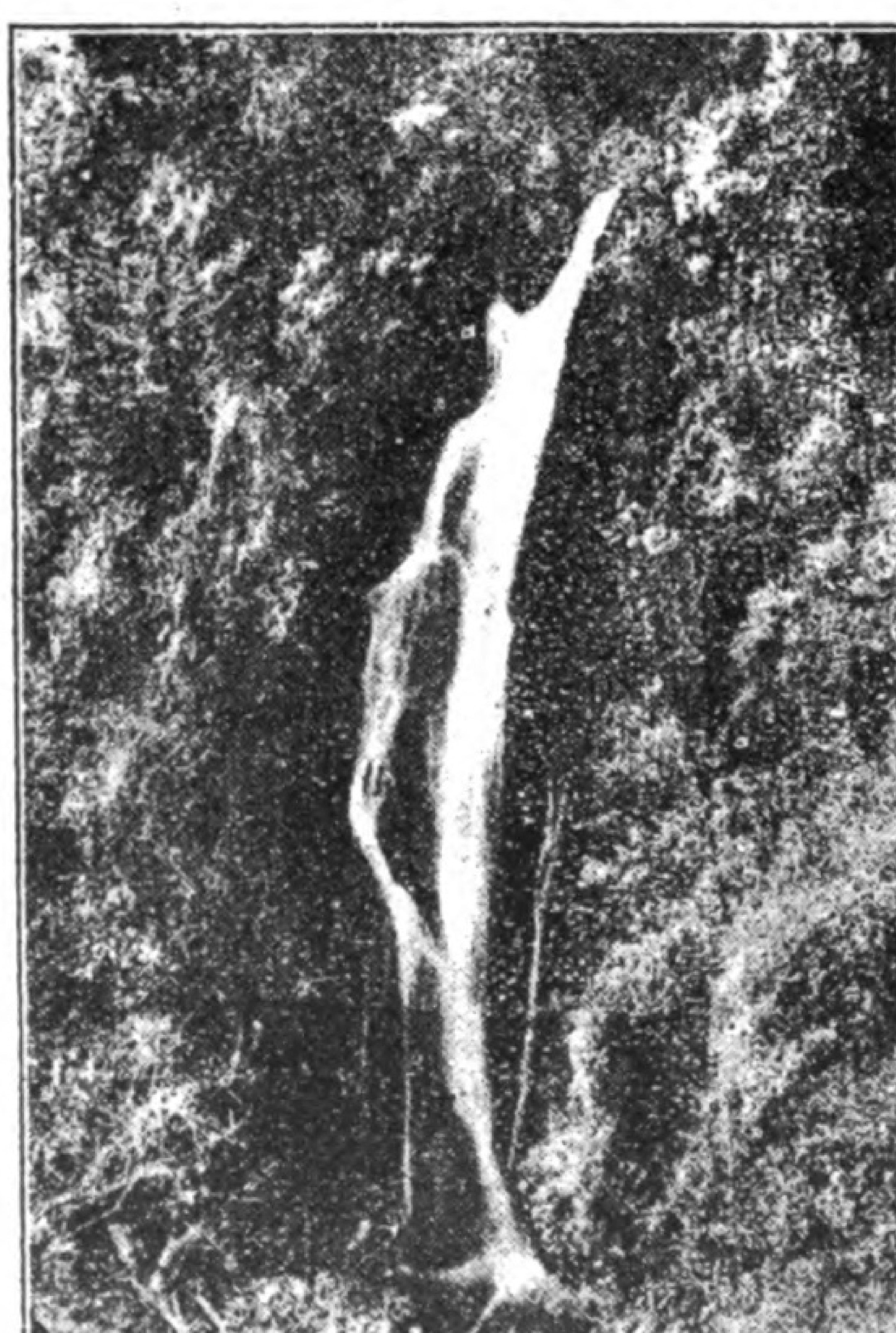
私はこの頃、時々、男のさも男性らしく力強さうな嚴つい骨格を見てゐると、その骨組を粉みぢんに粉砕してやり度くなる事がある。さうして錆をもつたさも男性らしい太い聲を聞いてゐると、その聲の再び出ない様に咽喉をひたりと塞いでしまひ度い様な氣のする事がある。男の男らしい外形の權力と云ふやうなものに魅せられてくると。私はかうした苦しい反抗に責められるのである。さうしていかにも極端な兩性の體現が不思議で可笑くつてならなくなつたりする私は同じ人間と名の付くもので、さうして男性でも女性でもない一種怪偉なものがこの世の中に飛びだしてきて、さうして男性と女性の間を永遠に割いてしまつたらどんなに面白からうと思つてゐる。

常識教育　新鶉衣

曙内侍

與女流文士書

ちはやふ神代のことは知らず。人間の世にくだりて、女流文士の天下に災禍せる、その淵源はなはだ遠しとなす。まづ額田女王が壬申の大亂を惹きいだせるは、言語道斷の擧動にして、治安妨害これより大なるものやはある。それより藤氏全盛の世に至りて、和泉式部が意馬心猿にまかせて仇し男と褄かさねせるは、女性の貞操を紊るものとして、風俗壞亂これより大なるものやはある。されば、瓜の蔓には茄子の生らぬ俚言に洩れで、近ごろ女流文士の間に、いと苦々しき行爲あるこそ、道理せめて是非なきわざなれそは何ぞといふに、噂は出づる瓢簞の、駒込の里にさる女流文士の一團ありけり。ノラよ、マグダよと、醒めたる女に憧憬れしうちは、天下泰平、無事安穩なりけるが、何時しかその鼻息途方もなく荒くなりゆき、麥酒を倒しては膝を枕に人生を談じ、狹斜に入りては同性の戀に轉た新しき氣分をやしなひ、その勢ひ猛虎の如ければ、流石海千山千の新聞記者さへ偏へに恐れ魘えて、唯だ遠卷の筆に『新しき女』の敬語を奉りしこそ實にうとましき極みなれ。此に於てか同じすさびの好



豐後別府齊原の雄瀧

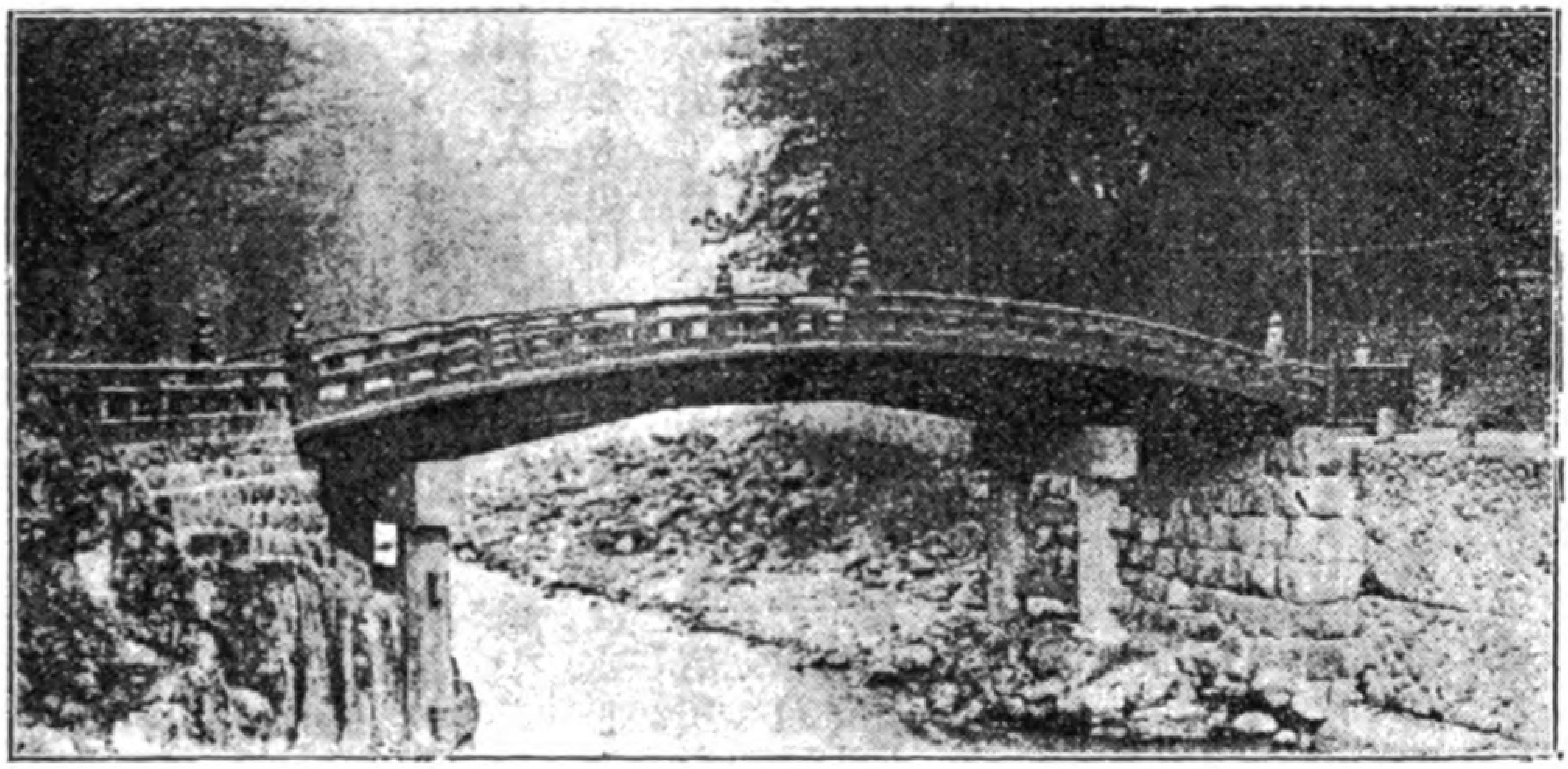
みもあれば・我れ三度思ふて些か諸姉に誨へむ。夫れノラやマグダの舊慣を脱して家庭を去りしは、理性の判斷に訴へし所なるが、諸姉の行爲は理性の判斷に基きしとも思はれず。唯だ感情の奔放にまかせて慾望を恣まゝにせるにはあらざるなきか。麥酒を倒すも可し。狹斜に入るも可し。人生を談ずるも大に可し。同性を戀ふるも更に大に可し。求むるところ新しき氣分を養ふに於ては、いたづらに舊慣、舊式を墨守せざるが却つて英雄素の含蓄深く賴母しけれど、それを得意げに機關雜誌に載せ、新聞記者に吹聽するに至りては、公衆に誤解を招ぐの他、何の得るところもなけむ。彼の三面子が『新しき女』と云へるは、諸姉よ、果して何とか解する。新しきは珍らしく、珍らしきは新しその間に何の差別もなきが如けれど、實は千里の距離あり。三面子が奉りし敬語は、淸新の意義を含めるものにあらずして、實は珍奇の意義を含めるものなり。やがては評判々々の聲を嗄す時も來るならむか。これを想へば寒心に堪へず。不文を草して更に諸姉の三思を仰ぐ。

瀑布の辭

およそ夏日のあつきを避けむに、海邊におもむくも深山に入るも、或は湖畔に構ふるも、温泉にゆくも、いづれか涼風萬斛の新天地ならざるはなけれど、なほ瀑布の邊には一歩をゆづりつべし。白雲蒸騰の山溪を



日光湯本湯瀧



下野日光神橋

越えて、喘ぎ登る爪先に、杖に、額の汗の玉と碎くるとき、颯と吹きおろす嵐と共に、忽ち耳朶に落ち來る轟々のひゞきこそあれ。仰いで天空を望めば、一簾の瀑布、萬丈の高きより落下して、巖壁のはら〳〵松、危くも落ちむとはすなる。この折の涼しき、何に譬へむものもなし。瀧壺より起る一道の冷氣は、迫りて肌へに粟を生ぜしめ、頭部の血液をして、自づから四散逆流せしめぬれば、いかなる腦病患者も、坤軸搖がす瀑布に對しては、忽ち根治せられずやはある。さるを底事ぞ彼の悠々天壤を識しゝ青年は、巖頭に立ちて、却つて瀑布に躍り込み、摩訶不可思議の謎を永く此世に遺しけるもうとまし。これに比ぶれば、源氏方なる遠藤武者が、那智の瀧の荒行に遁世頓悟の門に入りしこそ、かへす〴〵も稱すべき業なれ。季節や盛夏の堪へがたきを迎へぬ。往け〳〵、深山幽谷の瀑布に往け。往いて心身を一新せよ。蓋し公園の湯瀧は如何などゝ、卑怯なることを言はむ輩は、必ずや伊勢平氏が子孫にやあらむかし。

旅行の說

百里の草まくらには泣いて別れを告げ、千里の楫まくらには水さかづきしけるは、旅にして誰れか泣くらむと歌ひける遠つ御代の夢がたりにて、今はひらけゆく大御代のありがたく、陸には鐵路の何處までも延びて、ゐ



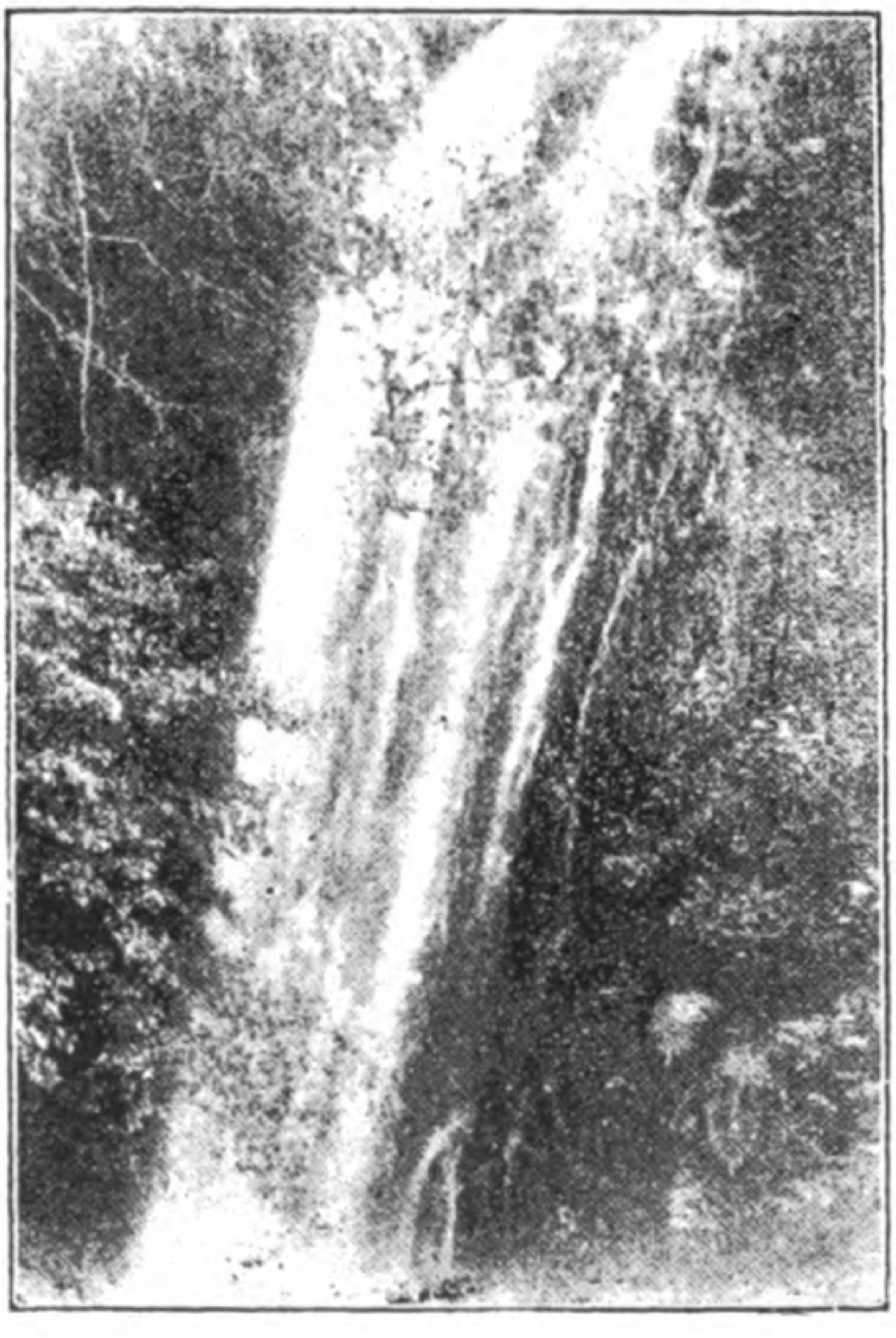
上總木更津海岸

したに新橋にて日の出を拝みぬと思へば、その日のなほ沈まぬ中に早くも京都にぞ着きぬる。海路には海路の幸多くして、遠州灘、紀州灘などゝ云へれば、むかしは聞くだに身を震はせしに、今は青海原出づる月を眺めく、らして、孟德が詩腸を偲ぶもめでたし。されば、可愛い子にさする旅も、昔に於てこそ、雲助の惡ものに強請られ　かどはかし、ごまのはひに尾けまはされて、辛苦艱難の稽古臺ともなれ、今は唯だ山河明媚の風景を眺め、氣ばらし氣散じの保養とのみなりぬる。かく一概に言ひて退くれば、旅行の要はたゞ無下に贅澤の遊びのごとくあれど、心の用ひかた一つに依りては、また限りなき修養ともなるぞかし。そもや己が居室を一歩出づるも、悟らば天地の悠久を知りて、哲學的思想を養ふにも足りぬらむ。況して美しき自然に接しなば、情懷こゝに洗はれ、詩囊にはかに重むを覺えむ。更に具さに地方人士の生活狀態を觀察しなば、史學に裨益すること豈に尠かるべき。獨逸の古語にも、旅行を人生修養の一にかぞへしこそ、實に道理ふかけれ。

朝顔の辭

あさがほの趣き、何くれとなく多かれど、やはらかき地殼を破りて双葉を開きたる時ほど面白きはなし。その莖のいろを看て、こは紅ならむか、

白ならむか、將た紫色ならむかなど〻、まだ程遠き花の色を卜するも、美しき少女の行する末を想ふには似たらずや。それよりやう／＼蔓の伸びそめて、浮世のませ垣亘らむとするさま、なか／＼味ひ深けれど、すでに柳里恭ぬしの筆にかゝりて、物のたとへに引かれぬれば、今更諄々しくいふも懶く、こゝには唯だ露の干ぬ間のいと短かく、果敢なき言をのみ繰りのべむ。そもや此の花を眺むるに、くるひ咲、かはり色などのいと異やうに咲きたるは俗めきて厭味多く、垣根にひし／＼と咲きたるは田舍旅屋によくある習ひに似て趣きいと薄かり。緣日の植木棚に晒されながら、花の色だにさだかに判らぬを、わかき夫婦づれの購ひてゆけるは、新生活に清涼の料を増すならむかと、あはれさいみじかりけり。隱居が丹誠に咲きたるは、萎みてもなほ摘みきる可からず。理髮店の大きやかなる鉢植は宵越の金錢は如件と、褒むれば親方の鼻の孔まで開かむとはすなる。さあれ、そのあざやかなる美しさには、芭蕉翁も膝を正して朝飯を

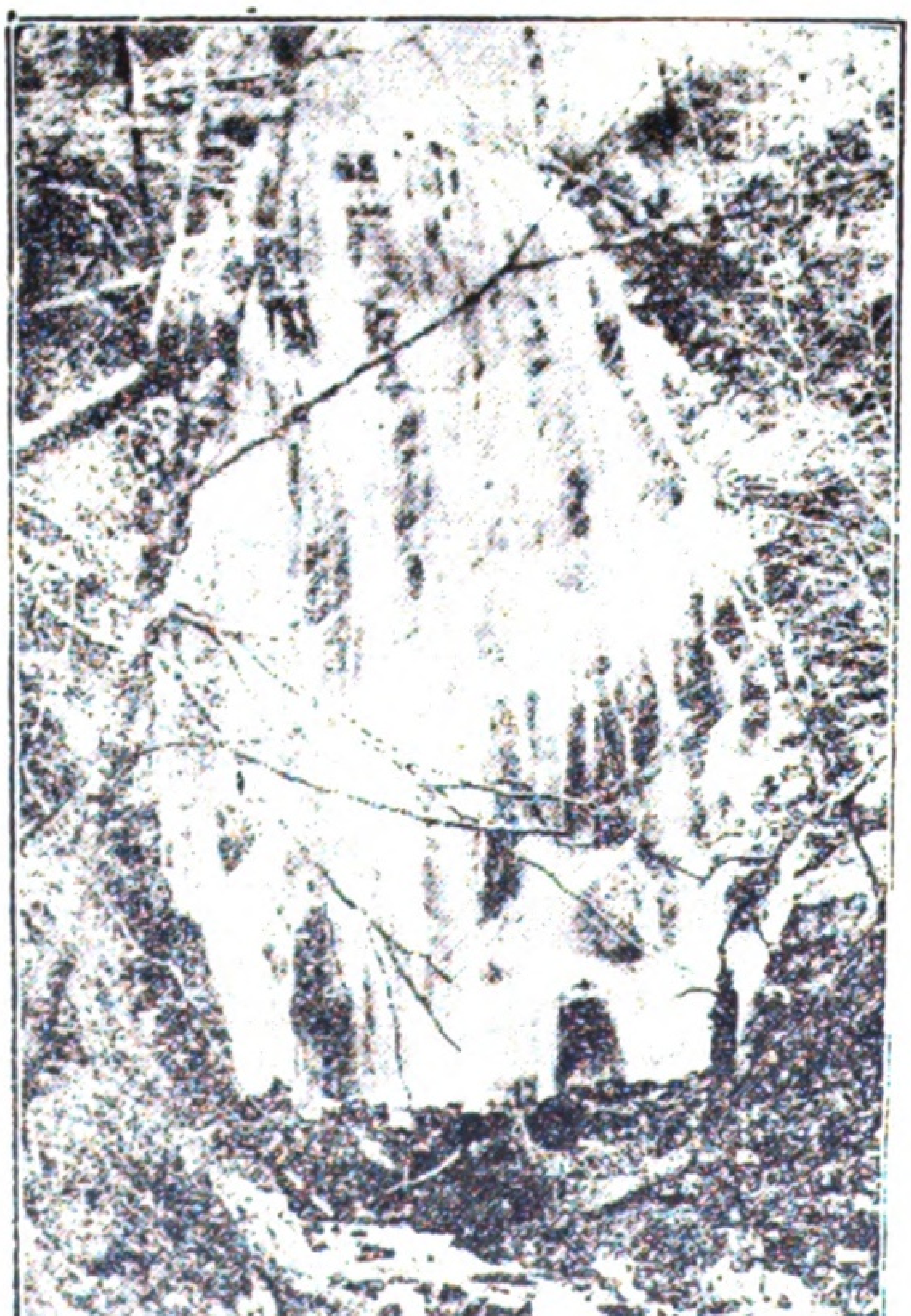

豐後音居瀧

喫し、そのいたいけなる優しさには、千代女も釣瓶を取られてわざ／＼隣家まで水貰ひにぞ行きける。今朝しも朝顏の咲きにければ、記念の爲めにとて、かくは水ぐきをのたくらせにけり。

後園の記

縱しや十歩に足らぬ後園なりとて、大都會の一角に

蟲の音しげき田園の風情をうつし出せるこそ、此になき我が矜なりけれ。見よや、朝霧ふかく立罩めて紫の露滴らむとせるは、法師すがたの茄子にぞあなる。脊丈いと高やかに伸びて、頭には金モールめけるを戴き威風堂々の袖を風にひるがせるは、玉蜀黍なりけり。褐色の毛ふさ〳〵として、早くも熟しつべき態なるに其一つ二つを手折りて皮を剝きけるに、老人の齒の疎らなるが如く、僅かに十五六粒ばかり着きてあるこそ申譯じみて甚と淺猿しかりけれ。垣にからまる胡瓜の、葉は殊の外秀れて茂りけるが、折角生りしものは、或は釣針の如く曲り、或は楔の如く尖り、或は花おちのみ徒に膨らみて、さながら達磨の如き形したるもありて、例の八百屋の店などに見るやうなるは一本もなきこそ腹立しけれ。芋の葉の風に戰ぎては、露の白玉ほろ〳〵と零れ落つ。來む芋名月の夜には、友どち數多招き請ぜむと思へど、玉蜀黍の例もあれば、心の中なか〳〵に安からず。瓢簞棚の蔭には、嬉しや二つ三つブラ下りて、日毎にいとど大きうなりゆくに、來年の花見には酒や盛りなむ、秋の夜長には艶布巾かけて家寶の一つに加へなむなど、瓢簞より駒の出づるが如き想ひにぞ耽る。誰れ植ゑしともなく唯だ芥溜より這ひ出でし南瓜の蔓の、縱横無盡にのたうち廻れるさまは、近ごろ流行る新しき女のさまざまの氣分を味はむとて、さま〴〵なる試みを爲すに似、いとゞしう可笑しかりけり。



上野碓氷男瀧

月	火
5. 12. 19. 26.	6. 13. 20. 27.

水	木
7. 14. 21. 28.	1. 8. 15. 22. 29.



八月

驕陽威を弄する八月の炎熱には、屋根に甍白くかゞやき、庭に草木いたいげに萎れど、驟雨一過して軒滴の聲未だ罷まざる時、涼風限りなく吹起りて、有らゆる生物を甦らしめむとす。あはれ此折の涼味、何に譬へむ物のあらばこそよ。

心天冷す水あり竹の中　不水

日
4. 11. 18. 25.

土	金
3. 10. 17. 24. 31.	2. 11. 18. 25. 30.

大隈伯爵家を始め其他の諸名家より多數御注文の榮を辱ふす以て本器が如何に優秀なるかを知られよ

新橋堂式 組合せ本箱

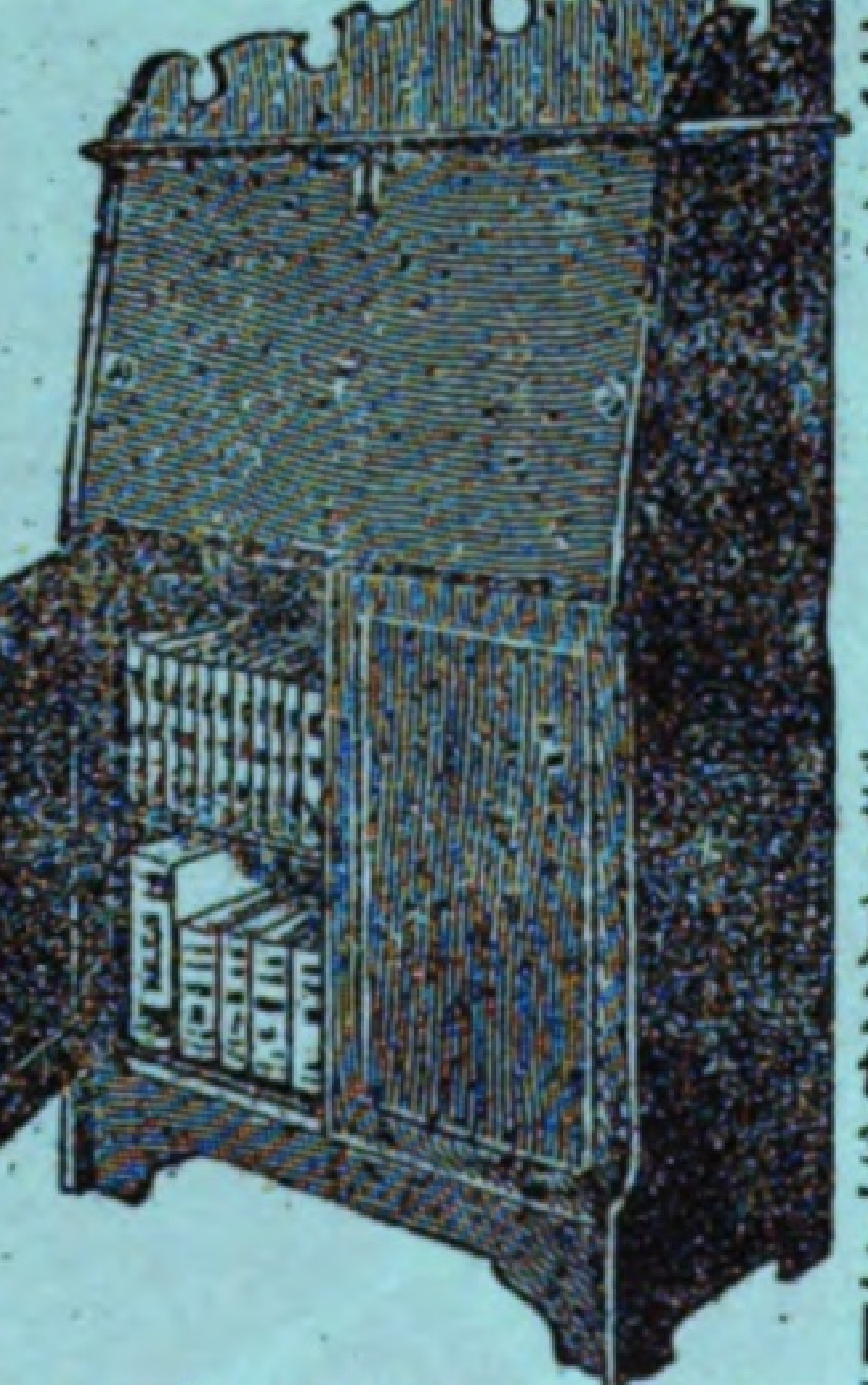
●最新式最新形の本箱にして目下歐米諸國に大流行を極め居れり
●多數の優れたる特徴を有す其重なるもの即ち左の如し



△藏書の増減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし
△室内の構造に應じて適宜に配置し得べし
△書物を分類するに最も適當なる構造を有す
△形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

金二十六圓 檜製
金二十八圓 欅製
金三十圓 櫻製
運賃荷造費御自辨

理想のデスク



事務用定價金廿五圓
書見用定價金廿二圓

☞構造を示せる目錄は郵券二錢封入御申越次第進呈

荷造費各一圓八十錢
運賃は御自辨

●デスクの上部は事務用又は書見用に用ひられ下部は帳簿棚又は書棚に使用するやう構造されて居ります
●夫故日常必要の帳簿又は書物を最も手近に配置し得て便利此上もありません
●デスク使用後は机板を閉ぢて其大さを短縮する事が出來ます
●材料は兩デスク共檜です塗は木地色のデスク仕上げです

發賣元 東京市京橋區銀座大通新橋際 **新橋堂** 電話新橋千九百九十一番 振替貯金口座二百番

●家庭改良の最良指針!!!

村井弦齋先生著

增補註釈 食道樂

◎本書には米料理百種、パン料理五拾種、病人料理百五拾種、日用食品分析表、食器食品價格表、料理心得の秘百種等の附錄あり

春夏秋冬 合本 定價金貳圓 郵税拾八錢

增補註釈 食道樂 續篇

◎春の卷には野菜料理百種、夏の卷には果物料理百種、秋の卷には魚料理百種、冬の卷には肉料理百種の附錄あり

春夏秋冬 分本 價各壹册八拾錢 郵税各册拾貳錢

增補訂正 台所重宝記

全壹册 和裝 定價金壹圓 郵税拾貳錢

著者の自序に曰く此書の記事は盡く我家庭の實驗する所にして余は飽く迄も世人に親切ならん事を期すと

▲發行所 東京市麴町區有樂町（振替東京七三八番）報知社出版部
▲發賣所 東京市銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番）新橋堂書店

銷夏之好伴侶

文學博士芳賀矢一先生松浦政泰君合著（裝幀頗美本）

好評嘖々

婦人美譚

上下三千歳、東西一万里、本邦は勿論朝鮮支那西洋各國の太古より現代に至る婦人の逸話美談を一切網羅し、而かも言文一致體に書き著はしたるものにして佳人才媛の美、貞女烈婦の壯、良妻賢母の實、俠女勇婦の誠、紙上燦爛として花薫じ月輝く宜しく各家庭各學校に備へて、修身補導の材料に資すべき近來稀有の好著書なり

家庭の好伴侶

菊版洋裝上下二冊
定價各壹圓五十錢
郵税各十二錢

女（ぬの二）

鳩山春子女史著（好評嘖々）

第三版

婦人の修養

全壹冊　定價一圓二十錢　郵税金拾貳錢

本書は女史が深き素養と廣き見聞とを以て婦人常識の修養を說きたる書にして敢て新奇に走らす舊を套はす極めて其中庸を得たる好著書なり希くは家庭に備へて一讀の勞を吝しむ事勿れ

實踐女學校長下田歌子女史著

三體女子消息文

全壹冊

特製壹圓貳十錢並製壹圓　郵税金十二錢

本書は女史が子女間に往復する通信文に就て其起源、變遷、種類、組織、書き方を最も簡明に說き更に之を雅文、候文、口語文の三體に分ちて文範を示したる好良著書なり

發賣元 東京本町 博文館・發行所 東京小石川 精美堂

女（ぬの三）

沼田笠峰君著　山村耕花君畫

新少女スケッチ

全一冊
洋裝四六判
南京綴美本
紙數二百五十餘頁
正價四十五錢
郵税六錢

さきに少女スケッチを出して大高評を博した著者は、更に新らしい觀察と新らしい筆致とによつて、この書を公にしました　少女子の優にやさしい心、しとやかな態度、純潔な愛情、けだかい行爲、やるせなき胸のなやみ、華やかな歡樂など、みな著者の溫かい筆によつて、さながらに描かれてあります。書中の事實は小說よりも面白くて、而も修身書よりも教訓に富んで居ります。新時代の教育を受けた少女は、必ずこの書を一讀せねばなりません。

·東京　博文館　本町·

●急告 油顔とセボレア液 急告●

顔面皮脂漏(俗に油顔)とは皮脂腺の分泌増加し顔面は常に脂肪あり一種汚穢なる光澤を呈し皮膚は常に淺黒く美貌を損するのみならず夏日班面皰等を併發し且つ此種の人は甚だ日に焼け易く微力なる光線に對しても直に皮膚黒色となる油顔に白粉の附き惡きとは既に諸氏の熟知せらるゝ處今茲に記するの要なし所詮油顔を治せざれば到底顔面美を發輝せしむると不可能とす今般弊堂にて發賣するセボレア液は學術的研究の結果製出したる理想的高等化粧料にして一日二三回洗面後本液の少量を顔面に塗布すれば皮脂の分泌を適度に調節し皮膚を艶麗ならしむると同時に前記の併發症を未發に防ぎ特に日焼豫防に著効を奏す速に御試用あらんとを乞ふ

●セボレア液定價一瓶(一ヶ月用)金壹圓送料八錢

發賣所 東京市小石川區江戸川町廿三番地 松下一心堂

隆鼻術

はなたかくするほう

東京市九段下 神田今川小路二丁目十一番地

和田耳鼻咽喉醫院

午後

電話本局一七三〇番



東京神田裏猿樂町

東洋音樂學校

電話本局三八五四番

生徒募集

本科、特別科、本校及び京音樂學校入學豫科

新學期九月五日始業

補缺生募集

ピアノ。オルガン。バイオリン。唱歌其他管絃樂器及理論等

音樂家となり又樂みに之を學びたき人は本校へ申込みあれ

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる奇薬を専門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸説を參考し有力薬を配合したる妙藥なれば世間に有觸れたる技術と學理に暗き藥が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賣藥品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する莵寧丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し拔毛の再生を早むる事請合薬價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●●●●取次所ハ前月ノ廣告ニアリ●●●

取次所ナキ地方ハ直接本舖ヘ註文アレ

ヂノサール 一ヶ月分 貳圓

複方ヂノサール 一ヶ月分 參圓

らい病

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力薬なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を繼續服用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴かしむる妙藥なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする賣藥の實藥に非ず

本舖 三河國碧海郡刈谷町

醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

振替口座東京貳參壹壹
電話長 刈谷參拾貳番

女(ゐの五)


世界お伽文庫
毎月一回發行
巖谷小波先生著
洋装菊判美本
紙數各百餘頁
毎編挿畫木版廿個入
正價一冊十三錢
郵稅一冊四錢
1 大勇士
2 魔法鶴
3 半分物語
4 善玉惡玉
5 王取王子
6 二人天使
7 強力太郎
8 妖怪壺
9 報恩鬼
10 活地獄
11 金色鳥
12 海の花
13 足跡物語
14 笛の力
15 家來三疋
16 飛行の馬
17 山の神 上編
18 山の神 下編
19 忠義猫
20 鬼火物語
21 二人山賊
22 羊息子
23 朝日姫
24 孝女アンネ
25 白髯大王
26 此親此子
27 大蛇の夢（沖舟畫）・新刊
（東京本町）博文館發行

女（四の六）

女子文壇化粧顧問答顧問藤波芙蓉先生實驗發明

クセ毛トレ 美髪剤

美顔 コールドクリーム

艶肌剤

●美髪剤定價 小三拾錢中五拾錢 大瓶壹圓▲同特製 香油壹圓五拾錢各 小包八錢市内四錢

●クリーム定價 壹瓶金壹圓 小包八錢市内四錢

●艶肌剤定價 壹瓶金六拾錢 小包八錢市内四錢

清韓 臺樺 卅錢

◎日やけごめ 定價壹瓶四拾錢 小包八錢市内四錢

專賣元 東京市京橋區大鋸町 振替口座壹七五九 女子文壇社代理部

わきが及皮膚病

最も完全なる治療法

夫れわきがなるものは腋下の分泌液より一種不快なる惡臭を發する病症なり凡そ人として此病有時は全身常に惡臭を帶び殊に暖季より暑季に向ては惡臭一層甚だしく人をして近接に堪さらしむる實に人間として耻づべき惡病なり又婦人の如きは外面如何に美なりと雖も此病有る時は人皆之をさけ應對談話するも快とせず故に良縁を妨ぐる等實に悲み憐むべき惡病なり然れども未だ是れらに確實なる良藥を認めず爲に當主其の患者に治癒の目的を達せしめんと四川醫學士と共に多年研究苦心の後ち茲に一大良劑を發見し數多患者をして實見するに偉大なる効力を有し愈々確實なる一新藥となれり依て同病者に弘く傳へん爲内務省に向て出願したるに當省に於ては本劑を試驗の上(第一六八二九號)を以て官許せるものなり藥名清腋散と名く同病者は輕重に拘らず本劑にて完全なる治療をせらるべし又本劑はたむし、水むし、いんきん等の皮膚病は如何なる痼疾と雖も速に治癒す……●藥價五十錢、一圓、二圓 送料八錢……●本舖へ代金を添御注文あれば直に送藥す

製劑本舖 東京神田錦町三丁目三 中村實珠堂藥局

色白くなります

色黒き青き赤き日に燒け易きお方は既に實驗の皆樣より有効著しいとの禮狀が澤山參りました お望の御方は郵券二錢封入御照會下さい見違へる程色白くなる良藥を委しく御知らせ致します

東京神田區鍛冶町五 大塚とよ子

產科婦人科專門大醫 大和田宗順先生方劑

帝國大學藥學專攻藥劑士 玉應勝海謹製

月やく下し

『快月丸は子宮を痛めずいか程長き月經とまりにも効あり血塊には特製を服用せば快く下る。本劑は斯道の專門大醫の方劑にして學理に暗らき素人、奸商の營利的製品と其効大差あり、服藥の撰擇に迷ふことなく、早く試み藥効に浴せられよ』

定價一劑六拾五錢 二劑壹圓貳拾錢 特製貳圓 送料各八錢

東京市小石川大塚辻町十七番地 天信堂藥局

改良 ね小便袋



◎子を持つ親病人ある家人は是非必要特許品

定價●乳兒用九拾五錢●中人用壹圓貳拾錢●大人用壹圓九拾五錢 特別製品各十五錢上り

送料各拾錢

衛生最良德用ね小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば小兒病人老人の最も必要にして、おきたち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長なり(男女の區別あれば御注文の節御注意を乞ふ)

注文切手代用必ず一割増 振替口座(大阪拾四番)

發賣元 大阪天下茶屋町 ともゑ號

(その七)


フロラー香水
廿錢、一圓廿錢、一圓八十錢
登錄 商標
美髪の御料には
柳清香油
けいお香油
が最も愛用されます
美術小間物化粧品
東京日本橋通二丁目
柳屋本店
電話本局二〇一
毛のはへる薬
多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇薬
一圓、●一圓半●濃厚二圓●三圓半●送料十錢
養容散
やせる薬
●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる奇效薬なり
●定價(一週)七十錢(三週)二圓(五週)三圓二十錢●送費十錢
◀似せ物あり乞御注意▶
リウマチス特効劑
驚く可き効驗確實の特効薬禮狀山の如し
七日分三十五錢
半劑七十錢
一劑一圓三十錢
二劑二圓四十錢
送料八錢
方名パウル氏丸は獨逸醫學大博士パウル先生發明の靈薬にして三十有餘年間服用各位の實驗報告に依り益奏効偉大なる特効薬と確信す…證明禮狀寫希望の方申込あれ送呈す
全快禮狀に内保存す一覽を乞ふ
新宮薬館
東京本郷三丁目(振替一二五八四)
電話下谷五一四六番

女(ぬの八)

新らしい女



内田魯庵

△所謂新らしい女

先頃、讀賣紙上に新らしい女とかいふ題で毎日いろいろの女が出た。ところで世間で新らしい女と稱してゐるのは一體如何なる女でどんな事を言つてゐるのかと思つて一種の好奇心を以て讀んでみたがさてどこが新らしいのかさつぱり解らない。まづ私には新しいとも何ともないと思はれた。併しあれで一つ見出したのは所謂新らしい女と云ふのは職業を持つて居ると云ふ事である。あの新聞にあつた女は一人のこらず何か仕事をして居た。何にもしないでゐる普通の娘とか、一家の主婦となつて家を治め子女を敎育しつゝあると云ふやうなのは一人も見當らなかつた、あれによつて見ると今日の新らしい女と云ふのは職業ある婦人と云ふ事が重大なる一つの資格であると思はれる、さう思つて考へるとノラでもその通りで自分を敎育しなければならないと云ふて夫の家から飛び出したがいくら自覺したからとて食べないでは居られない。どうして生きやうと云ふことが、第一に起つてくる問題だ。そこで何かする即ち職業を執るといふ事になるのは知れきつ

た事實だマクダも矢張り職業を持つた女であつた。一體今迄の女が男子よりも地位が低いとか男子に壓迫されてゐたとか云ふのは一つは從來の女子の多くは何にも職業をもたない、獨りで生きて行く事は出來ない、男子に倚り男子に養はれてゐたと云ふ處から來た當然の結果で、之に反して職業を持つた女、獨立をなし得る女が男子に對して反抗的の態度をとるのは之又當然の結果であるが米一粒かせぐ事を知らない女迄がそれをまねてかれこれと生意氣らしい事を云ふのは甚だ心得違ひと云はねばなるまい。

△そんな女は大嫌ひ

けれども職業をもつた女が嫁に行く迄新らしい女、自覺した婦人で家庭をもち、妻となり、母となつてゐたのでは新らしい女ではないと云ふのはどうであらう。もしさうならば覺醒した婦人と云ふのは嫁に行かない、いつ迄も獨身でゐる女といふ事になるが一家の主婦となつて居る人には新らしい女が一人もないと云ふ理窟はない。今云ふ新らしい女と稱するのが果してこれで即ち職業を執り獨身を主張し、結婚を以て屈辱であると心得てゐるならばそれは婦人の天職を忘れてゐるもので少なくも私はそんな女は大嫌ひであると云ふを憚らない。今時にそんな女が澤山に殖えると云ふ事は社會にとつても喜ばしからぬことゝ思ふ。一體妻と云ふ職責は決してそのやうな屈辱的のものではない。家庭と云ふものはそんな淺薄な考で處理出來るものではない。眞の人生の意義は結婚によつて夫婦關係が形づくられた後に初めて解るものであるから獨身生活をしてゐて人生の意義も知らないものにどうして眞の自覺が出來やう。自覺したと云ふならば當然婦人の天職もわかる筈である、自分は何をすればよいかといふことも解る筈である。併しこゝに私が云ふ天職と云ふのは家庭以外に何か職業をもつと云ふことではない。何をするかと云ふのも家を外にやれ婦人會やれ慈善會と飛びまはると云ふことでもなければ男女同權をふりまはして選擧權運動などをせよと云ふのでは無論

ない。そんな事の外にもつと〳〵手近な處に婦人が手を着けなければならない、婦人の力をまたなければ出來ない事が澤山にあると信ずる。

△下婢と細君との相違

それは第一に家庭であらう。男子は外へ出て活動すべきものであるから家庭などの細かいことを顧る暇がない則ち家庭は男子の領分ではなく、これこそ婦人が誰憚る所もなく公然活動す可く與へられた天地である事は古くから誰も認めてゐる處である、故に婦人は何處迄も家庭をば自分の城廓として自分の勢力範圍として他からは一歩でも侵入することを許さないといふ意氣込でなければならぬ。しかるに今日の社會は上下を通じて家庭の神聖が保たれてゐると斷言されるのが果してどの位あるであらう。何々婦人會長、或は幹事と云ふ立派な肩書のある夫人でも自分の夫一人の不品行さへどうすることも出來ないものが多いではないか。自分の城廓には滔々たる濁流が逆まくと云ふ有樣で社會事業など



が成功するわけはあるまい。よし社會事業がよい結果を得られたからと云ふてもそれは本來を誤つたものと云はねばならぬ。私は社會事業にたづさはる前に家庭の弊風を改善して行く事が自覺した婦人の急務であらうと考へる。それには從來の普通の細君のやうにたゞ家庭に於て裁縫をしたり、洗濯をしたり食物を料理する丈では足りない。單にそれだけの事なら妻でなくとも宜しい。下女を雇へばすべての用が足りるではないか。妻と下女との異る所は即ちそこである。新らしい婦人にはこの位の事は解らねばならない筈だ。私はその意味に於て新らしい女を要求する、封建時代には武士の家庭に育つた女は丁度同じやうな武士の家庭に嫁ぐのである。武士氣質と云ふ事も共通であるし、生活の程度も略同じやうだ。それ故に自然コンモンインテレストも合致してゐる。であるから女大學、女今川でも讀んでゐれば嫁いでからもさう困る事はないけれども今は四民平等で交際する人も千差萬別である必ずしも官吏の娘が官吏の妻となるとは限らない。この點から考へても多方面の智識が必要になつてくる。多方面の智識を得るためにはいろ／＼な學問をせねばならぬ。從つて女子教育は大に必要である。教育のない婦人はこれからの社會には適しない、併しこれは智識の方面を云ふのであつて丁度衣服の如きものである。人格は三千年の昔も今日も異りはない。人の身體が上代でも今でも同じであるが着てゐる着物はいろ／＼に變化しつゝあると同樣智識のみが時代と共に進化するのでパーソナリチーはその儘でたゞ現れ方が違ふと云ふのみに過ぎない。時世に伴はない智識は役に立たない。昨日上野へ着いた許と云ふ風をして東京の市中をのそ／＼歩かれては家の人も外聞が惡いやはり相當のなりをしてくれなければ困ると云ふのと變りはない。

△時代の生んだ畸形兒

處が今の新らしい婦人と云ふのは男子と共同して生活して行かうと云ふのではなく、男子に反抗する態度

である、西洋では婦人の勢力が強いとか何とか云ふが矢張り近世迄は男子の爲に壓迫を蒙つてゐたのでそれがために何となく男子に對して繼子根性があるのは爭はれない事實で何でもない事にまで甚しく神經過敏である。だから新らしい女と云ふのを見ると皆ヒステリックで稍ひねくれた所があるらしい。かう云ふ女の表面に現れた處だけを觀察するのでなく内部の心理を解剖して見たら必ず一種の淋しみがひそんで居るに相違ないと思ふこれは丁度男子に反抗して獨



身主義を唱へてゐる女のそれとも一致するだらうと思ふ。婦人に就いて興味を有してゐる人々が研究してみたら案外面白いだらうと思ふ。彼のノラやヘダの如き（マクダは藝術家だから少し違ふが）は全く時代の生んだ畸形兒である。丁度あの時代に婦人一般があゝいふ思想の傾向を持つてゐた處へイプセンがあれをかいたから大に世間から受けたのであるが、しかしドイツでもあれを理想としたのではない、昔の日本の小說例へば八犬傳の如きものは作者が勸善懲

惡を目的としてかいたのであるから中に出てくる人物は皆何か道德的のシンボルであつて作者自身もそれらの人物に對しては多少の尊敬を拂つてかいてゐる。たとへ泥坊でも義賊だとか何だとかいふて何處か聖人めいたローマンチックな處がある。從つてよむ人々もそれに感化され作中の人物の人となりを尊敬して或は義經となり正成とならんと思ふのであるがノラやヘダに至つてはイプセンが書く時にその主人公に對して別に敬意を拂つたのでもなし、道德などといふ事は勿論考へもしない。たゞその時代の畸形兒を主人公としてかいた迄である近代の小説は皆この主義であるのに日本の人は古い小説をよみ昔の芝居を見るくせがついてゐるためにその惡い習慣に囚はれて後前も考へずにすぐ作中の主人公になりたがるといふ氣味がある。それに同情するのはよいがそれに眞似られては困る。

△氣狂沙汰の選擧權運動

實際日本では何でも西洋直輸入であるから實際にあてはまらない事が多いノラ、マグダと騷いでゐる人達が果してどれ程かやうな問題を痛切に感じて居るかと云へば事實は案外そんなではないらしい。西洋では婦人問題に限らず實際があつて思想がそれに伴ふが日本では何時も思想が先に入る。かういふ思想があるから實際にも行らなくてはなるまいといふ調子である。社會主義の如きもやはりさうである。西洋は開けてゐるには相違ないが日本ですべてそれにまねるといふ事は出來ない。小説にも隨分甚だしいのがあるが實際は小説以上の女が澤山にある。殊に選擧權の運動の如きに至つては婦人と云ふ點は殆んど認められない。石をなげて首相邸の窓硝子等を破壞したさへあるに亂暴して牢へ入つたものが一團となつて各自牢へ入つた印を胸のあたりへつけ同じく監獄の印のついた旗を聯隊旗か何かのやうに押し樹てゝ市中をねりあるいて示威運動をするなどといふに至つては突飛と云はうか、狂氣の沙汰といはうか殆んど形容すべき言葉を知らないのである。

水面なづる風涼し今日も竿釣りに



米の價と身の價

村雨

紺碧の大空には一刷毛撫でた程の薄雲も懸らず、葉櫻のゆれ間に見ゆる微風のすが／＼しさ雀までが嬉しさうに梅の枝から松の幹、楓の葉がくれへと轉々と飛び廻つてゐる。

良人はもう圖書館へ……茶椀、箸、汁椀、鍋を洗つて、土釜を磨いて新らしい水を汲み込み、室内を掃除して板の間の少しばかりの雜巾がけがすんだのは七時に未だならぬ。

例のやうに床を拔けると直ぐ寢間着のまゝ七輪の下をかいて土釜をかけて着更へしてから火鉢に鏡を持たせて髮を結んだが、昨日足した入毛の馴れぬ故か根が右に片寄つてどうも變手古で氣持が惡い。思ひ切つて又結び直した。もう二ケ月洗髮しないものだから其汚れが一通りでなく櫛通りの音がザリ／＼と聞ゆる。今日洗つてしまはうか知らむ？　でも……一體私はどうしてこんなに吝嗇になつたんだらう？　錢湯での五錢の洗髮料と二錢のふのり代とが馬鹿／＼しさにこんな有樣だもの、それなら釜一杯湯をわかして臺所の隅で洗つたら理由は無いだらう？　でもそれは斯うしての間借生活のつらさ、江戸子の家主に田舍者のしみつたれ根性と見られるのが流石に恥しい。衛生家の眼から見たらさぞ不潔至極だらうに、昨日買つた入毛だつて



甲州猿橋

どの位奮發した結果かしれない。

私は此近來つく／＼と自分の守錢奴然たる態度に驚嘆してゐる。毎月の二十圓の爲替を虎の子のやうに儉約の度はすでに越して吝嗇然たる方法で小心翼々と唯唯健樣の赤門のめでたい通り終りの日を指折り數へてゐる。

四升内外の二等米が六圓、副食物が三圓、炭が一圓石油が一升五合、醬油が二升、味噌が六百目、玉子、砂糖、酢、鹽、一日隔の入浴料、間代四圓、其他雜費を含めて毎月の手元は左程苦しい感じはない。クラブ洗粉や御園御白粉が欲しいわけではないし、七錢五厘の花王石鹼が二つ五錢のライオン齒磨粉が一袋とは二人で使用きれぬ。ミンゼル香油の必要もなければ小瓶に水油五錢を三河屋で入れさせれば一ヶ月は充分すぎる。



日光華嚴の瀧

中流社會の人士を以て任じ中等生活を標榜する婦人間では、一日三十五錢で五人分の献立の研究や、帶上切二つの處分法等に頭腦を絞つてゐる天下太平に、私は私等の現在や將來を考へ較べると微弱な恐怖と其底には一種の奮闘力とが湧いて來る。私は生意氣にも、國家の中堅たる中流以上の教育ある婦人の心理狀態が自ら世を狹ふ見做して心中に餘裕の影が沒して孤城を守つてゐるやうな一定の型にはまつてゐるらしい感じがしてならぬ。所謂、良家庭の意義は其神經過敏な心中餘裕のない婦人の冷たる手で堅く維持されて、さうして其家長は比較的意志の弱さうな男らしからぬ人ら



筑前香椎宮

しい解釋がされるのは私の僻見だらう。

それはさうとして、金縁眼鏡の美髯紳士連が我子なればこそだらうけれども都大路の眞中を乳母車を押して、着飾つた手ぶらの美しい婦人を引具して歩いてゐるのは何の傾向と命名するだらう。罪のない清い夢を結んでゐる彼の乳母車の中の愛らしい幼い人はさても幸福と果して斷言されるだらうか。貧乏な片田舍の水呑百姓の家庭に生れた私等は男だらうが、女だらうが容赦はない。姉弟喧嘩したと云つては寒中襦袢一枚に剝がされて、大黑柱に麻繩でくゝりつけられ、着物を汚したと云つては肉の飛ぶやうに臀部を打たれ、泣出しては更に石火の勢で大きな掌は飛んで來る。私はこんな體罰を受けて來たことは明瞭に記憶してゐる。無教育な兩親が理由もなく嚴しい制裁を何彼につけて加へられたのを漸く今日感謝して私は心ひそかに拜むのが常である。時代、地位、場所の相違もあるけれど育兒法の變遷は隨分甚しい。

貧乏の空氣を吸ひ通しの私は意氣は別として生活上については、どんな下流の部に陷つても敢て驚かず自若として居らねばならぬと思ふ。でも矢張り女の悲しさには、八百屋の店先で葱一錢、蒟蒻一丁、大根一本、里芋五合、芽蓮根三錢、と買求むる折々に、走りの瓜の一本三錢四錢を平氣で、さつさと買つて行く人を見ると流石に心細さを感じては、我と我心を詰るのが常である。牛肉なら十錢豚肉は五錢づゝと極めて求

めるが、僅かばかりをさぞ面倒臭いだらうと私はいつも肉屋に感謝してゐる。少しばかり注意して動くと帝都生活の恩恵を感受する場合がある。故里で聞いた東京は非常に魚類の拂底地で且其高價な事は一通りでないと、しかしそれは普通多くの家庭に出刄庖刀や刺身庖刀の用意がなく、來客と云へば、それ口取、それ刺身と肴屋から岡持で若い衆に運ばせた結果の趨勢に外ならぬと思ふ。或る氣質に囚はれて、大家、旅館、下宿屋等で不經濟に買つた後の鯛の頭や切身等は皿に盛られて肴屋の店頭を賑はしてゐる。公衆衞生の行屆いてゐる都會では、ビク／＼して買物する必要はない。安價な皿盛等を出掛けて買つて來るのは一般中流以下の通り懸りの人や勞働者みたやうな人が多い。私は十一時過ぎると朝見た新聞の魚河岸だよりによつて出掛ける。さうして上品な潮汁をつくる時もあれば、新らしい鮪の切身をよりわけて刺身をこしらへる時もある

私は、生活費問題をさらけ出して、とやかう云ふほど片腹痛く嫌ひな事はない。其頭に始終其方法處分等が彷徨してゐるので、淺ましく覺える。融通の利かぬ臆病者と化することを恐るゝ私は未來永遠に榮達遊ばさねばならぬ良人に朝夕附添つてゐて安物集めの膳立をする罪を容して頂かねばならぬ。

あゝ、私は下らぬ事を思ひ出しては暗鬼をなせつくるのだらう。昨日の鐵拳、無論私の片意地が禍したのであると觀念して置く。



佐渡小木矢經島



繪もの語

わかくさ草紙（下）

太田三郎

樂しかるべき新婚の夜は、さうした惱ましい空氣の中に明け放れました。

人形のやうな花嫁の、未だ嘗て男と云ふものを知らぬ心には、其新郎の打沈んだ餘所々々しい態度を、どう解釋してよいかも定め兼るのでありましたけれど、併し何と無く或る物足らなさの感じが、若い處女の壯んな血潮を鈍らせずには居ませんでした。

少將は燃え上る火焔の苦しみです。終には堪え兼てつと席を立ちました。間も無く一輛の牛車は慌しく門を出でました。常ならば未だ恥しい怖ろしい其夜の夢が容易に覺めもせぬ時刻ですのに、渠はもう車を我家へ向けたのであります。

其處に彼の懷しい若草は、別れた昨日の儘に、宛でがくりと落ちた花のやう、疲れた體を簾の際に倒して居るのでありました。ぴたりと頰へ絡み附いた黑髮、今は涙さへ枯れ果てた瞳、長かつた〳〵一夜の思ひが如何に激しく此纖弱い人を呵んだかと思ふと、もう堪りません。渠はよろ〳〵と其上に倒れ懸つて、耐えに





耐えた一夜の涙を、遽にどつと樋の口開けたやうに溢れさせるのでありました。

かくて其後も、渠は斷ち難い執着の糸に曳かれて、夕に强て三條へ送られても、朝に直ぐ我家へ立歸ると云つた風で、少しも新婦の家には馴染ませんでした。

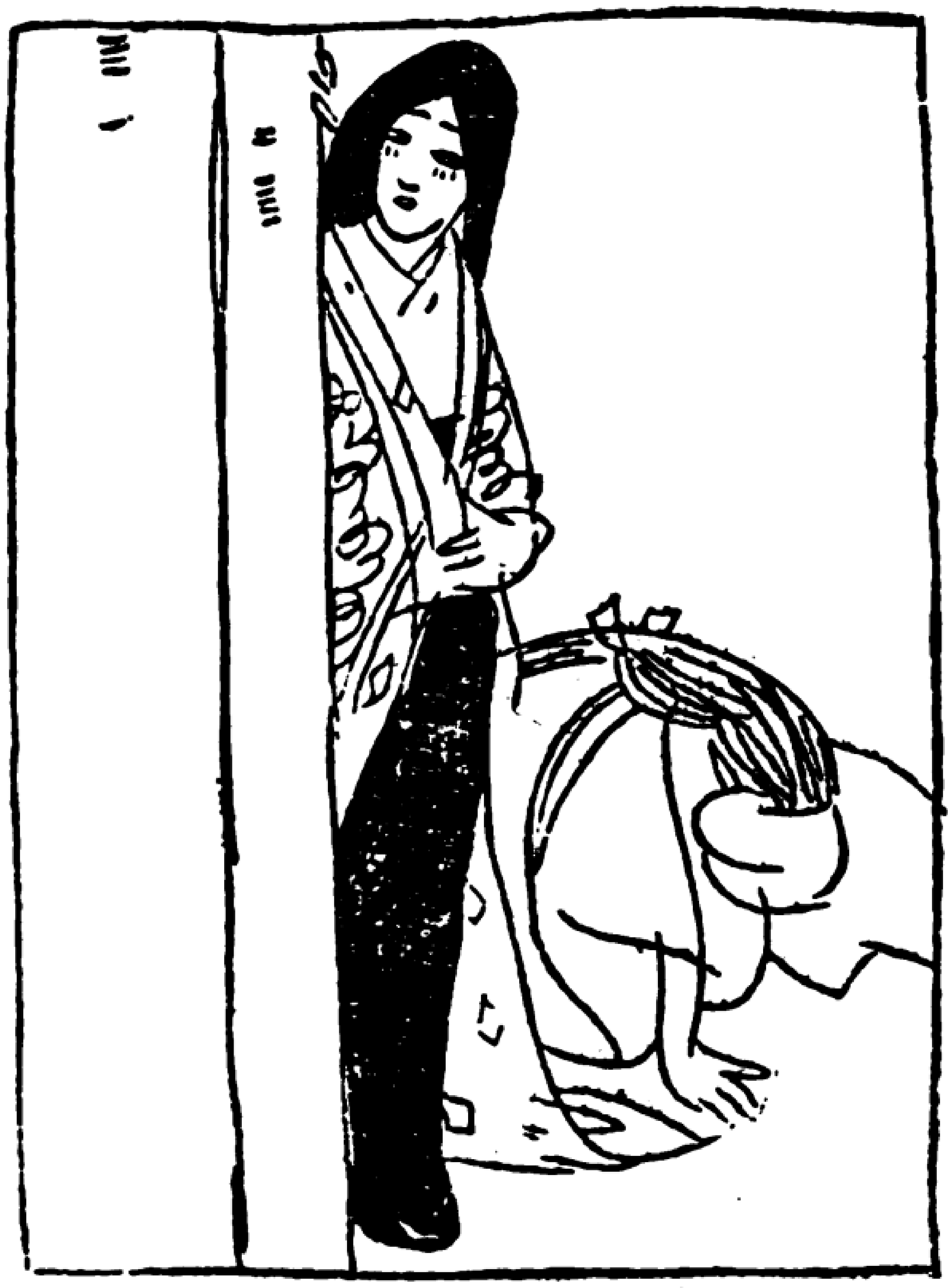
父の大納言の怒は一通りでありません宰相の思わく世間への聞え、それを思つては外觀を飾る老人のどうして其儘に打捨てゝ置きましやう。理が非でも三條へ行かせねば止まぬ。怎うした權幕で手を更へ品を變へて少將に迫るのでありました。けれどそれは燃え盛る火に注ぐ水の、却て反抗の度を强めるばかり、些の効果もありませんでした。

有繫の老人もはたと當惑して了ひましたが、不圖ある時ある事を思ひ附きました。それは動き易い靑年の例、若し若草さへ此家に居なかつたならば、渠の心は屹度宰相の令孃に移るであらう。あの若草さへ何處かへ隱したならば……と云ふ、若い人々の純潔な心臟を侮蔑した。而して實に殘酷な策略でありました。

或時、渠は又氣もそゞろに我家へ立歸つて來ますともう其時その策は施されて居りました。慌しう駈け入る毎時の部屋、其處には嘗て睦み合つた調度をその儘ながら。

しきたへの枕も憂きにたえずして思ひ出でなん事
ぞうらめし

など形見の文字がうら淑しう滲んで居るのみで、戀



しい人の姿は影さへ見えないのでありました。
渠は先づ驚きに胸を打たれて了つて、少時なす事もなく其處に立ち盡しました。漸く妹に質し侍女に聞いて、其人は父に促されて、淡路と云ふ乳母一人を從へ大佛詣でにと車を出したのであつたが、其後歸つたのはたゞ空しい車のみだつた。との事を知つた時には、驚愕悲嘆憤怒、あらゆる苦い感情が潮のやうに狹い胸に押迫つて來て、總身がたゞぶる／＼と戰慄し續けるのでありました。

が、軈て渠は決然として我家を出でました。何よりも先づ懸念に堪えぬのは匿された人の安否、もしや暴逆な刃の下に、とそんな事までが思はれるのでした。で、よしや漂ふ雲を摑まうとする業であらうとも、戀の一念、如何にもして其消息を確めやう。恁う固く心を期したのであります。

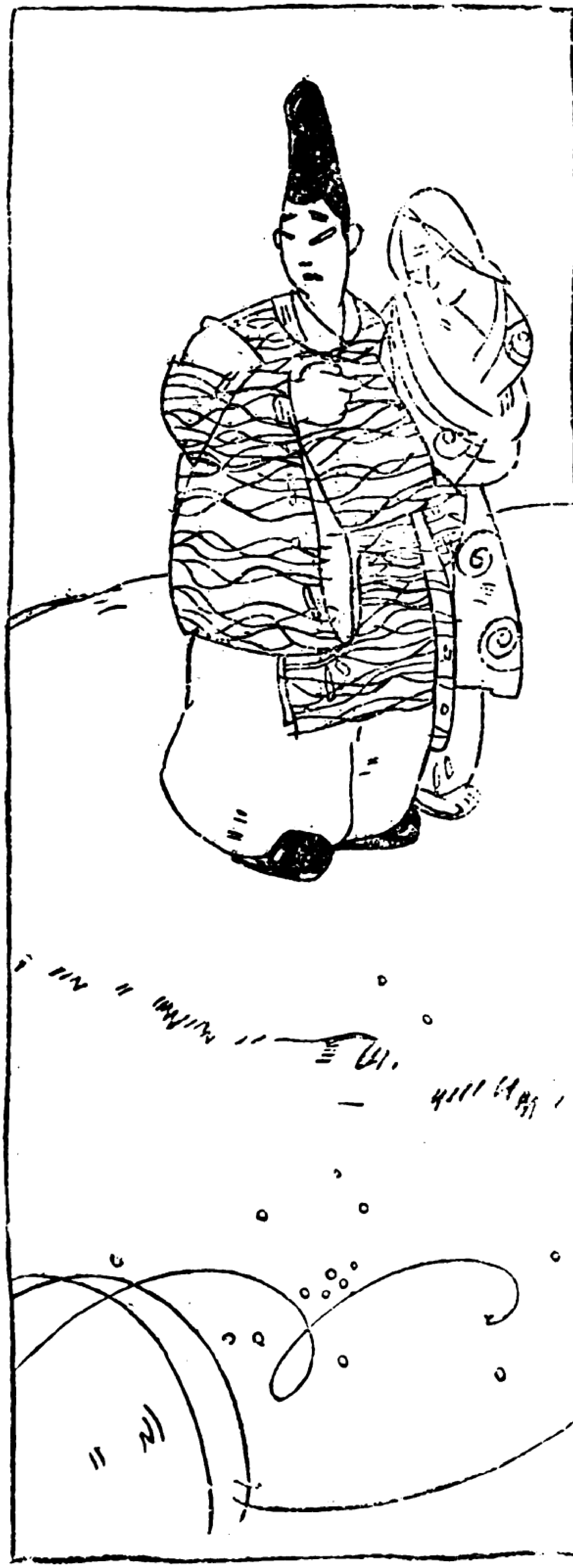
で、兎に角に先づ、其表面は大佛詣でと言つたのを緒に、其邊を中心として搜索の手を廻しました。

玆に或る日、渠は大佛の上人に對面して、種々と其苛々する胸中を訴へなどしましたが、其折、上人が慰めのため物憂い世の中の例を擧げた中に、つい此程、若い美しい上﨟が何に思ひ入つてか、其盛りの春の黑髮を斷つて佛門に入らうとしたと云ふ話がありました木の葉の小搖ぎにもなほ聞耳立てる此頃の渠は、はつと胸轟かせずには居られません。聞き咎めて猶委しく質しますと、女は決心を乳母らしい人に强て止められ

唯戒ばかりを受けて歸つたのであつたが、佛への供物として所持の品々を納めて行つたとのこと、

「して其供物の品と云ふのは？」

渠は思はず膝を進めました。と、こはそも、果してそれが尋ね探ねる若草でありました。目前に出された品は、紛れもなくあの戀人と倶に手馴れた琵琶、ほゝ笑みの面映し合つた鏡であつたのです。



嬉しや懐しい人は生きて居た。が、それにしても、未だ十八の咲く花啼く鳥みな喜ばしい齡でありながらそのやうに様を變へやうとまで思ひ詰めた心の中はどんなであらう。恁う思ふと渠はなほ愈ゝじつとしては居られません。一日も〳〵早く邂逅して、其憂さ辛さを慰めてやらねばならぬ、と焦慮りに焦慮つて、益ゝ其探索の力を強めるのでありました。

と、三四日して熱心は終に其驗を見せました。けれど、痛ましくもそれは渠が期待したやうな結果ではなかつたのです。渠は宇治川の畔で圖らず彼の若草に從つて出たと云ふ淡路に會ひ、導かれて喜悦の體をとある小柴垣の中に入れましたが、其處に彼の人は居なかつたのです。否、其處のみで無く、もう此世の中の何處にも居ない、と云ふ事を乳母の涙ながらの物語に依つて、傳へられねばならなかつたのであります。

『此處へお移されあそばした折のことなど、今思つても胸が一杯になりまする。』

と乳母の聲は最初からもう亂れるのでした。

『それはもうどんなにかお心細う思召したでございましやう。お送り申上げて來た御車が、間も無く歸つて行くのを御覽あそばして、ねえ淡路、前にお邸を出る時には、あの車を寄せられたのが物悲しうも思はれたけれど、今となつてはあれも懷しい都の形見の、あゝしてだん／＼彼方へ遠ざかつて行くのが殘り惜しいのねえ、と戀うしみ／＼と仰しやるのでございます。妾



はもう何と申上げてよいか、お慰めの役とは知りながら、つい耐り兼てわつと倒れて了ひました。』

斯くて此處に迸つた幾干の日は、それはもう云ふに忍びぬ程慘憺たるものであつた。戀しい〳〵男は奪はれ、寂しい中の唯これのみを慰めとした其子にまでも引放されて、幾重の幔の裡にのみ住み馴れた高貴の身が、忽ちに恁うした怪しげな小柴垣の中に移された其情無さ辛さ、時には此家の主の尼に勸められて、大佛へ詣でた事などもあつたが、併しさうした事位でどうして此苦しみが忘れられやう。憫しい女は日に泣き夜に泣き悶え續けるのみであつた。

『ところが、未だやつと三日前のことでございます。曉に近くふと心附くと、こは如何にお姫樣の御夜の具は、たゞ空蟬のもぬけの殼でございました。驚いて主の尼もろ共、其處よ此處よとお探し申上げると、ああ、あの宇治川の――あの激しい流れの宇治川の岸に日比お履き馴れのうらなしが脫いであつたのでございます……。』

嗚呼、萬事休矣。渠の痛恨、それは叙するだけ贅です。軈て、せめて其身を亡ぼした跡なりともと、淡を先に悄然として絶望の體を運びました。

其處に白い〳〵水は湧きたぎり渦卷き返り、吹雪のやうに飛沫して矢よりも早く流れて居ります。其處に夫れを阻む黑い〳〵岩は彼方に聳え此方に怒り、宛で百雷の一時に落つるやうな音響を立てゝ居ります。渠は思はずひし〳〵と迫る恐怖に壓されて、總身にぞつと粟せずには居られませんでした。が、軈て其烈しい音、凄じい勢を見るにつけ、慾然として渠の心頭に上つた激情がありました。外でもない、父に對する憤怒です。あの羅にも堪へぬ彼女の艶容を、このやうに物凄い、男ですらなほ打戰かれる所へ沈めしめたのも父の所爲だ。我をして恁うした所で恁うした堪へがたい思ひをせしめるのも父の所爲だ。なほ春秋に富む我生命は今日を限り生きながらに葬られるであらうけれどそれも亦父の所爲だ。恨めしいは父だ。憎むべきは父だ。私はもう斷じて彼と同じには棲むまい。あの醜い

顏を見まい。激し易い青年は狹い胸に憑う一途に思ひ詰めて、淡路の止める袂を拂ふ手も鋭く、矢場に何處へか走り去つて了ひました。

かくて渠は半ばは物狂はしう、身を燒く焰に一時もじつとしては居られないで、遠く瀨山の其處此處と漂泊つて步るくのでありましたが、終にはそれにも疲れて、芳野の山の奧深く庵を結び・其處に廢殘の身の空洞のやうな生活をして居りました。

すると或年の秋も更けて、峰々の紅葉の色もだんだんと褪せて、行く頃であります。ゆくり無くも其處へ彼の情無かつた父が尋ねて來ました。彼の老人は相次で起つた痛ましい出來事、姪の慘死や子の失踪やに、有繫に今までの無情な所行を悔ますには居られないのでせめては今一度其子を我家に歸してと頻りに行方を尋ねて居る中、ふと或る山伏に此住居を聞いて、遙々分け上つて來たのださうです。

が、執拗な渠が深く／＼心に刻み込んだ怨恨は未だ解けて居ませんでした。所無げにさし俯首く父の額の皺の深さ、思ひに削げた脊の肉の寂しさ。じつと見詰める渠の瞳からさと怪しく光つて落ちたものがありましたけれど、でもなほ直ぐ思ひ返したのか、くるりと父に脊を向けて了ひました。而して、折柄颯と吹き下す山風が肌を切るやうなのに、渠の衣は唯帷子一枚なのを父が見て、そつと己れの小袖を脫いで出しましたけれど、それも

『貴君の衣を着るべき少將は、疾くの昔に死にました此世の人でも無い今の身には、世の暑い寒いも感じません。』

とのみで押返すのでありました。

さうかうする中、暮れ易い晩秋の日は夜になつて、やがて脚下に聞える溪流の音が冴え渡る頃となりました。老の身の大納言は晝の疲れについうと／＼としたと思ふ其間もなく驚いて四邊を見ると、もう其時、子の姿は庵に有りませんでした。

翌日、大納言は悄然として、一人で山を下りました

——終——



俚諺に現れたる女

眞壁一郎

諺といふものは、何時の世に、誰がいひ始めたものか判らぬが、長い間、いひふるされても、滅びずに傳へ來ただけあつて、輕妙ないひまはしの中に、動かすべからざる眞理の含められてある所が面白いのである。諺の中には、巧に聲調を整へたのもあるがいひまはしの巧妙を極めたのもある。骨をゑぐる樣な痛快を覺えるのもあるが、眞綿で首をしめる樣な婉曲なのもある。いづれも、寸鐵人を殺すの趣があつて、輕妙飄逸な言辭の裏面には、みな、千古不滅の眞理のひらめきを認められるから、こゝに、女に關する諺のおもなるものを集めて、古來、我が國に於ては、如何に女を觀察し、如何に之を取扱つて居るかを窺知るたよりとも致さう。

『女は髮かたち』と申す諺は、今も、女の生命の如くいはれて、その髮容を整へるためには、朝な夕な、鏡の手前も恥かしいばかりの苦勞をなされて、どれ程、小さき胸を痛められたか知れない。そこで、利にさとい商人などは、種々の流行品や贅澤品を拵へて、髮容の美をもとめる人達に滿足を與へると同時に、自家の所得をもふやさうとする。道學先生などからは『女といふは虚榮の塊ぢや』などゝ言はれるのも、一面よりすれば、至極尤だと思はれる位であるから、娘を持つ親は、昔から、その身のまはりを整へさせるため、千千に心を碎き、家庭の花の色香を添へるに、千萬の黄

金をも惜しまなかつたものとみえる。故に諺には、

(1)娘三人はひとしんだい。
(2)娘三人持てば身代がつぶれる。
(3)娘出世の親貧乏。
(4)娘の子は强盗八人

などゝいふのがある。この中で、(1)と(3)とは、娘のために費す黄金の莫大なることをいつたのであるが、そのいひ方が優しいけれども、(2)と(4)とは、隨分、思ひきつた露骨な云ひ方で、娘の子一人の爲めには、八人の强盗に資財を掠められた程の失費があると申してゐる。この種の諺と同じ意味のものでも、

(1)娘一人に七藏あけた。
(2)女の子が三人あれば圍爐裏の灰もなくなる。
(3)娘と小袋は思つたよりいりが强い。

といふのは、そのいひまはしが頗る巧妙である。之を前者に比べると、後者は餘程文學的ではあるまいか。『七藏あけたといひ』『圍爐裏の灰もなくなる』とかこち『小袋も思ひの外にものゝ入る』に比べて、費用のかさむことを語つた處などは、何たる巧みないひまはしであらう。

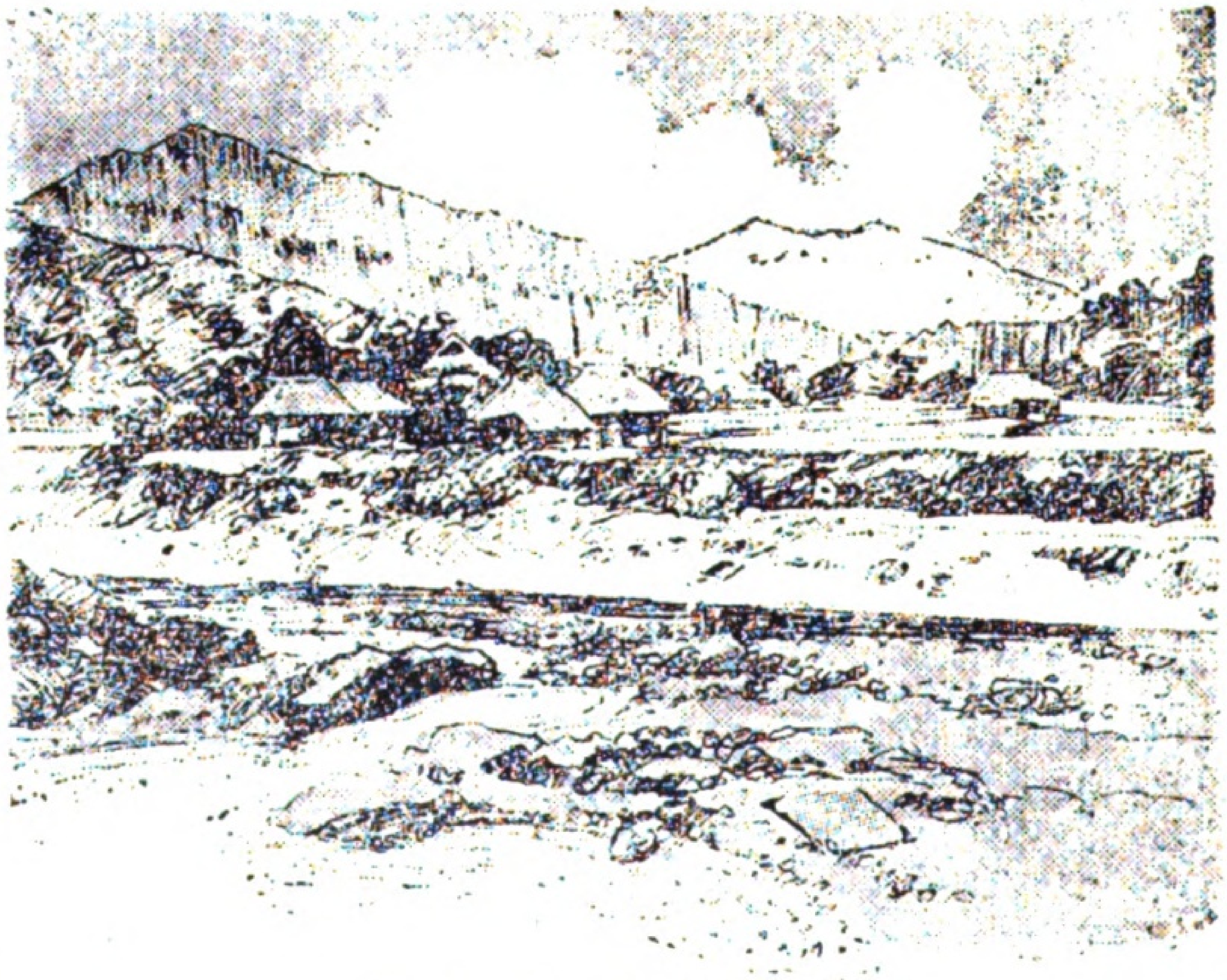
それから、女の躾と、身だしなみとをいつたものでは、次のやうな面白いのがある。

(1)娘をみるより母をみよ。
(2)女子みるなら帯の端みやれ。
(3)女が細帯をしめたまゝで居ると尻が大くなる。
(4)女はさげて育てよ。
(5)嫁は灰小屋から貰へ。

この中で、(1)と(2)と(4)とには、動かすべからざる眞理を認められる。家庭の躾は娘の日常にもあらはれ、その性格を左右する力があるから、娘の半面は必ず、母親の上にもみとめられる。そこで、娘をみやうと思ふなら、まづその母親を見よといふ所に鋭敏な眼光がかゞやいて居る。それから、衣服の着こなし、帯のしめ方、事は極めて小さい様でも、その性格趣向を語る無言の能辯とも聽かれる。その意味からいふと、現代の貴婦人の中などでも、なるべく、賤業婦に近い扮

装をして、黒人のやうだなどと言はれることを、一種の誇として居る方などには『帯の端見やれ』の一語を囁いてやりたいものです。『女はさげて育てよ』といひ『嫁は灰小屋から貰へ』といふにも、なかなか味のふかい所がありませう。

『姑のよめいぢり』は、昔から、『ありがちなもの』の一つに數へられて居る。蜜蜂などの樣に、その子にあとを譲ると、女王は必ず他に引退するならともかくも、一家に二人の女王が出來ると、とかく、その間の圓滿をかき、同性あひつくの結果は、つひに、一家の平和をみだすに至るはまぬかれ難い人情の弱點かと考へられる。諺にも、姑と嫁とに關するものは、大分多くありますが、何れも、水と油との一致しがたい



豐後耶馬溪入口

ものと看做して居る。
(1)小姑は鬼千匹。
(2)姑の嘲笑ひ後がこはい。
(3)姑の氣にいる嫁は世が早い
(註、姑に氣にいる程の嫁は夭折するの意)
(4)姑の十七みたことがない。
(5)姑にくけりや夫まで惡い。
(6)姑と嫁にや火がつく。
(7)姑の前のみせ麻小桶。
(8)姑の死んだのと芥子のきいたのは、氣持よく涙が出る。
(9)秋茄子は嫁に食はすな。
(10)夏の火は嫁にたかせよ。
などいふのが、その重なるものである。(4)の『姑の十七みたことが無い』といふのと、(7)の『姑の死んだのと芥子のきいたのとは、氣持よく涙が出る』といふのは、その云

ひ方こそ皮肉なれ、頗る痛快を覺えるではあるまいか新舊思想の相違が、行住坐臥の煩をなして、異れる方面に引かれたる線の如く一致すること能はず、歳月と經驗とを重ねた階段の上から、經驗に乏しいから若き人を肉眼視して、二言目には必ず『私どもの若い時は』をおびせかける姑の前で『姑の十七みたことが無い』といふ皮肉な諺のあることを話したらどうであらう。『秋茄子』と『夏の火』とは、之を善意に解いた例もあるやうだが、姑と嫁との間から推すと、矢張り『讀んで字の如し』といふ方が當つてはしまいか。

(1)鏡とみさをは女の寶。
(2)女と鰹節はかたい程よい。
(3)女は人愛を左右にせよ。
(4)悋氣嫉妬は女のたしなみ。
(5)悋氣は女の愼しむ所、疝氣は男の苦しむところ
(6)女の心は猫の目。
(7)女の心に蛇がすむ。
(8)女の仕返しは三層倍。
(9)女は閾をまたぎながらも七十たくらみ。
(10)女の賢いのと東の空の明いのはあてにならぬ。
(11)女の智慧は後から。
(12)女の話は一里かぎり。

これらの中には、女を侮蔑した樣な口つきがないでも無いが(1)と(2)と(3)とは、動かぬ教訓ともとらへてゐる。(4)から(11)までは、女の陥りやすき弱點を巧みに捉へてゐる。教育もあり修養をも怠らぬ人々なら、自己の工夫によつて、その弱點を補ふのだ、この諺にあてはまるやうなことはあるまいが、自ら賢しげに振舞ふ女の中には、また〳〵『東の空の時あかり』に比べらるべき智者が無くばありますまい。『女の智慧は後から』とか『女の話は一里限』とかいふのは、女の見識の狹いのを誹つたのであるから、それが、たとひ、巧妙ないひまはしであつたにしても、所謂覺めたる現代の女にはあてはまるまい。

(1)鬼瓦にも化粧。
(2)女の眼には鈴をはれ。

(3)屈み女にそり男。
(4)眼病女に風邪ひき男。
(5)女と米の飯は白い程よい。
(6)女は氏なくして玉の輿。
(7)娘と茄子は若いがよい。
(8)女廿歳はちよと婆さん。
(9)娘と糯米は年の暮にかたづく。
(10)女の齶は城を傾く。
(11)女はうりもの。

の如きは、女の容や緣組に關するもので、殊更に、とりいでゝいふ程のものではあるまい。たゞ『女と米の飯』『娘と茄子』『娘と糯米』といふ風に、似つかはしい對比をとつた所は、諺によく現れる形式である。

(1)娘一人に婿八人。
(2)女やもめに花がさく。
(3)廿歳後家はたつが、三十後家はたゝぬ。
(4)女房と疊は新しい程よい。
(5)女房と菅笠は新しいがよい。
(6)女房と味噌は古い所に價値がある。
(7)女房と鍋釜は古いがよい。
(8)家のみだれは女から。
(9)家になくてならぬは、上框と女房。
(10)女房を持ちはづすと五十年の不作。

の如きは、何れも、味ふべき眞理の泉ともみられやう。しかし『一人娘に婿八人』などゝいふのは、その娘の人がらにもよりけりで、今では、敎育ある女が婿えらびをするから場合によりますとこの諺の反對に『息子一人に嫁八人』の奇觀を呈することすら珍しくない。『廿歳後家はたつが三十後家はたゝぬ』例が、世にいくらもあるが、これは、强烈なる本能の要求から起ることでさもあるべきことゝさる學者も說かれてゐます。『女やもめに花が咲く』は『男やもめに蛆のわく』と相對してげに理やと首肯かれるが、この傾向は、女ならでは夜のあけぬわが國のみには限らぬ。自由の鄉里アメリカなどでは、『かへり咲き』を目的として、うら若いミスが鶴髮の老人に嫁ぐときいて居る。四億の遺產を擁し

て居ると噂されるミセス、モルガンの如きでも、『女やもめに花の咲く』時が無いとは限るまい。疊表や菅笠に女房を比べたのは、女を女とも思はぬいひ方のやうにも取れるが、夫婦の鎹ともいはれる子供の一人も生れると、新妻時代のしとやかさを忘れて、夫を夫とも思はぬ振舞をするものなどが、廣い世間には往々あるので、斯る災難を耐えてる男が、妻の前ではいひかねる心のわびしさと、蔭へまはつて、小聲で洩す嘆聲ともきかれやう。が、この反對に、味噌と鐵器とを類例にして『女房は古いがよい』といふ諺もあるから、この勝負持とさだめて、柳の眉をさかたてぬが何よりです『五十年の不作』とまでいはれる女房の大切なことは、上り框にたとへた所でもよく判ります。

(1)女の好きは芝居蒟蒻芋南瓜。

(2)三十振袖四十島田。

(3)小娘と炒り豆には手を出すな。

(4)小姑にはこまらぬが、八つ口には困る。

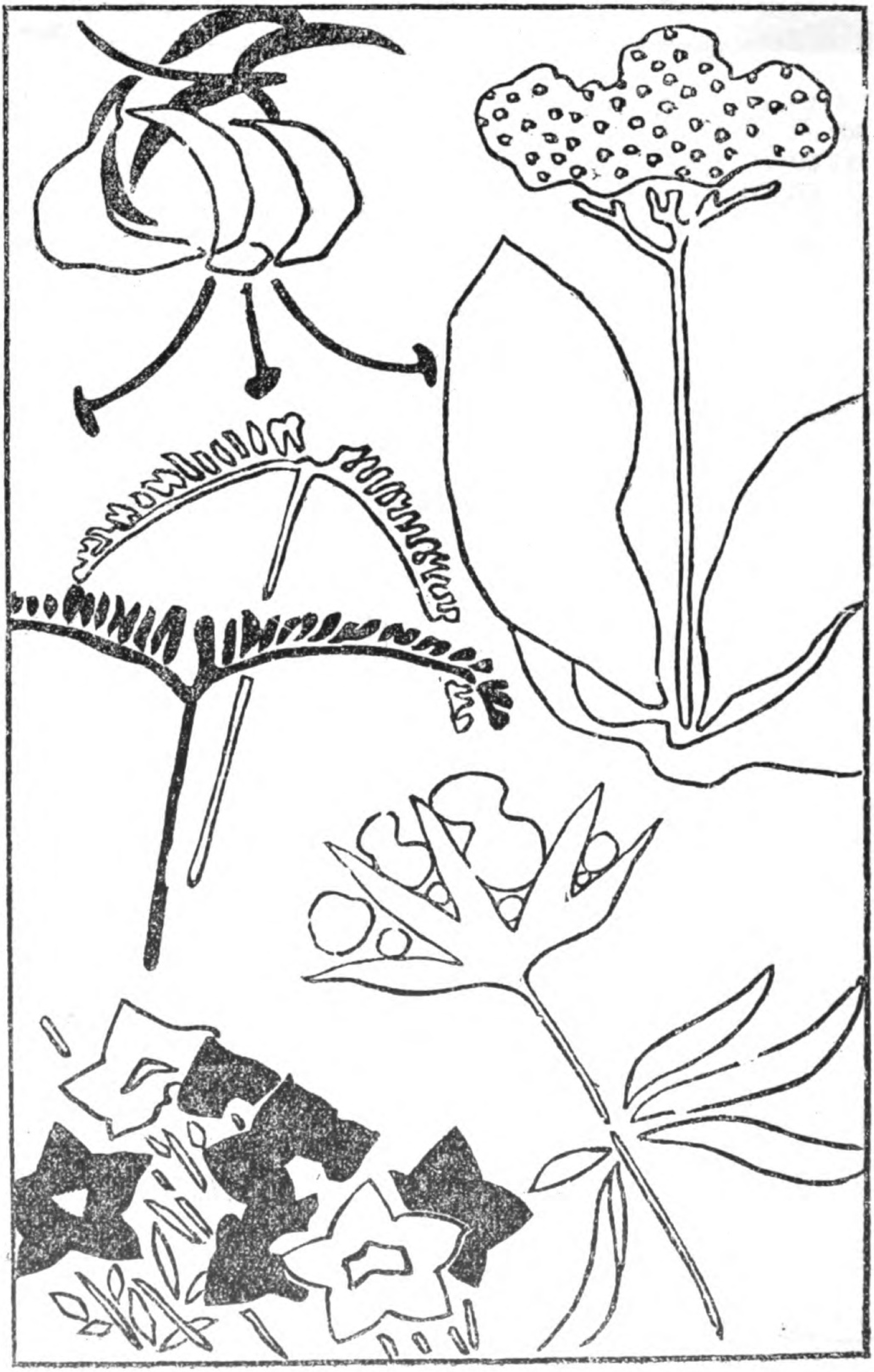
(5)いやな女でも無くなれば三百捨てたより惜しい

これらも、皮肉ないひ方ではあるが、流石に急所をついてるから妙である。女の好きなものを、芝居蒟蒻芋南瓜とつけた所、小姑の操縦にこまらぬが、やつ口の縫方には困るといふ所、失禮ながら、現代のレデーにも適用されるではありますまいか。『いやな女でもなくなれば三百捨てたより惜しい』は『ある時はありのなすびに惡かりきなくてぞ人は戀しかりける』を通俗的にしたものであらう。

奴婢の出替り月のこと

是れは支那の故事より出でぬとぞ、昔或家にて一人の子を生みけるが、これを隣家に與へしに、夫れより其家は次第に貧しくなりゆき、隣家は次第に富みゆきけり。その後二月二日といへるに、再び其子を取戻して育てしに、此度は隣家次第に衰へて、其家のみ次第に榮えたりとかや、是れより二月二日は奴婢の出替り月といふこと始まりけり。

新案草花模樣



惡口と皮肉

紅唇

△惡口

惡口と云ふもの、名を聞きてさへも、耳むつかし。中に就ても陰にて云ふは殊に罪深し。我れ隔り無き人の上にても、快からずこそ聞きなさるれ。

よく人の上探り來ては、奥もなく云ひ散らす人、こは我が上をも、又他處に行きては斯くぞいふらんと、心おかれけりや。

打對ひたる人の惡口をば、つけ〳〵と見る前にて云ふ人、其時こそ心地よからず腹立たしけれど、云はれての後には何物も殘らず、却ては我が非の有る處指摘されて、自ら省らるゝ事も有りけり。かゝる惡口は、些罪輕き中にや入れなんか。

打付けに云ひても、些角立てずに、人の心害せぬ惡口云ふ人あり。云はれ乍らも何故となく、其人に引付けらるゝ心地して、却ては親密の度の增すもをかし。洗練されたる惡口とや云はん。是、惡口の上乘なるものか。

斯樣のものなれば、時々用ゐて交際を圓滿ならしめ、四角張りたる對手をも、丸くするの効

能あり。

然し此悪口は、眞似て以て中々に出來ぬもの、其の人の天性によりて、始めてよく云ふを得べし。それとても過ぎたるは、猶及ばざるに如じ。

△客

刀自の在はさぬ後は、客の來ましても他に應接ふ人も無ければ、疎くはづかしき人にも、詮方なくて我のみぞ出でける。

客を愛す、長座せぬ客を愛す、來らぬ客を猶愛す、と記し置きけん誰やらも、餘りに極端乍ら、全く人手少なき家に、客の長座さるゝ程、困る事は無し。

いかに浮世と隔たりたる樣の住居にても、食ふて、着て、生きて行く間は、それ〳〵人間並の營みの無くてやは。親しき程は心安し、疎き人の話もいとゞ絶え勝ちに、さて歸りもやらず手持無沙汰に程經るは實に苦しきものにぞありける。客もつらからん、かゝる時、いつも親懸しうなりけりや。

老い給へる人のおはしける時、昔の事など問ひかけ參らすれば、面持ち嬉しげに、若き人は今樣のみ賢うして、古き事とし云はゞ何事にも耳貸さぬなる、昔にも斯く〳〵の事こそ有りけれ。是等、今の世に爭で求むべしや、などゝ、始つ方はさすがに興無くはあらぬものから、漸く管々しうなりもて行きては、對手の倦むらん事も思されず、苧環の果てしも無う、つど〳〵と續け給ふ、逃ぐるにも逃げられず、お談話は右より左の耳へとすら〳〵通りぬけぬ。

いつも弱らせらるゝ無口男、洋服窮屈らしう座布團にかしこまりて、兩手は膝に突かい棒の樣にして肩怒らせ、此方より問ひかくる事には、唯、は、は、とのみ答へ給ふなる、談話の繼穗も有つたものには有らず。さりとて何時迄睨み合ひたらんも心苦しげに、強て其人の好める事、考へ出して端緒云ひかくる。何とかや請け給はんと思ふに、又しても、は、否、は、にて言葉盡きぬ。苦心して蒔き付けたる話の種子、未だ根も下し敢へずして、惡戯な烏奴に啄み去られたらん心地して、歸り給ひての後に、吻と息つかるゝはかゝる客なりけり。

なみ〳〵の女、口數多きは只此方より些迎へ火つくれば、それよりそれへと、流行の何や彼や、さては人の噂、縱板に水の辯にも話し續け給ふ、此方は時々、横板に飴の樣なる言葉、挿み行くのみにて座を白けさせぬ。聞きての興味は皆無乍らも、かゝる客はさる方に心安し。

中に忌はしきは、人の鼻息窺ひつゝ、座なりの言葉美しう、合せもて行く人。

又、自らの非を掩はむとして、殊更に人を貶めたる、反りては自己が卑劣を吹聽するとも知らで、得意氣なる面持憐なり。

學生は、縱令談話の範圍は狹くとも、己が學校の事のみなど、吹いたるはよし。顏のみ優しげに、女の身のあられもなく異性の研究とやらん、さる方面の事恥かしげも無く喋々とせる聞くからに面に唾したし。さるは殊更に論ふ心も出で來ぬや。

有り體にいはゞ、男にも有れ、女にもあれ、同じ程なる若き同士語り合ひたるこそ、話も合ひて興はた多かりけれ。

それも女どちなれば、如何に親しく睦みたらんとも、人の咎負ふまじう心安けれど、男には

親しき中にも流石憚かられたる、さるは我が心には、露恥ぢざれども、無き名の立たぬ世ならねば、人の口煩はしうて、心ならずも隔おきけれ。

諸共に、知らぬ事は聞き交し、教へ合ひてこそ、友たるの甲斐は有れ。かゝる事、男は些覺束なき事をも、臆面なく自ら知れる儘、思ふ儘を、殘る處無く云ひ放ちけり。

なぞや女の、多くは只管に能有る鷹の爪を隠して、まこと知り給ふ事をもおぼめかしう、謙下り給ふやらむ。さる人に生中言ひ出でなば、生意氣とや貶められむ、恥かきて引下らん後手も、さすがにいとほしくて、思ひしのみにて打出でぬ。獨り在る心地の友とは是をやいふらむ。

あはれ今の世に、女の餘りに愼みに過ぎ、床しく謙下りて振舞ひ給ふは、果して禮か。我、是をとらず、時と、人と、場合とにこそよりけれ。

さはれ、人猶昔よりの其因襲をおひ給ふ間は、我ひ又、是に從はむ哉。

△待遇

いや、どうも彼處のお宅へ伺つたら、何の御馳走でもうつかり箸は出せないんです。え？何故ですつて？ だつて彼奥さん、頗、非常に經濟家なんですよ。A君が委細構はず私の居る前で、さしみを取れ、麥酒を拔けなんて云はれると、私は冷々して了ひます、A君には氣の毒ですけれどね、知つてちや食べたつて棘が立ちさうですもの、申譯ばかり箸をつけといて匆々に歸る算段するんです。厭やですからね。何れ家計簿か何んかに、幾ら〳〵刺身、麥



酒、新香…眞逆それ迄は記けないでせうけれど…兎に角品々書き並べといてからが、何くし々氏客膳用と八の字よせ乍らやられるのでせう、叶ひませんよ。

それ程怖ぢ給はずともの事、よし些許り手をつけぬとも、不殘召上りたりとも、其の客膳用の三字、何れは遁れはつまじきものをとて、笑ひ叅らすれば。

なあに、手をつけずに歸つて來りや、同じ齊くにしてても八の字丈けは免かれるんです。否、實際ですよ。もう評判になつてますもの、友人仲間で…。え〻、奥さんの事です、A君にや同情しますよ。

此君も隨分の皮肉家ながら、眞實にか〻る事、色に出し給ふ奥樣無しとも云はれず。

あはれ旦那樣、自然舊友にや離れ給はんとかいとほし。

親しくても有りぬべき人の家に行きて、お膳の上事々しう、御給仕つけて御座敷に一人食はせられたる、いと有難からず。

失禮乍らさあ何卒此方へ、と、家族と一つ食卓に導かれて、何は無くとも談笑の裡に温味籠れる待遇は、實に心地よきものにぞ有りける。

身分の懸隔甚しからぬ場合は、なべてかくこそ有らまほし。

△夏

百鳥樂しう囀る春よりも、千草美しう咲き亂る〻秋よりも、最多く我は夏を好む。

彼の連なれる山を見れば、彼の潤けたる野を見れば、簇々として蔞々として、生氣漲る萬綠



緑天地の裏何處にか沈滯の影あらん。紅の下染めなれや青木立など丶、先潛りすべからず、此時最天地の息は活潑なり。

炎帝の赫々たるもよし、涼風の爽々たるも更に又よし。家毎に障子からりとして、萬に隔壁なき開放的なるも嬉しく、單への衣の偏にうらなきと文字の通ひたるも心地よしや。

其の樂しき夏に於ける避暑地こそは、分きても殊に面白けれ。

近頃よく人の口に上る簡易生活とか云ふめるもの、避暑の旅行先などにては、遺憾なくぞ實現せられける。

旅館や何やと、贅をきめらるゝ人は此限りにあらねども、穢くるしき百姓家、或は漁師の家などに間借りして、僅に一ト間か二タ間へ家族一同お鮓の如く詰め込みつゝ、二間の縁側は御玄關となり、又臺所ともなる。

一隅には帽子掛け、下駄箱、洋傘など寄せかけて、紛ふ方なき御玄關なり。一隅にはお釜、七輪、擂鉢など、群雄割據して目白押しの體、正にお臺所を形づくれり。

晴れたる日の夕方など、近邊散歩に出づれば、よくかゝる別天地に簡易生活を營み給ふ人を見る、畫く筆を持たば其場去らずスケッチ爲まほしき處、屢々なり。

お縁側に俎板据ゑて、ちよき〳〵とお惣菜刻み給ふ奥様も有れば、廣々としたるお庭先に七輪持出して、お竪帶にしめた後姿可愛らうしう、モスリンの浴衣襦袢にして、はた〳〵と渋團扇もて煽ぎ給ふ御嬢様も有り。

是等は都會にては見られぬ圖なるべし。





母の眞情

井深花子

井深花子夫人は、井深明治學院總理の後妻としておかたづきになつたので、先夫人のお子さんを五人迄お育てになつた方であります、中三人は女のお子さんで、長女のちよ子さんは福岡工科大學教授荒川文六氏に、二女のとよ子さんは外國語學校教授片山寛氏に、三女のはる子さんは醫學士木村貞夫氏に夫れ〴〵お緣附きになつて、最も平和な家庭を作つて居られますが、夫人が先夫人のお子さんを是迄にお育てになるには、一方ならぬ御心配であつたらうと思はれますが、よく圓滿に御教養なされたお話を伺つて、全く感心なお方だと思ひました。

△遠慮と親の義務

私は井深家へ參ります迄、神戸の女學院で百人餘の寄宿生を預つて、我が子のやうに思つて世話してゐましたが、子供としては少々數が多過ぎて、思ふ樣に育てる事が出來ないと思つて居ましたので、五人位は私の樣な及ばぬ勝の者には丁度適當な數であらうと存じまして、樂んで當家へ參つたので御座います。しかし之れに就て私には別に世の中のお母樣と違つた經驗は御座いません。只だ赤坊の時から手にかけなかつたつまり母親たる資格の一部分を失つた不具の母親と申す迄の事と存じます。言ひ換へれば、さん〴〵手のかゝる骨の折れる時代を人に育てゝ貰つて、可愛らしくなり樂になつた時に自分の子として育てる抔、餘り蟲の良過ぎた位で、却てお恥かしい位で御座います。強て私の經驗を語れば、只だ一言あるのみで御座います。それは「義理」と申す意味で育てなかつた事です。

世には、義理ある仲だからと、いやに義理立てして、朝寝して居ても遠慮して起さず、學校がおくれてもそ

の儘にして置いたり、夜は假寢しても小言を言はず、子供の自由に任して、たとへ意氣地がなく獨立心を失つて成長しても關はず。たゞ大切に我が儘に育てる方がよくあります。

其の樣にすれば世間體は如何にも綺麗に見えませうが、「將來」と云ふ點から見れば、感心したことではありませぬ。又親としての義務を盡したものとは申されません。

△人を養成する流義

私は神戸の女學院に居た時から、どれ程非難されても、他日世間へ出て、女らしく働いて、如何なる逆境に立つても容易にひるまず、奮鬪して幸福な境涯に入らうとする獨立心に富んだ婦人を養成しやうと苦心したのでありますが、それが家庭へ入つて子供を育てる場合になつても變りませんので、義理ある仲だ抔云ふことは思ひつきも致しません。只だ何うかして獨立心のある、確信と主義のある人間に育て上げたいと苦心しました。



婦人養の流義図

それですから、私は自分の云ひたいことを言ひ、したいことをして、世間で何と非難しやうが頓着なしに、只管子供の將來の爲めを思うて育てました。ある時私は子

供に冗談を言つて居ますと、側に聞いてゐた方が、「貴方は實の子でもないのに、そんなことを被仰つて惡かありませんでせうか」と申されたことがありました。大抵のお方はさう云ふ樣に、些少の事にも注意致さるる樣ですが、私は義理の何のと申す事は念頭に措かないのみでは無く、全く心の中に無いのですから、極く不遠慮なので御座います。何らかと云へば何事にも無頓着な方で、義理と申す事は大嫌ひでもあり、又可愛い子供等に其樣な考へを持たせ度くもありませんでした。強ひて子供との間の隔壁を取り除けやうとしたのではなく、全く自然に隔壁も何も無く、子供も自分も互に云ひ度い事を語り合ひ、又思ふことを無遠慮に行ふたに過ぎませぬ。

△嫁入り仕度の用意

これは人の性質にも依ることでせうが、私はガサツな方で、何方に限らず世話をして上げるとなれば、まづ行く先きの爲めを思ふのであります。自分がこんな主義ですから、井深家へ參りましても、寄宿舍で生徒の世話をしてゐましたやうな心持ちで、惡いことがあれば小言も言ふ代り、善いことは奬勵し、殊に虚榮心と云ふ點は格別に注意して、女子にあり勝の虚榮の芽を未萠に防ぐ事を勉めました。其故着物を拵へても、成る可く新しい方は着せませんでした。私の知つてたる方の中には、敎會へ行く時は、他人が見るから餘り見すぼらしい服裝をさせては人前が惡からうと、成るべくよく見える樣にと考へる人もありますが、私は、家に居る中は垢の附かぬ着物でさへあれば澤山だ、女の子はどんな所へ行くか知れぬものだから、その時の用意に一枚でも餘計に持つて居た方が爲めになる、いくら拵らへてやると云つても出來ぬ勝ちなものだからといふ流義で、一枚でも多く藏つて置くやうに心掛けさせました。

△片腕と賴んだ相談相手

併し私が何れ程心配しても、子供が私の氣心を呑み

込んで居てくれなければ、圓滿に行くものではありません。自分で氣付かぬ落ち度も澤山あつたでせうが、

幸に子供は何れも性質が柔順で、又よく躾けられて居りましたので、却て私の方が色々の事に學ぶ所が有つた位です。而して世間で善く申すひがんだ所などは少しもなかつたから、此點に就ては不愉快に思ふたことはありません。誠心誠意を以て育てゝ居る事はよく知つて居て呉れました。かやうに性質のよい子供を與へられましたのは、誠に私の幸福でございます。少し大きくなりましてからは、娘達は殊更に私の力となり、相談相手ともなつて呉れましたから、今日の如く夫々縁付て仕舞つては、私の片腕を取られた樣で、只度々よこして呉れるやさしい手紙が、非常に慰安となつて居ります。

△親の情を慕ふ子供

それでも私は、まだ子供に對して何うしても時々氣の毒でたまりませんでした。それは、是れでも實母の愛に劣つて居はしなからうかと云ふことでした。

私が米國に居た頃、一人の數學敎師が居りましたが二人兄弟の人でした。二つの時母親に分れて繼母の手で育てられたのですか、母子の間は羨ましい位平和でした。子供の方では母親を大切にし、母親の方では子供の爲めを思うて、家庭は頗る圓滿でしたが、その人は私に向つて、或時「何も不足に思ふことはないが、生みの母親の愛情はどんなものか、それが知りたいと思ふことが時々ある」と申されたことがあります。それを思ひ出すと五人の子供が可愛相でたまりません。自分は子供を眞實に愛し、又その前途を思うて心配して居るが、それでも生みの母親に及ばないやうなことはあるまいかと思ふと、時々哀れに感じて人知れず涙にくるゝこともあります。

△仕合せの一致

それに私が何時も感謝して居るのは、先妻の故家の兄姉であります。誠に心掛けの善い方で、何時も私に

同情して呉れます、だから子供の教育上に就ても、親切に相談相手になつて色々と心配して呉れますので、私の實の兄姉の樣に力に思はれ、誠に嬉れしうございます。子供が遊びに參りましても、何時も子供等の爲になる樣な事を話して呉れますし、又其他の親類も皆同樣でございますから、内外相應じて子女の爲を計る事の出來たのは、是亦私の幸福でございます。

その他にもう一つ、子供は皆キリスト教の學校へ通つてゐましたから都合が宜しうございました。そこには私の知つた方が居ましたから、自然私の風評を聞いて、お母さんはかう云ふ人だと知ることが出來たらうと思はれます。

長女と三女はフレンド女學校を卒業致し、二女は神戸の女學院へやりましたが、何れも宗教學校で、家庭に於ける教育の方針と一致して居りましたから、何かと都合がよろしう御座いました。皆樣が、宅の家庭の圓滿に參りましたのを私の苦心の結果の樣に申されますが、決して左樣では御座いません。宅の老人をはじめ、親類の親切である事と、子供等が皆柔順で、可愛らしい性質を持つて居るのと、家族擧てキリストの心を持て心と致し度いと勉めて居る故であると存じます。

交際の道心得あり

權貴の家と、女おほき家には、屢々出入すべからず、あるじ留守の家ながゐすべからず、主人欠伸せばはやく立つべし、來りて問ふことありとも、志他にあらば詳に說くべからず、吾が好む事なりとも、人のこのまざる事ならば語るべからず、朋友にも親切の異見再三にして可ずんば止むべし、我なすべしとおもひ立ちたる事は明日ありとおもふべからず、貧しき人は狎みやすく、富貴の人は親しみたきものと知るべし。金銀にのぞみては、爭心起るものと知るべし。

（三浦安貞）

白の綫彩る白帆風涼し



しくじり日記

櫻草

三日間に七ツの失敗事件

○○日

一夫はいつか寢床を這ひ出して枕元でいたづらをして居るやうだが、もう三十分。

六時うつ音におどろいて飛び起きると、くづれた髮がパラリと肩にかゝる。オヤと思つて手をやるとピンが一本もない、一夫がいつの間にか拔いてしまつたのだ。

「一ちやんや、母さんの簪々どうしたの」

「こゝへ入れたの」

「其處、どこ」

「こゝ」

と指さすのを見れば、これはしたり縁側に置いた便器の中、白鼈甲の自由簪まで……夫にいへば、

「ハヽヽ、母さんが寢坊だからだ、ねえ一坊」

取つく島もない。

夜來の雨は名殘なく晴れた。珊瑚樹の垣が青く光つて、露をふくんだ緋ぼたんは、花びらをしぼつたら紅がたれさう。

瓦斯で炊く御飯は不味いなんていふけれど、不精者には重寶でよい。味噌汁がシユー〳〵煮立つお鍋をおろして、ふと氣がつくとまだ瓦斯が玉蟲色のほのほをはいて出てゐる。あわてゝ消す拍子に前掛の端をこがした。

今日は姑樣の御命日、お茶湯とお好きだつた米饅頭を供へる。

まだほんの子供だつた私を、いろ〳〵とやさしく敎訓へて下すつた姑さまの御恩が、今になつてしみ〳〵思はれる、何にも知らずに嫁いだのだけれど、大した過失もなかつたのは、皆んな姑さまのおかげ。姑の無いところを第一條件にかつぎ出す、人の方が多いけれど、同情の深い老人ほどありがたいものはない。姑さ

まがお亡なり遊ばして、一夫が生れる、このごろは失敗ばかりして居る。

午後銘仙の綿入を解く。まだ汚れ目も見えぬのに肩へ大きな薄鼠色のシミ。

去年の秋だつた、衣紋竹へかけた着物を、紅玉のやうな實をたわゝにつけた庭の柿の木の下へ干したのが私の不注意、とまつてゐた鳥が立つたはずみに、パチャリと熟し切つた赤い實が……とうとう羽織なしでは着られぬ着物にして了つた。

實家の妹が遊びに來た。今日はめづらしく大きなお



稚子輪に銀丈長、うつくしい前挿さして黄八丈の袷に緋紋縮緬の帯がよく似合ふ。母様のお心添へだらう。

籠入りの苺と私の好きな榮太樓の甘納豆を持つて、

『お佳音ちやん今夜はとまつてもいゝんでせう』

『えゝ、そのつもりで來たの』遠慮がない。

『晩飯にはたくさん御馳走して進るわ。お佳音ちやんの好なものは、ええと何だつけな』

『お刺身と玉子とじ、女はおさつと唐辛が好きだつていふけど、私あんまり好きじや無いことよ』なんて

氣焔をはく。
夫もお歸宅、晩餐の支度に庖廚へ立つと、
『姉さん、何か用がなくつて』
『いゝわ、着物がよごれるから』
『だつても母さんが、姉さん家へいつたらお手つだひをしなけりやあ不可ないつて』
『ホヽ、さう、じやあこの數の子をもんで頂戴な』擂鉢へ入れたのをわたして、
一鹽をふつて、こういふ風に……』
『わかつてよ〳〵、私よくもんで上げるわ』
『オイ湯へいつて來るよ』
『ハイ〳〵』ぬれ手ふき〳〵タオルとしやぼん出して庖廚へ引かへす、と佳香ちやん耳たぶまで赤くして滿身の力をこめてゴシ〳〵ゴシ〳〵もんでゐる。
『もういゝでせう……一寸拜見、アラマア』
二の句が次げなかつた、數の子が、いつか數の粉になつてゐる。『なるたけくづさないやうに』といふ一言の注意を、をこたつた爲に、はる〳〵北海道からとりよせたのを、分けて下すつた伯母さんのおこゝろざしを無にして了つた。
日は落ちたが新樹の梢は微明るく、やがて宵の明星が花のやうに、大空に咲き初めた。

△△日

庭の若葉は朝日を受けて、金綠色に榮えて、そよ風に碧い空を撫でゝ、ふら〳〵頷けば地に落した紫の影もまた頷ふ。
朝飯がすむと一夫は緣側へ繪草紙ひろげて佳香ちやんが繪の通りの出鱈目の話をするのを、じつと目をすゑて、口を結んで聞いてゐる。夫が袷の下へ重ねてゐらしつたネルの單衣を洗濯しやうと水へつけると、袂から紙が出て來た、何氣なくひろげて見ると、五圓紙幣だつた、破ぶけもどうもしなかつたから、乾かせばよいやうなものゝ、すんでの事に天下のお寶をフイにして了ふところだつた。よくあらためてから水へ漬けるものだとつく〳〵思つた。
今日は夫も在宅、晝飯はいつになく賑かに頂いた。

青葉若葉に風かをる靜かな午さがり、けたゝましい自働車の叫びもいくつかの家並を越て聞えるので、ほんのかすかな音ばかり一夫が寢て了つたので所在なくなつたお佳ちやんは急に歸ると言ひ出した。母樣へのお土産にカステーラの折を包んで門まで送つて出る

『またいらつしやいよ。母樣によろしくねえ、そのうちに伺ひますつて』

銀色の穗波をうたす麥圃の間を、電車停留場まで行く、妹のお稚子輪の上をすいとかすめて燕がとぶ。

茶の間へ引かへして時計を見るとまだ三時少しまはつたばかり、今のうちにと一夫をつれてお湯へゆく。逃げやう、逃げやうとするのを、おさへおさへ足の裏まで洗つてやるのだから、自分が洗はぬさきにガッカリして了ふ、ところへ入り來たまひしは山田の奥樣、何がさて夫の上役の夫人。外交手腕をふるふはこの時なりと、お世じ湯なみ〳〵と汲んでお待ちうけ、式の如く御あいさつを取かはす、小形の籠の中には辨慶の七つ道具ならぬお化粧品の數々、お美しきもむべなるかなとひとり感じ入つた。

やがて湯槽を出でゝ大鏡の前へ陣どり給ふお後へまはつて『ざつとお流しいたしませう』と御辭退遊ばすのを無理にお夕オル拜借してお流しする。

『もう、ほんとうに、たくさんで厶いますよ、ありがたう存じました』

『いえもう、かへつてお氣味がお惡くつてゐらつしやいましたでせう』

ザーッとお肩へお湯をかけて、やれ〳〵と持つてた手拭で鼻のまはりの汗を拭いてると。

『あのそれは私の……』

しなしたり、雪をあざむく奥樣のお夕オルだつた。

『あら、とんだ失禮をごめん遊ばせ』

ゆすいでかへす間の惡さ、早々にして湯屋をとび出す。

晩餐の後夫に湯屋でのしくじりをお話すると『ハヽヽヽお前のことだ、そんなものだらう』と被仰る。

『私、何故こんなで厶いませうね、いゝ年をして』

『氣をつけて、だん〱なほすさ』

『えゝ』と何も言はずにしまつたが、瀧鶴臺の妻が白い絲の玉と、赤い絲の玉で己を修養したやうに私も自分のいたらぬ行や、落付かぬ心を、毎夜床に入る時にのぞんで反省する、そして失敗といふことが少なくなることを望んでゐるのだけれど……

宵闇の庭のまつ黑は木立の奥には何だか魔でも潜んでゐるやうに思はれて恐ろしい。

ころ、ころ、ころと蛙の聲がきこえる。

××日

お晝前は何のかのと用があるので、いつの間にかたつて了ふが、晝飯をすまして、針箱でも持出すと眠くなつて仕方がない、無理に目をみはつてセッセと針を運ばして見るがやつぱり駄目。縫物押やつて庭へでゝ見る、滿庭の翠緑したゝるやうに我身も綠に化するかのやう。樹の間をもれて絹絲のやうに光る日光を浴びながら、そこはかとなく庭下駄ならしてゐると、へだての垣の若葉して遠くなつたお隣家から奥さまがお呼び遊ばす、紫折戸あけて御緣先へゆけば『さあ〱どうぞ』とおふとん直しながら『どうも今時分になりますと眠くなつて先刻からこまつて居たので厶いますよ』なるほどお眼がとろんになつて居る。

『あら私もやつぱり……たまらなくなつて庭へ出ましたのホヽヽ』

『ホヽヽ』香りの高い新茶をすゝりながらお話する。

『お坊ちやまは』

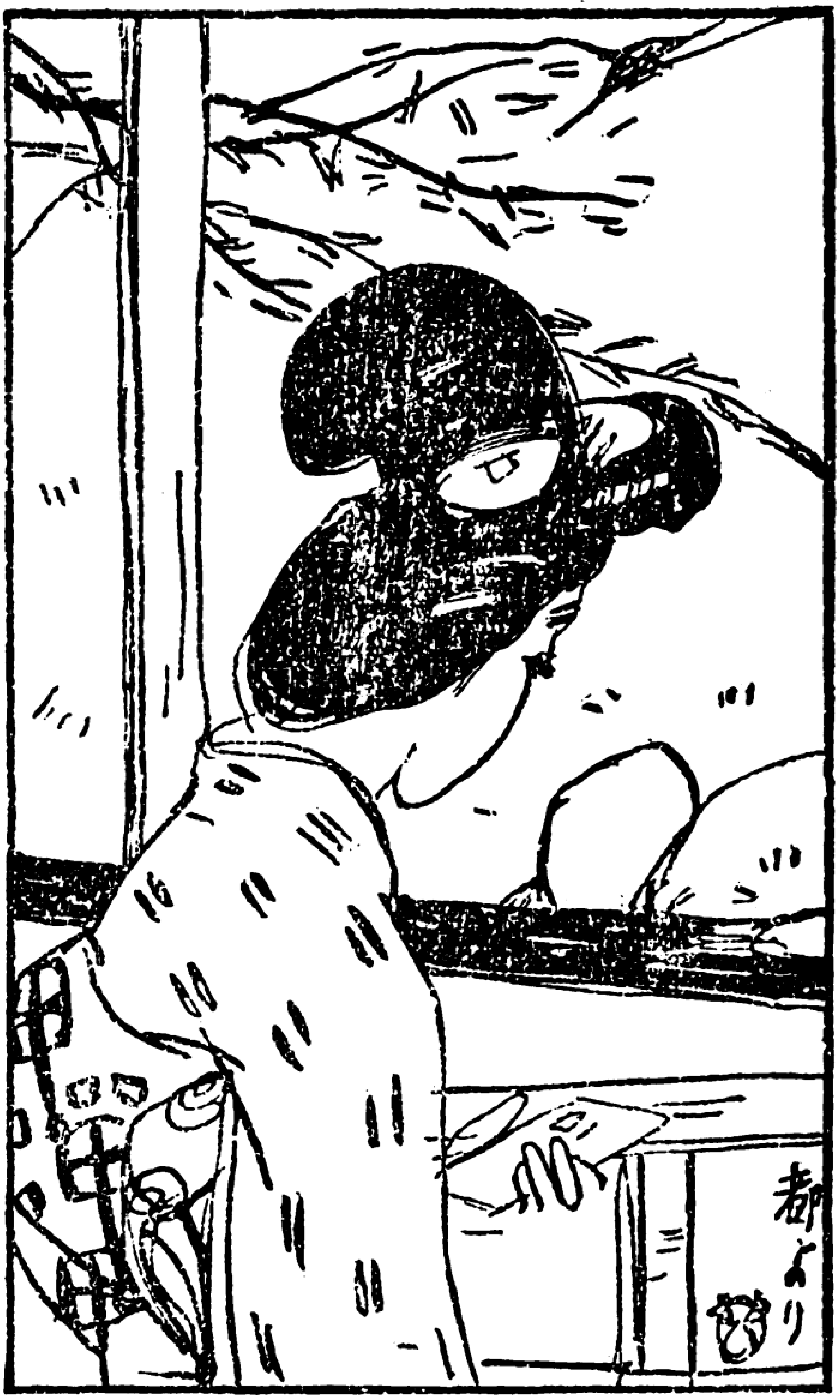
『よくやすんで居りますの』

『あゝ左樣で……ほんとにこの頃はおとなしくおなり遊ばしましたわね』

『いえ奥樣、おいたで〱こまるんで厶いますよ、この間の朝もね』とピンの一件をお話すると、

『まあ便器の中へホヽヽ、どちらの子供衆もねえ、宅の初子が二才ばかりの時で厶いましたよ夏の盛りで私が茶の間でウト〱して居りますと、あの子が來て口のまはりや、頬の邊へ何だかしきりとおつけるやうですけど、たまらなくねむいのでかまはずに置きますと、

そのうち玄關へ人が來たやうなのでハッとして出て見ますと、保險會社の集金人で、いやにひとの顏を見ながら歸つてゆきましたの、いやな奴だと思ながら奥へきますと、姑に『どうしたのお千代の顏は』といはれてびつくり鏡を見ますとあなた顏中パンの粉だらけなんでございませう。そのきまりの悪いことつたら……その時つくづく思ひましたわ、子供を持つてるものは氣をつけないと、とんだ恥をかくことがムいますからねえ』



『まつたく……おいたをする子供が悪るいのじやなくつて、皆んな大人が不注意なからですわ』

母さんくと一夫が泣きながら呼んでゐるので急いでお暇する。

三時半お歸宅高木様も御一緒夕飯を差上るやうになるだらう。少し早いが四時頃から支度をしやうと水汲みに出けると、南無三、井戸端會議長として名聲高き角のお婆さんにつかまつた。已ぬるかなとは思つたが、あんまりつれなくあしらつては後難がおそろしい。油を塗つたやう

によくすべるお口から、とう〳〵として出るくだらもなき千萬言を拜聽して、やつとお許しの出たのは四十分の後だつた——さあこれから大活動せねばならぬ。お鍋をかけるやら鰹節をかくやらしてゐると。外で遊んでゐた一夫が泣きながら歸つて來た、見ればこゐんだと見えて白いエーバーンが泥だらけ……お座敷ではお手が鳴る。

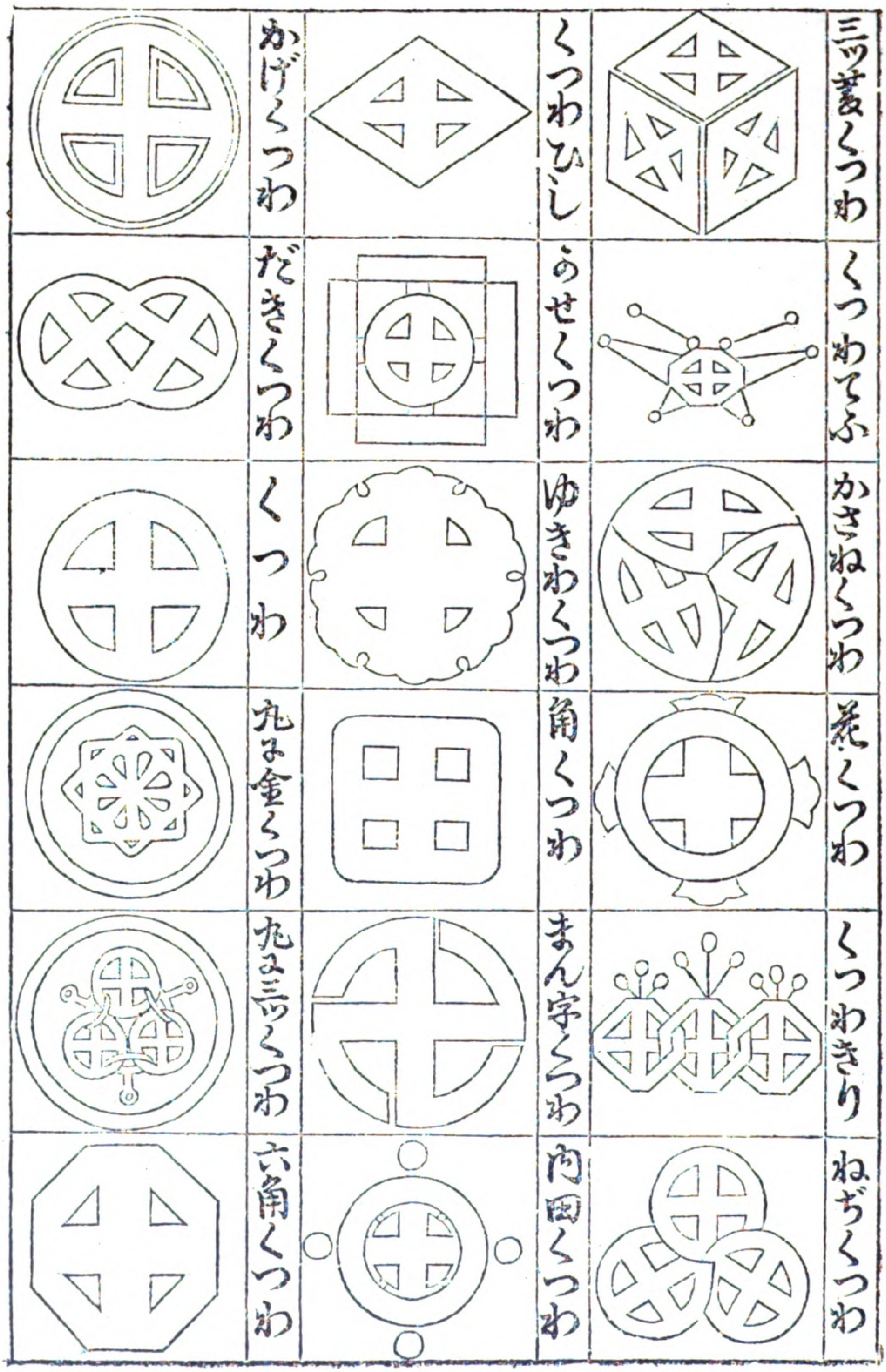
『雨はふる〳〵干物ぬれる。脊中で子は泣く飯こげる』といふ俗謠そのまゝの體たらく、ア、目がまはりさうだ。

腕のある妻

男は外を務め、女は内を治むるとは、昔からいひ傳へた事であるが、今これを平たくいへば男は外に出て金を儲けねばならぬ。女は内に居て、其金を遣はねばならぬ。併し金を遣ふといつた處で、何にも自分の爲めに、無暗に滸物なんぞを拵らへるのではない。男が儲けて來た金を遣つて、世帶を持つのが女の務である。一體多く儲けるか、少く儲けるかは、男の腕前次第であるが、其金を上手に使ふか、下手に遣ふかは又女の腕前次第で、腕のある女は僅かの金でも立派に世帶を持つて行くが、腕のない女といふは仕樣のないもので、何程金を持たせて置いても、立派な家庭は覺束ない。だから世帶持の上手な女は男の爲めに福の神であるが、世帶持の下手な女は男に祟る貧乏神で、一度これに取付かれては、なんぼ骨折つて金を儲けても底の無い袋に物を入れるも同じ事、入れても〳〵溜りはしない。昔から大きな身代を造り出した人は男の力もえらいが、內に居て其働きを補けた女の力は一層えらいので、このえらい女の內助が無ければ、男許りでは其身代は興せない。女の働きは男の樣に華美でもないから一寸世間の目に立たないが、能く分析して見たら、却つて女の力が多いかも知れない。

此の樣に家の經濟は女で持つから、其女に勤儉貯蓄の心掛があるとないとは、其家の興廢にも關する程である。特に性來綿密で、あれば、家計の中から色々にして金を絞り出す工夫にかけては迚も男の及ぶところでない。女がいよ〳〵其腕に撚をかけて絞り始めたなら、貯金は何處からでも湧いて來る。臺所にあるものは米櫃でも醬油樽でも、皆貯金の瀧をなす樣になる。

くつわ意匠


三ツ菱くつわ
くつわひし
かげくつわ
くつわてふ
ゐせくつわ
だきくつわ
かさねくつわ
ゆきわくつわ
くつわ
花くつわ
角くつわ
丸に金くつわ
くつわきり
まん字くつわ
丸に三ツくつわ
ねぢくつわ
内田くつわ
六角くつわ

女子一代の大業

久津見蕨村

△顔と足袋とのコントラスト

一日電車に乘つた時、自分の向側に二人の女學生が腰をかけて澄してゐた。その顔を見るともなしに眺めると、いかにも身嗜みにと白粉を塗けて、その白さと云つたら、富士の白雪に朝日が映じたやうに、誠に美しさの限りであつた。それから自分の眼がスッと流れて兩女の足下に至つた時、これは亦た驚かざるを得ない。兩女の足袋と云つたら、その汚れてること、鼠色に染まつてゐる上に、爪先が少々破けて拇指が顔を出してゐる。加之に其黑い足袋で踏んでゐる下駄、夫れが亦た非常に怪しい恰好をしてゐる。即ち前は駒下駄の如く、後は雪駄の如く、これに例の鼠色の足袋を合はせると、何のことはない、兩女の踵から下部は源三位頼政が射止めた鵺であるこの不精つたらしい踵と、身だしなみの好い首と、兩々相對して比べると、古人は斯ういふのを同日の談にあらずと云つたのだらうと思はれる。それから更に、兩女が風呂敷包みの上に置いてある手を見ると、いかにも能く肥えてゐる。雖然ど、おそや爪が少し延びすぎて、肉との間に垢が薄黑く溜つてゐる。

この爪の垢と、この足袋の鼠色とは、幸ひに此女の品行方正を證明するかも知れないが、首から上部が餘り綺麗だけ、それだけ汚らしさが目立つて、淺猿しさに堪えられない。

斯くいふ怪しげな對照は、必ずしも此の兩女學生にのみに限らず、隨所の往來、隨所の電車の内でよく見受ける例である。いくら女學生だからと云つたところで、何時かは花嫁になり、愛妻になる身なのに、さりとは餘り身嗜みが下手すぎる。

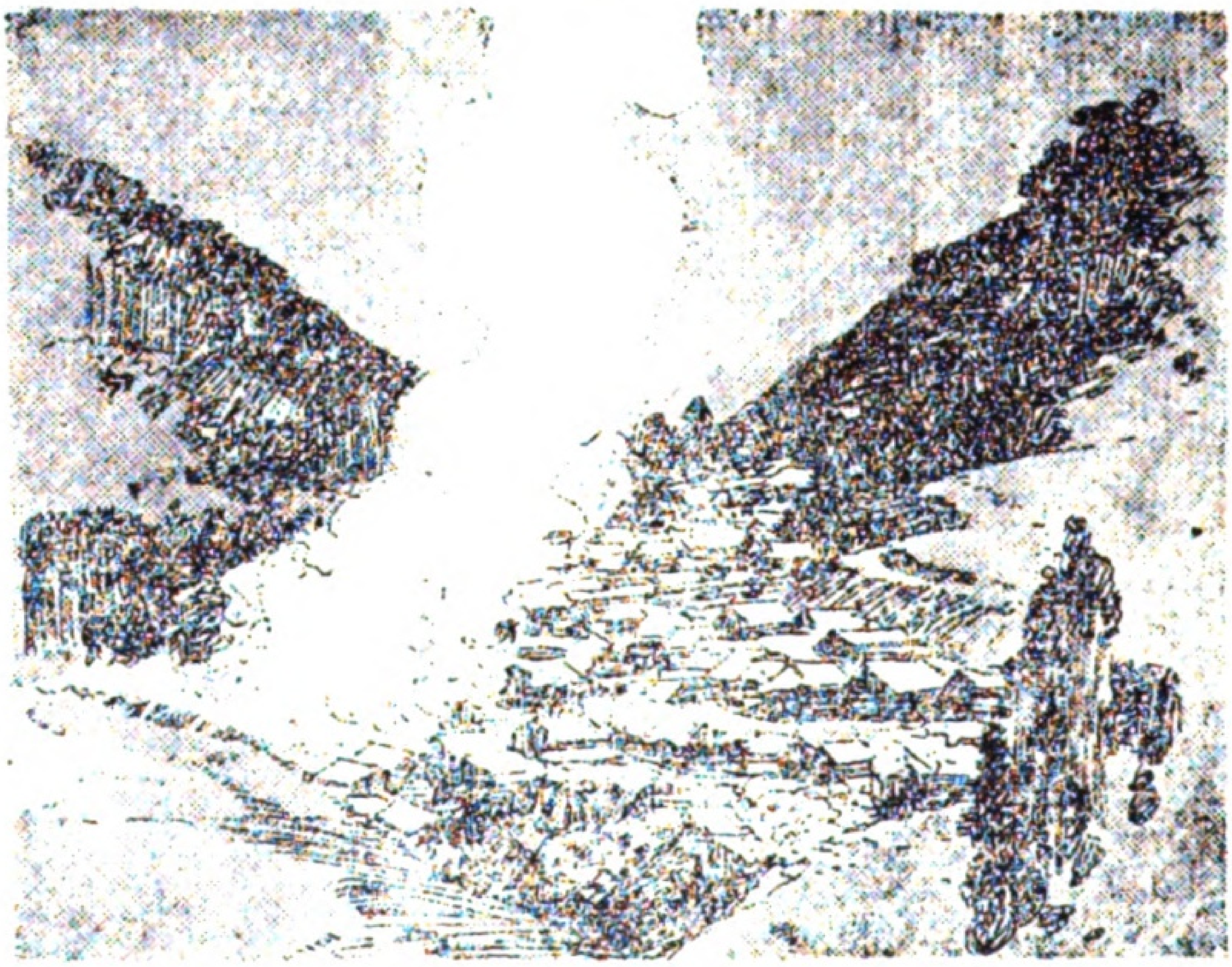
△細い指と青い顔

女の生命は美である。故に顔や姿の整つて居らぬ女

は幾んど生命のないものである。隨つて之を整へるには、精神の修養よりも、先づ第一に美顔美身の工夫を運らさなければならぬことは言ふまでもない。

併し其美とは何であるか世の美人と云はれてゐる婦人はと尋ねるのに、十中八九までは顔の青い、指の細い、身體の薄手な體質の弱さうな女である。兎もすれば細腰狐面とでも形容すべきものである。

近來美人の標準が幾度か變つて來て、一部の人たちは體格の善い、血色の充ちた女を稱する樣になつて來てはをるが、一般には未だ優しい弱々しい女を美人としてをる。隨つてその反對の、身體の强さうな女は醜婦とされてゐる。併しこれは喜ぶべく、祝すべき現象であらうか、云ふまでもなく、人類の向上進歩は、强健偉大な身體に俟つ所がなければならぬ。優等の種族と云ふのは唯だ智力や道德の高いバカリではなく、身體の强健なものでなければならぬ。此點から見ると、指の細いのと顏の青いのとが美人の特徴にされてゐる今日の風尚は、甚だ喜ぶべからざることだ。女子教育家も一般の社會も此點に意を注いで、身體の優良な女子を美人とする風尚を養つて貰ひたく思ふ。



會津東山溫泉

△練馬大根の樣な腕

一體世間の下婢の腕を見ると皆な練馬大根のやうに太く逞しい。天晴な立派な發達

を遂げてをる。之に反して令孃方や夫人方の手足を覗ふと、多くは皆な細い、綺麗で優しいと云ふ點は相違ないが、見事に發達してをるとか、雄々しく見えるとか云ふ點は幾んど全くない。下婢の腕は太くて見苦しいとは、令孃方や夫人方の動もすれば云はれる所であるが、その細いのよりは、實際の所役にも立つし、見事でもある。

而して、その太いのは何から來、細いのは何から來るのか。中には先天的なのもあるが、多くは腕の運動の多寡から來る。學校では今でも女子に運動を盛んにやらせる。身體の發育は之が爲めに餘程良くなつてをるに違ひないが、夫れでも下婢の腕は女學生の夫れよりも太いのが常である。自分に云はせれば、學校の體育は未だ〳〵足らぬと云はねばならない。

自分の希望する所は、貴賤上下の別なく、令孃でも、貴夫人でも、太い腕を持つて貰ひたい。身體を優健な、見るから堂々たる婦人になつて貰ひたい。智力道德の進歩は云ふまでもないが、身體の發達は一層良くなつて貰ひたい。

△下婢の運動と奧樣の不精

下婢の頰片は赤いが、奧樣の顏は青い。下婢は飯炊きをし、洗濯をし、拭掃除をするが、奧樣は兎もすれば奧で靜と新聞を讀でござる。言ひかへれば、下婢は一家中の運動家である。奧樣は家内中の不精者である。運動の良いのは女中の太い腕を造くる。其赤い顏を造る、奧樣の不精は青い顏、細い指、勢ひのない身體を造る。頓ては夫れが不健康の母となつて、一家の不幸ともなる。

自分は貴賤上下一般に對して、女子が皆な太い腕、赤い顏を持つに至ることを望む。隨つて飯炊き、洗濯拭掃除、何んでも彼でも能く働くことを望む。

△雪中一里の强行散步

『寒中雪に降り込められた日でも、決して外出しなければ不可ぬ。雪中毎日一里以上の强行散步しなければ

健康の爲に良くないばかりではなく、顔の艶が惡くなつて靑瓢簞のやうな女になつて仕舞ふ』とは北海道に寄寓した時、其初めての冬に醫師が自分の妻に忠告した所である。

歐米の婦人が其容貌の美を保つ爲めに苦心する事は一通りの沙汰ではないが、その美を保つ工夫の最上なものは、毎日の運動である。少なくとも二哩以上の强行散歩をしなければ、血色が良くはならない。

元來女子に對しては、智識や道德の必要も言ふまでもないが、此等には一體何を土臺として成るものであらうか、その土臺が唯だ精神上にのみ存してをると思ふのは大なる誤想である。『完全な心意は健康な身體に宿る』と云ふ格言のある通り、まづ身體の健康を第一としなければならない。

故に道德智識を磨くのも、畢竟するに先づその土臺たる身體を壯健にし、かくて初めて精神が働かされるものであると云ふことを確信せねばならぬ。

△美人の標準

强ち顔の白いのばかりが美人ではなく、指が細くて弱々しく見えるのが美人ではない。爪に垢を溜めて置いたり、足袋が鼠色に汚れてをるのは美人ではない。眞正に美人と云つて可いのは、昔で云へば三十二相揃つて、加之に身嗜みの行渡つたもの、今で云へば、身體がよく發達し、如何にも人種として優勝でなければならぬ。

この故に世間の總ての女子は、美人の標準を茲に置いて、夫れに向つて進むべく心懸けねばならぬ。隨つて强ひて着物を飾るにも及ばねば、また紅白粉を塗り立てるにも及ばず。只管身體の發達を心懸けることが必要である。優勝の發達を遂げたものは、之を何時までも保つことに力め、若し不完全な所があれば、之を補ふことを心懸けることが必要である。いくら顔ばかり白く塗つても、不完全な身嗜みは却つて人に嫌はれる基である。頭の端から足の爪先まで、强ひて好い物

を求めるには及ばぬが、能く行渡つた發達と身嗜みに心懸けて貰ひたい。

△女子最大の目的

今日の女子が、貴賤上下の區別なく一生懸命になつて努める事は、抑も何んであらう。良妻賢母にならうとするのか、才女名媛にならうとするのか。それとも一代を華やかな生活に面白く送らうとするか。一體女子最大の目的は何んであるかは種々の論もあらうが、先づ其等は暫く措いて、何んにしても女子は女子として一代の大業がある。此大業を遂げなければ女子として天職を盡したものとは云はれない。

抑も人は過去より現在にかけて歩一歩、代一代進化し、向上してゆく猿猴と同族な獸類から人間、野蠻人から半開人、半開人から文明人になつて來てゐる。之から未來にかけては更に向上して、人以上の人、文明人以上の文明人にならねばならぬ。

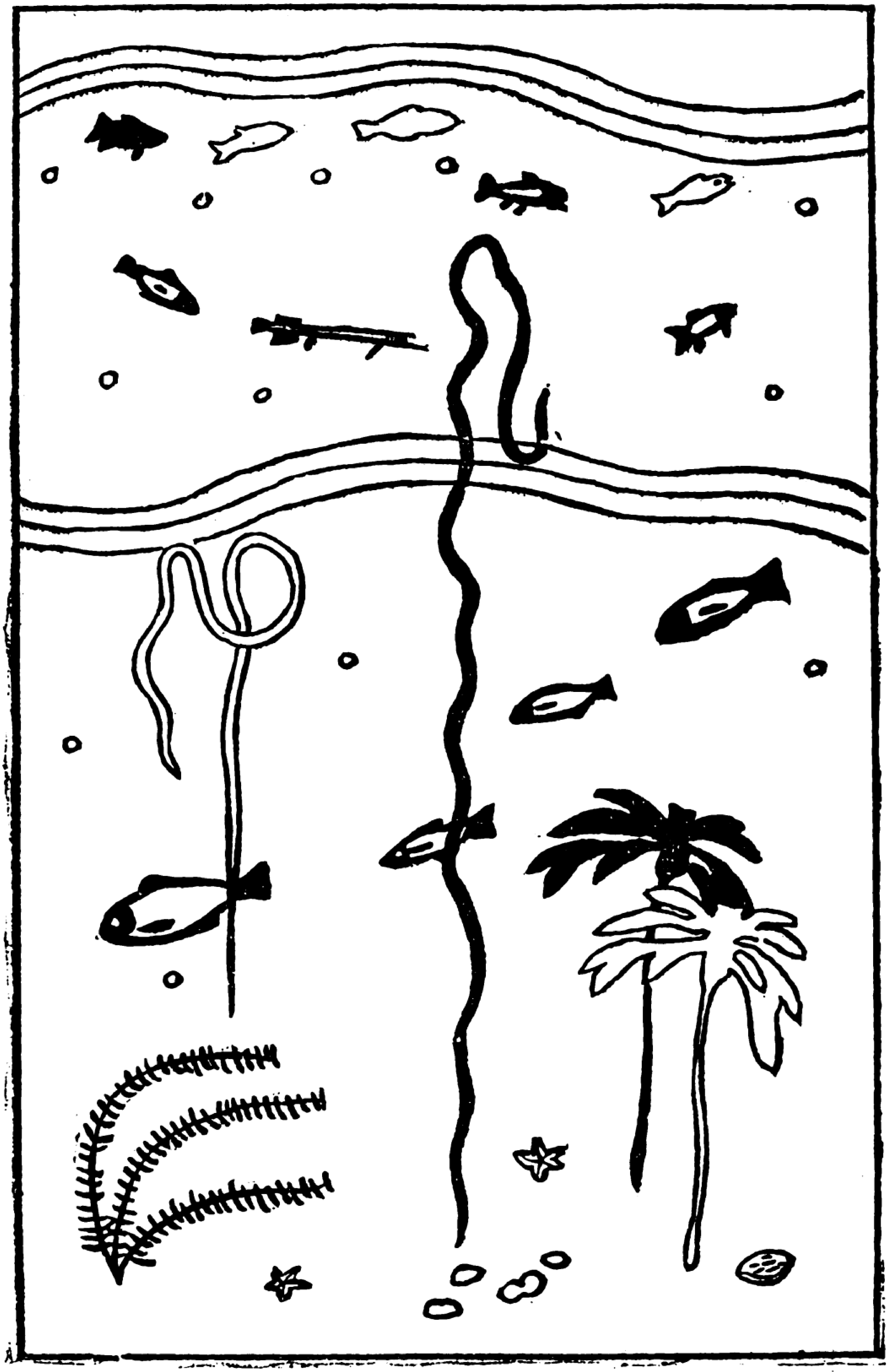
この向上の一路に立つて、文明人以上の文明人を生み人以上の人を造る大役を有してゐるものは今の男女である。就中女子である。

之が爲めに、女子は殊にその身體を完全に發達させますます完全に發達した子孫を得なければならぬ。所謂る世間並の美人即ち顏が靑く、指が細くては、到底この大役は勤まらない。腕も腰も堂々として發達した新美人となり、而して新時代の美男子、美女子を造らねばならぬ。

△日本婦人の西洋婦人に優つた點

日本婦人は西洋婦人に勝れて居る點が三つある。第一は溫良な事で歐米何れの國にも日本婦人の樣に深沈とした溫雅な婦人はない第二は貞淑な事で夫に對する貞節の堅い事は歐米婦人に見る事が出來ない第三は勤勞でこれも歐米では百事分業で且つ機械力によつて居るから日本婦人の樣に忠實に一家の勞役に服する婦人を見る事が出來ぬ以上は日本婦人全體を通して西洋婦人と比較しての話で一々實地に就て云へば日本婦人中にも右の長所の一つも無い婦人が隨分澤山あるし又西洋婦人でも日本婦人以上に溫良、貞節、勤勉な婦人がある然し概して日本婦人の長所で西洋婦人の缺點は以上の三つである。

海の意匠





二通の手紙

ある男に答ふる

苔の花

重ねての御手紙、いと〳〵有難く拜見申上候。色々と御親切樣に仰せ被下候をば又しても頑なしう、同じ言葉を繰返して御返事申上げ候事、誠に恐入りて候へども、矢張前便にて申上げ候よりも、より以上の事は申上げ兼ね候。さり乍ら彼の御文面の趣が、若し君の眞實なる御心より出で給ひし者と致し候へば、私は有らゆる感謝の辭をもて、是に捧げざる可からず候。故如何となれば、私は未だ斯程の御手紙をば、曾て一度も見し事これ無く候へばにて候。

さはれ御文中の、人物地位をば飽足らず思ひ給ふや、との御言葉は、謹みて御返上申し上ぐべく候。左樣の女にては無しと思して、最初の御手紙は下されしものには候はずや。君は何時迄も現地位に居給ふべき御人ならずとは、常にMの御敬服申上げ居る處、私も屢々耳に致し居り候て、乍陰もMの良きお友達としての御許樣をば、猶一層の御奮勵有れかしと、祈上げ居候事に候。

前便にも一寸申上げしかとも存じ、重ねて又もや、管々しき樣ながらも、私には一人の親、只一人の母の候。私を生みくれたる、又今日迄育てくれたる、此の老母の餘生



には、せめて私の全身を捧げざる可からず、其命令には絶對に服從すべくと考居候。然し、御推もじの樣に、何も嫁る先の極まつて居る譯にもこれ無く、さればとて終身童貞を理想とする程の、崇高な考も御座無く、時に野心も萌し、時に榮華も夢見申候。

母の高壓手段もて、斯樣の御返事を餘儀なく書かせられたるとは、努々思召し被下間敷、私の母は私の意志に對しては、至て放任主義をとり居候。然も母の束縛なく、又尊敬の念をもて君を愛し乍らも、猶かく申上候は、一見甚矛盾しても思召し候べし。

束縛は之無く候へども、母の意向は略知る處に候。されば口にはよし出し候はずとも、夫れと知りて我が都合よき方には、如何にしても出來不申、嬉しき仰せに背向きて迄も、平々凡々の生活に、敢て居る譯に御座候。

又、仰せ越されし今一ヶ條の事。愈々ならずは、兄妹として永久に交際せよとの仰せ唯單に隔意なきお友達としてのみならば、進みても御言葉に從ひ候べし。

露骨なるを許させ給へ、御噂は疾くより常に耳にして候へども、Mを介して只數度御面晤致し候のみの御方に、尊敬の念は先措き候て、眞率に兄上樣としての情は湧き不申候。血緣斧鉞も絶ち離き、同腹の兄妹すらも、嫁ぎ、又娶りたる後は、自然に疎々しく、音信さへも時に稀になり行く者とか聞きて候。ましてや一時の御言葉、是は失禮乍ら御辭退致し候方、御互樣にも宜しからむかと考へ申候。

冷やかなる女よ。情知らぬ者よとの、御蔑視もいとく辛く恥かしく存じながら、前便と一とつ樣なる事を繰返して、御細々の御文に酬い候事、何卒々々不惡御許容下さ



れ度く、自ら作りし殻中に蹐まり居り候ふて、よく云はゞ自覺せる、惡しく云はゞ抑制なき原始的なる、個人主義の行爲をば、最も忌むべき者と、不言の内に然躾けられたる古めかしき心をば我と自らあはれみ居り候。

此文御覽被遊候て、或は御冷笑や遊ばされむ、或は御怒りもや候はんかと、さすがに心の平かならぬを覺え申候。

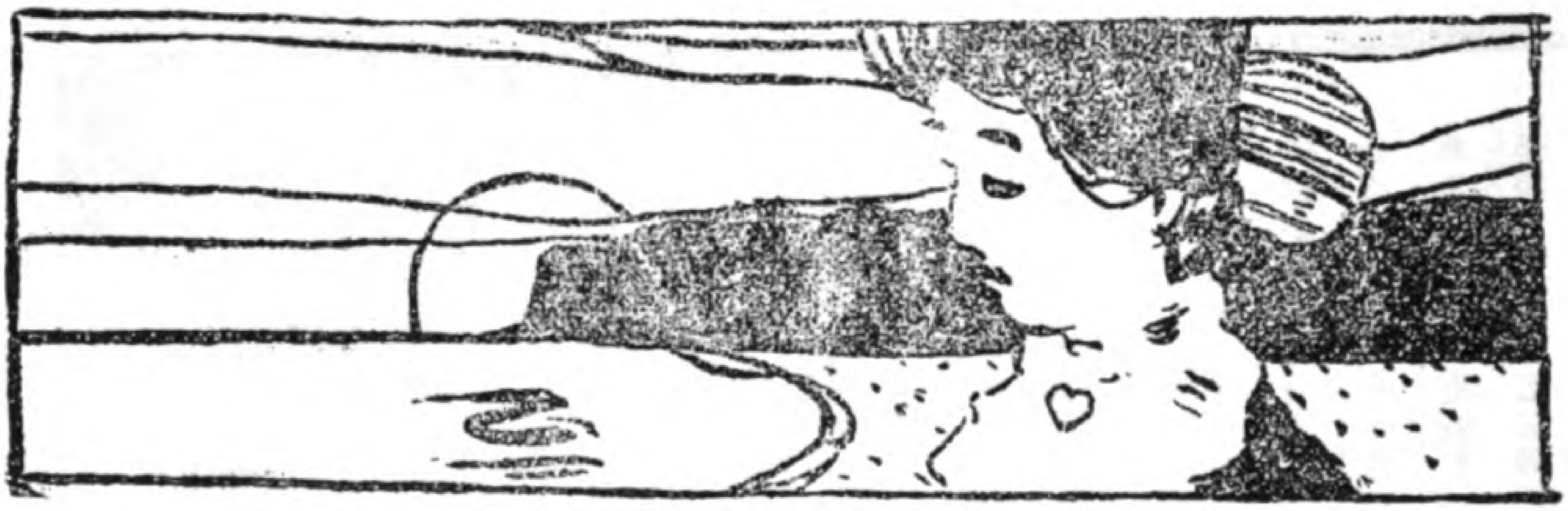
うれしき御言葉に絆され候て、此度許りと此筆をとり申候へども、以後はかゝる方の御手紙は一切御免し被下度、又御返事も差上げ申間敷候。女の愼を忘れてよしなき事ども書き列ね候事、誠に〳〵恐入り候。御判讀被下候後は必ず御裂き捨ての程、願ひ上げ參らせ候。先は御返事まで、斯くの如くに御座候。かしこ

苔の花より

ある女に答ふる

細々と御心籠め給ひし御文、繰返し〳〵、嬉しく將悲しく交々の思ひやる方なくて拜見致し候。

あやなくに涙のふり止まらで、先に驚きと悲しみとの御手紙頂戴致し候折、何事をか御返事には書附け候ひけむ、心亂れ居候ひし事とて、怪しき繰り言や聞え上げ參らせんと、斯う數々御慰めの御言葉賜はり候にも、却て私よりこそ、御見舞も申上ぐべき位置に有りながら、只ほけ〳〵しう亡き御面影のみ戀ひ聞えつゝ日を暮し候女々しさ



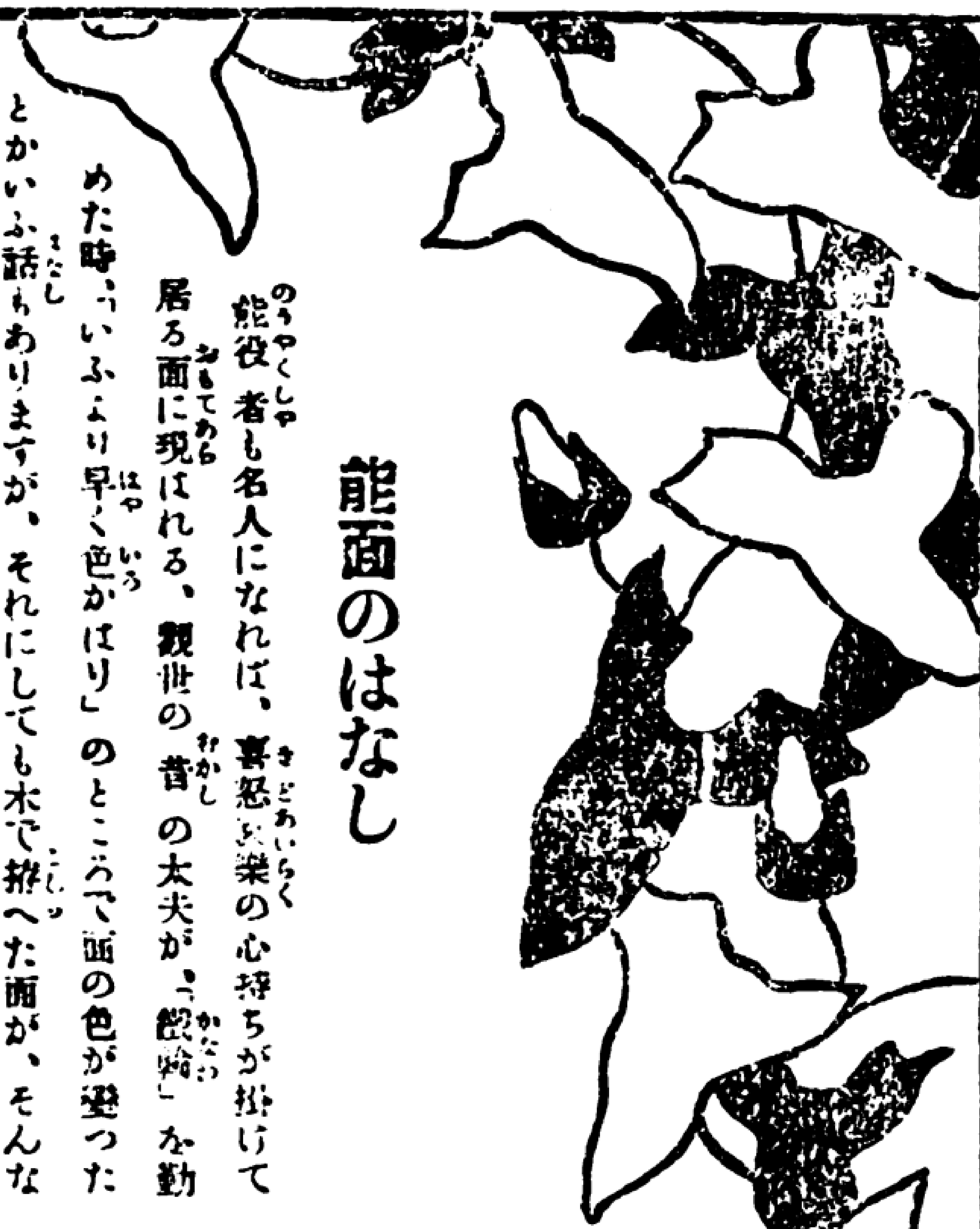
御父君、御許様にも、御勞れの御障り入らせられずとか、何よりせめて御嬉しく存上候。御歿後、御許様より御送り被下候御遺書拜見候ても、彼の雄々しき御筆の蹟かゝる御壯年に何の定まりたる御命ぞと怪まれ候ばかり、まして御父君の御心の中、推量り參らするだに心苦しく候。

在ませし御世には只さる方の御近しさにて、愚なる身のさりとは些心もつかひ候ひける、御後に承り候てよりはいかなれば知らで過ぎけんと口惜しさに取返すものにもがもなと、折柄雨勝ちなる空の一しほ心有り氣に眺められ申候。今は近き御ゆかりを、亡き御影になぞらへ參らせて、御許様懐かしく、屢ゝもおとづれ參らせ度存じ乍ら俄に今迄と變し御睦みは、譯知り給はぬ御父君様の如何に思し給はんかと憚かられ候て愼しみ居候。我人に痛恨を殘して逝き給ひし御後に、あり有りての後、又、如何なる世をか見候らん。絕えなば絕えよと、惜しからぬ玉の緒の我と自ら呪咀はれも致し候よ。中々に心一つに秘めても有りぬべき事ぞも、君獨りに知られ參らせたれば、云はで腹ふくるゝ苦しさより逃れて、せめての託ち處と御免し被下候嬉しさは、何に譬へ候べき。

昨日は人知れず、陰乍らも七々の御供養、心許りを致し候。

此度はかゝる事申上げまじと存乍ら、又してもかごとのみを聞え上げて候。同じ心に御ゆるし下さるべうもや。あなかしこ

苔の花より



能面のはなし

能役者も名人になれば、喜怒哀楽の心持ちが掛けて居る面に現はれる、觀世の昔の太夫が、「鐵輪」を勤めた時、「いふより早く色かはり」のところで面の色が變つたとかいふ話もありますが、それにしても木で拵へた面が、そんな働きを何うしてするか、藝が極意に達すれば、そんな不思議も現はれるものかと或能面作家に訊れて見たことがある、スルと其人の云ふには、一體能面でも鬼とか、天狗とかのやうな怒つた顔ならば寧ろこしらへ安い方であるが、女の面となると非常に困難である。殊に「羽衣」に用ふる「小面」の如きに至つては至難中の至難なる面だと云つたが、成程それに相違はない。羽衣を取られた時の悲しさうな顔に作ると後の羽衣を返してもらつて喜んだ時に不都合になるし、さうかと云つて、喜んだ顔にすると憂ひの時に困る譯である、それならば結局、どういふ意味を含めた顔に製作するかと訊ねて見ると、仕方が無いからどちらつかずの何も考へて居ない、ぼんやりした顔附きに作るのだと答へた、それから取分け難しいのは眼睛の穴の明け方で、それが何か見て居るやうでは可けない、只だ眼を据ゑた無心な顔附にするのだと云つた。

其話を聞いた後に、神作とか銘作とか云ふ面を見た時によく注意をすると、如何にも作のよい面ほど顔がぼんやりとして無我無心に見えるし、少し劣つた作になると、何處かに何かの意味が含まれて居るやうで、却つて生氣を帶んで居るやうに思はれるので、只面として飾つて置くのには却つてその方がよいやうな氣がする。

處で茲に可笑しい話がある、能の面といふものは不思議なもの

で、掛けて居る人が、泣く型をすれば、面も泣いて居るやうに見えるし、喜べば、如何にも面白い顔附きに見えるといふ話を聞いた人が、或時能を見に行くと、外の面は一向そんな風も見えなかつたが、シテを勤めた人だけは、如何にも話しに聞いた通り、物を言へば口も動くし、眼までがパチ〳〵動くので、成程是は不思議なものである、と非常に感心したといふので、それは何であつたかとたづねると「鉢の木」とかいふ能で、シテは佐野源左衛門とか云つたと答へた。それは成程その筈である、源左衛門の女房のツレ役こそは面も掛けるがシテの源左衛門は、常面とて素顔なのである。

又能の面を有難がる或人は、盛んに銘作の効能をのべて、面の大さは其品によつて大小の差は非常にある、「熊坂」に掛ける「長靈べし見」や、天狗の時に掛ける「大べし見」などいふ大きな面もあれば「若女」や「小面」や其外女面のやうな小さなものもあるが、それが誰の顔へでも間に合ふといふのは不思議だといつたが、如何にも面の大小のみでなく、人の顔にも長いのや廣いのや、十人十色であるので、顔の小さい方の人は困ることもないが、顔の大きい人となると、實際はその爲めにいろ〳〵困ることがある、先々代觀世清孝などは並外れの大顔で小面などを掛けると兩の頬が面の外へ餘つて餘程滑稽なものであつたさうだが、それで舞臺で能を勤めると、それが少しも苦にならなかつたさうで、して見ると面よりも藝の力は不思議なものである。

尉の面をかけると面の耳と本物の耳と二ツ並んで居るが實際目障りにならないのも不思議だ。



大酒な夫を感化した橋場の貞女

婦人記者

淺草の橋場町二百五十七番地に三十戸建の長屋があります。是は東京市特殊小學校後援會の經營して居りますする長屋で、借家人はみな玉姫小學校生徒の保護者であります。此人達は昨年の大火に焼け出された細民でありますが、其中に龜本春子とて世にもめづらしい貞婦が居ります。

△底の知れぬ懶惰な夫

此婦人は本年三十八歳、生れは佐渡の相川で、郷里で小學校を卒業してから、女學校へも入つたほどの婦人ですか、今より二十年前に、神田の松富町に質屋をして居りました龜本文吉の三男萬吉といふ人に嫁しました。此萬吉といふ人も其頃は相應に資産もありまして日本橋の長谷川町で唐物仲買をして居りましたが、困ることには大酒の爲めに稼業も思はしく行かないやうな始末で、追々とおちぶれて、しまひには淺草邊の汚ない裏長屋にうろついて人力車夫とまで成下つて了ひましたのですけれども、それでも酒は止められないものと見えて、少しばかりの賃錢は取り次第みな呑んで了ひ最早かうまでになつては、義理も外聞もあつたものでなく、ます／＼自暴になつて、たゞ／＼酒ばかり呑んで、醉へば、往來でも何處でもかまはず寢轉んで了ふといふ始末で、それがため警察の厄介になつたことも度々であるといふ、箸にも棒にもかゝらない、始末にいけない男になつて了ひました。

並大抵な女ならば、かやうの不しだらな夫に愛想を盡して離緣を取りさうなところでありますけれども、

春子は聊かもそんな樣子もなく、日となく夜となく、つらい貧苦を忍んで折を見ては夫をいさめますけれども、一向利目もなく相かはらずだらしのない始末に、今は夫の聊かの收入などは當にせず、つかひ放題、吞み放題爲るが儘に任せ、自身には何か内職などをして、辛くも暮し向をつけて居るといふ次第でありますので、近隣の人々や親戚からは、あんな大



酒吞と一緒に居つても見込みが無いから今の中に出て了つてはどうかとて頻りに離縁を勸める人もありますけれども、そんなことには耳も借さず、資産の豐かな時に嫁に來て、今貧乏になつたから去るなどいふことは有まじき仕打で殊に夫も酒さへ吞まなければ其外には別に惡い癖もない人であるから、何うかして酒さへ止めさせて、夫婦一生懸命に働きさへすれば一家恢復の望みは慥かにありますと堅くとつて、少しも心を動しま

せん。萬吉が酒を呑んでなまけて居れば、春子は一層精を出して生活の爲めに怠りなく働きますが、何分にも女の手一つでは、何うしてやり切れず、ます／＼苦しくなつて、最早路頭に迷ふやうなことに立到りました。

△二百圓の大金忽ち酒となる

今までは、辛抱に辛抱を重ねて、貧苦を凌いで來た春子も、全く途方に暮れて了ひました。今はいよ／＼手も足も出せないところまで行きついて了ひましたので、不本意ではありますけれども、實家の父に願つて二百圓の金を送つてもらひました。

それを資本にして何か商賣を始めたい心算であつたところが、萬吉は其金を持出して惜氣もなく酒を呑み仲間の車夫を連出して思ふざまに酒を振舞ひ、僅かの間に殘らず使つて了ひましたので、春子は一時非常に悲みましたが、つく／＼考へ直して見ますと、急に大金を手にしたのは、却て夫に罪惡をすゝめたやうなもので、是は全く自分の考への足りなかつたのだと却つて自身を責め、金を酒に使つて了つた夫を少しも怨むやうな氣色もなく、ます／＼眞心を盡して立働き、折を見ては物やはらかに酒を控へるやうに諫めて居りましたが、さすがの夫も、考へて見れば。此有様では最早乞食をするより外に途もないほどの身の上と、妻のこれまで盡して呉れた貞節に感じて、全く夢から覺めたやうな心になり、それからは餘り大酒もせずに居りましたが、昨年の四月淺草の大火に燒出されて、それから後援會の長屋に收容され、相變らず車を輓いては好きな酒を少しづゝ呑んで日を送つて居りました。

一體萬吉といふ男は酒は好きなことは好きであるが一人では左程呑めもし得ないけれども、仲間を連出して一緒に呑むことが好きで、其代金を一人で引受ける癖があるので、幾ら稼いでも一錢も家へ持歸ることが、出來なかつたのです。

△幾年の貞操始めて花を開く

春子は、それに少しも逆らはず、本年十一歳になる男子の要といふのを甲斐なき手一つに教育し、隙さへあれば自身に讀書、算術などを教へ、言葉つかひから作法までも、自ら模範となつて教へ、自身には見すぼらしい粗末な筒袖の着物を着ても、夫と子供には、小ざつぱりとしたものを着せるなど、總ての行ひが、近所合壁の人に感心されて居るのでした。

子供の要も母の教へがよろしいだけあつて、今年の春二學年を優等で卒業し、品行もすぐれて良かつたので特に賞與されました。かうなると段々春子の貞女の名が諸方に廣まり、長屋衛直の伊賀氏なども大層その人となりに感じ、萬吉を呼んで懇切に訓戒を加へましたが、萬吉とて物の分別がつかぬほどの男でもありませんので、始めて前非を悔悟し、それからは一滴も酒を口にしないことを誓つて、一心に職業に勉強する打て變つた人になりましたので、春子は悅ぶこと一方でなく一家の中にやうやく平和の光りがさすやうになりましたので、今まで萬吉の行狀に呆れて絶交して居つた親戚も、萬吉の改心と春子の節操に感じ、資本を貸して味噌、醬油、薪炭の店を出せましたが、開業からまだ間もありませんけれども貞女店の名が高くなつて非常に賣行よく、今のところでは毎日四五圓位の商賣があるやうになり、此一事は追々と長屋一體も感化して、揃つて稼業を勵むやうになつたといふことで、後援會では喜んで居ります。



肱川の歸帆



看護婦

くれなゐ

△看護婦となりし動機

私は故海軍の少尉と結婚をしましてから僅三年、まだ新家庭の香が失せない三十七年の春三月、良人は彼の旅順閉塞の際、名譽の戰死を遂げました。兼て覺悟はしてゐたもの〻、實際遣瀨ない思に涙のかわく間もなかつたのです。

それに良人は別家をした獨立の身で、私との間にまだ子供もありませんのですから、此先き何うしたらよいものか、心一ツに定めかねて困つたのでありましたが、其中良人の兄が參りまして『老先長い人を此のまゝ一人でゐて貰ふ譯にも行くまいから、相當の手當はするから生家へ歸つて貰ひ度い』と理を分けた情ある話、私はたとへ子はないにせよ、今後人の妻となる氣もありませんので、出來るものならば亡き後を弔ふ爲めに止まつてゐたいと思ひ生家の父に相談いたしますと、父はそれは何うとも汝の心次第にしたらよからうと申しますので、いろ〳〵考へもし相談もしました末、二度と良人を持つ氣はないもの〻、兒もない家に止つてゐて、本家の人々に厄介をかけるのも何だか氣の毒に思はれますので、ツイ生家へ歸りました。其頃丁度私の懇意な人が永年看護婦をして居りまして、相應にお金も貯め、獨身で不自由なく暮して居りましたから、私もどうせ何かの職業に就て、獨身で生活する覺悟ですから、其の人に様子を聞いて上京し、丁度看護婦募集のあつたを幸に、ある病院に志願したのであります。

△見習看護婦

見習看護婦になる資格は、十八歳から三十五歳までの、家事に係累なき者で、小學全科卒業以上と云ふのでありますが、私は地方の高女に學びましたので、別に試驗も不用ず、體格檢査丈けで濟みました。

尤も看護婦になりますのには、學校もあれば又養成所と云ふ塾のやうなもの〻あり、又何々會と云ふのもありますが、大きな病院で實地に就いて修めた方が、技量も上れば風儀も惡くならないと云ふ話を聞きましたので、病院の方へ志願をしたのでありました。

此の病院には百名に近い入院患者がありまして、從つて看護婦も見習も少くはありませんでした。

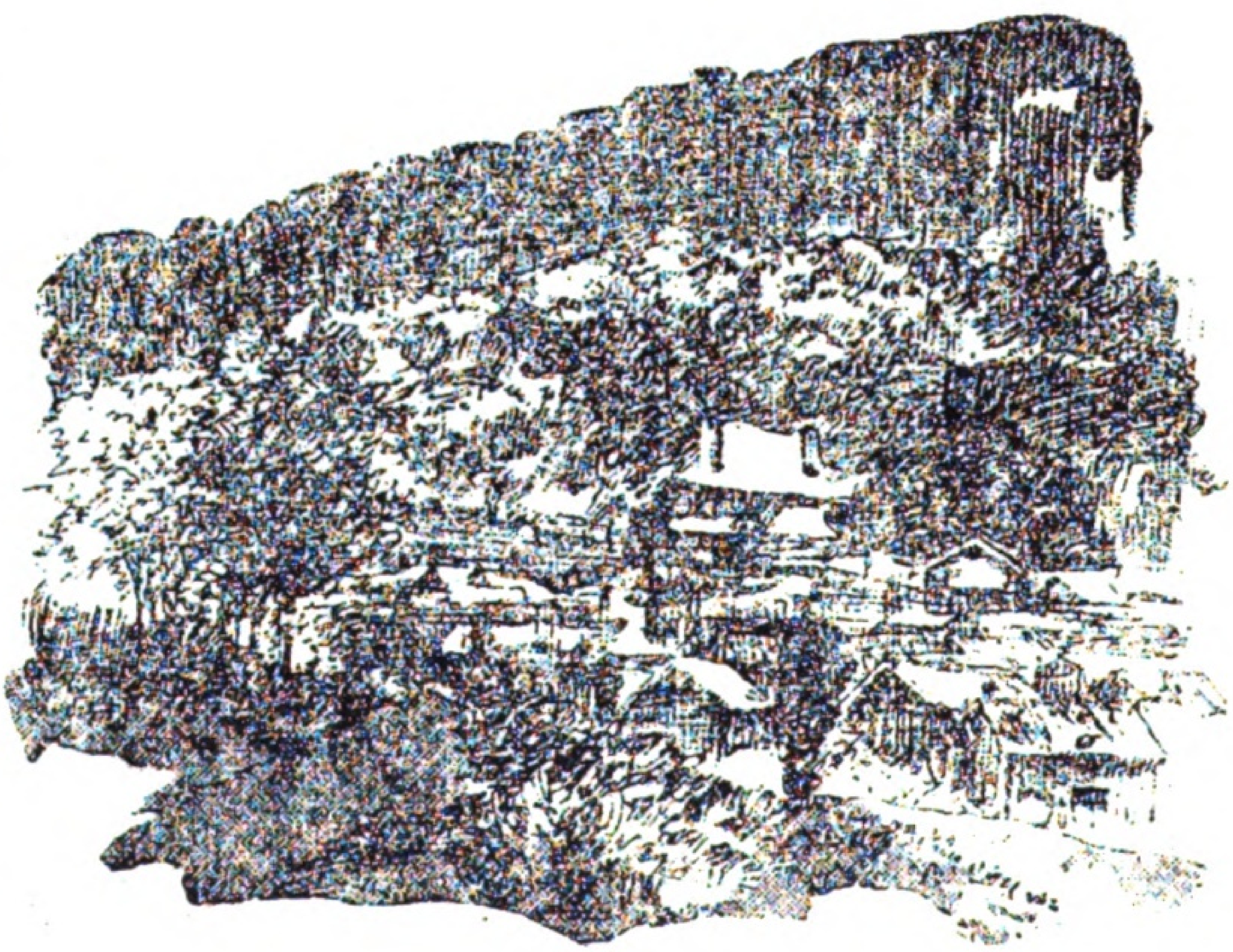
修業年限は三ケ年で、卒業すれば二ケ年の義務年限があります。而して修業中は一週十四五時間學課の講義がありますので、たとひ晝間の仕事で疲れてゐましても、夜はそれを復習しなければならず。世間の人の思つたやうに樂なものではありませんが、學課の方は私達には左ほど

六ヶ敷いものではありませんでした。

　初めの内は様子の分らないので困りました。いろ〳〵と耳馴れない言葉などがありましたり、一度位聞いた丈けでは解らないやうな事があつたり、馴れて見れば何でもないことにいやに暇どつたり、氣轉が利かなかつたりして、意地の惡い人にはひやかされたり、笑はれたり又は叱られたりなどもしましたが、それも十日と經ち二十日と經つ中には、段々様子も明つて來て、二ヶ月位の後はもう大抵の事にまごつかないやうになりました。

　然し何と申しましても見習中は生徒でありますから、何につけても命令をうけるばかりで、私のやうに廿二歳にもなつてから見習生となつた者は、同じ年配位の人に指揮される時などは、あまり好い心地も致しませんでしたが、併しそれが却つて奮發の助けになりました。

△一人前の看護婦



攝津有馬温泉

　私は始め内科附きになり、それから外科、産科、婦人科、皮膚病科等それからそれと廻りましたが、病室と云ふ病室は、薬の香ひやら呻吟の聲で、職業とは云ひながら、あまり好い心地は致しません。中でも内科の、勞れ切つた重病者が、グツタリとして横はり、力の無い眼で天井を見てゐる傍にゐる時などは哀れにもあり、又淋しく思ふ事もあります、外科で大負傷をした人や、大手術を受けた患者を見ては、ぞつとすることもあり、産科で難産の婦人を看護する時などは、あゝ女と生れるものではない、獨身と定めた自分は却つて幸福かも知れぬなど思ふこともありました、吹出物のない黴毒患者や尿科の患者は一寸見には病人らしくもありませんのでさう氣の毒との心も起らず、何となくいやらしいやうな氣もしましたが、二年三年と經つ中には、さう云ふ事もなくなり、切開された腫物に繃帶を卷いた後で、直ぐに御飯を頂くことも出來れば、死人部屋を出て夜便所に行くにも怖いとも思ひませんが、初めの中は物が食べられなかつたり、夜は寢られないやうなこと

は幾度となくあつたのでした

　三年間修業の後に卒業試験がありまして、卒業すれば始めて一人前の看護婦になり、月六七圓の給料を貰ふことになるのでありますが卒業試験と云つても別段六ケ敷いものではありません。私は難なく卒業しまして、其後二ケ年の義務年限中は、始め七圓の月給から、後には十五圓までに上りました。寢食の費用は總て病院の持ちでありますから、月給はみな自分の自由になりますし、又患者によりましては五十錢とか一圓とか心付けを下さる方もありますので、十五圓も月給を貰へば大抵月十七八圓位にはなるのであります。此の病院には或病人に專屬の看護婦をおかない爲め、彼方此方から貰ふやうになるからであります。

　尤も是は規則に反したことで、たとひ與へる人があつても取つてはいけないことになつて居ります、けれどもそこは人情で、身を愛する爲めに下さるので、頂けば矢張り特に注意するやうにもなります。それが患者へ對して不公平になる原因ですから、全體好くないのでありますから随つてそんな規則も出來たのですが、實際公然の秘密として皆貰つて居るのであります。

△看護婦氣質

　世間には人により看護婦を、一寸變つた意氣な品の好いものと思ふ方もあれば、又看護婦とさへ云へば皆堕落した婦人のやうに思ふ人もあるやうですが、實際白い看護婦服に姿を包み、無造作に束ねた束髪も品よく、上草履の音スツ〳〵と、廊下に風を切つて進む看護婦姿は、一寸意氣にも見えませう、實は初めは私もさう思ひました。また看護婦と云ふ職業が、犠牲的な氣高い職業なのに相違はありません。けれども神の世界でない限りは、表もあれば裏もあります。如何な社會でも其中に入つて見ると、思ひの外な處があるものです。

　多くの中には堕落した看護婦も少くはありますまい。然し私の居りましたは院病私立病院などゝ異つて、取締りも嚴重だし、又多くは此院で養成した看護婦で、他から來た者も熱心家でありますから、風儀は先づ良い方です。

　尤も閑な時廊下に立つて話をするとか、看護婦室で病人の品評が出たり、又は互の身の上話などから移り移つて、時には普通の婦人では此の位の年頃の者の口から漏れぬやうなことが囁かれるとか、或は時に友達の噂の種になる人も稀にはないでもありませんが、因を探れば多くは親しい間の嫉みなどからで、事實らしい事は少いのであります。

△精神病患者

　私は五年の後以前の病院を辭してから、或る精神病院に少しの間居たことがありましたが、此院では又他の病院では見られぬところがあります。

　此院には看護手と云つて、男の患者には男の看護人が付いて、私等は重に婦人の方を勤めますが、立派なお家の令嬢や奥様が、大きな聲で辻褄の合はない歌を唄つたり、片肌脱ぎになつて踊つたり、それは〳〵お痛はしいものであります。

然し他の病院と異つてさう手はかゝりません、尤も怒り出すと大變ですがさもない時は樂でありますそれに死ぬやうな患者は滅多になく、なか〳〵陽氣なものですが餘り下らない患者の仕方を見て居りますと涙がこぼれます。

△慈善病院

其後私はある慈善的な病院に務つて、今現に其院に居りますが、こゝも一方には看護婦を養成しやうと勉めて居りますから、規律もなか〳〵きびしく看護婦の多い割に風儀は良いやうであります。

此院は施療患者が多いので看護婦も他の所と比べると自ら氣位が高くなつてゐます。是は好くはない事で、却つて斯かる患者には同情して一層優しくすべきであるまいかと思はれます、

看護婦の收入も婦人の業としては割合に好い方でありますから、お互に自重して世の惡評に打勝つて行き度いと云ふ、それが私共の常に希望して居るところなのであります。



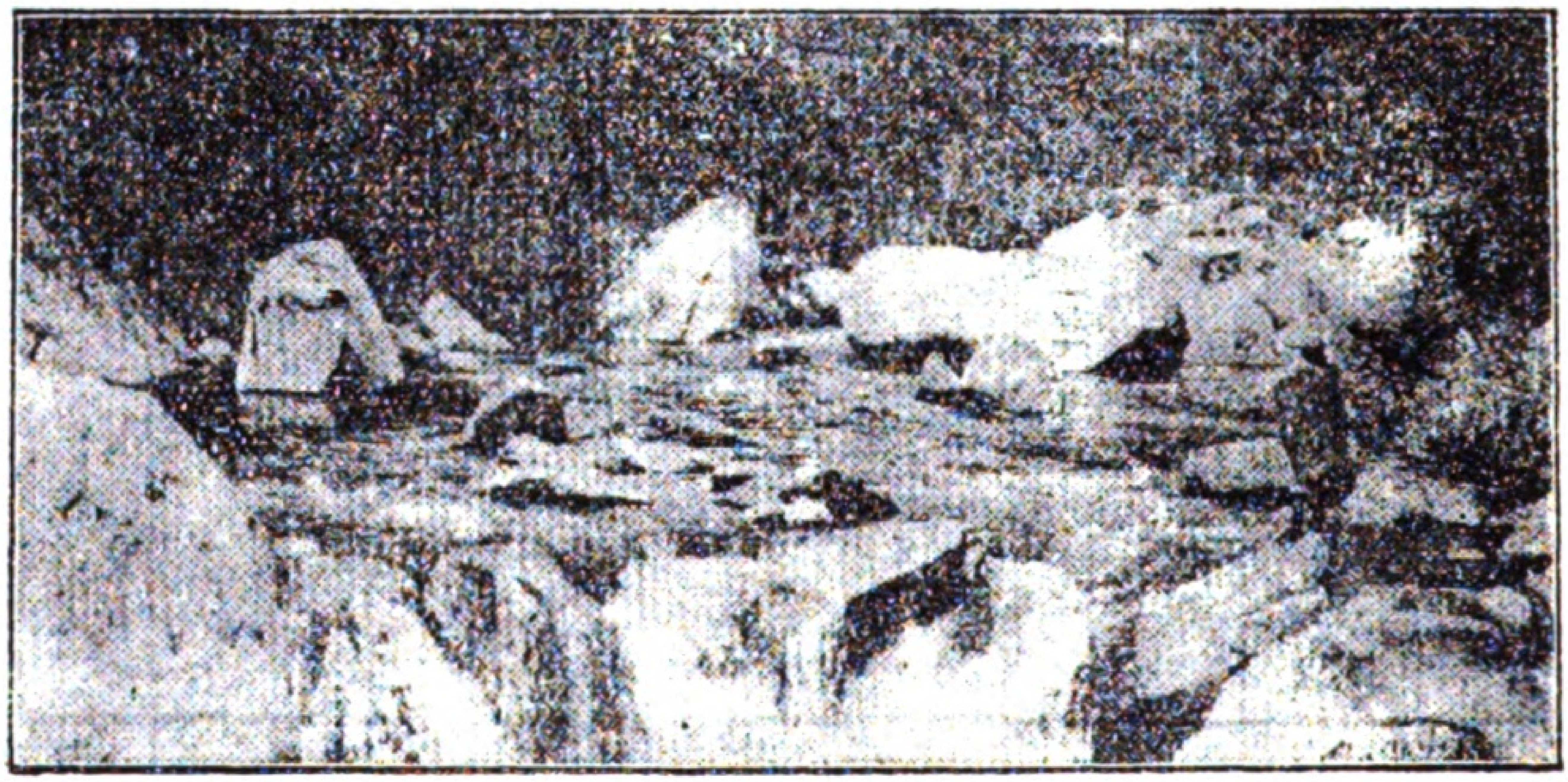
箱根木賀温泉

△幼兒の腦膜炎の注意

近頃腦膜炎に罹る子供が多い、この病氣に罹る子供は一年未滿齒の生えた時分で初生兒や三歳以上になると少くなる、この流行の腦膜炎は胃腸から及ぼすので乳の飲み過ぎか又は菓子や餡などを喰べさせて胃を害うのが原因となつて遂に腦膜炎になる、この病氣には牛乳營養よりも母乳營養の方が多いのは注意すべき點である、初めは子供の機嫌が惡くなり、よく寢たものが眠らないやうになつて癇が亢ぶる、旣にこの時はモウ病氣に罹つてゐるのだ、それから日に三回か五回下痢といふほどでもないが便通があるその便は青味を帶びてゐる、斯うなるとますます機嫌が惡くなつて乳を吐く、嘔吐を頻に催す、遂には乳を飲むと直ぐ吐く、この時は病氣は餘程重くなつてゐるのだ、母親は大抵この時ヤツト氣注いて醫師に診せるのが多い、熱は出る、上目をつかつたり、齒ぎしりをする痙攣を起して來る、かの結核性腦膜炎とは違つて手當を早くさへすれば癒るが、重くなると癒つても痴鈍になる家庭では注意して子供の機嫌の惡い時には早速醫師に診せるのが肝要である。

恥をつゝむこゝろ

何とも申にくき事ながら、御宅の井の水一杯汲ませ給はずやといふは隣の妻なり。そはやすき事なりされど此方も最早大方かわきて、昨日今日底の塵上る樣に成りぬ。只洗ひ給ふのにならば、それにても事は足りなむを汲み給へといへば、喜びて汲みて歸りぬ。其の夜暗まぎれに斷りもなう汲みて行きしは復隣のはしため。あなをかし、此所なるあやしの井戸も俄に貴くなりぬ。屋主がうごめかす鼻のけ憎しやなと笑ひ笑ふ程に井は遂に乾きはてぬ。雪ちら〱と降り來る夕小桶持ちて市の共用栓に行けば、右よりも左よりも持ち來る小桶は此所に集りて忙しき事よ。水冷たくて我も人も米研ぎ菜洗ふ手の赤く腫ればむとせんなし。人の行きかひ暫時も隙なき大路の事こて、うつむく頭の上を車も通り樂隊も通りぬ。かゝるすべなき世渡り、あらはにもするものかと思へば、恥を車塵馬足の間にと讀みし章もふと誦せらるゝ。さて我が故郷の誰やらがいひし言葉思ひ出づれば、俄なる客人ありて湯氣立つ飯櫃持ち出すは・之より品低き事なしと。げにをかし賤が家には白き飯など常日は炊き兼るが多ければ、俄なる客人は打ちまどふ事もあらむ。かゝるきはにては白き冷き飯いざとて進むるが品高きにや。分に從ひて樣々の心用をもするものかな。大凡貧は何の苦しき物にもあらねど、そをあらぬ樣につくらはむとする心づかひによりて樣々の苦しみをするとか。それを思へば俄なる客人に風呂敷持ちて米屋に走ることはありとも、かゝるあらはなる大路に朝夕の物洗ふ身のほどを思へば甲斐なくもをかしや。（さとんくわ）



水碧く石削り立つ青葉かな

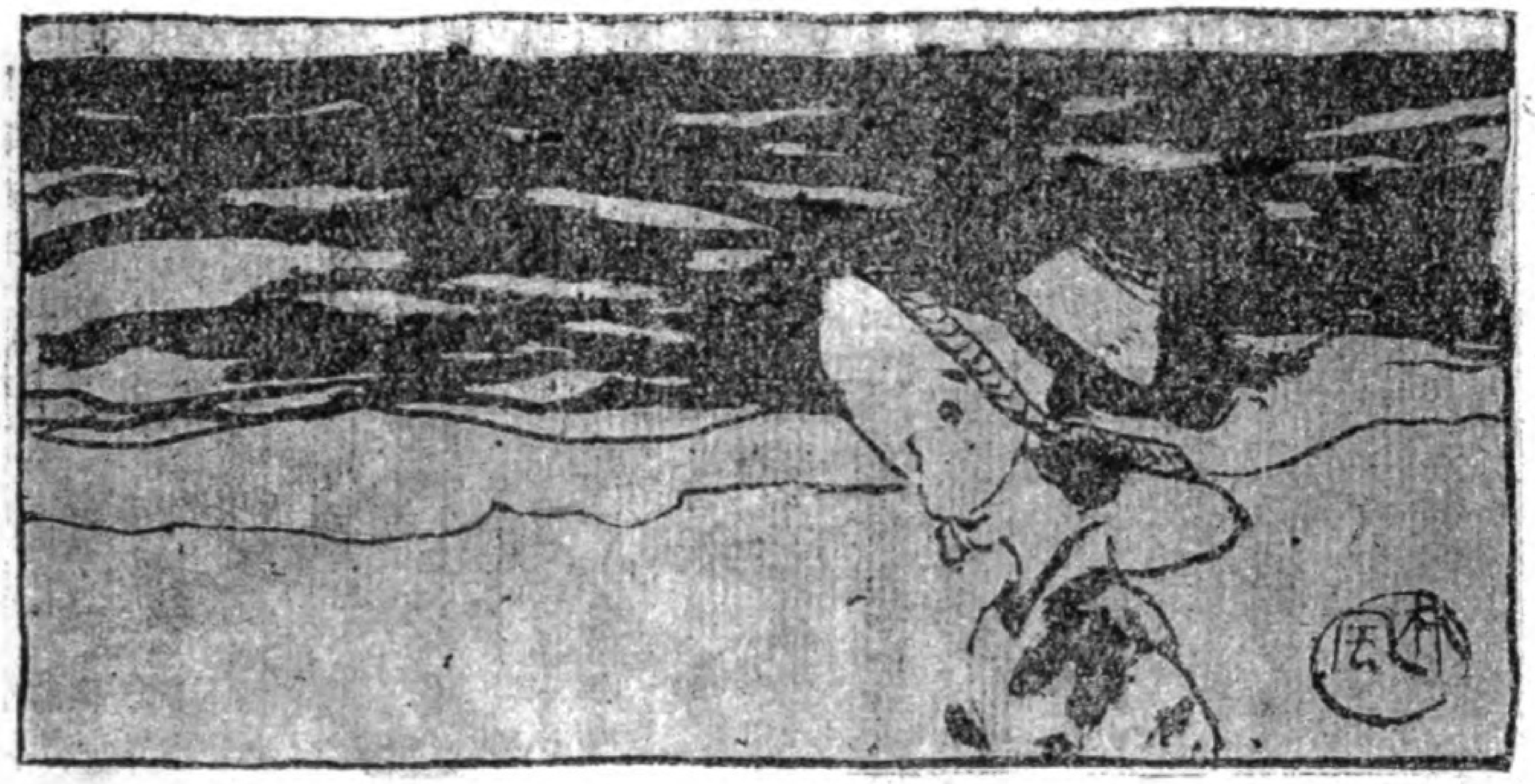
料理食品文盲手引（八）

小泉迂外

△氷水

氷水などゝいふのは、明治に還つてからの飲料品のやうに思はれますが、決してさうではないので、極く古いところでは、仁德天皇の御代に額田の大中彦皇子が鬪鷄野に御幸されて、氷室の氷を取つて天皇に献せられたといふ物語があります。又延喜式によりますと、當時は主水司といふものが設けられて、毎年四月になりますと、山城の葛野郡の德岡、愛宕郡の栗栖野、小野、土坂、賢木原、石前、大和の山邊郡の都可、河内の讃良、近江の志賀郡の都花、丹波の桑田郡の池邊等から氷を運ばせて御氷を献つたので、之の式は九月朔日に閉ぢたといふ事です。又鎌倉時代には富士山の雪を取寄せて氷と同じやうに珍重したと云ふ話もあります。

しかし維新前迄は需用者が一般といふ譯では無く、極く少數の好事家が珍重した位でしたが、明治三四年頃に函館五稜廓の濠の氷を伐り出してから需用者がとみに殖えたのです。



沖雲の紅藍美なり夕泳ぎ

蝦夷早便 **正直氷** 一斤に付金一朱と二百文 半斤より差上申度十斤より卸し仕候

氷の水 一合に付百四十八文

此般資弘め候氷の義は、奥蝦夷開拓の序彼の地は氷厚ふして容易くは解け難し當地は又暖国故解け易し茲に此大暑に冷かなる氷の解けずして其儘を貯る工夫を凝らし早便に任せ取寄せ候間暑中の御慰み旁に彼地の名産御一號の上御用の程偏に奉希上候以上

但し別品氷の水製し賣出し申候

未の五月明日より

日本橋呉服町大野屋

これは當時の引札ですが、現時から思へば、隨分滑稽に感じます。此の函館氷の小旗や玻璃簾のも近頃では又捲き收められて、今度は人造氷と俗に申します製氷會社の氷が價格の廉いので流行致すやうになりました。

一體之の製氷の起原といふのは、印度で、素燒の瀬戸物に水を入れて釣してあつた所、其水の蒸發すると共に底の水が冷えたところから思ひついて、獨逸で此の製氷機械を製つたので、日本では明治十五年にストンブリツツといふ洋人が、築地と大阪川口の二ヶ所に五噸ほどの機械を備へつけたのが最初でした。

現今では築地の製氷會社で十二三噸の機械を使つて暑中といはず、年中製つて貯氷庫に貯へ置き、暑中を待つて賣り出すので、一年の賣上高は平均五十萬貫だといふ話です。



名に古き鵜飼の宿や蘆荻の花

△干瓢

海苔卷の心に用ひます干瓢といふものは、夏の土用に夕顏や瓢等の實をとつて、肉を七八分位宛輪切にして、小刀或は鉋で薄く卷紙のやうに剝き、紐のやうにして、之を高く竿に懸けて乾したもので、地方では、小兒や婦女等が嬉々として遊びながら作るので、芭蕉が、

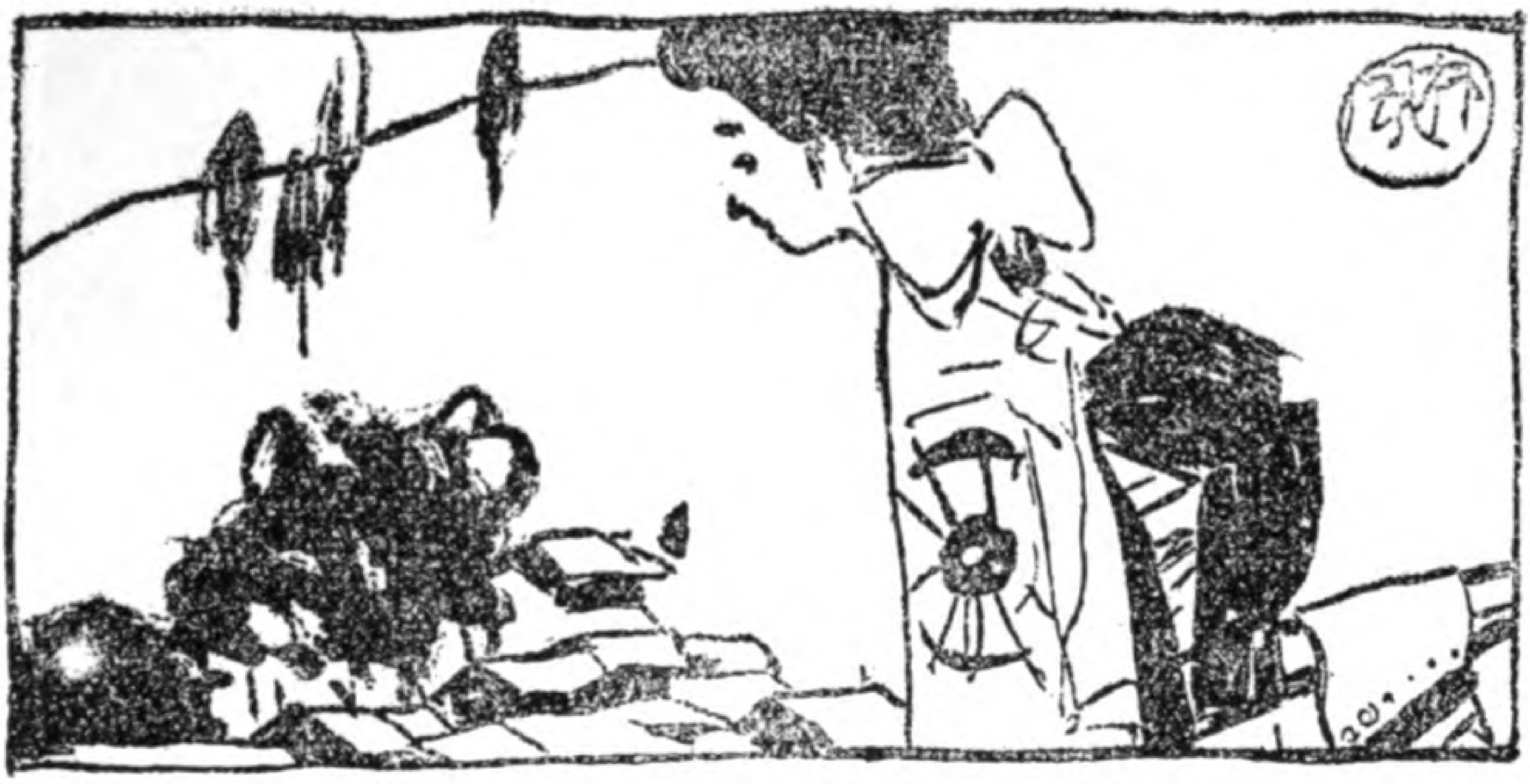
夕顏に干瓢剝いて遊びけり

の句を見ますと、夕顏棚の下に筵を敷きつらねて之をつくる農家の光景がよく現はれて居ります。

それで之れを乾すには、極く天氣のよい時を擇んで一日で乾上げてしまふのが肝心で、曇天などに乾したのは色も赤味を帶びて、味もいたく落ちます。ですから天氣の惡い時は剝いたのを水に浸けて置いて霽天を待つて乾すとよいさうですとは、之れの本場と謳はれて居る野州の人から親しく聞いた實驗談です。

△紫蘇卷

紫蘇には綠色と紫色の二種ございまして、前者を俗に靑紫蘇、後者を赤紫蘇とよんで居ります。どちらも食用にして其香りが美しい處を賞



涼さや塔山かはたれ忍む欄

款致します。

いろ〳〵の料理に應用されます中で、分けて紫蘇巻などゝ申して、之れに唐辛をくるんだ漬物などは、東京人の日常酒飯に缺くべからざる食品で、ちよつと洒落たものです。尤も東京では之れを訛つて、チソ巻と呼んで居ります。

之れは何處の佃煮屋にもございますが、就中今戸の濱金といふ家で賣るのが天下一品と推稱されます。

月の出鹽を待乳山と小唄に殘る、聖天宮の山麓、今戸橋の曲角に蕃椒を交叉した印を染め出した紺暖簾の佃煮屋、所謂淺草名物の濱屋が今日の繁昌を見るに至つたのは頗る奇拔な話が傳はつて居ります。

一體此店の最初は極くさゝやかな、床店やうのものでしたが、先代の主人が如何にもして名代の數に入りたいと心懸けて、玆に素性の知れぬ溺死者一千人を我手で葬つて菩提を弔ふといふ心願を起し、溺死者があると直ちに飛んで行つて屍體を引取り、懇ろに自家の菩提所へ葬つたので、此善行が非常に評判となつて、濱金の名が忽ちの中に江戸中に響き渡り、遂に今のやうに大店となつて、素志も貫けたといふわけです。

△蓴菜



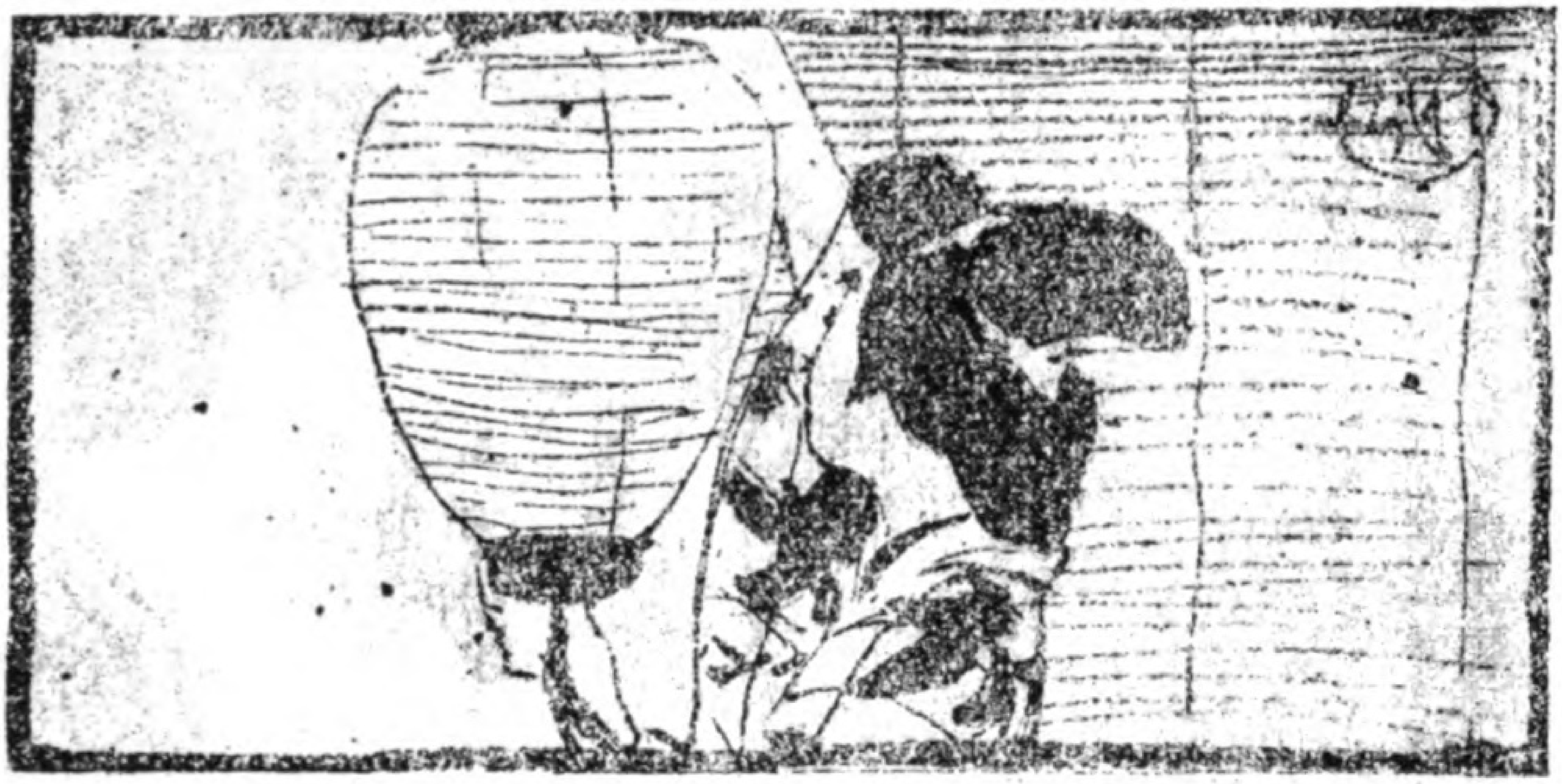
蝙蝠や風蒸せだるき墓地の松

昔、支那ではよい御馳走といふと、きつて蓴菜の羹を倩めたといふ事が彼地の書に記してございます。これは、王武子羊酪を指し陸機に示して曰く、東呉何を以て此に敵せん。對て曰く、千里蓴羹、未下鹽豉。といふ傳説から出たので、北支那の方は寒さが烈しいので濃厚な羊酪が第一の味でございませうが、南清は御存のやうな熱い地方ですから、千里といふ地から出る蓴菜の羹と、未下といふ處でつくる味噌が第一の風味であるといふのを申したのでせう。

日本でも夏季から初秋へかけましては、種々料理に用ゐます。之れは沼で採れますので、ぬめりがあるので婦人方などには氣味が惡いなどゝあまり歡迎はうけませんが、飲酒家などは、却つて之のぬめりの厚いのを賞翫して喰く風がございます。

之れは古い話ですが、京都のある通人連が、朝飯會といふ遊びを企てある夏の朝、寐足ぬ顏を揃へて菩薩ケ池の池畔まで俥を飛ばし、さる百姓家で簡單な田舍料理を喫き、さてそれから、小舟一艘を仕立てゝ菩薩ケ池に浮かばしめ、名物の蓴菜を採らし、之れに砂糖をかけて即坐に箸を下だし趣向がありましたが、之れには一同額を叩いて、幹事の用意に感服したさうです。

蓴菜とる小舟に歌はなかりけり　　蕪村



庭すゞき戰ぐや灯す涼哉

のやうに菩薩ヶ池の蓴菜といへば、日本一の名があるので、有名な巨掠ヶ池のは之れに比して遙かにぬめりが薄いといふ評判です。

△避暑地の菓子

我々が避暑に往つて辟易するのは一番菓子でございます。何れの土地でも先づ砂糖の惡いのにも閉口致しますが、それよりも色彩の毒々しいのと、形の無趣味のには拜見した許りで、とても口にする勇氣が出ません。大磯の虎まんぢう、片瀬の小饅頭、磯邊のカルヽス煎餅等は稍異彩を放つて居りますが、それは地方といふ觀念を頭に置いてからの事で、格別よい味と賞美いたす程のものではございません。さうかとまをして態々餅菓子を東京から取寄せるといふわけには、第一夏季の事ですから腐敗の恐れがあるので、不可能でございます。

かういふ次第ですから避暑にまゐるには、少し面倒でも、どうしても東京から名ある店の西洋菓子を澤山求めてゆくのが得策です。殊に**マシマロー**、**バナヽ**、**フレンチメキスト**、**チヨコレートクーリム**等は第一保存もよく、**チヨコレート**の如きは寒い時ですとクリームが固つて困りますが、夏は溶けてゐるので、頗る結構に喰けます。



夏の露ほろゝ見る草朝日かな

△富士の食物

富士の山上では如何な食品があるのか、定めて不自由だらうなどとは下界の方々の想像される事でせうが、登山して見るとそれ程でもなく、態々種々な食品を携帯して行くと却つて荷厄介になつて失敗致します。近頃は尚便利になつたでせうが、我々が七八年前登山した折の古日記から抄いて見ると雑つと斯うでございます。

△御殿場晩餐　茶碗蒸、鰹雉子焼、隠元胡麻汚。

△太郎坊朝飯　海苔巻、紅生姜（宿屋で作りし物）

△一合目　玉子一個（四錢）茶一杯（五厘）

△二合目　茶一杯。

△四合目　卷湯婆の吸物、佃煮、飯（晝飯也）飯半熟、酒一合取る五勺にて醉ふ價十錢は不廉

△六合目　薄荷玉菓子五個（一錢）團子一本（一錢）茶三杯。

△八合目　宿泊、牛肉罐詰一個（二十五錢）蛤味噌汁、白飯、キリンビール一本（四十錢）

汁や飯は宿泊料の中なれば不知、ビール一本は容易に陟らず、空氣薄き爲め醉盛んに出づ。



風鈴や遊びに來る子まだ見えず

△同　翌朝、名物甘酒一杯（三錢）南瓜味噌汁、飯。

△山頂　何も食ふ勇氣無し、甘酒は水つぽきとの衆評にて止む。

△下り口八台目　玉子一個（五錢）固パン十個（七錢）玉子は登るに從い高價也。パンは安し。

△松の茶屋（山麓）うどん三皿（二錢宛）頗る美味。

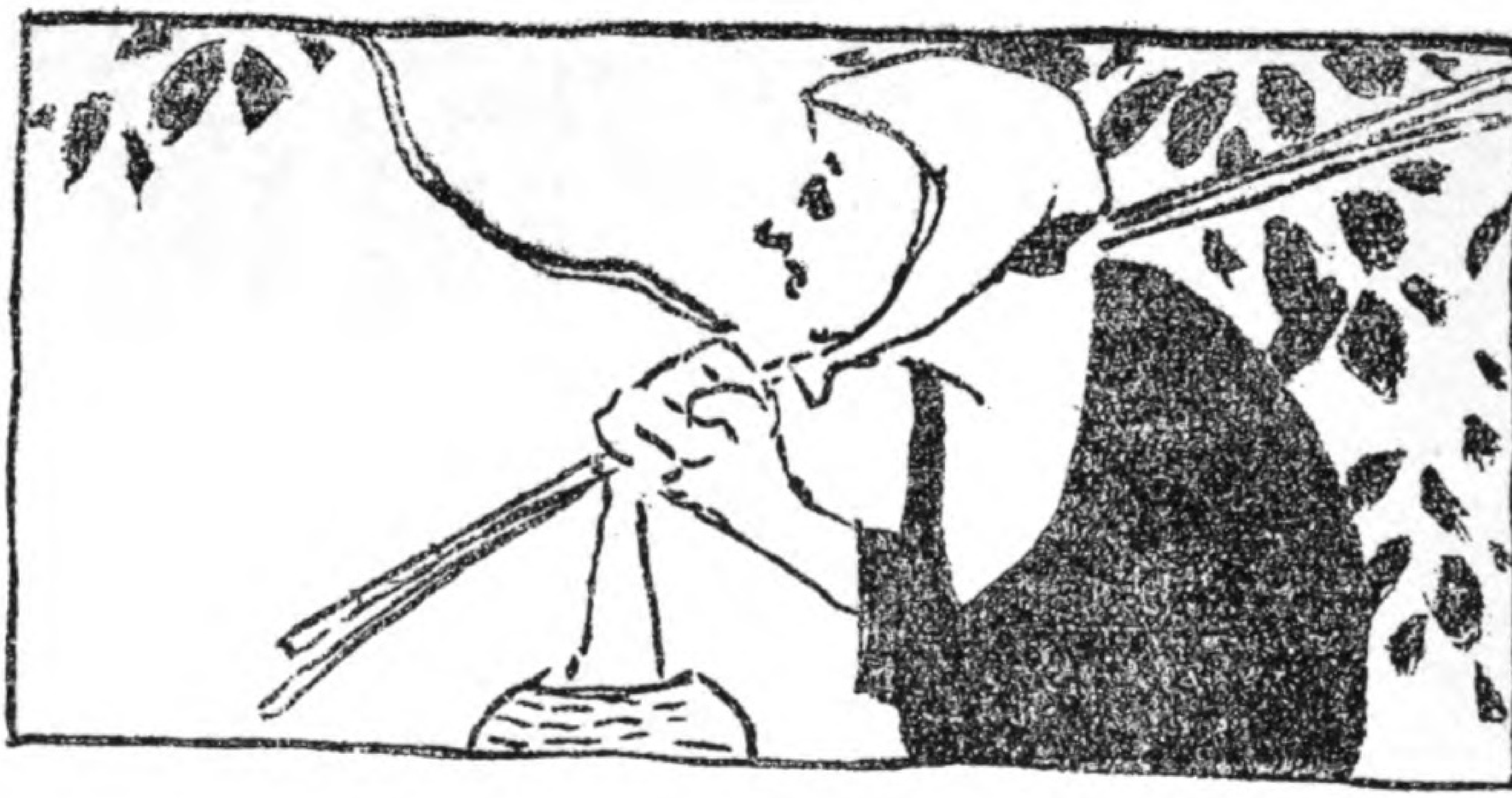
△御殿場夜餐　茶碗蒸、刺身、鯛フライ、オムレツ、胡瓜揉、葡萄酒奈良漬。

オムレツの葱は玉葱無き由にて日本葱なりしには驚きたり。洋食は折ふし歸省中の此家の愛孃が庖刀にて容易に製らぬとの事。皆々幸福を祝ひ合ふ。

△羽二重團子

水鷄啼く根岸は、音無川に沿ふて芋坂の邊り、ゆかりの色の紫を自慢な江戸時代に、藤の茶屋といつてさゝやかな立場茶屋がありました。菜飯と酒のよいのを誇りとして、濟分醬家、文人等がわざ〳〵杖を曳いたものでしたが、明治に入つて主人の好事から更に團子をつくつて賣り出しました。

其團子は普通とやり方を變へ、蒸しては搗き、搗いては蒸すので、膚が緻く、軟く、味が頗るよいので忽ち羽二重團子の評判が擴がつて看板



夕釣れの魚持ら歸る蚊遣哉

の芋坂團子と呼ぶ人はまれでございます。

團子があまり評判なので、遂に菜飯も煮染も廢めて近頃では酒と團子のみになつたやうです。團子屋で酒を賣るぞいぶかしむのは此の譯を御存ないからです。

蕣花、さては蓮花の戻り道などに、少しは廻り途にもなりませうが、滅びゆく此江戸名物の食味を御訪ねになるのも又功德でございませう。

△鴫燒

茄子は料理にも用へば、漬物にも用ゐられて夏の野菜では至極重寶なものです。此れの種類は頗る多く、早く市に上るのは俗に千成茄子と稱へて、形ちは少さうございますけれど、早生種で能き初めると、續々能きます。

嬉しさや鬼灯ほどに初茄子　一　涼菟
手の平に見て居る中や初茄子　一　茶

は此茄子です。

我庭の巾着茄子憎くにくし　一　茶

は形狀が巾着に似てゐる茄子で、煮物に適します。此外に山茄子、靑茄子、長茄子、白茄子、又は支那種の大圓茄子等といふのがありきす。



蚊柱や水汲みに出る裏戸口

茄子の料理には揚げ出し、鴫の子燒、鴫燒などが重に行はれますが就中鴫燒が一般に歡迎されるやうです。此の鴫燒といふのは現今では、京阪でいふ茄子の田樂燒と同じ料理ですが以前は實際に鴫を用ゐたといふ話です。

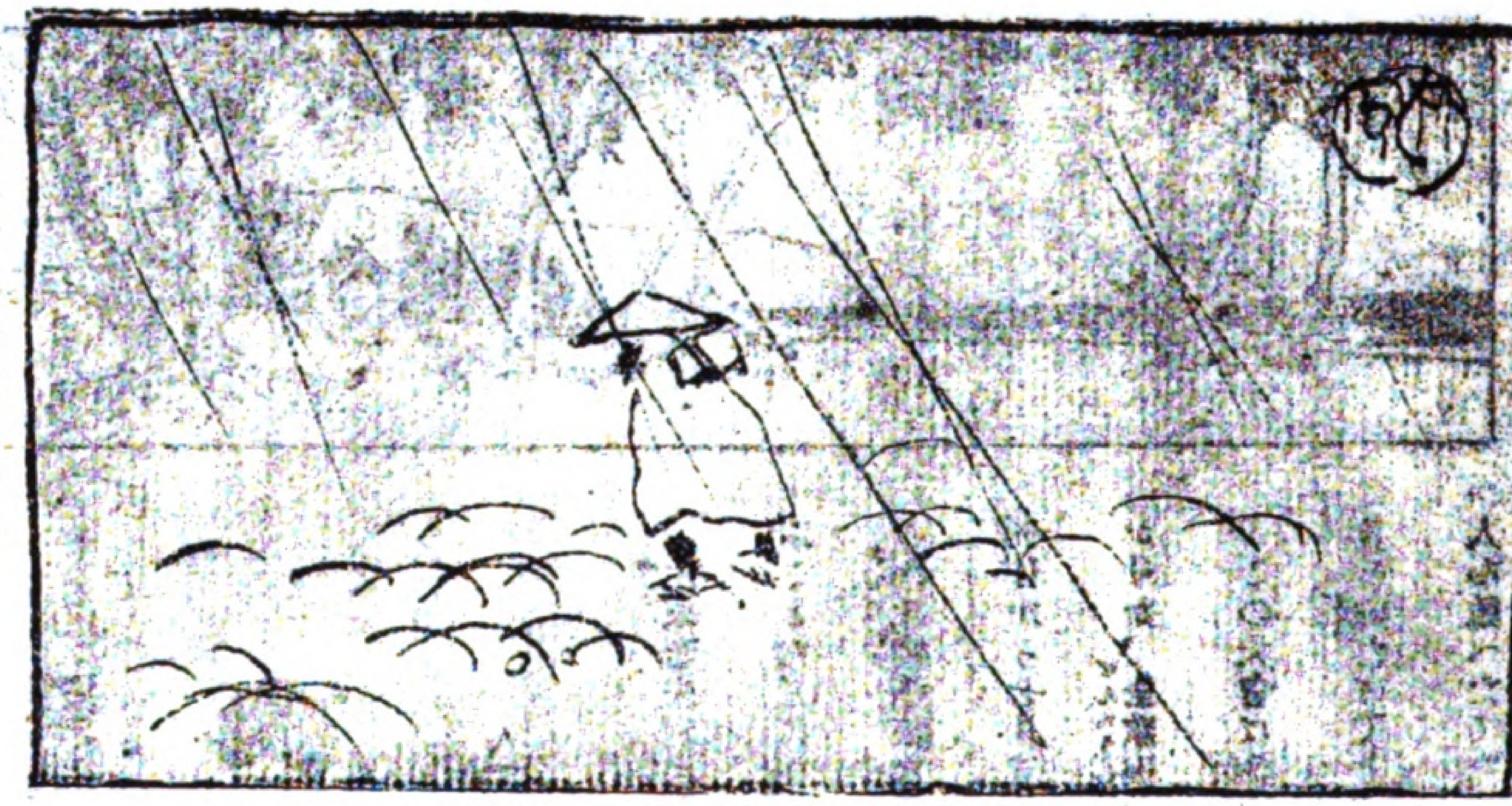
それは茄子の眞中をくり拔いて空として、此中に鴫の肉を納れて、柿の葉で蓋をして、石鍋に酒を入れて煮たのが最も古い仕方で、其次は、生茄子を燒いて、その上に茄子の枝を以て鴫の頭の形造つて出したとも申します。

鴫燒に貧しき瓶の味噌を叱す　　虚子

は、一番新らしいやり法でございませう。

△加茂川の水

昔、京都に阪田藤十郎といふ有名な俳優がありました。ある年大阪へ下つて、その興行中は毎日わざ〳〵飛脚を立つて、加茂川の水を取寄せ喰く前飯は、一粒づゝ選んだ米でなければ承知致しませんでした。其贅澤なる振舞には、大阪の人も皆舌を卷いて驚きました。或る贔負客が、あまりの事に見かねて、其の失費を注意致しましたところ、藤十郎は形を正して、御忠告は寔に有難うございますが、私の身體は高い給



夏野雨晴れて眞近き渚かな

料を貰ふ身體でございます。肌に馴れない他國の水を用ゐて、若しも病にでもならば申譯がございません。米も又砂など入つた米を喰けば、自然歯を損じて、延いて臺詞の調子も惡くなります。それが心苦しいので餘儀なく勿體ない眞似を敢て致すのでございます。ト申たので客は却て其用意の非凡に感じ入つたといふ話です。

又江戸の中村七三郎乃ち少長と申す、名優が京都に乘込み、藤十郎と其技を鬪はした事がありました。其後七三郎が江戸へ歸ると、間もなく藤十郎から送つて來た品がありました。何んだと荷を解くと、

加茂川の水一壺送り候、精々大服にておつかひ被下度候

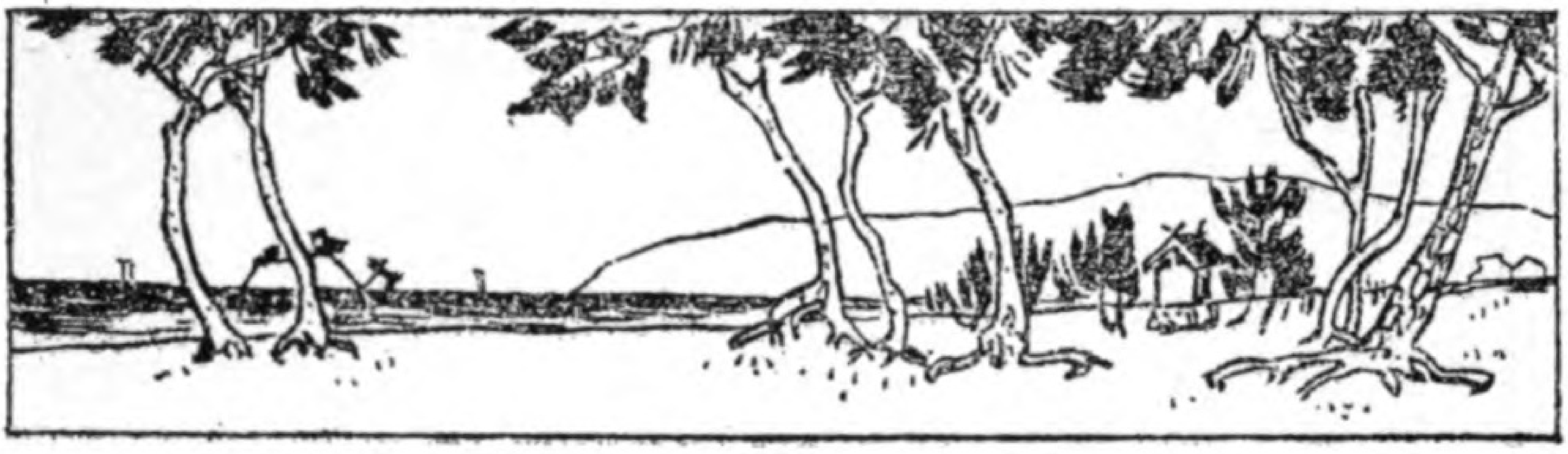
と、水莖の跡もうるはしく、加茂川の水を送つてまゐりました。

七三郎は之れから藤十郎の意氣にいたく感じて、京都で知つた藤十郎は、さまで豪いとは思はなかつたが、遥か隔てゝ、かういふ情緒を見ると、あの人の非凡な事が初めて解つたと申されました。

よく茶人が加茂川の水を江戸の土産にしたといふ話は、全くこの傳説から生じた話でございませう。

土産のこと

贈物のことをみやげと云ふは、參宮の人家に歸りて後、祓箱並びに若海布、青海苔、鰹節、鯣、鰒、編笠、柄杓、貝杓子、などの類を親戚朋友に贈りしより名づけたるものなり。されば土産と書かず宮笥と書くを正しとす。



桑港の婦人大會

——米國婦人の大活動——

△素晴しい人數

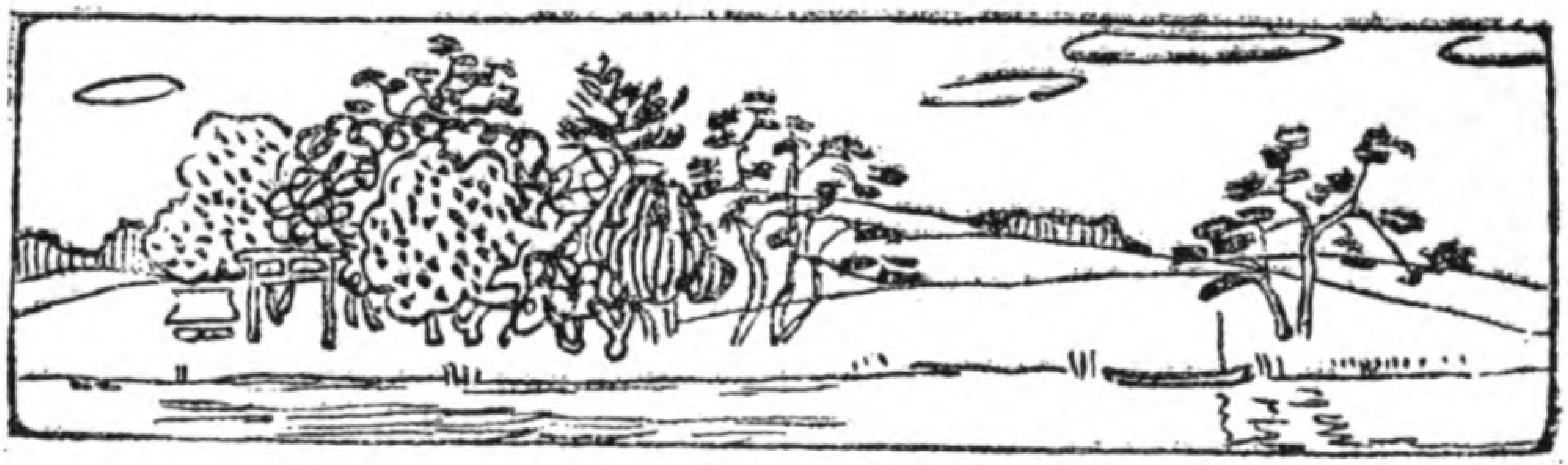
由來亞米利加の婦人は非常に活動的である、男子の言ふことなどに從つて忸怩してゐるものは殆んどない。彼の參政權運動なども隨分久しいものだが、去る六月二十五日から七月五日に亙る婦人大會の如きは、亞米利加ばかりか、全歐洲の政治家でさへ目を欹てたほどである。

この大會は桑港で開催された。各地に散在してゐる委員の數だけでも、驚くなかれ二千有餘人。その他唯の婦人を數へたてたら、何うしても一萬人には下らない。

△會議の事項

會議の事項は澤山ある。婦人參政權問題、萬國平和問題、此等は素より言ふを待たない。その他文學、藝術から兒童保護、公衆衞生に至るまでさまざまの問題があるが、こゝに最も注目すべきは結婚及び離婚問題である。

全體亞米利加では、各州に依つて結婚や離婚の法律が異つてゐる。だから此の異つてゐるのを利用(?)して、或人が細君を離緣したくなると、一旦わざわざ自分の爲めに都合の好い他の州に籍を移して、それから徐ろに離婚をし、而して又離婚の後に又元の州に復籍するのであるが、是れは實に面白くない習慣である。この習慣を打破して米國全體が同じ結婚及び離婚制度を取るやうにと。これが今度の大會の主要な問題であつた。



それから結婚するには、是非とも男女の健康診斷書を提出しなければならぬと云ふのが、これ亦た今度の大會の主要な論題であつた。

△盛んな歡迎會

さて愈々當日になると、會長ムーア夫人、副會長フィラデルフィア市長夫人などは、特別列車を仕立てゝ威風堂々と桑港に乘込む。紐育の婦人連は更に善美を極めた特別列車に搭じて、これ亦た威風堂々と桑港に乘込んだ。

桑港の市民たちは、今度の大會こそ前古無比の盛んなものだから、歡迎會もそれに負けるなと、これ亦た大層な意氣込で、音樂會、講演會、活動寫眞、晩餐會など、さま〳〵な準備をして饗應した。大會の前や其隙間々々に近郊の名勝を探る爲めに多くの自動車、多くの帆船を借切にして、此等の婦人たちを喜ばせたのである。

△傾聽すべき議題

こゝにハイカラ先進國としては、やゝ不思議な位ゐ家庭的な議題があつた。從來米國婦人は女學校を卒業すると、炊事や、裁縫や、室内整理などの家事に關する智識に乏しく、從つて動もすれば此等の事にたづさはることを嫌つて、僅かばかりの賃銀を得る爲めに内職をするやうな傾向があつたが、これは却つて一家の爲めに不幸であり、將來は成るべく家事に關する智識を習得して、出來得るかぎり經濟的に時間を費し、それでも尚ほ餘暇があつたら、内職なり何なり爲ても差支へなからうと云ふのが、婦人大會の一般の輿論であつた。此等は日本の婦人たちも、大に省みるべき點であらうと思はれる。

波斯婦人の生活

前田雪子

△婦人の美貌

ペルシャ婦人の第一に麗はしい點は目に在ると申しますが、實に其通りで、目元の涼しい一瞥人を魅するに足る美人は澤山あります。併しペルシャの婦人は顔の中で外から見えますものは目ばかりですから、隱されてゐる鼻や口元も眼のやうに美しいか何うかはわかりませんけれども、いづれ目の美と釣合つて居るに相違あるまいと推察するのでございます。ペルシア婦人は誠に上手な化粧術を知つて居りまして、一段の美を添へるいろ〳〵の秘傳があるさうです。眉毛などは柳の眉と申したやうに長く延ばしまして顳顬まで下げ、その淡い薄毛の鼻の上部に續いて居りまするなど、なか〳〵美しうございます。

婦人は一般に、中脊の方でありまして、美しいのに上品な相をして居ります。田舍に往きましても婦人が重い物を頭に乘せて靜々と歩く歩行に何となく嚴かな風が見えます。ペルシア婦人の生粹の美しいのは町家の婦人よりも寧ろ田舍の婦人に見受けられます。町家の金持の婦人になりますと、それこそ風にもたへないといふやうな、なよやかな風情はありますけれども、それはペルシャ婦人の特色を失つて居るのであります。



岡山後樂園


夏の酷暑は今!
體の健康を損する時も今
此の時大木五臓圓を服む人は
體力と精力を養ひ勇氣を増す
本舗 東京神田大通鍋町 大阪淡路町堺筋東
大木合名會社
各藥店にあり
NUTRITIOUS TONIC
大木五臓圓
四日量 金三十錢
七日量 金五十錢
十五日量 金一圓
廿四日量 一圓五十錢
▲身體虚弱症…强壮になる
▲病後の衰弱…肥肉させる
▲貧血諸病…血液を増す
▲肺病肋膜…疲勞を回復
▲心臓病諸症…息切を治す
▲産後の疲勞…肥立をよくす
▲痰咳喘息…奇妙に治す
▲ぶら〳〵症…快活にする
▲一般衛生家…病を豫防す

(ろの一)

巖谷小波君著

山中古洞畫伯挿畫　高村眞夫畫伯装幀

小波お伽文庫

明治お伽噺以來、久しく其自作のお伽噺を出さゞりし著者は、今や其多數の作物中、最も得意の物のみを撰拔して、新しく世に問ふことゝはなれり而して第一に現はれしは

洋装四六判
美本◎各册
紙數三百頁

第一册 お伽太閤記

正價四十五錢
郵税六錢

第二册 お伽歌劇

正價郵税共同上

新刊

の二篇にして、前者は有名なる太閤記を、著者一流の筆法によりて、お伽式に書き改め、附するに今太閤、お伽詩篇など東西古今の英雄お伽噺を以てし、後者は艶麗なる筆法を以て春夏秋冬の自然を詩化し、お伽式筆法によりて縱横無盡の變化に富めり、共に彩色石版畫二色刷寫眞版を多く挿入して、錦上更に花を飾る、少年の机上、家庭の書庫に缺く可らざる好册子也

續刊 ● お伽口演 近日發行

東京 博文館 本町

女（るの二）

女子文壇叢書 第壹編

前島優梨子著

町むすめ

八月一日發賣

▲全一冊譜切寸珍美装

正價三拾錢

送料六錢

女性の作物と云ふ事を最も明かに示せるものは前島優梨子の小説となす、優梨子の小説には女性らしき同情あり、女性らしき理解あり、彼女の作れる多くの短篇小説は、其一篇毎に、それ〴〵異りたる人を引きつける力ありて、讀めば讀むほどしみ〴〵と人生の味ひを感得せしむ。世に閨秀作家を以て標榜する者少からずと雖、多くは其名ありて、其實空し、此處に其名は知られずとも、其實力の充實せる若き婦人作家、前島優梨子の處女作を一般の讀書社會に推奬するの機會を得たるは吾人の誇とする處なり。

八年八號 八月號 普通號發行

女子文壇

毎月一回一日發行

定價		
特別號三拾錢	送	二錢
普通號拾五錢		一錢半

本誌は毛色の異つた無類の女學雑誌です若い人達に持て囃されて居ます、論より證據實物御覽下さい

八月一日 初號 發刊

少年少女お伽世界

▲毎月一回一日發行

▲石版寫眞版挿畵頗美

價一冊七錢

送料五厘

價が廉くて、綺麗で爲になつて、面白い、こんな雑誌は外にありません

百聞は一見に如かず、最寄の書店にて實物を御覽下さい。

▲横瀬夜雨先生著

再版

夜雨集

諸新聞高評

全一冊三百卅頁
特製八十錢
並製五十錢
各送料六錢

◎女子美文作法 全

特價二十錢
送料四錢

◎新文章 全

特價拾錢
送一錢五厘

◎娘時代 全

特價拾五錢
送一錢五厘

◎女子遊學便覽 全

特價十五錢
送料四錢

▲佐々木邦先生著

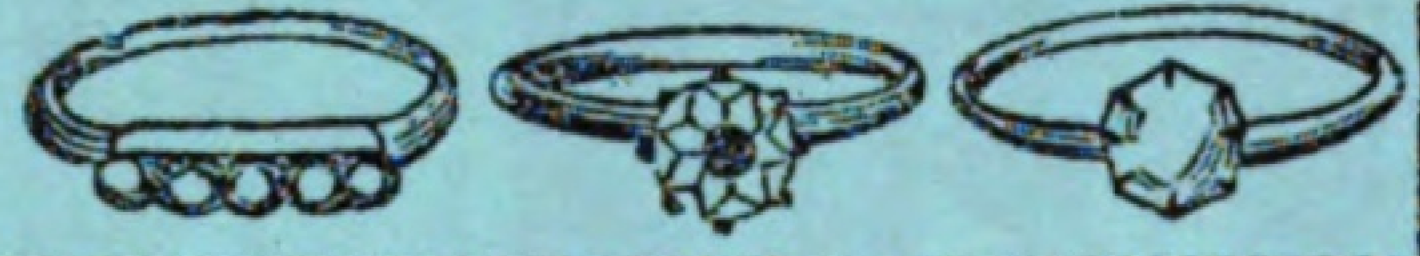
再版

二人やんちゃん

全一冊
武田氏密書數葉
正價卅五錢
送料六錢

女(ろの四)

大流行金メッキ製



壹個參拾五錢 送料三錢 宛

安くてよい指環

これは金メッキ製で模造寶石を入れた指環で、人のはめてゐる所を見ると、どうしても十圓ゝ廿圓も出した眞正の金指環と思ふ程によく出來てゐます。故に東京では只今大流行です。それで大切にすれば二三年間は色も變らず模造寶石も眞物の樣です、今回廣告のため一個三十五錢送料三錢小爲替で送金次第御送り致し升二錢切手なら一割增四十二錢分送れ●形色々あり誰の指にも合ふ樣に出來てゐます

東京神田錦町
錦城學校南隣

小島工場

不龜膏（ふきんかう）

田虫、鼻中のできもの

あたまのできもの、きりきず、やけど、しらくも、すりきず、ひつ、ひぜん其他の皮膚病一切に不思議の妙藥

藥價 廿錢 五十錢 一圓 送四錢

わきがの人に告

弊店主每年夏期は腋臭に罹り種々な藥を持用するも更に効驗なし故に斷念し更に藥化學を應用して新藥を發見し不龜藥と命名す他藥にて根治せざる人は一度不龜藥を試られよ：送料共一劑金壹圓六十錢：別製貳劑金參圓五拾錢

東京麻布笄町五拾四
口座東京七八五〇番

宮崎藥店

東京眼科病院長
ドクトル、メディチーネ 井上豐太郎君著

トラホーム豫防法

トラホームは一種の恐るべき傳染病で、若し其治療を誤る時は、思はぬ大事を惹起さぬとも限らぬ。それには何よりも早期の診斷が肝要である。處が素人は勿論假令醫師でも經驗が乏しいと、往々誤診を下す場合がある。本書の著者は斯界の大家で、よく懇切なる用意を以て、本病の豫防法を說き、且つ特に本病經過に伴ふ眼瞼變化の狀を、一々精巧比なき圖面を以て示すもの新工夫を加味し、素人と雖も容易に其診斷が出來る。決して誇張でも何でもない。少しく衞生思想のある家庭は、恐らくは此書を繼子扱ひせぬことであらう。

全一冊
洋裝四六判
紙數二百二十頁
口繪 一 石版彩色 一 三刷藥
正價三十錢
郵稅六錢

東京本町 **博文館** 振替口座東京二四〇番

女(ろの五)

女ノろの七）



レーベンの特色と効能

—レーベンは常持醫學士の發見に係るものにして米食人たる東洋人種に適合すべく和漢洋法を折衷して得たる植物性の藥物にして「リンサン」の多量に加味せる絶好の良劑なる事は醫學博士岡田、森戸山腦病院長、等の證明による明白なる事實なり。

醫治効用 は回性、興奮、鎮痙の三作用を兼備せる最新式の錠劑なれば腦、神經衰弱、頭痛、眩暈、逆上、便秘、不眠ヒステリー等を治癒し心神爽快元氣旺盛ならしめ殊に陰萎遺精、早漏夢精、生殖器神經衰弱等にて交接不能となり人生の快樂を奪はれて長へに悲歎憂愁の涙に暮るゝの人は皆何れも腦神經衰弱其婦人にありてはヒステリー患者なればなり故に以上記載の其一を患ふる人は最後の試藥としてレーベン百錠乃至二百錠を試みよ其効神速に顯はれて平靜和樂の健康體となり、得も云はれぬ愉快に其日を送る事を得べし・夫の大黄の下劑を主とせる粗藥にあらず、論より證據今直に試みよ

●本病患者には腦神經衰弱自然療法と精神療法とを發行所へ「ハガキ」にて申込次第進上す

定價			
三十錠	三十錢	二百錠	一圓六十錢
五十五錠	五十錢	四百錠	三圓
百錠	八十五錢	八百錠	五圓五十錢

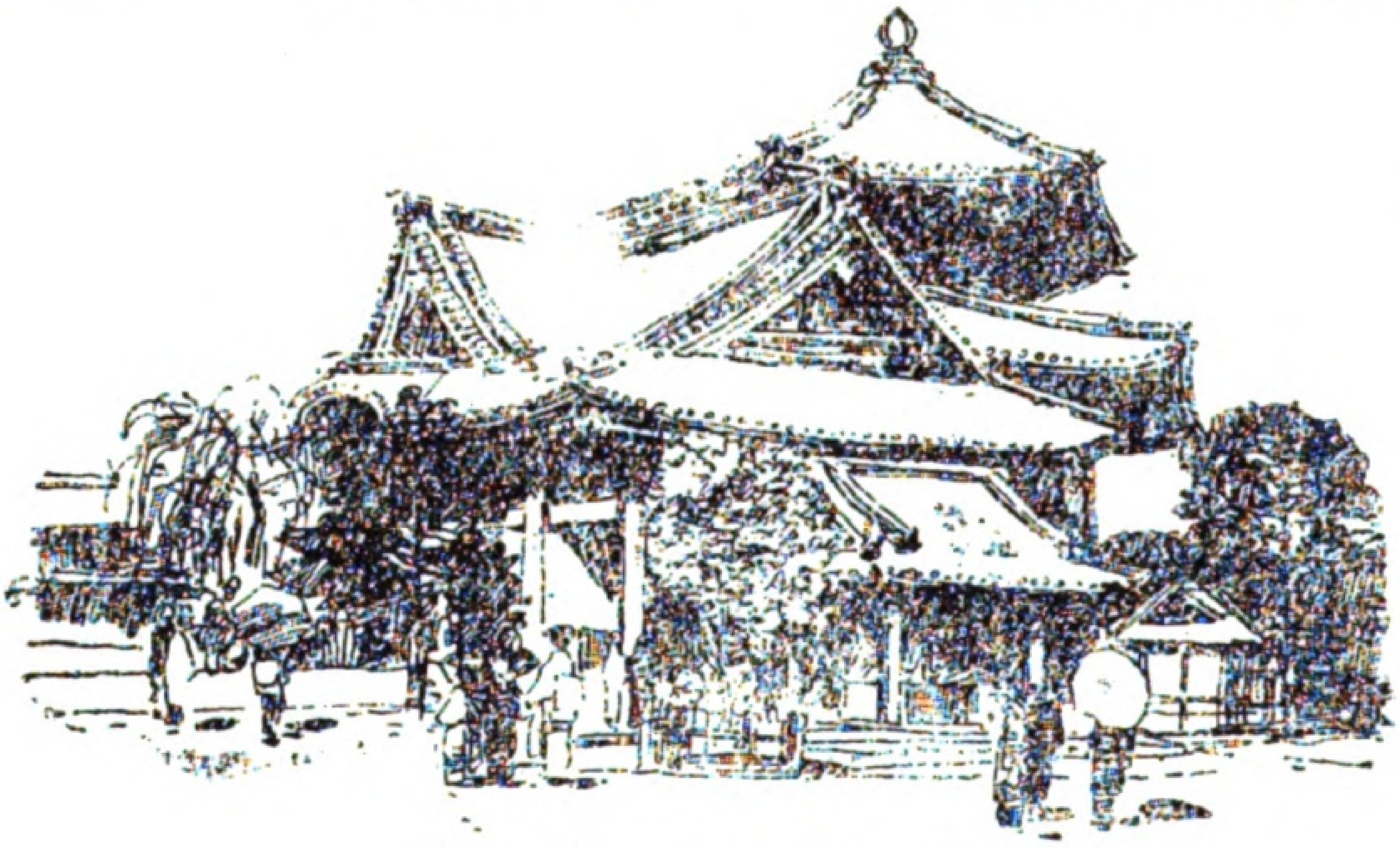
各藥店にあり無ば發行所へ
全國送費無料信用なき藥店
にて他藥を賣付んとす注意

發行所

東京銀座弓町電話京橋三〇八番　振替東京七七七番
大阪市安土町電・東三二四六番　振替大阪三四四番

弘濟藥院
中南定太郎

若い女になりますと顔の色つやが殊の外艶麗で手などは全く白魚を並べたやう、指の先きの爪の生え工合までが何とも云はれぬほど綺麗でございます。けれども一つ遺憾に思はれますのは足で、是れがまあ足かと思はれるほど無恰好でございます。



京都六角堂

髪の毛は染める習慣がありますが、天然の黒髪でも烏の濡れたやうに眞黒で實に美しうございます。貴婦人は髪を分けまして、頰のところに愛嬌毛を下げて居りますところなど、一際目立つて見えます。髪の毛の薄い婦人は入毛をして毛の多いやうに見せますのは、いづくも同じ人情でございます。

ペルシャ婦人は魂がないやうだと申しますが、それは誤りで、コーラン（回教の經典）を見ましても、回教の掟では隨分大なる義務を婦人に負はせて置きますけれど過失などありました場合には責任を半分だけ帶ばしめ、隨て罰を加へますにも、之に應じていたします。

△結婚の習慣

婦人の結婚するのは、どうしても避けることは出來ない宿命と看做して居ります。『シャラ』と云ふ聖書には獨身で暮すのは死ぬよりも惡いと記してあります。ですから、ペルシャには決して老孃と名の付くやうな婦人はありませんが、先方のお金の有無によりまして結婚を取極めますから、イラン地方には花恥しき乙女でありながら、父とも祖父とも見えるやうな男を夫に

して居る者が澤山御座います。これは金によりまして結婚が定りますので、つまり女は金で買はれるも同樣なのでございます。結婚を取極めますのに當人の意見をきくやうなことは餘りいたしません、或る青年の言葉に『吾等はお互に闇夜に手を伸してゐるやうなもので、何が落ちて來るか解りません。』と申しましたが、ペルシヤの結婚は全くそんなもんです。

　ペルシヤには家傳家產を重んずるの風がありますから、家族同志で婚姻を結ぶ風が行はれて居ります。特に從兄弟同志の結婚が多う御座います。けれども再從兄弟は結婚することが出來ません。これは何ういふものですか固く禁じられて居るさうです。

　結婚を取極めるものは重にダルララーと稱する婦人でありまして、ダルララーと云ふのは『道を示す女』と云ふ意味です。これが方々の家庭へ出入しまして、方々に知合を作ることが大層上手でございます。それで年頃の綺麗な娘が見當りますと、金持の息子さんの親のところへ往きまして、娘さんの親の方へ往くやうに勸めます。これが見合の端緒を啓くのでありまして それとなく訪問しまして、直ぐに恁んな話を持出します、『私共はお宅の前を通りましたところが、大層立派なお住宅でございましたから、一寸拜見さして戴きたいと存じて、お伺ひ致しましたのでございます』と云へば、其家の婦人は直ぐと來意を察して了ひますから『善く御立寄り下さいました。』それから漸次話を交はし初め、頓てお茶やお菓子を出します、此時娘さんを呼び出すのですが、娘さんはもう部屋に引込んで居ります。若し娘さんが出て來まして、好ましさうな風を見せますと、話を進めるため、再び訪問することにいたします。而して二度目の訪問には、直ぐとお金の話が持出されまして、算盤づくめで結婚が取極められるので御座います。

　男は幾ら許嫁の娘だからとて、結婚をして了はなければ、女の顏を見ることの出來ない規則です。けれども實際は例のダルララーの媒介の勞を取りまして、許嫁の娘を未來の家に伴れて參りますから、夫となる人

は屏風の蔭へ隠れて、其の娘を見て、同情があるかないかを知ることが出來ます。

　結婚式の日時を知らせますには、左の如き文句の手紙を以て知らせてやります。

「吾等は聖使徒の保護の下に、吾子の慶事を執行致度存候間、何卒嫁の父母の家に御光來被下度願上候、粗末なる茶菓差上度存居候」

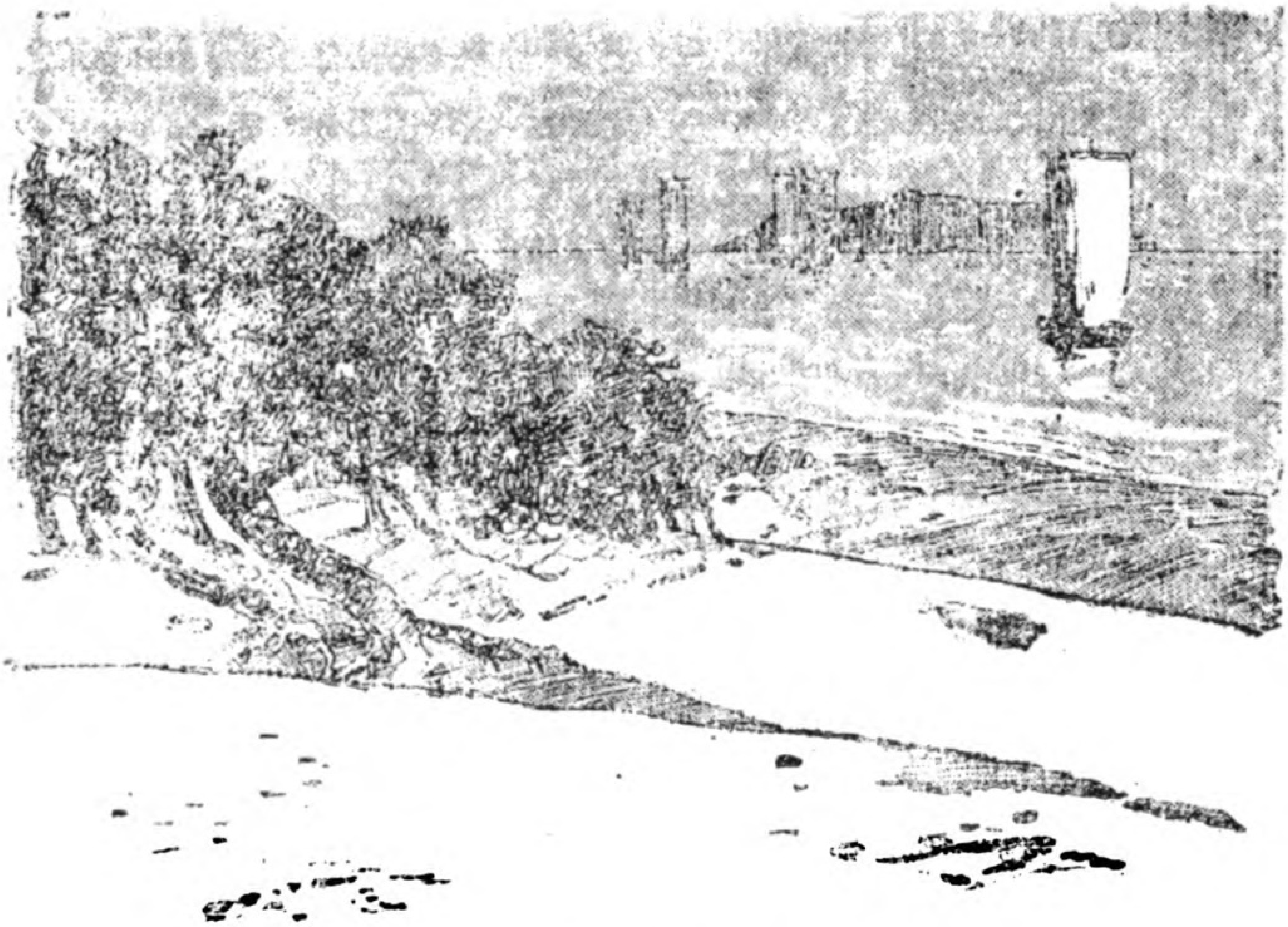
　結婚は嫁と婿との權利を回敎僧が代表して行ひます是れは嫁の居ないところに行ふのです。回敎僧の出て行きましてからは、婿は嫁の居る婦人室に這入つて往きます。其時お金にお菓子を添へてお嫁さんに出すのです。

△離緣の風習

　夫婦になりましてから、嫁は暫く姑に仕へて居りまして、家政の事は一切姑が敎へてくれます「コーラン」によりますると、夫は本妻でも奴隷の如くに打擲る權利が御座います。若し夫が氣に濟まぬことがありますれば、離緣することも出來ます。離緣致しますにも別に六ケ敷い事はありません。證人の前でアラビア語で三度「エンチ、タレコウン」と唱へれば可いのです。是れは「我れ汝を離緣す」と云ふ意味で、此の言葉を唱へますや否や、妻は面紗を被つて自分の部屋に引込んで居りまして、一ケ月經過てから、夫の家から出て往きます。

　ペルシヤでは夫は一種の特權を持つて居りまして、自分の離緣しました妻を再び呼戻すことが出來ますけれども、妙な事には、其間に一旦他の女と結婚しなければなりません。斯う申しますと離緣は甚に容易なやうですけれども、實際はあまり離緣沙汰が御座いませんのは、離緣の場合には、結婚の際、若し離緣の場合に贈ることに契約しました金額を渡さなければならないからです。

　一方には妻の方でも夫と離婚する權利があります。此の場合には數區の回敎僧を尋ねて行きまして、苦情の理由を述べ、靴の裏革をひッくりかへして、文句を



播州舞子の濱

唱へるのですが、其時には、夫は嫁の所持金を取り上げて、妻を一文もなしにして出て行く儘に任せるのでございます。

△子供の誕生

子供の誕生は、非常にお目出度い事といたして居りますが、その命名式が亦非常に面白うございます。此日父は、坊さんや老人達を招待して御馳走をします。其時赤兒を布に包みまして、來賓の眞中へ持つて來まして、地上に臥かして置きます、夫から五枚の紙片に五ツの名前を記しまして、それをコーランの間に挾みコーランの第一章を讀んで、五枚の中の一枚を引き出しまして、それに書いてあつた名を子供の名とするのでございます。

ペルシヤでは男の子の生れるのをお目出度いとして居ますが女の子の生れるのを不吉のやうに看做して居りますが、中には女の子が生れましても、『是れも神樣の賜であるから、先づ難有いと思はなければならない』

と云つて居るものもあります。上流社會に於きましては決して妻のことを話しません。若し自分の妻のことを話さなければならない場合がありますれば、いつも其の子供の名前の方から、アリの母とか、イブヲヒンの母とか云つて居ります。

△婦人の刑罰

大罪を犯しました婦人の刑罰に就きましては、恐ろしくもまた面白い話がございます。これはシラーズ附近に行はれるのでありまして、サアヂ及びハヒズと云ふ詩人の墓から程遠からぬところに、底知れぬ深い井戸があります。其の井戸に罪を犯しました婦人を生きながら投込むのです。數年前にも罰せられた婦人が一人ありましたが、今迄誇りの一ッとして居りました髪の毛を抜きまして、驢馬に後向きに乗せまして、故と面被を取つて了ひます。これはペルシヤの婦人に取りましては此上もない恥なのでございます。驢馬は赤い着物を着た刑吏が引き、歌舞の藝人が周圍を取巻きま



長崎高鉾島

して、大勢の人が後から從て往きます。山の麓に着きましてから、驢馬から婦人をおろし、殆ど引きずるやうにして井戸まで伴れて往き、其處で手を後に縛りまして、井戸端に坐らせ、「神の外神なし、マホメットは神の使徒なり」と云ふ經文を唱へさせまして、それが終りますや否や、刑吏は近づきまして、婦人を底知れぬ井戸の内に突落すのです。

町家の婦人生活は茶菓を喫したり、香水をつけたりするのが、終日の役目で、知識の修養などそんな事には一向頓着致しませんから、土地の諺にも「婦人は髪の毛は長けれども、智識短し」と申します。併し田舎では之と違ひまして、耕作業でも婦人が夫を助けて働きますから、田舎の婦人は町の婦人よりも夫に敬はれて居ります。

ペルシャ婦人は、時々旅行いたしますが多分は巡禮に參るので、王妃などは「タクトイラワン」と云ふ轎に乘つて往きます、これは一種の昇床のやうなものですが、驢馬又は騾馬が昇ぎます。中流の婦人は蓋があつて、幕のかゝつてゐる籠に乘り、下等の婦人は蓋も幕もない籠に乘り、田舎の婦人は驢馬又は馬に跨りて旅行致します。

美人に育てる法

一米國研究家の説く所によると、小兒の面貌と云ふものは、其食物の具合によりて非常に變化するもので、食物に注意なすれば普通の容貌を持つて居る子供でも、成人の後非常に美しくなるやうにすることが出來るといふことである。ところで其研究に依ると、顎の大きい顔の形の大き過ぎる小兒に對しては、澱粉の多い食物を與ふることを避くべく之に反して、顔の恰好の小さきに過ぎて顎の細つた兒童に對しては、澱粉の多い食物を與ふることとすると非常に顔の恰好を美くすることが出來る、委しく云ふと前に述べた樣な人には米、馬鈴薯、若くは白麪麭の類を節して、其代りに肉類及び天然に食鹽を含むこと多い野菜の如き含鹽食物を多量に食べさせることにすると、第一に骨格が丈夫になつて、從つて顔の恰好もよくなるのであるが、其代り後に述べた如き小兒に對しては其反對の食物を與ふることに注意すれば、これもまた自然に面貌をして美しくせしむることが出來ると云ふので有る。

鎌倉の避暑先より

白鷗

△

鎌倉にはいち早く夏が來ました。

草を踏めば緑の匂ひ、土を踏めば土の軟かい匂ひがします。すべてもの逞しい漲り香のうちに夏はめぐつて來ました。天地は崇高なかをり高い呼吸をしてをります。實に、姿見の鏡をみがいたやうな明かな夏、よろこび多き夏よ。

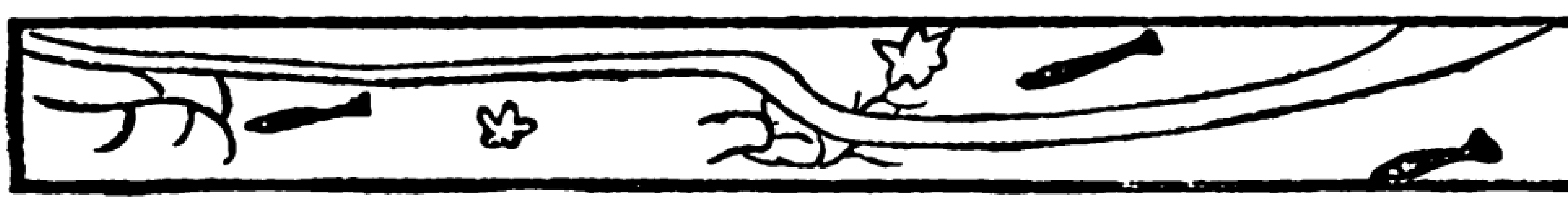
十里の彼方にとぶ白鳥をも見られる様な青い空に日光は充ちてをります。鎌倉旅館の主人の土培ふとナシンスも、白い梢も香ぐはしい眸をあげて夏に對うてゐます。

△

夏はきぬ相模の海の南風にわが心もゆわがひとみ燃ゆ

松林の隙よりみゆる朝の停車場は、何時もフレシユな感じを人々に與へます。小さな柳行李を手にして、私どもも五六日前の朝この鎌倉の避暑客となりました。タロスプリツナを渡る白い浴衣も水色のパラソルも、歡喜みちみちてゐます。茅ケ崎の南湖院は白堊を松林の中にみせ、相模川は朝暮の薄霧の中を漾ぎと、平和な色を見せて流れてゐます。夏はデリケートな色彩と崇高な力とを齎らしてきました。見よ、渾脊の海は紺碧となり、八重の潮路をゆきかへる白鳥の翅も翻然と輝き、潮の濱鳴もあざやかに旅人の胸に響いて來ます。

鮮かな色彩、崇高な力、私たちが弱き者も心強く夏を意識します。海に對へば、空に向へば、あゝ、心が雀躍します。人々の眼も夏の姿をみて燃えたつやうに活氣づきました。



△

鶴ケ岡八幡宮の石段の十級にして疲れたる人

鎌倉山に、英雄千古の骨朽ちて、古墳のあたり青苔のかなしく蒸す。頼朝の墓前に頸垂れ、土牢のほとりに立ちて緋牡丹の如かりし往古をおもひふける——とある夕暮、

君は青葉を脣にあてゝ心なげに鳴らしたまへど、わが想ひは徒らにみだる。

しづやしづしづのをだまき繰りかへしと靜の前、こゝに涙ながら舞へりきと云ふ朱の舞殿、今はたゞ潮風の中にうち默す。あはれ、綺羅星の如く並びたる幾百の鎧武者も、峯のしら雪ふみ分けて入りにし人戀しさの情には何の價もせざりし。

まにあれ、昔をいまになすよしもなくて、常世にくもがくりにし義經公、別れ〳〵の東と北果ては國へ〳〵て世を終へたりけむことの心哀しくおもひなりて、ひとり涙に濡れたる我を不審し氣に君來よと呼び給ふ。手をとられて八幡宮の階段を傳

ふ。一段二段……すでに十を數ふるに及びて甲斐なくも疲れてぬ。君、誰なしとも思召しけむ。微笑みながら立ちて、大銀杏をながめ給ふ。夕日は黄いろく大樹の木精を染めて、松風のみぞうす寒く吹く。

△

鎌倉やみ佛なれど釋迦牟尼は美男におはす夏木立かな

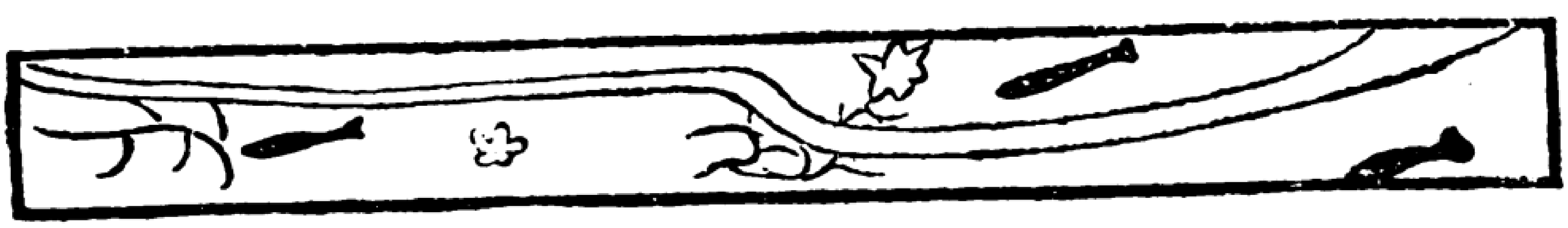
櫛風沐雨幾百年、淋しく露座しておはす釋迦牟尼よ。明くれば曉のひかりは、おん背後を照らし、暮るれば夕月の光、青白くわん眉をながる……

古風な鎌倉の建物に相應しい五丈のみ姿は、夏になつて一層目立つて、輪廓がはつきりして來ました。敷石をつたつてゆく濱ひるの青葉がくれに、白つゝじがちらく見える。それを背景にして濃い陰影を曳いて大佛はおはす。眉のあたりには周圍の青葉が反射してゐます。そして大が奥床しく釋迦牟尼をみせてをります。

夏の帶いさごのうへになが／＼と解きてかこちぬ身さへ細ると

△

鎌倉の海は紺碧をたゝへて、白波は水平線の彼方から、七里ヶ濱へきては、我とわが波頭を投げます。そして碎けては水煙をつくり、また歸つては寄せる……



私は、海鳥を見送つてゐたが、ふと沙丘のうへに立ちあがりました。よろ／＼と輕い眩暈を覺え作ら、黄昏の赤い太陽を仰ぎました。そして髮をも、亂れた襟をもとりつくろうて帶をもしめ直さうとしました。氣だるい氣分はわが汗ばんだ全身を領じて、何處へも重いものを。まして長い／＼女帶のおもさ。あゝ、わが身は痩するばかりよ！

△

月なき夜頃、宿の者に案内されて、君とそこゝにゆく、かはたれのうす闇にとほく響きくる潮鳴りをきゝつゝ心淋しくなりて、君に倚り添ひ歩く。

滑川を越ゆ。宿の者、川風の中を提灯ふりつゝ先にたつ。君は星をながめつゝ、例の青葉の笛。われはひとり歌を低聲に誦す。

滑川こすと君は天の川しるしといひてあふぎけるかな

片瀨、腰越のあたり、古船にまつはれる潮の濕り香たかく、喪服のごとき海草、星光に黑々とうち上げられし沙濱うらがなし。

漁家の蚊やり火の烟ただよふ松並木路をかへりゆく裸馬も遲きふかし。

宿の者は大山詣りの生れらしく、提灯をふりつゝ手眞似口眞似もて物語る。君は煙草くゆらしつゝ面白げにそなさく。彼の者

頼朝の死因に、相模川渡しの時、落ちきの悩しみを受けて、故郷に移されし時の傷なることなくして、といふ。大山の頂の阿夫利神社に雨乞ひの社なりとふく、金槐集の「ときによりすぐれば民の嘆きなり」といふ雨乞ひ歌あれば、實朝も大山に登りて雨乞ひやせし。

我しうちまどり語りりくほどに、とほく大山山脈を望む彼の若にかしこに燃ゆるは何ごと問へば「山火事」なりと答ふ。げに山火事よ。

さねさし相模の小野にもゆる火の火中にたちてとひし君はも

ふとこの古歌、わが腦に衝きていでぬ。夏の夜の風はいと冷やかに衣服に沁む。

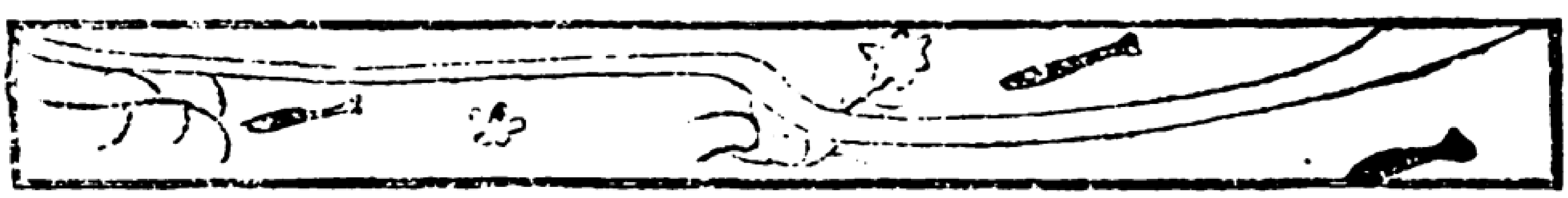
△

月の明かな宵い夜でありました。旅館の燈下に東京の人々への消息を心うれしく書いてゐると、窓の玻璃戸に青葉の枝が觸れて、外へ來よと誘ふやうにも顔にせます。

外へ出ますと、八重の潮路にうつろふ月影は、くらげの様にうすく見えます。そゞろ歩きの人々の白い浴衣姿も、夏のかたりが高いやうにおもはれます。海鳴りと松風と共鳴する濱べの松並木の下へ何時か來ました。

鎌倉の由井ヶ濱べの松もきけ君とわれとはあひおもふ人

潮鳴たかきかゝる夜、人戀しさの心にたへやらず晶子さんは歌



つたのでせう。こゝ鎌倉の由井ヶ濱べの松も聞けよ、君と我とは相思の仲らひで、われらは天を仰ぎ地を俯して誇るべき戀のふなげぞ！

由井ヶ濱べの松は、澄つた鏡な月明の下に寢ほせて、夜もすがら潮風をほしいまゝにしてをります。

△

宮柱ふとしきたてゝよろづ代にいまぞ榮えん鎌倉の里　　實朝

治承の往古、征夷大將軍源頼朝の築いた幕府の跡も夢の跡、今は兵ども夏草のかげに眠り、時々、農人の鍬鋤に觸れて、淺間しき髑髏を見す。權五郎の手なしも、影元の才略も今はむなしく、天日は復すに術なくなりました。たゞ星月夜の井戸の底しれぬ悲哀をたゝへて鎌倉町は一塊の古蹟となつて仕舞ひました。實朝が歌つた宮柱も甲斐なく、今は避暑地となつて榮えるのでありませう。

△

いま午前の日光が照つてゐる濱邊、緋のネグリジイの西洋人が通ります。お友達に私の歌を一首お目にかけませう。

鎌倉の由井ヶ濱べに夕されば湖をかなしみ海鳥の啼く。

けふは私ひとりで、隣にまかせて書きつけました。ニコライの鐘をおもひつゝ鎌倉旅館より。さやうなら。

田舍住の娘の日記

夕はし

軽い鼾を立てゝつと蚊帳をくゞりぬけ、ほぐれた束髪を留めてゐると、表を朝早くから珍らしく人力車が轍の音騒がしく馳けて去つた。

庖廚から茶の間を通りぬけていらしつた母様は蚊帳のつり手を外しながら、

「あなた、もう郡長さんがお出でなすつたやうでございますよ。」

「ウム、何時だ。」

今まで快よくおよつてらしつた父様は發作的に眼をみひらく。

「五時一寸過たところでございます。郡長さん大變几帳面にお出でなすつたのですね、着物はどれを召していらつしやいますか。」

と母様は外し終つた蚊帳を床の間へよつた間へやつて簞笥の抽出しをお開けになる。

では先刻の人力車は郡長さまのおん出でか、昨夜、明朝六時までに耕地整理の區畫檢分に郡長が來る筈になつてますからその時は、唯お顔出し丈でも願ひたいから承知してゝくれるやうにつて、役場から小使が來たのは知つてゐるけれど……。

やがて小松屋が休憩所になつてゐるのか、小松屋の女が、お支度が出來ましたらお出で下さいつて迎ひに來た。

白薩摩に縞絽の羽織、パナマの帽子に白足袋の扮裝は、これ好箇の田紳模型それでも、氣障の中心たる白縮緬に絡まる金ピカ時計は流石にいたしませんのよ、寢卷の浴衣へメリンスの細帯をお貝の口に裾を端折つて洗濯をはじめる。庖廚では俎板の音が忙しい。母様また茄子味噌をこしらへてゐらつしやいますのよ、早稲茄子でも晩茄子でも大きさうなところを、御飯炊く時に、おへつついの下に入れて、好い加減に燒けたのを皮を剝いて、お味噌を少し交せて叩きますの、四

五日は毎朝お甘し、戴いたけれどもう骨節は、飽き飽きしてしまつた。皮肉を知らない人に物を云ふやうなものつ！ お歯應へがないんですもの。

弟の紺絣を一枚洗つたから、ヴェナス山のところがヒリ／＼する皮がむけたの、だつて今年十五の腕白盛り、冒険世界の愛讀者で、手におへないんです。潮風さんの崇拜者で、二た言目には、もう、「何だッ軟體動物！—ッ、」と、はや鐵拳落下しかねまじき猛烈さ加減、母様だつてかなうものですか、十人の姉弟で末つ子の男子と來てゐるのでせう。本卦返りの父様は可愛くつて／＼いが栗頭でもなめて了ひたいつて風がありありと見えますの、かうなんです。東京の新聞はその日の正午に配達されます。來るとお預けを許された狗のやうに、父様、母様、弟と夕ほしと、朝日と報知を一枚宛分配になる。



その時の騒ぎ、夕刊を見てしまつた弟は早く佛佐吉がみたくつて堪らない。突然父様のみてらつしやるのを引つたくつてしまふそれでも父様はたゞ眼鏡越しに笑つてらつしやるばかり、ほんとうに憎らしくつて胸がムカ／＼します。

ヒリ／＼するのを我慢してとう／＼自分の浴衣と父様の肌襦袢二枚洗濯してしまつた。竹垣の間から朝の紅が仄に洩れて、泡立つたたらひの水が恐しく濁れて

みえる、弟も起きたとみえて、カラリと開け放たれた二階の窓、白い窓掛がハタ〳〵と鳴る。此間女子文壇から切り拔いて貼つた壁の、「濤の音」弟が、よせそんな繪を、つて怒つたのを拜み倒して巧く說き付けた女の强烈な脣の赤が、クリーム色の壁に、鮮かに、窓掛けにみえ隱れしてゐる。

「草ちやんお茶を飮まないか、御飯にしませう、オ、洗ひましたね。」

と、絞つたまゝ竿にかけたのを御覽になつて母樣は緣側からお呼びになる。

「エ、御馳走さま、只今。」

水垢が溜つたのか、こし水がなか〳〵出ない。井戸から汲んだ儘では鐵分を含んでゐるのでせう。赤土色して白い衣などとしては洗濯が出來ません。いたせば一度でもう醬油で煮しめたやうな色になつてしまひますの。

御飯後と思つてそのまゝ食卓へ座つてしまつた。

六時半の逢原通ひのガタ馬車が合圖の喇叭威勢よく風を切つて行く、格子から後向きになつて覗いてゐると、多い髮毛の前がみを引きつめた相變らずホクロのある口元の可愛い〻……あゝお雪さん。

「母さんお雪さんよ。」

お箸を投げ出して、黑い門の小さいくゞりから、まろぶやうに表へ立つた。一人しか乘つてゐないガタ馬車はもう一町ほど先の吳服屋の前、白いおもわ微かにくづれた。重い瞼へ袂をやつて、御機嫌よう！　と口の中に。

淚に曇つた瞳には、紫紺のお袴も、縞モスリンも支離滅裂。

「あゝあ、お雪さん！」

馬車は駐在所から左へ折れる、露にしめつた縣道は晝の暑さも知らぬげに、朝霧に包まれし綠の遠山は、限りも知れぬ姿見にすつきりと浮いて、巨人のやうな白い雲が一團、悠々と東へ東へ……。

九月から逢原の小學校へ轉任になりますの、とお手紙いたゞいたきり、何所の講習、此所の講演と三十日

の休暇を、常には、イロハから、上は十二三の生徒を相手の教師には進んだ修養は滿足に得られない……ため、人は海に山に體育養成とかに、遙る〲御出張あそばすものを。三年を九圓の鐵鎖に繋がれた十九のお雪さん、でも來春はお目出度うございますわ、約婚の君は師範の二部をお出になるし、未來の小學校長の夫人。

前途の希望、光明がなくつて、何で……お雪さんだつてお若いんですもの、ね。

海岸へ嫁らしつた姉樣の達ちやん、どんなに可あいいだらう、今年の男子のお節句に生れた達ちやん、もう笑つて食ひつき度いほどですつて！ まだ見たことないの。

「姉樣に來るやうにつて手紙上げてもようございませう。ね母樣、惡い？」

「海水浴にお出遊ばせと云つてやれ。」

と父樣は交せつ返す。夏、他所へ行くことを父樣は海水浴に行く。と決定めてゝまひました。

「草だつて東京から故郷へ海水浴に來たのざ。」こんな山の中へ。

それでもね、夏夜中に便りに起きて、手洗ひの所へ立つてますと、しけの時には、波の音が底の方で聞えます。海岸から二里ばかり離れてますの。

お雪さんはもう赴任なすつた。夕ほしも十二日の後の今頃あの馬車で、兩國へ。初秋の都よ、五十日間沈滯してゐた向上の精神、智識慾の渴は如何なる勢ひを以て滿たし、如何に激しく燃えたつでせう？

空虛の胸は想像の翼で一つぱいになる。

さめた御飯へ、さし置きの苦いお茶をかけ、からしをかいて溶かしたお醬油へ、鹽漬の香物をつけて、漸くかき込んだ。

後片付けは、分家のきくが來たからして貰つて、お裁縫を持つて二階へ上つた。

晴れた遠山の木々、麓の畑のみどり、緑は、熱き日光の接吻を、吸ふがまゝに吸つてゐる。どこかで井戸浚ひをしてゐるのでせう、車のきしり、水をあげる音

綱引く掛聲が子供のさわぎとごつちやに聞えます。
オ、涼しい風。
「濤の音」の側には弟の中學校の學規と生徒心得が、麗々しくピンでとめてありますの。
御誓文と同じ五箇條を謹んで拜見に及ぶ……。

一、大義を明かにし名分を正し以て日本國民たるの志操を發揮すべし

一、心術を公明にし言動を正實にし以て士君子たるの資性を養成すべし

一、學業に精熟し身體を剛健にし以て國家有爲の材たるを期すべし

一、師長を尊親し學校を愛重し以て校風の美を顯揚すべし

一、禮儀を貴び廉恥を重んじ以て學生の品位を高尙にすべし

「康ちやん封筒どこにあるか知らないか。」
欄干の間から銅色の眼ばかり大きく光る顏を出してまるで命令的だ。
「よその家ぢやあるまいし、中の間の机の抽出しにありませんか、ひとりでお探しなさい。」休暇の宿題を先生の許に送るのだらう。
英作文と代數、三十日迄に送れと云はれたものだから現金な、差引なしの三十日出す、
「泥棒捕へて繩なふ。」
と云へば、
「大器晩成だ。」
と負け惜しみを遣る。
蠻骨のくせに何所で教はつて來るのか駄じやれが上手で折々連發しますのよ。
お晝にあまりふざけたものだからおそうめんのお汁を今朝着替へたばかりの着物へザブリ。
「仕樣がないね、シミになると洗つたつて、なか〳〵落ちやしないのに
と母樣が愚痴したら、
「どうもシミジミ困つちやつた。」
ですつて、豈、抱腹せざるべけんやではありませんか

母さまはお叱言どころか大笑ひ、おやつに新米を、さ
さげ(豆)とお砂糖を入れて煮て下つた。
　さゝげはきのふ、きくが分家裏の櫻の木の下でたゝ
いてゐたあれがさうなのださうな。
　兩方共初物だ、二五の十、二七の十四、合計百五十
日生を延びる理由。
　夜は小石川の友へ手紙を書く。
みどりの山にかこまれて居る故かもう故郷の朝夕は

秋風ですの、鳳仙花は夕毎に散つて逝きます、槐に
囁く初秋の音づれ、筧の忍び音の細りゆく縁の柱、
觀音堂の半枯れた松やお寺の屋根が近く遠く暗い涙
を誘ひます。荒みゆく故郷の態は幼ない夕ほしの瞳
にも映りますの……。

葉月つごもりのまへ

冷笑の子

歌さま

主人の覺悟

一家の主人となれば、家族の安寧幸福を保ち、如何なる不時の災難に出遭ふても妻子を路頭に迷はせず、又は他人の厄介にならざるだけの準備は平常から無くてはならぬ。併し其準備をなさずして取つた丈皆遣ふといふのでは、早晩不幸な生涯に陥る事は定つてゐる。世間にはよくある事で、主人の存命中は何不足なく贅澤に暮してゐた家族が、一朝主人を失ふて、忽ち其日から生活に困り、果ては母子兄弟散り〳〵に親戚知己の厄介になる事がある。是等は遺族の不幸のみではない。實に死後の恥曬しである。併し人は老少不定、何時如何いふ災難に罹るかも知れないから家の主人たるものは平常より其覺悟がなくてはならぬ。主人の貯金は收入の三分の一即ち百圓に對して三十圓といふのが當り前の割合である。此割合丈は必ず初めから無いものとして積み置く事にしなければならぬ。さうして貯金は主人の義務として家族の爲めの非常準備に積むものであれば、如何なる場合でも決してこれを引出して遣ふべきものでない。もし金が入用ならば、假令借金しても貯金丈には手を附けないといふ堅い決心がなければ貯金は決して出來るものではない。又貯金は生計の金を取つた餘りでは可かない。總て收入の初穗をまだ他の事に遣はない前に先づ引去りて積むのが肝心である。さうしないと金はまづ、生計の爲めに要つてしまつて毎度貯金の金が殘らなくなる。故に百圓の收入ある者は、始めから七十圓だと諦めさへすれば、それで充分立つて行く又生計の程度は主人の定め樣次第で伸びもすれば縮みもする必らず始めより何程でなければ生活せないといふものではない。

みくしげ



△稲荷の靈夢

みくしげは越前大野の二の宮源内左衛門が妻なりしが、花満といふ九歳になる子のありしを學文の爲永平寺へのぼせおきしに、其後源内左衛門若き女を迎へて花満の母を追出せしかば、みくしげ泣く〳〵寺にある花満に黒髪を切り文に添へて送りける。花満之を見てなげき、母の行衛をたづぬれども更に知れず、其後十五歳の時京に上り稲荷に祈誓せしに靈夢に感じて母に遭ふ、みくしげは其時細川右馬頭の家に老女たりしが、右馬頭花満が孝を感じ烏帽子子として細川左近と名乗る、北國亂れし時、二の宮敵に討たるべかりしを左近串受けて助け、親子都にて對面す、二の宮後悔して一家睦じくなりしとぞ。

△從容死に臨む

守尾は奥州の侍立野彌兵衛の妻なり。立野蘆名刑部と戰ふとしば〳〵にして運拙なく蘆名方へ降參し人質として妻の守尾を蘆名方へ出し置きしが、其後故ありて立野叛逆を企てしかば、蘆名大いに怒り、立野の妻守尾を引出し、軍儀のいましめに守尾を串ざしの刑罰に行はんとて其用意をせしに、守尾は少しも恐るゝけしきなく、此歌をよみて從容死に臨みしは、女ながらも、豁膽の程珍らしゝとて、時の人々噂しあひけるとなん。

守尾



佐介貞俊の妻



△かたみの短刀

佐介左京亮貞俊は鎌倉北條の臣なりしが高時亡びて後、貞俊千種忠顯によりて京都に降り罪を阿州に待ちしに、終に死をたまひければ、僧を招き傳來の一刀と封書を古郷に贈り届けんことを頼みて、潔よく死しける、彼僧其品と最後に着たる小袖を貞俊が妻をたづねておくりけるに妻は悲歎の涙に沈み、遺書を見れば辭世として『みな人の世にある時はかずならでうきにもれぬわが身なりけり』とあり、妻はかたみの小袖に此歌を書き夫のおくりし短刀にて自害し果ければ世人其貞烈を稱しけるとなり。

元ひめ



△世の亂れ髪

もとひめは山名の郎等喜家の九郎が妻なりしが、九郎出陣の時討死の覺悟を極め、『わかれては又あふまでと思ひきや形みなりけり世のみだれがみ』といふ歌に一ふさの髪をそへて家に送りける、もとひめ之を見て自ら黑髪を切り『一とすぢ』にの此歌をそへて夫におくりけるが、程なく夫討死せしよしきこえしかば、今は何をか思ひのこすことのあるべきとて念佛高らかにとなへつゝ、あたら二十路の春を一期としていさぎよく自害し、貞烈の名を後世につたへける。

若狭の局



△夜半の鹿のこゑ

若狭の局は比企の判官義員が娘にして、鎌倉二代頼家將軍に愛せられ、一幡君を生む、然るに頼家將軍病氣につき東二十八ヶ國を此一幡君に、西卅八ヶ國を御舍弟千幡君にゆづらんとせしを比企義員之を不足なりとして叛逆を企つるよし聞えければ北條時政ひそかに計りて義員を自邸に呼よせて討取り、尙比企の餘類を討たんとせしかば、比企の一族若君の御所にこもりしを北條方火をかけ一族を亡ぼしける、若君も火中に亡びたまひ、頼家將軍は伊豆の修禪寺に下向ありて薨じたまふ、局此時まで隨ひまゐらせしが、兩君の御あと弔らはんとて尼となり、山中に鹿の聲をきゝて此歌をよめりとぞ。

安住たよ女



△一月に足らぬ縁

たよは河内の國大井の里、安住某の女にして心優しく十七歳の時夫に嫁せしが、不運にして一月もたゝぬ間に夫身まかりければ、歎きのうちに日を送りけるに年若く美しければ、再緣をすゝむる多きを、たよはうるさきことに思ひ尼の姿となりて名を妙善とあらため、大井の尼寺に住し童女に手習ふことを敎へつゝ夫の菩提をとむらひて一生を行ひすましにける、僅か一月に足らぬ間を添ひし夫に操を立てゝ花羞かしき男を捨てしはめづらしき節婦といふべし。

探題英時の妻



△心ならぬ一年

北條英時の妻は赤橋相模守の女にして足利尊氏の奥方の姉なり。夫に隨ひてつくしへ赴きけるに、元弘の亂に官軍寄來り合戰數度に及び、英時ふるひ戰ひけれども敵は大軍なれば力及はず、是非なく妻子を關東に返して心よく討死す、妻は此由傳へ聞きて歎きに沈み、自害し果てんとしけるを人々おしとゞめて嚴重に守りければ、餘儀なく日を延べて、翌年五月二十四日夫英時の一週忌をいとなみし其夜此歌をよみ自害して失せけるとなり。

和田於菟女



△怨みの長刀

おとめは武藏國豐島郡和田親貢といふ者の女にして、落合の小川左衛門の妻となる、然に小川と交り深き村山三郎といふ者此おとめを見て戀慕し、ことをたくみ隙を見て奪はんとはかり、或夜忍び入りて夫小川をさし殺す、おとめ手早く長刀取つて三郎が足を薙ぎたふるゝところ難なく討取り當のかたきは討ちたれども、夫の横死をかなしみ、其塲に髪を切り月の隈なくてるを見て『かぎりあれば月もこよひは出にけりきなふ見し人今は世になき』とよみ、かくて其ほとりの川邊に行き此歌をよみて身を投げ果しとかや。

一葉女史の日記に就て

半井桃水

兼々評判の一葉全集は、此の程博文館から先づ前篇が出版された。その內容は今まで筐底に秘められて居た。故女史の日記と文範とである。此の日記を一讀すれば、女史の短い生涯が如何に悲慘であつたかゞ充分に窺ひ知られる。

私は當時の文壇に女史を手引した最初の案內者であつた爲め、從來も女史に就て、種々の質問を受けた事もあり、二三の雜誌には女史の性行を記述して、世人の誤解を正さうと試みた事もあつたが、先頃馬場孤蝶君が、讀賣新聞に日記の一節、而も私に關する事ばかりを拔抄された以來、一層激しい質問を受ける事となり、全集の出た後は、更に〳〵激しくなつた。

一葉女史の日記が保存されてある事は、廣津柳浪君のお話で知た。慥か去年の夏であつた。何かの序に談故女史に及んだ時、柳浪君は眞面目になつて、一葉の戀人は正しく君であつたさうな、その事は日記の中に記されて居ると言はれたが、私は女史の爲、辭を盡して打消さうと試みた。

全集の前篇が出來て、故女史の令妹國子どのから、わざ〳〵お送り下された後は、隨分諸方から種々の書面を受取つたが、就中私と多年親しく交はつて居る一友人の如きは、斯な穩かならぬ手紙を寄せた。

一葉日記出版の事承はり取敢ず借覽候處明治の淸女とたゝへられし女史は正しく戀に死したるものと斷言するに憚らず候而もその下手人が吾兄なるに至つては一驚を喫し申候不日參上當時の御感想も伺ひ度く併せて御馳走に預り可申候間豫じめ御用意置き被下度候と。

人間の通り相場五十を越た私が、此の節は冷かされ脅かされ、イヤハヤさん〴〵の仕合せである。

此比類なき秘書が感情熾烈なる女作家の忌憚なき告白録として、人生に對する僞らざる觀察誌として公

刊せられたる上は、關係深き私が、多く書れて居る、私が如何に女史を見て居たか、また如何に取扱かつたかを、參考として記さる事も、强ち無益ではないと信ずる。

私は何人に對しても、故女史とは親友であつた、言得べくんば兄妹であつたヨリ以上の何事もなかつたと、常に明言して居たのである。私は少しでも女史の胸中を窺知して居ながら、僞り飾つた譯ではない、實際女史の心には戀てふもの〻影だにも映る事を許されないと確信して居たのである



夫ゆゑ一二の文士に付て女史が戀物語りを傳へられた時も、私は一笑に附し去て、斯いつた事を覺えて居る女史は戀を歌ふ人で、實行し得る人ではない女史は戀を理想化せしめたいと力める人で、同時に理想の戀は歌ふべくして實現せぬといふ事を知りぬいて居る人であると。私は日記に書れて居る女史の文を見て、初めて女史が理想の戀の研究材料の一部分に使はれて居た事を知た。それより以前は何事も一切知らなかつたといふ外はない。

私がそも〳〵始めて、一葉女史の樋口夏子さんを知つたのは、その十九ばかりの齡で、當時私は芝南佐久間町に、弟二人と妹と弟嫁の鶴田たみ子と、書生暮しをして居つたが、妹のお友達の野々宮さんからのお話で、樋口さんに洗濯ものをお賴みする事になつた、夫が二三ケ月も續いたかと思ふと、今度は小說を書きたいと言はれる。一度對面てあげてはくれまいかと、野々宮さんのお話により、早速お目に掛る事にした。

さてお目に掛つて見ると、風采から言語動作までが昔の人を見るやうで、當世向の婦人ではない、その上弱々しい體格、何の點から言つても甚だ不適當と思ふので、私は切に諫めた。併し樋口さんは家計上已むを得ず決心したので、外にかはるべき方法も見出さぬから、何分賴むと推返された。年ごろの女が獨身の男と親しく交際する事になれば、世間の批評も免かれぬ、夫が貴孃に堪られますかと豫じめ質した時、樋口さんは仕方がない、心だに淸ければ、毀譽褒貶も厭ひませぬと、强い決心を示されたから、私も承知して、樋口さんの爲成し得る限り、力を盡さうと受合た。同時に私は樋口さんに向ひ、貴孃は私を男と見てはならぬ、私も女としては貴孃を見ぬと約束した、以來私は樋口さんを常に同性の友として交はつた。

私も樋口さんばかりでない、二三世話して居た小壯文學者の爲、一の舞臺を作りたいと思ふので、雜誌武藏野を發刊したが、金力の續かぬ爲、所謂三號雜誌のあはれ果敢ない運命に終つた。さりとて一葉女史の小說は、新聞に向ぬので、私は博文館の大橋乙羽君に賴み、一方尾崎紅葉君にも紹介する事としたが、女史は左の手紙をもつて紅葉君に對面ことは斷わつて寄こされた。文中に畑島とあるは桃蹊といつた人で、私の使となり度々紅葉君に訪ふたのである。

梅雨のならひなめれど兎角又晴間のすくなきころにて御籠り居の御つれ〴〵さこそと推量りょらし扨とや此ほどより御心切に御世話いただき候ひし尾崎樣御めどほりのこと實は少し事情御座候て此時の爲御男子との御交際は願ひ難き折からゆゑ折角の御心入れに背き候には不本意ながら惡しからず御酌取り畑島さまへの御傳一重に願上候益上可申上ながら夫も心にまかせず先は右のみあら〳〵かしこ

乙羽君には面會して、其の結果都の花に筆を執られる事となつた。

此の頃から私と女史の間には面白からぬ噂が立て、自然に遠ざかる事となつた。

御目にかゝらぬ昔もあるを自由のきかぬ身と存じ候ほど心地わろく參上いたし度われしらず考へこみ候時なども有りこんな事人に話しでも致し候ものならそれこそ笑はれぐさにもなりからかはるゝ種にもなり候はんなれど私は唯々まことの兄様のやうな心持にていつまでも〳〵御身にすがり度願ひに御座候を計らぬ事より變な工合になり只今の所私しにて御前様におめもじ致し度などゝ申さば他人はさらなり親兄弟も何と疑ふか知れ申さず兎角にくやしき身分に御座候御前様御男子でなきか私女子でなきかいづれに致せ男女の別さへなくば此樣にいやなことも申されず月花の遊びは更なりこんな事申さば生意氣とお笑ひ遊ばすか知らねど萬一御前様御一身につきての御苦勞などおあり遊ばさばとても〳〵お役には立つ間敷ながら其片はしたも御分ちいたゞき何事によらず共にといふやうに御座候はゞいかばかりうれしかるべきものをと今更の樣にはかなき愚痴さへおこり申候さりながら私愚直のうまれとて受けまゐらせたる御恩決して〳〵忘るゝものに御座候はずさるを若し御前様御心中に何ごとかお氣にさはる事でも有ては何と致してよかるべきや夫のみ心苦しく先日一寸宅まで參り候歸途に内々御宅前まで相伺ひ候ひしに折あしく御留守のよしお女中より承はり失望して歸り申候御話澤山御座候へども盡たり不申十日過には少しのひまも出來候まゝ表むきにて參上可致この夜ひろの寢られぬまゝに思ひつゞけ候まゝを先はかしこ

私は始めから豫期した事で、何な噂が起らうとも、別段耳にも留めなかつたが、女史の用事といふのは小説の趣向に付ての相談がおも、是も手紙の上で解る、女史の身の不利益と知りながら、對面必要もないと思ふて一二度女中に留守つかはせた事があつた、神經の鋭い女史は多分是を悟つたので、お氣にさはる云々の文句も列ねたのかと思はれる。

其の後女史からの手紙に中島歌子先生まであらぬ疑ひを起し、さま〴〵の用に託してその邸に自分を留置き、宅へ歸る事をゆるされぬと告げられた、恰ど其の頃私が小田果園氏を誘ひ暫らく鎌倉に遊んだのを齋藤緑雨さん外二三の人から冷かし半分の手紙が來たので今後御用のある時はお手紙を頂きたい、當分往來せぬ方がお互ひの爲ですと、私は申し送つた。その後女史から左の如き返事が來た。文中茂樣とあるは、死んだ私の弟である。

此ほどは思ひよらぬ賜もの有り難く折ふし不在にて茂樣に御目にか

からず御前さま御近狀を承はり得ざりしこといとも〳〵殘念にてことに鎌倉へ御旅行とか伺ふはもし御病氣にてはなきやと御案じ申し候ひぬ御樣子うかゞひながら御禮申し度と存じ居候ひしかど憚る所なきにしもあらで心ならずも日を送り申候今日しもめづらしき御玉は久々にて御目もじせし心地うれしきにも又お恨みの御詞がうらめしく候私愚鈍の身人樣を知るなど〻申すことかけても及ばれど師の君なり兄君なりと思ふ御前樣のこと誰人が何と申傳へ候とも夫を誠と聞く道理もなくもとよりこしらへ事とは存じ候故別して御耳にも入れざりしにて候我さへしらぬ事を知る世の中聞かぬことを聞くかとの仰さしてあやしき事にもある間敷御捨おき遊ばし候とも消ゆる時にはきえ候はんかしかく計らぬ事より御目通りの叶はぬ樣になりしもやむを得ぬ事と私はあきらめ居候今更人の口に戸も立ず只身一つを謹み申候さりながら其源は何方にもあらず皆私より起りしにて此一事のみにも非ずひまあれかし陷しいれんの落し穽設けられし身いかに遁がれ候とも何の罪かきせられずには居る間敷と悲しき決心をきはめ居候唯々先日野々宮さまもおことづけ願ひしとほり御前樣御高恩のほどはみな〳〵身にしみて有難く日夜申暮し候こと何よりも心苦しくつらきは唯是のみに候申上度こといと多けれどさのみはとて御返へしばかりを猶々願ひ參らするは何方へ御轉住相成候とも何とぞ御住所御しらせ置きたまはり度又折ふしは一片の御化翰もと夫のみ苦中の樂しみに待渡りまゐらせ候かしこ

折しもあれ初秋かぜの立そめたるに蟲の音の時しりがほなるなど月にも闇にも夜ごと物は思はれ候へ露けき秋とはつれ〴〵申ふるせし詞ながら袖の上におく今日此頃ぞ誠にしかとは思ひしられ候何事を申合はする人もなき樣に覺えて世の中の心細さ限りなく私こそ果かるさじき命と存られ候先頃より腦病にて自宅に歸り居候を又さる人々のあしさまに言ひなすとか兎に角にもうき世はいやに御座候

八月十日夜　なつ子

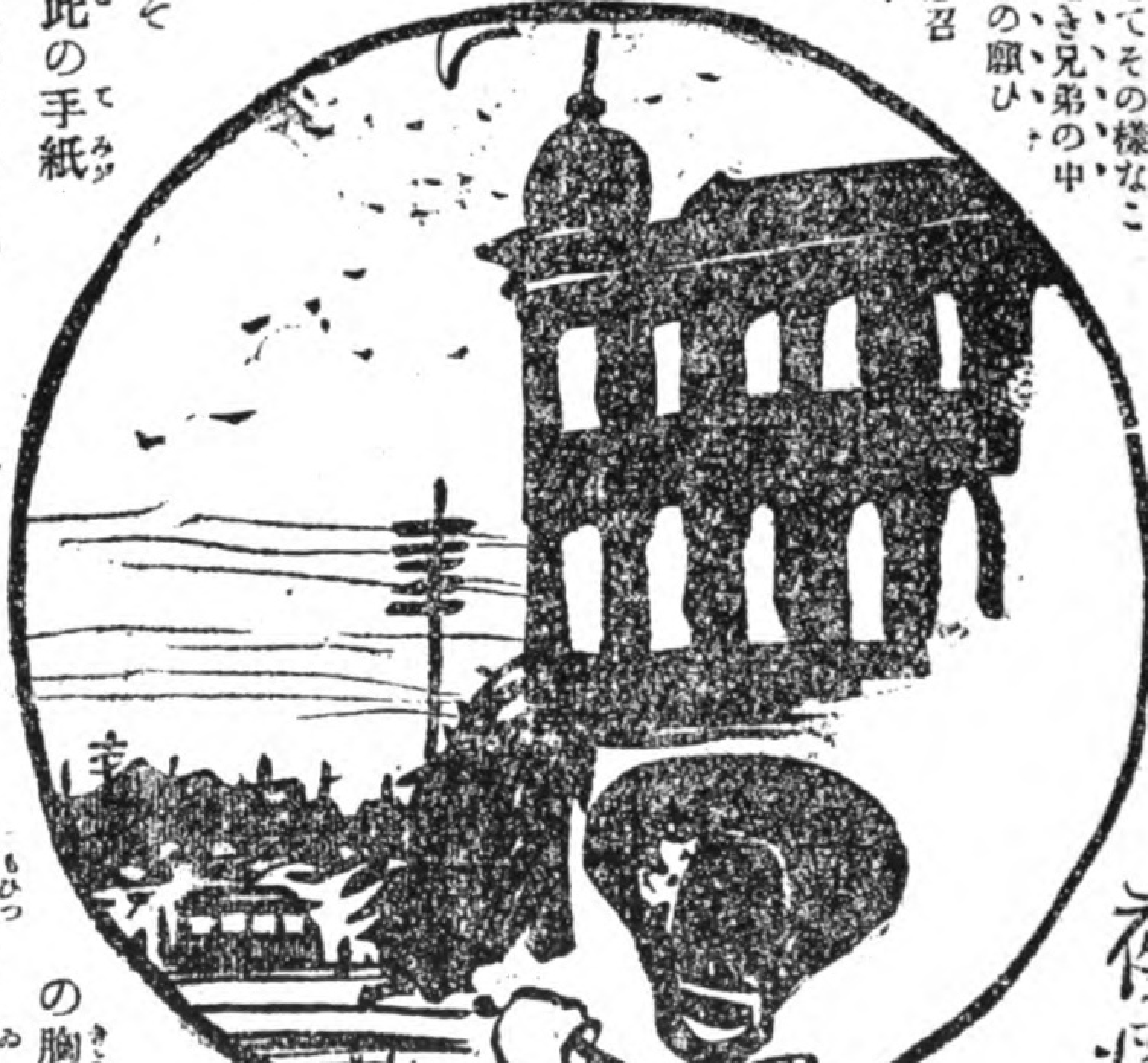
御兄上樣

大方の手紙は師の君さまと宛られたが此の文ばかりは特に御兄上樣とあり文章いかにも哀れ深く、心弱き私は其の儘絶交するに忍びず、寧ろ此方から尋ねて行き、極めて無邪氣な交際ぶりを母君やお妹さんにも見て頂き、疑ひを解いたなら、女史も安心されるであらうと、數日の後手土產もつて、丸山福山町に音訪れた。而して母君にも妹君にも對面て一時間程話して歸つた。數日の後女史の送られた手紙は斯うである。

もしその後のお立寄もやと待わたりまゐらせ日數も今日はいくかに成り候はんお目に掛らばしみ〴〵お話も申上げ御をしへにも預かりたしとは兼ての願ひに御座候を此ほどのやうに他人行儀の御義理合に御出下され候ては何事をか申上らるべきさりとてはお恨みにも存じ候御心もしらず御詞一つをたのみに我れ一人妹氣取りのおろかさよしや世間のうくもつらくもお前樣おはしませばと心丈夫にさだめて大海を小舟にて渡り候やうな境界見捨たまはゞ波の下草にこそ候はめはるかになつかし月日を數へ候へば私は御前樣の御怒にふるゝ樣なる事ばかりかされ居申候罪は心淺きわれにあれど今更に人は恨まれ

ど後悔のおもひにかきくらさるゝ朝夕せめては思ふほどのことお聞きにいれて御佗の叶はゞ嬉しかるべくそれむつかしくは餘所ながら我心のうちにだけ兄上樣とたのみ參らするを御ゆるし頂き度さりとて夢さらあやしき心ありてにはあらずかれての御氣質をしれば何としてその樣なこと申上らるべき唯々隔てなき兄弟の中ともならばとこれのみ終生の願ひに御座候をけふこの頃の思召はかりがたさにおもひ佗申候夕風涼しからんほど御そゞろ歩きのお序と申す樣な折に御はこび願はれまじきや强ひては申がたけれど是は慾の上の慾に御座候かしこ

此の後も二三度は音訪たと覺えて居るが、成るべく遠ざかるやうに仕向けたのである。併し女史の死後その潔白を證する爲め、此の手紙だけは永く保存して居たのである。女史が私に送られた手紙を見て、何か凡ならぬ關係



でもあるやうに思ひたる人もあつたので、常に私は女史に向ひ、斯いふ事を警告した、男は對話で打解けても手紙の上では打解けぬが、夫に反して御婦人は對話の時は打解けず手紙の上で打解ける、夫ゆゑ艶めかしい文字を列ねて往々あらぬ疑ひを招ぐやうな事も起る、貴孃ほどの文章家でも此の缺點は免かれぬ、好く〳〵注意せられたいと、畢竟こんな無遠慮な事をいつたのも、女史の胸底には戀の影だにも映る事をゆるされぬと思詰めて居たからである。日記中の私は佛とも慕はれ鬼とも怖しがられて居る

所謂觀察誌に對して何ともいふ考へはないが、まきぞへに書れて居る姪の千代子から、昨日こんな手紙を寄した、當時五歳のおてんさんはもう國漢文の教師になつた、その頃の女史と略同じ位の年になつて居る。

先日は參上はからずも一葉全集拝見いたし誠にをさなき昔なつかしくさすが名高き女史のお筆當年の狀眼前に横たはる思ひ飽かず讀返へし申候人に見すべくもあらぬ日記の事なれば筆を省きたまひしためにや明治二十六年六月三日の記中へ鶴田ぬしの腹にまうけし千代とよべるが云々無心にて讀み候へば私事叔父樣の子のやうに見えずやと申す人あり疑ひの程ともなり候はんかと危まれ候御一詔願ひまゐらせ候

千代子

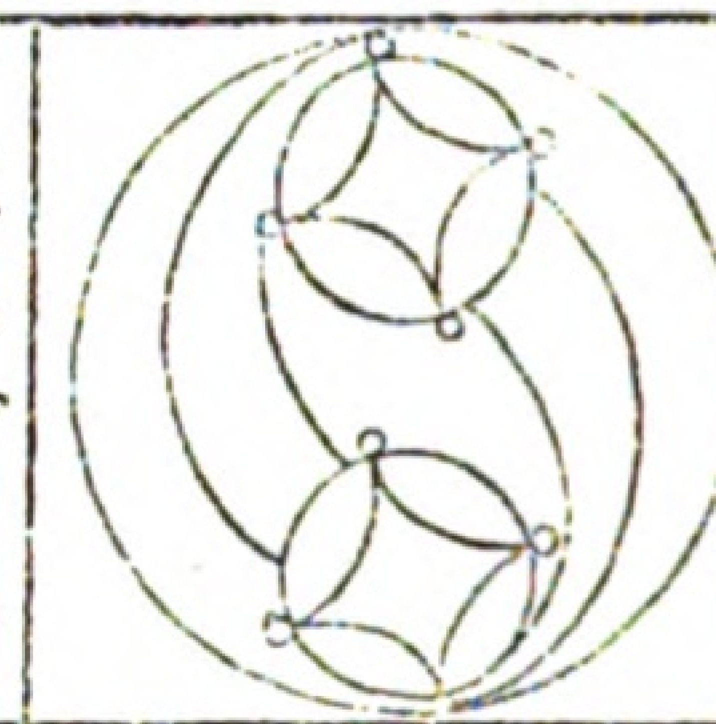
叔父上樣

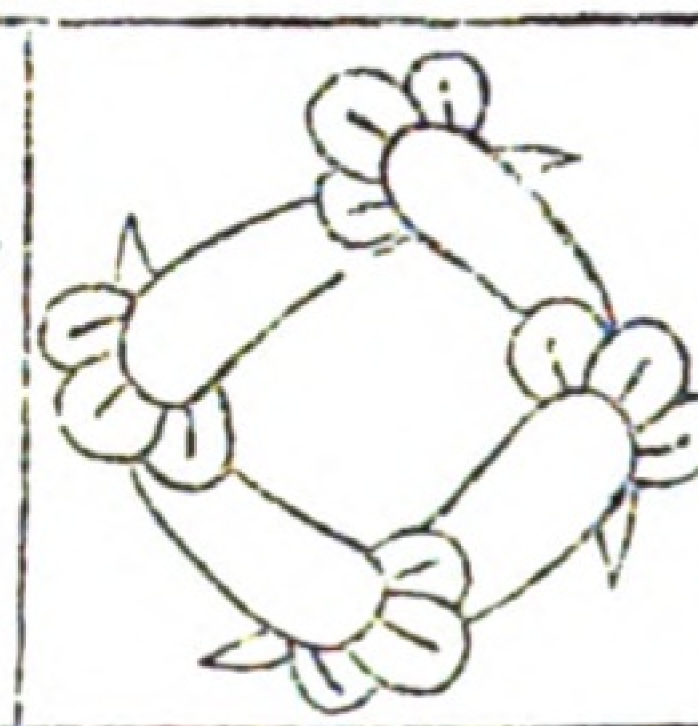
私は一葉女史の日記を讀むまで、女史は戀を歌ふ人で自から局に當り得る人ではないと思詰めて居た事を繰返へし言て置く、而して此の日記を讀んだ時女史が私に知らしめなかつた通り、令妹も世間の人に知らしめられなかつた方が女史の本意ではあるまいかと、一たびは悲しんだが、更に思へば、此の日記により女史の人格が何程高かつたか、女史の性行が如何に堅實であつたかを世間に證し得ると信じて又喜ばしい心地をした。（六月五日記す）

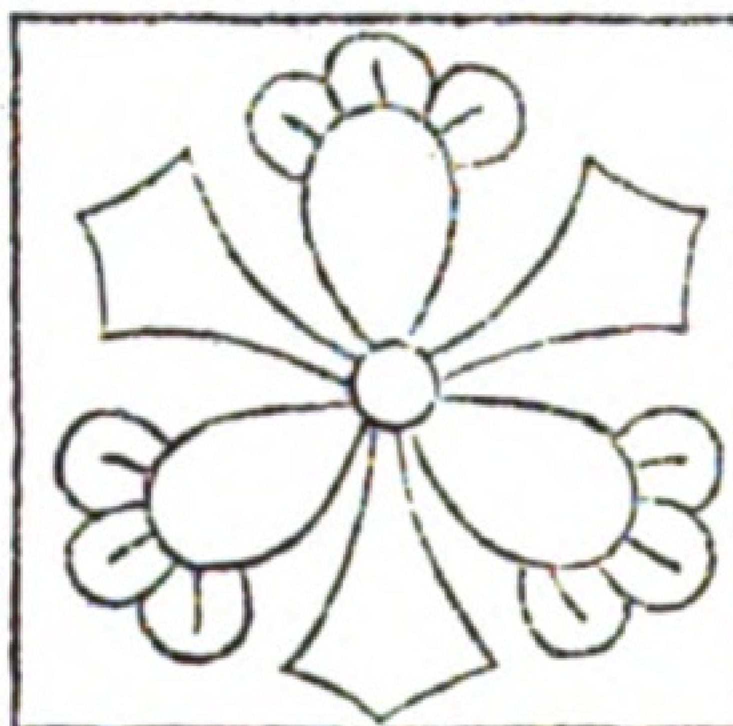
夏季旅行の心得

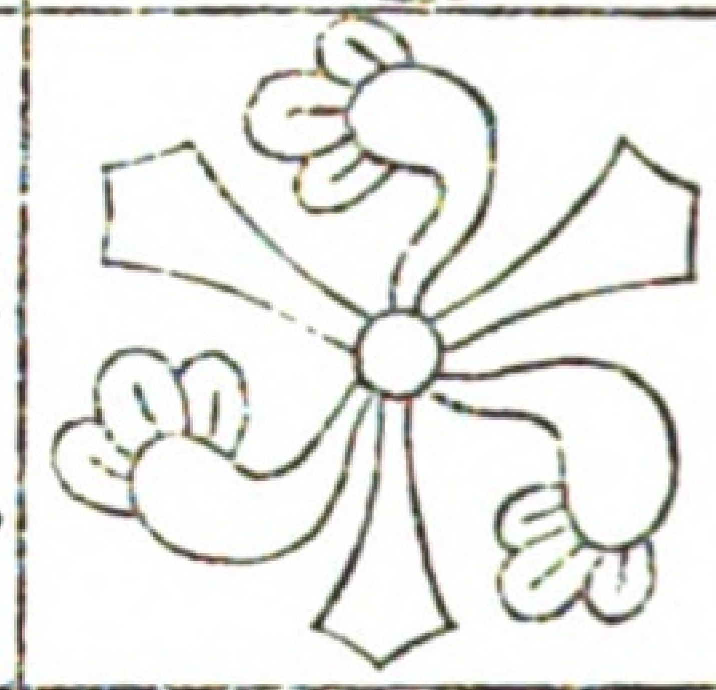
携帶品は敷布及びシャツ、腹巻きの類を用意し、就眠の時は必ずシャツを着腹巻きをなすこと、これは夜中に夜具を跳ね飛ばしても感冒等に罹らぬためで、敷布は蒲團の上に敷き又は夜具の襟を被ふのである。旅宿の寢具は、ドンナ傳染病患者が投宿して使用したか判らぬ、若しそれをそのまゝ使用すると忽ち傳染する、殊に夏期は尚ほ更らであるから、之を豫防するため是非必要である、又、萬一ある場合に應ずるため薄荷、重曹、次硝酸蒼鉛、撒里失爾酸曹達、安母尼亞水、絆創膏、デルマトール昇汞ガーゼ、繃帶、ピンセットを携帶することが必要だ。薄荷は旅行中非常に喉が渴いて湯茶の得られない場合、止むなく水を飲む時などには薄荷一滴を滴らして用ゆれば水中りをせぬ、又氣つけの効がある、重曹は急性腸加答兒即ち食傷の場合三瓦位を水に溶かし數回に服用すること、次硝酸蒼鉛は下痢の際一瓦乃至二瓦を服むこと、撒里失爾酸曹達は感冒或は發熱の際、服用する、安母尼亞水は眩暈等で倒たものに嗅がせる、又南京蟲に螫れた時に用ゐる、絆創膏は輕傷に貼り、重傷の時はデルマトールを撒布して、其上に昇汞ガーゼを當て繃帶をすること、ピンセットは山野を跋渉する際棘などを立てた時之を拔く用意である。

丁字の意匠

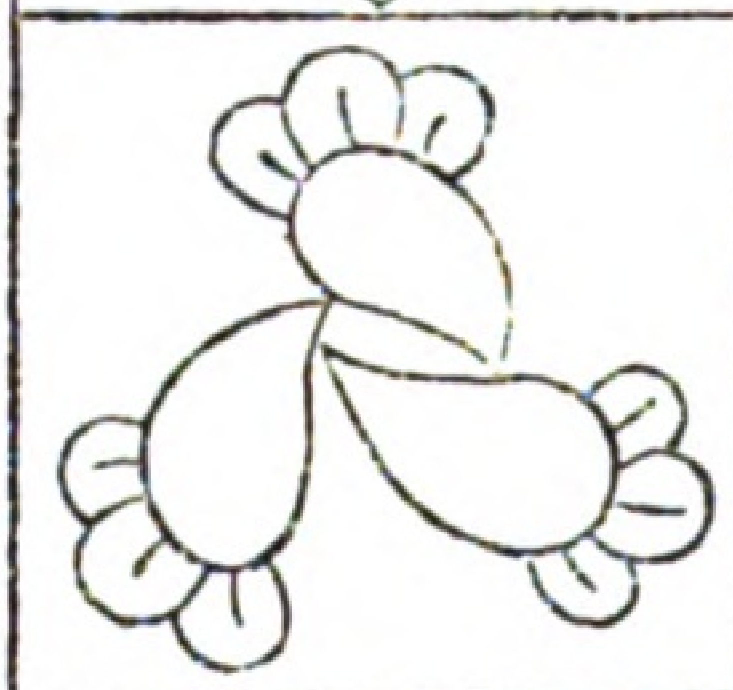

七宝丁字


丁字井げた

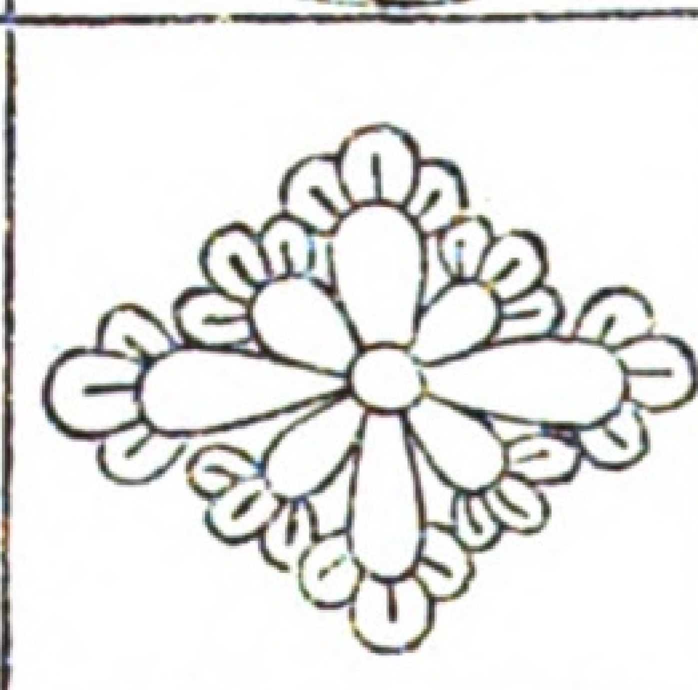

けん三ツ丁字

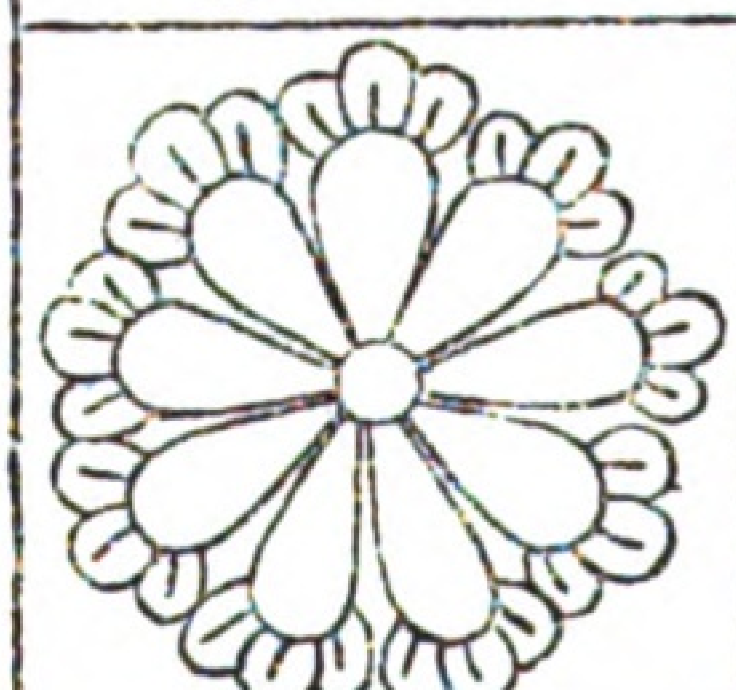

けんねぢ丁字

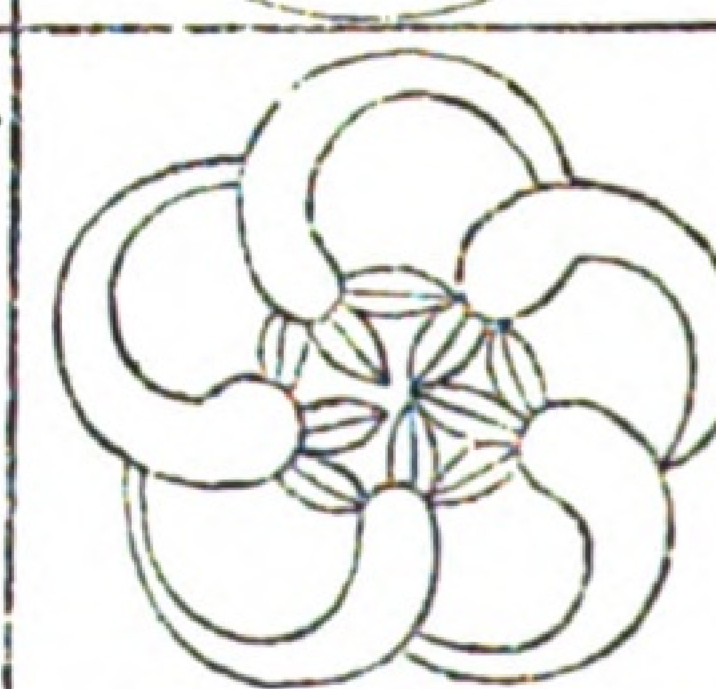

丁字巴

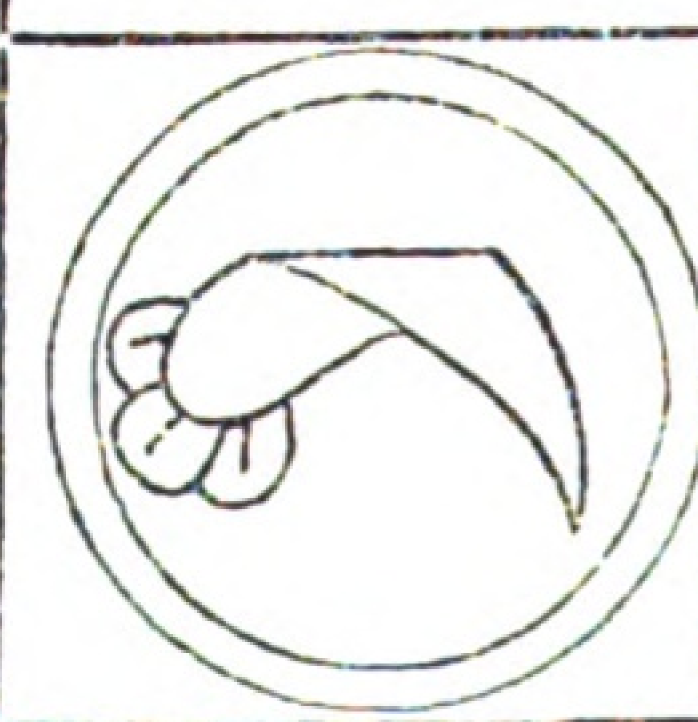

三ツそり丁字

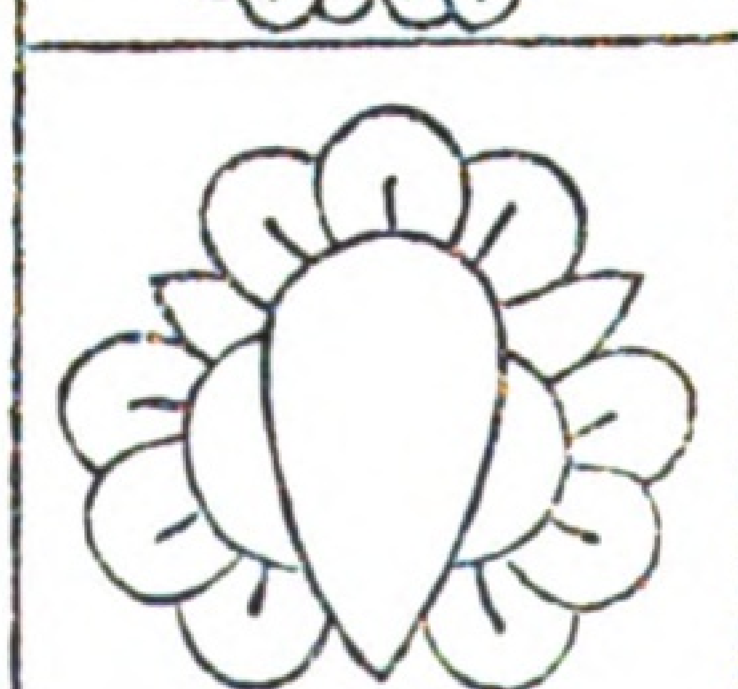

丁字きり


丁字菱

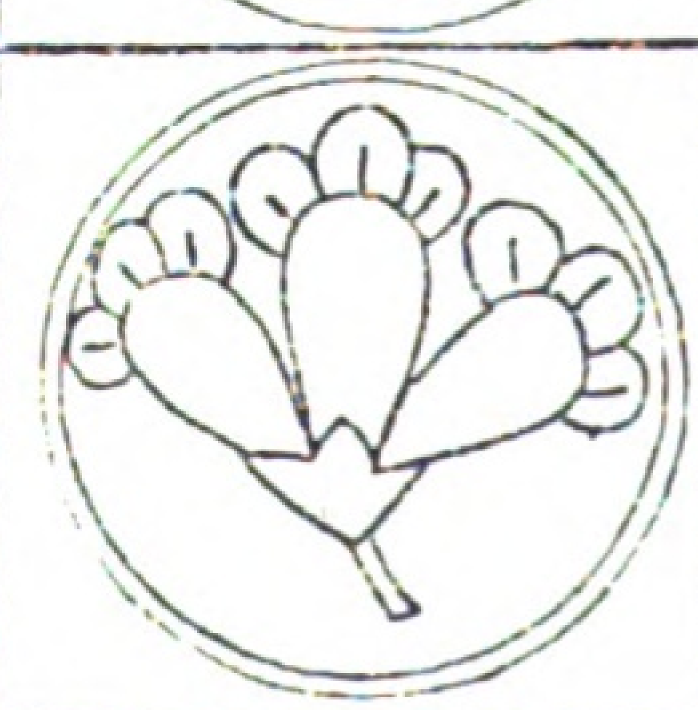

八ツ丁字


ねぢ丁字

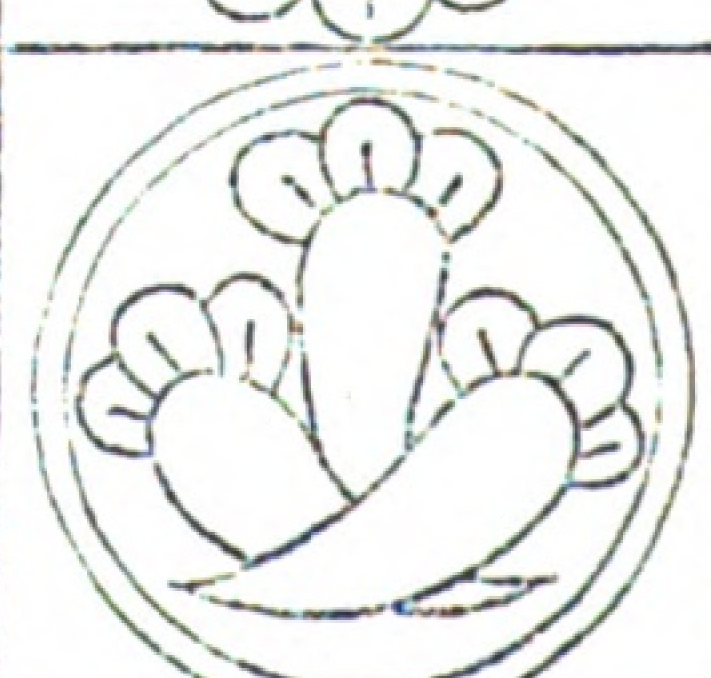

折丁字

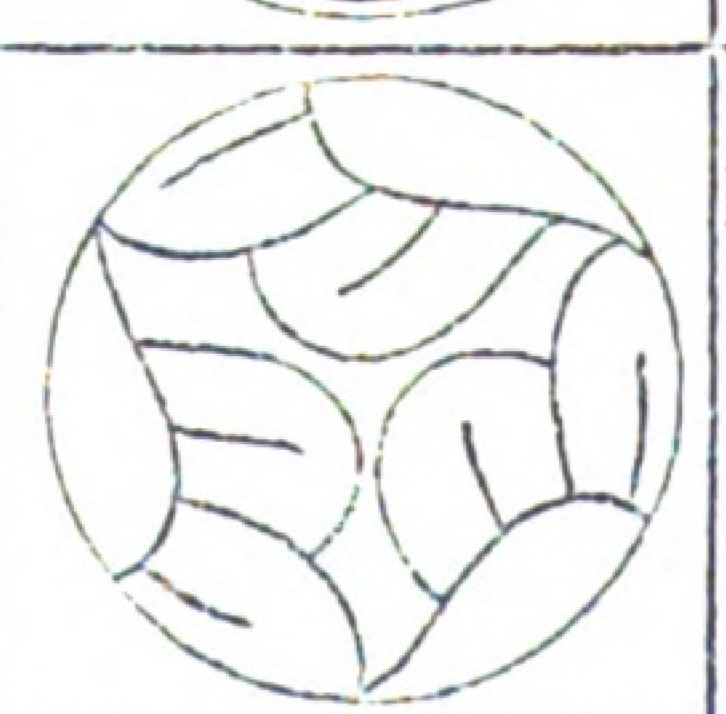

重ね丁字

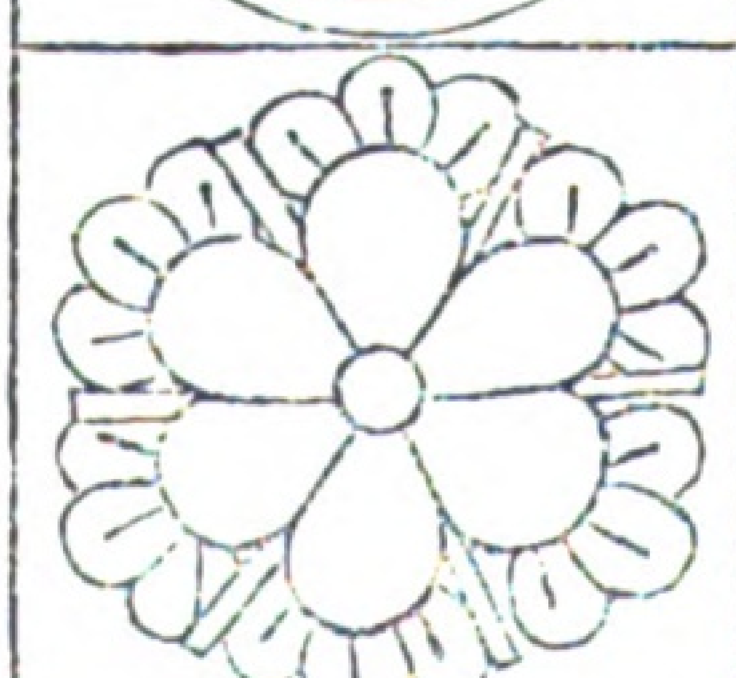

ふせん丁字

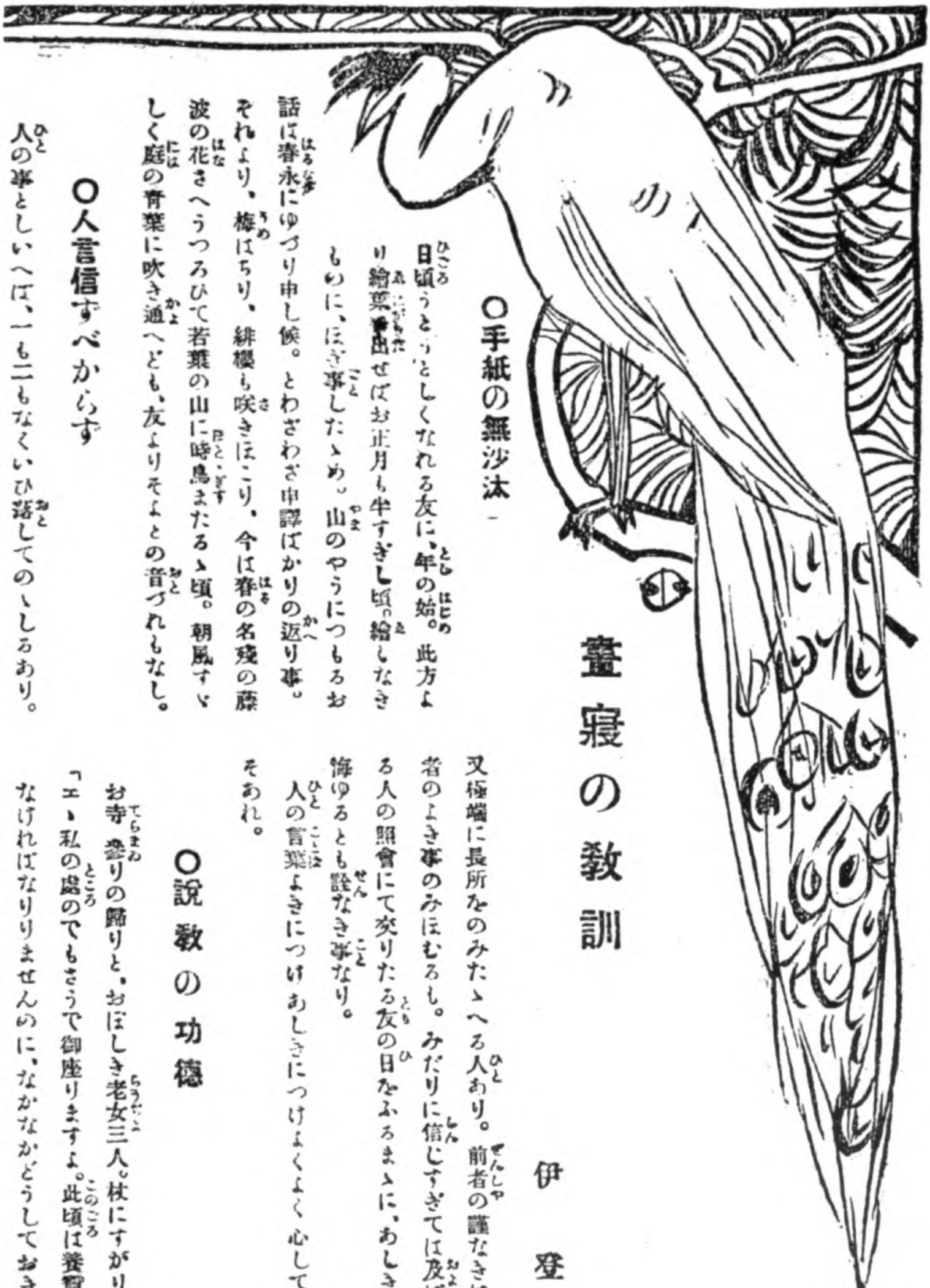

横見丁字


三ツ丁字


三ツくみ丁字


割丁字


六ツぢく丁字



竈寝の教訓

伊登子

○手紙の無沙汰

日頃うとうとしくなれる友に、年の始。此方より繪葉書出せばお正月も半すぎし頃、繪もなきものに、ほゞ事したゝめ。山のやうにつもるお話は春永にゆづり申し候。とわざわざ申譯ばかりの返り事。それより、梅はちり、緋櫻も咲きほこり、今は春の名殘の藤波の花さへうつろひて若葉の山に時鳥またるゝ頃。朝風すゞしく庭の青葉に吹き通へども、友よりそよとの音づれもなし。

○人言信ずべからず

人の事としいへば、一も二もなくいひ落してのゝしるあり。又極端に長所のみたゝへる人あり。前者の謹なきはさる事ながら、後者のよき事のみほむるも。みだりに信じすぎては及ばざる事あり。かゝる人の照會にて交りたる友の日をふるまゝに、あしきふしぶし見出して悔ゆるとも詮なき事なり。

人の言葉よきにつけあしきにつけよくよく心してきくべきものにこそあれ。

○説教の功徳

お寺參りの歸りと、おぼしき老女三人。杖にすがりつゝの高話し。

「エゝ私の處のでもさうで御座りますよ。此頃は養蠶にて夜も桑を與へなければなりりませんのに、なかなかどうしておきないんでござりま



すよ。實に氣の利かないのには閉口で、私もいつになつたら樂が出來ますやら。今の若きものは口ばかり達者にて」と次第に遠ざかり、聞えずなれども。定めし三人かはるがはる我が家の嫁の棚下をなしつゝゆくならむ。

まるにても己れさる時、說教といふもの聞きしに世の姑を戒めて曰く。

這へばたて立てば步めと育てた娘。お下げに結ふやうになれば。まづ小學校に入れ、それがすめば、又女學校に進ませ、外に茶の湯活花裁縫琴曲よと、いろ〳〵の手藝をしつけ。漸く少し母の手傳が出來し處にて緣談が始まり。あれかこれかと苦心して良緣定まれば又もや娘の他家にてひけをとらぬやう肩身廣かれかしと、身分にまさる衣類調度の數々。箪笥幾棹長持いくつに重ねこみて。よこした生みの親の苦心。そを同情すれば一言の叱言もいはれまいものをと諄諄と說き聞かする法師の前。居並びたる老女の面面熱淚ほとばしり、南無阿彌陀々々々々と念佛となふる殊勝さよ。

此の心いつまでも保ちたらましかば、世にいまはしき嫁姑の爭ひはなきものを。あはれ寺の門一寸出れば忽ちかはる曲げし心。何れ今門すぎし人の如き老女の類多かるべし。

○妻のさし出口

良人はいつも、にこ〳〵顏のふところ手にて遊び。妻は恐ろしき顏してたち働き。細君の前には少しも頭あがらぬ夫婦者すめり。大掃除なんどの時にても、細君先になりて指圖すれば夫は唯々として仰のまゝになす。正月の飾付近所の交際、細君の力によらざるはなし。牝鷄の晨するは家の亂るゝ基なりとかや。女の指出がましさは淺ましきものながらこれも。男子の至らぬふしのあればなるべし。

○梅雨期

梅雨期に入りてより、門通ふ人々互に雨をかこちつゝ。今年許りの雨のやうにのゝしつてゆくぞをかしき。おのれとても此梅雨好ましからねども稻の成育を助け。此の期にふるだけふれば、土用にてりこみありてよろしときけば。餘りかごとかましき事はいはれざるなり。

衣類などのかびて困るとかいふ人は、自身の手廻しあしかりし故にあらざるか。おのれは必ず入梅以前。冬物の始末つけおけば、心は至極平和にて、雨のためなか〳〵用の少きにこまる位なり。さはいへ米價高直の今日此頃。日和仕事にいづる細民の此雨の爲め如何になやむらんとおもへば降りつゞく雨いと恨めしき心地もせらる。

俳諧袋廻し

松風女

初夏某日、第二回俳句會を開き、袋廻しの催あるに付、是非上京あれと伯母君よりの來狀、饅は食ひたし命は惜しゝ、では無い鳥渡怖い者見たさの格で、好いわ其お席へは出ないでも、人惡るに爲つてお次間で以て立聞きなり、出來るなら竊見でも爲ませうと、兎に角上京と極める。

私元來此の俳句なるもの、何だか手が出して見たい樣で出せなかつた、芭蕉あたりの句集の評釋など見ても、それ程とも思へないのに讃辭が列ねてあつたり實際の妙味の有處が解らないのが原因で……

近頃伯母樣がお始め遊ばしたので、私にも頻にお勸め下さる、出來たら何んなのでも關はないから罫紙に書いてお送りなさい、先生の御添削願つて上げますから、と被仰つたけれど、中々罫紙なんどに書きつける勇氣が出ない、只お笑ひ草にと思つて書信の端に十四五句並べて置いたら、お人の惡るい、其處丈け切り取つて先生の朱を入れて御返送下さつた。易者が人を占ふのに、貴方は非常に好い事が有る、然し時に故障が起るかも知れない、注意して勵めば成功疑なし、とまあ斯う云つて置けば、當らずと雖不遠だといふ、若し成功しなければ、其人の注意が足りないからだといふ拔道が作へて有るので……鳥渡それに似た、煽動る樣な先生の評語に、何も乘つたと云ふ譯でもないけれど、それからは易者の言に勇氣を出して、事に從ふ人の見得で、駄句つては御添削を願ふ事、玆に二ケ月に足らず、而して今日のこ〳〵と俳席に罷出やうとするのは、餘り押が強過ぎる、何でも隙見の事、立聞の事と極めて、當日の午後に牛込へ行く。

先生のお出は午後七時とある、それ迄硯や墨や筆や箱から出したり拭いたりお手傳ひする。十疊のお座敷瀟い好みの軸にお香爐品よく、傍寄せて唐物の籠に紫

しほらしい野菊に似た花が投入れてある、上座を宗匠のお席として、紫檀のお机螺鈿梨地のお硯、是は先よし、下座へかけて敷並べた、秋草染めの麻の褥、其間々に程よく配置した料紙硯箱、黄昏時の電燭に蒔繪や梨地の美くしい事、集る方は皆初心の域を出ない方と聞く、嘸使用れて硯が泣かう筆が泣かうと可笑い。

其内に段々と皆様お集り先生も程無くお見え遊ばさうと私語き交す聲に、そつと逃れてお離れへ隠れて仕舞ふ、半時間も經つたら、壁の中の蛬そろ〳〵と這ひ出さうと思つて。

先生が御出遊しましたからと女中が迎ひに來る、返事しながら新聞見て居る、今度は小さなお使者が來るお母様が僕と一緒に直ぐ入らつしやいつて、と坐つてる私の首に手を捲き付けて、頭髪と諸共に引張られる痛いので我知らず連れられて、到頭お座敷へにじり出て了つた。初對面の先生、御紹介も待たるればこそ、やあようこそ御出京、さあ何卒お蒲團へと馴々しく、面白い方とは承り置いたれど、今こそあれ曾ては日比谷邊りの一員にも數ぞへられし御方、幾分の官臭も定めしある事と思つたのに、知らねば只の一俳人とも、聞しに増した圓滑洒脱、初めましての御挨拶から毎度御面倒願上る御禮、さて此次からはお仲間入願ひますれども、今日は只拜見丈けに、と聞きも敢へず、否それは不可せん大丈夫皆さん御名人揃ひで在



らつしやいますから。と笑つて御出遊ばす。其御名人揃のお話承つたればこそ怖いので……前回にも獨天狗の某様、お髯のみ厳然として、赤くなり煙を立てゝ苦吟難澁の體、見ても命の縮りさうと承つて居れば私とても一向場馴れせぬ未熟物、赤い顔を海老茶にし、焦茶としても餘り不體裁な者と、些ばかり憚られて。

人數丈けの狀袋へ、先生がそれ〴〵題を書いて各自の前へ置かれる、私のを見ると「百合」としてある、急いで氷菓子喰べて了つて考にかゝる。出來ましたが如何致します、と伺ふ、その細い紙へ書いて其狀袋へお入れなさい、而して袋の上へ御自分のお名前を記してお次ぎの方へお廻しなさるのです。

姫百合のそと覗きけり水鏡、として仰通りにT様へ御廻しする、やあまだ此方の出來ない内もうお袋背負はされた、と無闇にお髯を引張つて居らつしやる、彼處から句を手繰出すお積りかしら。此度は又私の前に青簾とある狀袋が廻つて來る、又考へる。

先生、私の處に蝸牛と云ふのが來て居ますが他に何う云つて宜しいでせう、とY様お聞きになる。それは上五に置けばてゝ蟲や、下五に置けばかたつむり、又蝸牛哉でも宜しい、飴くれてやつと剃りたり片頭と云つた句もありますけれど、是では蝸牛の句には成りませんよ。皆不思失笑て仕舞ふ。暫時無言、えゝ先生、蝸牛は角を振廻しますなあ、左様、和い角を動しますから振り立てるでも宜しいけれど、芭蕉の句に蝸牛角ふり分けよ須磨明石と有りますから、餘りついては困ります。僕の題は先生單衣ですけれど、矢張此五字を入れなくつては不可でせうか、甚場ふさげですが蔭で利かせては何うでせう、餘り平凡な題で捕へ處が無い。それは題の字を入れなくては不可い」ひとへ丈けでも宜いのですよ、平凡で無い題では猶更貴方にはおよめにならないでせうに、先袖でも引つりときなさい、總會の決議文でも草するお手際で、すら〳〵とやつて頂けば立派な者ですがなあ。と莞爾と笑つて居らつしや

る。否何うも恐縮、一體私の字で書くと名句も下手に見えますよ、綺麗に斯うすら〳〵つと書き流すと拙句でもよく思へますがなあ。否何うして君の書はうまい者だ、せめて書位の句がお出來になれば結構です。と何うも先生の冷かす事のお上手つたら、俳句でも一流なら皮肉るのも確に一流の列に入る。一巡して各自の句を收めて來た狀袋は、一人の手蹟で半紙に清書される。私が手明きになつたので書記を仰付かる、あゝ是は誰々さんのだなと思ふと、可笑くてならない、清書には無記名で、只句の頭に1 2の番號丈附けて置くから他の人には誰のだか解らない、最解らない爲めに斯うするのだけれど。先生の句もやはり此の内に入つてるので。漸く不殘各題とも出來上つて來る、一題毎に一枚の半紙に列記して、それを又各自受取つては、各題から自分で好いと思つた句丈け控へて置くのである

私共には是は誰々の句と想像がついてるから不殘先生のを拔いて置きたい樣な、それも可笑いと大に迷つてると、從弟が、名前に超越して撰り出す事が出來て？なんどゝ小聲で交せ返す、やつと撰り出してから不殘先生のお机へ差出す。

始めます、とお聲が掛ると一座寂となる。

粽の一番！　とお讀みになるとT樣が頂きますと仰有る。一點！　私も頂戴しますとH樣、二點！　もう頂きてが無い。

江戸趣味のまだ名に殘る粽哉、作者は？

私です、とY樣、すると句の下へ先生が朱で作者の名を入れる。斯うして讀み上げて入らつしやる傍から各自好きなのが出ると、頂戴！　と聲を掛けて點を入れて行く、可笑しいのは先生の句に一點も入らない時作者！　と被仰つて御自分の御名をお書きになると、皆頭をかいて恐縮して仕舞ふ。青簾の題で、

男一匹水髮にして青簾、と云ふのが大分呼び聲が高かつた、けれども是は青簾よりも初松魚の方が句が生きて來る、と被仰る。伺へば成程と思はれる、笑聲歎聲裡に、一片のレモン浮べたお紅茶を啜りながら總評

を伺ふ。よく新聞で唄はれる蛙會の御連中にも隨分振つたものが多いさうで、誰とか樣が、何とかテッポ百合の花とおよみ遊した事やら、又、何とやらしてうぐの聲と被仰つた方も有るとやら、前者は鐵砲百合の事後者は鶯の聲と云ふ處を、うつかり約めて仕舞つた者とか、兎角初心は是で困ると先生がお笑ひ遊ばす耳の痛いのは我のみかは、お仲間は大分其處ら邊に居らつしやる。

かくて樂しく散會したのは、夜も既に三更、薄月夜に雨しと〳〵と、新樹は暗く青葉の薫り、庭の石は程よく濡れて居た。

百物語の滑稽

和漢怪談評林に曰く、昔より百物語といふ事の侍ふ。先行燈を青紙にてはり、灯心を百筋ともし、座中の刀脇差等たかくし、扨て夫より恐しき咄一つ咄して灯心を一つ消し、段々百に百筋のともし火打消し侍へば、必ずけもの出づといふ。或ろ西國方の若侍五七人集り、極月の末いと寒氣も強に、ふぐ汁なんとなふ一世の中の物語なし侍ふ處、一人の侍言ひけろは、昔より百物語を爲せば化物出づといふ、いざや今宵の慰に物語せばやと言ひ出せば、我れぞよからん人ぞよからんといふ。かたへに臆病なる人侍りて益なき事と云ふを猶更人々勇み立ち、主はあんどうの仕度し、一つ二つと恐しき物語かぞへてともし火打消し、次第〳〵に咄も行くに、かたへよりそりやなま首が見ゆるといへば、目のない座頭がといふ。次第に咄て夜もはや七ッとおぼしきには、話は百みてゝ一面に暗く、雪さへ降り出で外面白まむ〳〵物すごき風身にしみわたり、皆々火鉢に頭付合て今やと待つに、ねむけさへさして座中とろり〳〵とねむる處、一人用事かなへんとて、かたへの戸を明け出でしに雪の白白と積みたろ中立頻りに動き出づ。そりや雪女といふに、人々眼さめてかけ出しに、さして變事もなく、風に楮の動くなりけり。人々大笑して又こそりよりたろに、火鉢の中より白き女の顯れ出づ。人々驚き、一度に飛びのき、夫れといふ程にこそあの立さわぎころびまろぶ足とらへてやれ、化物とらへたぞ、ちやうさんよ手そくよと呼ばはろに、勝手よりともし火持ち出で見れば、臆病なりし侍の驚きて目を廻はしたろ足を捕へたろにぞありけろ。座中大笑して夜もほの〳〵と明くろに人々顧りぬ。されども右の火鉢より出でたるは確に見たりしといへり。かゝる事もある事にや。

新案模樣



△蝶　△くちなし　△苔の花　△男郎花　△をだまき　△蓼の花　△幽栞

愛の問答歌

美人草

是は、何も萬葉集中の代表的と云ふのでは御座いませむ。戀歌としては佳作のが澤山載せてありますけれど、只、問答歌となつて居ります處に面白味が味はゝれますから、少し拔萃して見ました。

○

懇懃におもふ我妹を人言の、繁きによりて逢はぬ頃かも

○

人言の繁くし有れば君も我も、絶えむと云ひて逢ひしものかも

○

戀しい、可愛い貴女に、逢ひたい見たいとは思つて居乍らも、世間の口が煩いので、毎日々々只思ふばかりで、眞に味氣ない日を送る事よ、と、言ひ送つたものです。

すると女の方では、偖々情の薄い事かな、最初から世間の口が煩くなつたら、其時二人の間を絶つて了はふといふ、そんな約束で始めた戀ぢや無いわいな、と怨みを述べたのです。

○

すべも無き片戀を爲と此頃に、我が死ぬべきは夢に見えきや

○

夢に見て衣をとりき裝ふ間に、妹が使ぞ先立ちにける

是は、女方から先に云ひ送つたのです。ほんとに情無いお人哉、此方では是程に深く思つて居るのに、貴君はまあ何とも思召さ無いかして、一向御訪ねも下さらない、もう／＼私は片戀に焦れて、不遠焦れ死して了ふかも知れない、まあ這麽に切ない心が、せめて貴君の夢にでも通ひさうなものぢやに、と大に怨めしやなあと嚇したのでせう。

男も如才有りません。生中無沙汰の云譯なんかしても、聞いては呉れないと承知して居りますから、恍けた顔して向ふの歌の意を受けまして、さあ昨夜そもじの夢を見て、如何にも氣に懸るから、今宵こそ訪ね樣とたつた今他所行きの着物を取出した處さ、着替へして居る間に御歌使の方が先きになつたと云ふばかり、決して疎に忘れちや居らぬぞえ、と云ふ意が含めて有ります。

其晩多分男は訪れたでせう。左樣すれば、まあ／＼貴君は、位の處で女の御機嫌は直つて了ふ事と思はれます。

○

○

門鎖てゝ戶も閉ぢたるを何處從か、妹が入り來て夢に見えつる

門たてゝ戸は鎖せれども盗人の、穿りたる穴ゆ入りて見えけむ

是はお互樣に呑氣な歌です。ねえ君、雨戸もしめりやあ、門もちやんと鎖つて置いたんだよ。それだのに君を夢に見たね、一體何處から入つて來たんかい。怪しからんね、位の處です。

女も却々世馴れて居ます、そりや貴君、門や戸はちやんと鎖めときなさつたでせうけれど、不精な方だから前夜盗人の入つた穴はまだ其儘直して無いでせう。大方其處からでも入つて行つたのでせうよ、夢の事だから私だつてよくは知りませむけれど、と答へました。這麼註をつけたら、遠いゝ昔の作者が地下で怒り出すかも知れません。

○

久方の雨の降る日を我が門に、簑笠きずに來る人や誰れ

○

纏向のあなしの山に雲居つゝ、雨はふれども濡れつゝぞ來し

是は少々女の御機嫌が斜なのかも知れません。些不沙汰になつて居た男が尋ねて來て、案内を乞ふたとします。すると、女も心中飛び立つ樣には思つても、日頃待つ日は來もしないで、今頃思ひ出した樣に遣つて來て何ぞいの、と、一寸拗ねて見せまして、這麼雨降りに簑笠も着ないで、我が門に立つてる人は誰ぢやいまあ、と、態と冷々と云つてのけたのです。

男は哀而憐れみを乞ふ樣にもてなして、誰ぢやい處ぢや無いわよの、這麽雨風に吹かれて來たのも誰故と思やる、そんなに無情づくらいで、早く開けてたもれさ、と申しました。

○

紫は灰さすものぞつば市の、八十の街に逢へる子や誰れ

○

垂乳根の母の召す名は申さめど、道行く人を誰れと知りてか

此の、紫は灰さすものぞとは、只海石榴市と云はう爲めの序なので、其の街で行きずりの、彼の優しい乙女よ、そもじの名は一體何と呼ばせらるゝ、と尋ねかけたのです同じ萬葉の始めの方に、

その岡に菜つます子、家聞かな、名告らさね、我こそは脊とは名告らめ

と樣な事が云つて有ります、其處に摘草をして居らるゝ可愛らしい乙女よ、お前の家や名を私に敎へなさい、私こそ良人と名告らうと、輕い意味で歌いかけたので、總じて此時代に女の名を聞くのは、既に深い戀の意味が含まれて居りますのです。

此の、尋ねかけられた乙女は、如何にも優しい、おつとりとした、娘らしい娘だつたでせう。そりやもう御尋ねとあれば、母樣の召させられます名をば、申上げませうなれど、只かうして御目に掛つた許りの貴君樣をば、何の樣な方と知つて、御返事申してよいものぢややら、と、如何にも柔和らしい、初々しい樣子が、歌の上

に現れて居ります。私は此の娘が大好きです。

○

眞珠は緒絶えしにきと聞きし故、其の緒また貫き我が玉にせん

○

白珠の緒絶えはまこと然れども、其緒また貫き人持ちて去にけり

或處に女が有りました。始めの良人に見棄てられまして、又二度目の良人を持ちました。それとも知らずに或る男が、貴女の緣は切れたさうな、即緒絶えしたと聞きました。其處で眞珠の如な貴女を、私の心の絲で繫ぎとめたい、私の玉となる事を許して下さいと云つたのです。

彼の女の父母は是を見て、是は困つた事を云つて遣した。娘は最早再人妻となつて了つた後だにと、そこで返歌して云ふ樣、如何にも離緣になつた事は眞實です。然し其の白珠はもう、別な人が緒を持つて來て、繫ぎとめて連れて行つて了ひました、御志は有難いけれど、伺ひ樣が遲う御座いました、と、斷つた歌なのです。人もちて去にけり、なんて、如何にも鷹揚な時代の心が見えるでは御座いませんか。

○

念ふ人來むと知りせば八重葎、掩へる庭に玉敷かましを

○

玉敷ける庭も何せむ八重葎、おほへる小屋も妹と居りてば

是は誠に優しい、愛と敬との籠つた歌です。まあ貴君が御出下さると知りましたなら、斯の樣な穢くるしい處でも、出來る丈け塵でも拂つて、御居心のよい樣にして置くので御座いましたけれど、と申しますと。男は、

否もう決して那麼心配するには及ばない。縦、甚麼埴生の小家でも、かうして君と一緒に居るならば錦殿よりも居心がよい。と、女を勞り慰めたのです。

此歌でも、又とり樣一ツで惡くもとれます、おや／＼何した風の吹き廻しで出掛けて入らした。もう／＼私の家なんか、道も忘れて了つて、來て下さる方も有るまいと思ひましたから、獨り埋もれて、八重葎もいとゞ繁くなつたのですと云ふ心を態と言葉美しく飾つて、皮肉ツたのかも知れません。

男もてれ隠しに、む、否なに那麼事はどうでも、偶にかうして一緒に眺める庭は又無く心がよい、と、御機嫌とりに云つたとも、聞けば聞えます。

作者　眞意は後者に有つたのかも知れません。何故なれば、志厚く、常々通つて居る女の許なら、思ふ人來んと知りせば、などゝ不用意の處へ飛び込みはしないでせう、然し、さうとらずに、何處までも優しい、美くしい意味にとりたいと思ひます。

△色紙貼りの古實

屛風に色紙をはること、寸法は八寸七分にするなり。一枚を二色に染分くるととなし、青、黄、赤、白、黒の五色にすること古實なりとぞ。



夏の髮と髮飾

近藤焦雨

△日本髮と束髮の季節

束髮は髮の爲に良くないと女髮結は申しますo何故であるかと聞きますと、束髮に油を用ゐず、又入毛なしで櫛を用ゐませんから、自然と毛が切れる許りでなく、毛の質も漸次惡くなつて了ふからだと答へます。

雖然又一方の衛生から申しますと、寒い間は兎も角夏の間は髮を束髮にして置けば、自然髮洗ひの度數が多くなるから、年寄は知らず若い人は成る可く夏は衛生上束髮にした方が良いとの說があります。又日本髮は近來自身で結ふ方は稀ですが、束髮は大概自身で結ひますから、女髮結の身に取つては敵で無論有難いものではありません。夫故中には束髮は害があるとも益は更にないなど〻極端に攻擊する者もあるのでせうが、總て物には一利一害は免かれませんから、先づ一年を二季に區別しまして、例年四月から九月一杯を束髮にし、十月から翌年三月までを日本髮に結ぶことし、四五兩月の間は年中の好季節ですから、束髮と日本髮交代に結ぶことにしましたならば、格別髮毛にも害を及ぼすまいと思ひます。何故日本髮が毛の爲に宜しいかと申しますれば、束髮は毛の生へなりを逆さにして櫛の齒を入れ、其上に自身でする爲め、自然不充分に成勝になるに引替へ、日本髮の方は毛の生へなりを其儘に櫛の齒を入れるので、少しも毛に無理をさせず、其上に油をつけます所から、毛の損むこともなければ脫ける憂ひもないといふ說です。一體油は毛の肥料になるものですから、絕えず少しづ〻でも使用して居りますれば髮毛の爲によいのは事實です。併し昨今から秋に至る迄、一般に束髮の殖えますのは、前に申した通り人々が衛生に重きを置くからで、實際束髮は夏の髮として婦人社會に歡迎されて居ります。

△束髮の變遷と其種類

束髮は時代の要求に餘儀なくされて今日の狀態となつたのですから、日本髮の種類が減るに引替へ、束髮の新形は年一年に現はれて種類は益々殖える許りです。雖然其髮容は日本髮の丸髷、島田、銀杏返しの如に永くは行はれません。同じ容の束髮は二年も三年も續いて流行た試しがありません。結局束髮は十人が九人まで髮結の手を煩はさずに自身で結んで濟し、同一髮容に飽ると髮結の手にか〻るのと、一方には髮結が客

の歡心を得んが爲に種々工夫を凝らして新形を考へ、好みの客の需めに應じ結ぶからです。近來一般を通して行はれて居ります束髮の種類は

蒔賀髷結　ローマー　君代結び　九つ卷
青柳結び　伊賀結び　國華卷　御代卷
クイン卷　女優結び　四ツ輪　エス卷
ダブルエス卷　お下げ　マガレツト
コロネーション

等です。右の中で主なる髮容の結び方を申しますと誰にでも結べますのはエス卷で、髻を採りながら、左から前へ輪を作り夫から逆に左へ戻つて後に輪を作り、右を取つて根に至り餘つた髮を根に卷きつけるので、其形が丁度Sの字の如になるからなのです。其最初は三十九年頃で七八年續いて行はれて居ります。夫より容易で倚古いのはお下げで、之は少女の髮で、髮毛を三つ組にして下げ、根を丈長のリボンで飾つて下げたのと、洗ひ髮をバラ髮の儘下げ、之にリボンを飾つたのと二通りあります。マガレツトは三つ組のお下げを引返し、大きく輪にしてリボンで止め、其輪を後へ垂れて更にリボン



で飾つた者で、六七年前からある令孃の髮です。昨今はリボンの外に髱止を髮飾に用ゐます。ローマーは若い夫人にも令孃にも適當した髮で、最初に髮の毛を後から眞二つに分け、少し高目に中を取つて、其所を元結で結び其周圍へ漉毛を入れて搔上げ、中の毛を撫で下してよく搔き、幅凡そ二寸程の茶筅の如き形にし、其毛の先を裏へ持つて行き、其根に括りつけ、左右に分けてくる〳〵と卷くのです。根元へ括りつける裝飾には、夫人の方ならばピンで宜しく、令孃ならば大形のリボンで結び、頭に櫛や髱止を挿すのです。

△新流行束髮の附屬品

次は夏の髮飾り品ですが、淑女社會に歡迎せらるゝリボンは、地の薄い無地、木目又は織物花模樣で、色は水色、鴇色、洗朱、褪紅色、クリーム、肉色、淺黃の如き見るから涼し氣なものです。幅は何れも五六寸以上で華美になつて居ります。夫から櫛と簪、髱止ですが、兩三年以來新ダイヤ入の品が彿々見受ましたが、今年になつてから急に新ダイヤ全盛の時代となりました。

體育上より觀た美人

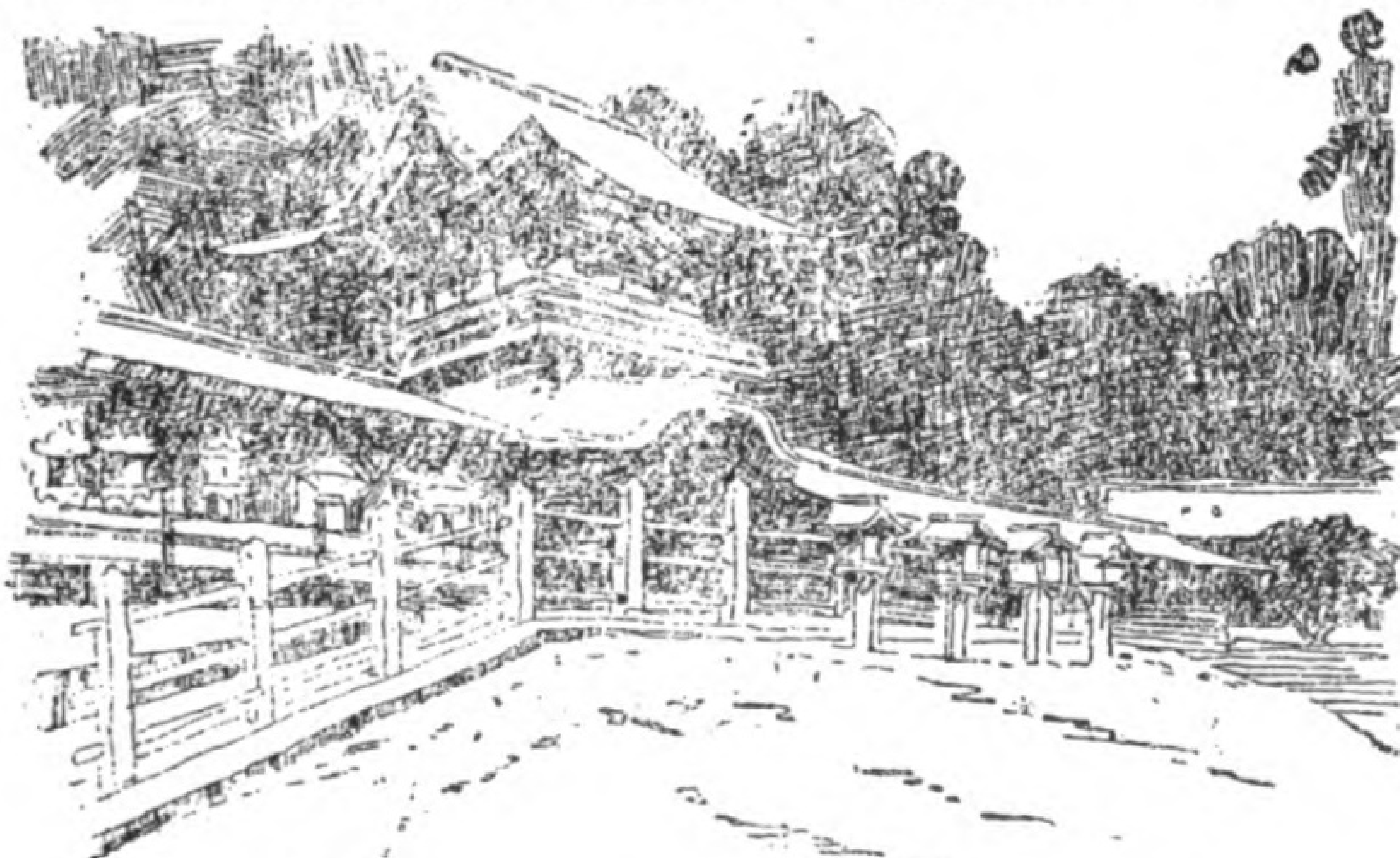
高師教授　永井道明

△體育上の醜婦

體育上から觀た美人などゝ云ふと多くの人は直ぐ體の非常に肥えたのを指すのだと早合點をするのでせうが、それは大なる誤解で、體育上の美人とは決してそんな女角力のやうな、又飯炊女のやうなのを云ふのではありません。單に身體が肥えて壯健であると云ふだけならば房州や相模あたりから出てきたお三どんなどは理想の美人と云はねばなりませんがたゞそれだけでは普通の眼から見て醜いと同樣體育上から觀ても亦醜なのであります。で體育上から美人と云ふのは、道德上、倫理上に於て外部よりは內部、身體よりは精神に重きを置くと同じく體育上からも矢張り內部から外部へ及ぼすのであります。

△飾られた美人

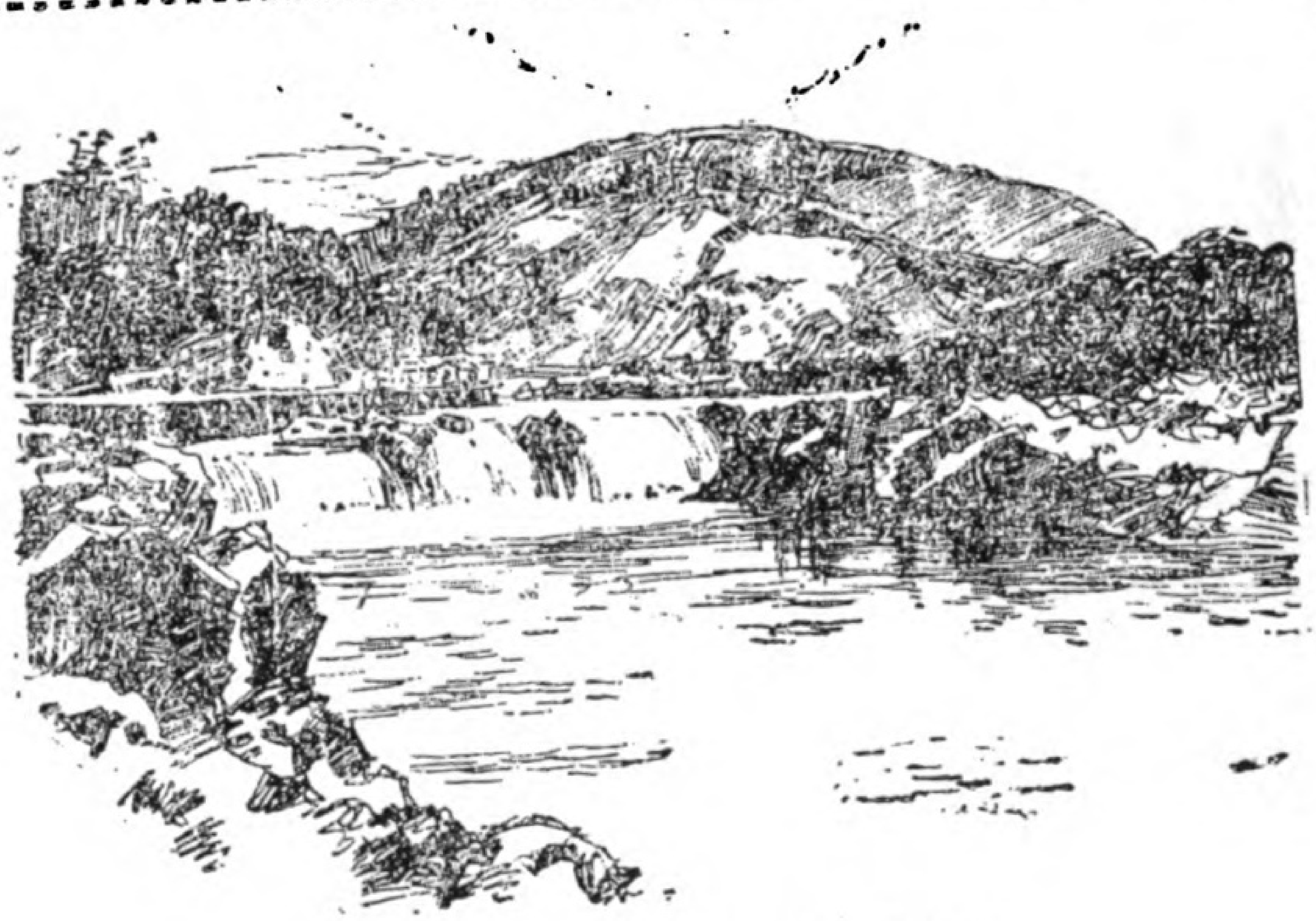
そこで普通の人が美人と云ひ、又婦人自らが美人とならむとして力める處を見ると先づ次のやうな順序があると思ひます。第一には外形ばかりに意を注ぐので內を顧みない即ち衣服や髮飾りにのみ綺羅を張つてさうして美しく見られやうとする。



奈良春日神社

これが稍進むと今度は顏面のみ美しくして見やうとして白粉を塗り紅をつけるなどの化粧を施す事になるの

で、これもその化粧法の巧拙によつて美しさ加減が違ひます。田舍娘がコテ〳〵と白粉をなすつたのは却つて惡感を催しますし又都會の女、殊に或る社會の女などは巧みに紅粉を粧ふて實質以上に美しく見せます。以上の二種は全く人工を以て美しく見せやうとするのであつて所謂、人爲の美に屬する者であります。



耶馬溪鮎返しの瀧

△裸體の美人

次には裸體美人でありますがこれは服裝を以て飾るのでもなく紅白粉を施して美しくするのでもありません。すべて外から添へた裝飾を除いて身體そのものを美しくしやうとするもので美術家、彫刻家などの理想とするものであつて歐米では古くからこの種の美人を喜ぶ風がありました。しかし日本ではあまり發達しませんでした。でかくの如くいろ〳〵の美人がありますがこれらは何れも外部の美に止るものでこれだけでは本當の美人とは云はれません。

△心の美人

如何に身體だけが美しく發達して居ても今一つ内部即ち心の美しさが之に添はねば完全ではありません。身體が心の云ふ事をきかねば立派な活動は出來ません卑しい女と貴い婦人との差は全くこの心から生ずるの

であリまして前の裸體美人と心の美人とは外部から装飾を加へるのでありませんから人爲美に對して自然美と云はれます。

△理想の美人

併し心を美しくするのは心そのものだけではいけないので、健全なる身體には健全なる精神が宿るの格言通り外部も美しくなければ内部も美しくはありません。即ち婦人が行儀作法を習ふのも外部の座作進退から心を正しくして行かうとするのに外ならぬのであります。この意味からして或る程度迄は衣服も美しくせねばなりませんし、紅や白粉も不必要ではありません。たゞ重きを置く程度から云ふて外よりも内が大切であると云ふのであります。これを多くの人が混同して仕舞つて或は着物の美しいのを見て美人と思ひ或は顔だけ美しいのを以て美人と早合點するのです。御當人も亦その心算で美くしい衣服を着、白粉をつけて美人然と澄して居ります。裸體美人は最も體育上から關係の深いもので、外國の婦人は大いにこの美を發揮しやうと力めてゐます。或る社會の婦人は化粧も上手であるし、美しい着物も着て居ますを何處となく卑しく見えるのは心が美しくないからで貴婦人が美しく見えるのは内心の美しい爲であります。

そこで理想の美人と云ふのは以上の四ケ條を悉く具備して居るものでギリシヤの神話にある女神、日本に云ふ天女などはこれであります。ギリシヤの女神は皆裸體でありますが日本のは着物を着て居ります。辨財天など云ふのも亦理想の美人なのであります。

△美人と身體

以上のいろ／＼の條件と身體上との關係を考へますと如何に美くしくしやうとしても馬鹿に肥つて居るのややせて骨ばかりな人は全く此資格にもとります。肥つた人が美しい衣服を澤山に着た處はあまり形のよいものでなく、瘦せた人がよい着物を着てもあまり美ではありません。つまり、身體が調和して發達して居らね

ば美くしい着物も無駄であります。又紅白粉を以て飾るには皮膚が良くなければなりませんがそれは身體が健康で血液の循環がよくなければ得られない事であります。血の氣の失せた、澤のないザラ〳〵した皮膚の人が粉粧を施せば美しい處か却つて美を損じます。そこで身體が健康でなければ白粉も紅も一向冴えないのであります。

裸體美人は全身がよく發育せねば駄目で、皮膚、筋肉、骨格、姿勢、手足の釣り合ひ迄均齊に行かねばならぬのでこれは體育、衛生によつて得る事が出來るのであります。



心の美人は身心一致の關係から圓滿なる心は圓滿なる體から出、反對に圓滿なる體の人は圓滿なる心を持つ、何處から云ふても同樣で兩々相俟つて初めて完全なのであります。そこで吾々の云ふ美人はこれでなくてはならないのです。心の通りに身體を活動させる、身心一致の修養として舞、踊、ダンス作法等が最も宜しいのでこれらの修養から座作進退がすべて意志通りに活らくやうになります。

△目鼻立より目口立

世の中の人は多くの場合人の顔を見てあれは美人だとか、美人でないとか云ひますがその時には一體何を見て云ふかと思ひますと、それは第一に誰でも眼を見ます。その次に口を見ます。眼は精神の窓、口は健康の門で心は直ぐ眼に現はれます。眼の涼しいと云ふのは心が清らかなので、眼に愛嬌があると云ふのは圓滿なる心の表出であります。それ故に病氣の人や僻んだ心の人にはニコ／＼する事は出來ません。身體の弱い人、病氣で身體の衰へてゐる人は心も從つて不愉快なのですから、それらの人には愛嬌のあらう筈がないのです。額に八の字をよせて居るのも内心の表現でヒステリーの婦人などはこの例であります。で眼の立派なのは心と體の立派なのに基します。それから口もその通りで、昔から馬鹿は口を開いてゐますし、賢い人はキチンと閉ぢて居ます。でありますから口に締りのない人は心に締りがないと見て差し支へありません。かうして見ますと人はよく目鼻立ちと云ひますが私は目口だちと云ひ度のであります。

この外心の表情を顔面に現すのは顔面筋の運動で喜怒哀樂をば喜怒哀樂として表出します。即ち心の如何によつて八の字をよせ、笑くぼを生じます。

要するに親譲りの顔の構造目口の大小、鼻の高低などは如何ともする事は出來ませんが（隆鼻術もあるさうですが）自然に供はつた目口よりもその人の修養如何によつて親から生み付けられた顔面の許す限りは美人となる事が出來ます。これが肉體的修養と精神的修養の大切な所以でよく均齊した立派な身體を備へ、之に圓滿な、健全な精神が伴つて初めて體育上から見た美人と云ふ事が出來るのでありまして、この點から見ますと體育上の美人は、道德上の美人と一致するわけなのであります。

風颯々鮓の香高き燈下かな　碧童

竹浸す水添ふべし鮓の宿　禾水

夏季と胃腸病

夏は便通をよくせよ

ドクトル　井上友子

△不注意な母親

一體便通なるものは食物の不消化分すなはち滋養分が吸收された殘りの糟が不用物として體の外に排泄されるので大抵一日一回位が普通です。これが順當に行つてをれば差支へはないのですが時とすると二日も三日もない事があります。人の性質によつては三日も四日もなくつても平氣ですけれど毎日あつた人は一日ないともう不快なのです、で、食物の不用物がどし／＼排泄されますと新陳代謝が盛んに行はれてその不足を補ふために新らしい食物をとつて身體を養つて行く事が出來ますがそれが滯つて居りますと必ず身體に障りが出來ます。日本の人はおしなべて便通と云ふ事にはあまり注意を拂ひませんが西洋の婦人は日々家庭に於ても小兒の便通などには細かく注意いたします。それ故に皆子供の中からよい習慣がついて居ります。處が日本では小兒が病氣などに罹つたをりにその母親に通じはと聞きますとさあ如何でしたかつい用事がありましたので氣が付きませんでしたと云ふのが常です。これは誠に不注意な話なので母親としては毎日子供の便通には注意せねばならないのです。

△便秘は何から起るか

それで便秘と云ふ事は何から起るかと申しますとまあ種々の原因がありますが普通には食物の爲からで消化のよいものでなければならぬと云ふて成るべく糟のたまらない蛋白質ばかり食べて居るとか、野菜の不足とか云ふ事で、一つは腸の筋肉が弱くなつて居るなどもあります。これはあまり便秘が長いために腸が腫れるその結果推し出す力がなくなり痲痺のありさまになるのです。又神經衰弱の人には神經の關係からない事もあります。この外腸がよぢれたり、腸の中に腸が入

り込んだり、脫腸などと云ふ事もあります。何れにしてもこの場合には身體が何となくだるい、元氣がない頭痛がする、氣がぼんやりするなどで何か毒にでも中つたやうな狀態になります。それから又肩が張る、肋骨、横腹などが痛む事もあるので肋膜炎ぢやないかと心配するやうな人もありますが通じをつけるとその痛みは何時の間にか失せて仕舞ふのです。學校の女生徒などに大變のぼせる人がありますが矢張りその原因は便秘にある事が多いので、大勢人の集つた式場などで倒れたりする事も多くはこれが原因です。平生通じをつけて置くと健康もよくなるし、食物に中ると云ふ事も少なくなります。

△いろ〳〵の方法

便秘の場合にも藥を飲まないで濟むなら成る可く飲まない方が宜しいので藥を飲むと癖になりますし又身體の爲にもよくありません。ですから外の方法をとる方がよいのです。それには朝起きて口をすゝぐとすぐ冷水を茶碗に一杯程飲む、又鹽を一匙入れて鹽水として飲むも宜しいし、曹達を少し飲むでも宜しいのです梅干を湯に入れて飲むのも効があります。その外果物は桃、梨、ぶだう、りんご龍眼肉何でも宜しいのです夏みかんなどはあまり酸味が強いために却つて腸を刺戟して下痢を起す位です。又プルンスを一晩水につけて置いて砂糖を入れ煮て食べるのも一の方法です、(これは西洋食料品店にあります) 併し、果物の中でもバナヽとか澁い柿などは便秘するものです。濃いお茶の如きも亦その通りです肉食のみして便秘した人は野菜を食べる事が必要です。食物を注意すると同時に今一つは時間を定める事です、或は朝飯の後とか夕飯の後とか各自の都合のよい時を撰んでその時間にはたとひ催さなくとも行くのです。かうしますと自然習慣がついて後にはその時間には自分が忘れて居ても先から催促される機になります。催しても用をしかけて居るからなどと云ふて耐らえる事は甚だ惡いのでさう云ふ折には何を捨てゝも行かなくてはいけません。それから

腹部を揉むのも亦便通を和らげるものでそれは腸のなりに右の下の方から上に、つゞいて横に右から左に、左の上方から下にと云ふ手順で何回も撫でるのです、西洋人が銑丸を腹の上で轉がすと云ふのも矢張り腹を揉む方法に外ならぬのであります。深呼吸や腹式呼吸などは腸に運動を與へるので宜しい事ですが長く坐つて仕事をして居るなどは宜しくありませんし帶の堅いのや袴の紐の堅いのも亦便通を妨げますから注意せねばなりません。



△便秘を捨てゝ置くと

かうしてすべての點に氣を付けて絶えず腸を清潔にして置く事は最も大切なので腸は恰も人體の下水溝なのでありますから下水が夏に於て殊に排水をよくせねばならないのと同樣にこゝに停滯ができればそれからいろいろの恐ろしい結果が出て參ります。即ち盲腸炎になる事もありますし、腸

が遲緩して筋肉は痲痺するし手の付けやうがなくなります。宿便になると便が溜つて瘤か腫物かと疑ふやうに苦しむ事もあります。熱が出る、痛みが烈しいので醫者も時として何かできて居るのかと思ふ事もあります。子供の便通に不注意で、通じがなくても捨てゝ置きますと三日もしたら四十度以上の熱が出るやうな事がありますし、又ひきつけて大病のやうになる事もあります、なほ子供の病氣は十中の八九迄便通の加減に原因して居りますから母親たる人は決して女中任せにしないで自分がその任に當つてよい習慣をつけるやうにする事が大切であります、この外婦人は便秘の結果腸の張る爲に月經中などには痛みますし、或は子宮の位置が變らないとも限りません。姙娠中の婦人には流産と云ふ恐もありますから宜しく婦人は注意せねばなりません。にきびのやうな吹出物は便秘から出る事が多いので通じをよくすれば大抵は治ります。

△下痢した時には

夏の暑い時には腸胃を痛める事が多いので身體の表面だけは熱くなつて腸胃の内部は冷えて居りますのに外へ出て暑かつたからと云ふて氷などを飲んだりすると下痢を起します。素人は下痢すれば直ぐに止めやうとしますがあれは却つて惡いのです。殘らず出て仕舞はない中はまた惡いものが殘つて居りますからその中は下劑をかけてでも皆出して仕舞はねばならないのですそして、おなかを懷爐で暖めて寢て居るのがよいので食物は無理に食べない方が宜しいのです。自然に任せて置いて欲しくなつたら葛湯か重湯から始めるのです。直ぐにお粥などを食べるのは又こはすもとになります。

浪の名のこと

さなみ、さなみ、さゞなみ、さゞらなみなど云ふはいづれも小さき浪のことなり。されば和歌、文章など作る時、その折言葉の都合によりて、いづれを用ふるも差支へなし。是れ世に歌聖と稱せられし頓昭法師の說なりしに、大隅、薩摩の海には、四月、五月の頃、殊に大いなる浪の立つことあり。里人は之をうなみ、さなみと稱ふとぞ。卯月、五月より取りたる名にやあらん。いと面白し。

――鴨長明――

支那衣食住奇聞

滬上槎客

△一般食物の種類

支那では野菜の培養法はなか〳〵發達したもので、日本の野菜よりもよいものが隨分多くありますが、支那人は肉類でも野菜でも必ず煮るとか、燒くとかしてでなければ決して食べません。

いつか香港の支那人町に寄留して居た或る日本の學生が、鯉を刺身にして食べましたら、其近邊の支那人は『東洋鬼が生魚を食つて居るから、みんな往つて見ろ』と云つて町中を觸れまはつたものだから、近所の者が大勢やつて來て戸や窓の隙間から爭ふて覗かうとしたのに、其學生も當惑をしたことがありました。

その後支那人の評判には、東洋鬼は生の魚を食ふから、虼度人の肉も食ふに違ひないと云つて、それからといふものは女や子供は、ひどく日本人を畏れたと云ふことでした。

支那人は菜漬や大根漬の類でも、決して其まゝで食ふやうなことはなく、一旦水につけて鹽を拔いてから牛肉や豚肉と一緒に煮て食べるか左もなければ豚の脂でよく煮て食べる習慣になつて居りますが、豆腐だけは生のまゝ、醬油か菜種油をかけ、生姜を細かに割いたのをまぜて日本で云へば奴豆腐のやうなことにして食べて居ります。豚や豚の脂は、日本の鰹節のやうに味をつけることに多く用ゐられて居ります。

△肉の煮方と變つた御馳走

鷄肉を煮るには大抵丸の儘二日三日も、硬い肉なれば四日も五日も氣長く煮ますから、箸で拗切るほどやはらかになり、箸ではさんで骨から肉を離すことが出來ます。一體肉は鷄肉に限らず、牛でも豚でも羊でもみな、氣長がに煮ますから、何んな大切れの肉でも、ナイフ要らずに箸で食べることが出來ます。こんな料理法は西洋にも日本にもないことで、全く支那獨特で

あらうと思はれます。

鼈は日本では高價なものですが、支那では澤山ありますから、價ひも廉いので、楊子江の南地では殆んど常食のやうに食べて居りますので、日本人の眼からは非常に贅澤のやうに思はれます。處がこの鼈の煮方もやはり鷄肉や牛肉を煮るやうに煮くづれて生體のわからなくなるまで煮るのですから、他國人などには食卓の上に出されたのを見たぐらひでは勿論、食べて見ても一寸味がよく解らないほどです。

或時日本人が四五人或旅館に泊つて晩餐をたべた時に何だか知らないが、香氣といひ味といひ、非常に甘いものがありましたので、小鳥だらうといふのもあれば、いや鷄の雛だらうといふものもありましたが、結局何だといふことが知れないので、料理人を呼んで訊ねたさうですが、言葉がよく通じないので、現物を持つて來させたところが、青蛙の大きなのを何十匹となく繩で縛つてウヨ／＼して居るを持つて來たのでいづれもぎよつとして中にも氣の弱い人は嘔吐をしたことがあつたさうです。

北京から西の方では、鼠の皮を剝いて小鳥燒のやうにしたり、又は油で煎りあげて食べます。此鼠は田圃に棲む鼠で、家に棲む鼠や、溝鼠などは喰べません。

△支那人の喜ぶ肉中の珍味

支那人はいろ／＼の肉を食べますが其中にも最も珍味として居るのは猫の肉で、廣東邊では死んだ猫一匹が一圓五十錢もするのです。猫の肉も他の肉のやうにして煮るのですが、これには必ず慾雞と生姜を加へて煮るべきことになつて居ります。

牛肉は昔は大牢の味として、宴會などに出したものださうですが、今では豚の肉のやうに用ゐられません宴會の席でも牛肉の料理があれば、主人から貴下は牛肉を召上りますかと問ふくらゐのもので、人によつては牛肉を嫌ふ向きはいくらもあります。牛肉の調理は西洋料理の「スチウ」に類したものが多いやうです。魚類も皆よく／＼煮たのでなければ食べません。

鷄の卵、鶩鳥の卵、家鴨の卵などは鹽漬けにして置て、食べる時には內部が固くなるまでよく煮て、上殼を剝して、膳へ出しますが蛋白は青鋼色に變じて一種の臭氣を發しますので、慣れない人にはとても食べられませんが、食べ慣れると一種のうまみを感ずるやうになるといふことです。

茶は、食卓には無くてならぬものになつて居りますが、大きな茶碗に煎茶を入れ、熱湯を注ぎ、蓋をして一つヅツ人數だけ出します。それを飲みますには、其儘兩手で持つて蓋の隙間から別の小さな器へしたんで日本で振出し藥を扱ふやうにして飲みます。茶受けの菓子はいろ／＼ありますが、普通どこの家でも貯へて置くのは西瓜の種で、これは噛んで碎いて皮をはいで中の仁を食べるのですが剝いだ皮は何處となく吐き散らして不作法千萬なものです。

又支那人は饅頭を好み、食卓にも代用しますが、是は肉饅頭で、餡には豚肉、胡桃、胡麻などを入れて、頗る美味でありますけれども、油臭いのには閉口で



す。

△朝夕の食事と點心

食事は大抵朝夕の二回で、晝には點心として極めて手輕なものを食べます。紳士や富豪は、各々それ〴〵の家風がありますから一樣には云へませんが、常人の家では朝食は九時頃で、槪して肉類料理、其外三四品を用ゐます。點心は正午から一時までの間で、饅頭や、菓子を食べて茶を飮みます又薄き粥を用ふることもあります。晩餐は暮方で、朝くらゐの品數を用ゐます。

漢口邊では普通の商家や職工の家で火を燃すのは大抵朝夕の二回だけで、晝は火を燃やすことをしませんから、大道を賣りあるく饅頭や菓子や、茶を買つて食事をすまします。茶は朝から夜まで市中を賣りあるきますから何時でも買つて飮まれます。

食事の時でも男と女は必ず室を別にして、中等以下の家でも、母子、夫婦、兄弟姉妹が一緒になつて食事することは殆んどありません。男は男同士、女は女同士にする習慣になつて居ります。

又宴會でも常の食事でも長幼、賓主の席を正して食卓をかこみますが、食品は皿鉢に盛つたのを食卓に出しならべただけで、めい〳〵に分けて出しませんから八方から勝手に箸や匙を出して突つき合ひますので、時々頭の鉢合せをすることがあります。殊に常の食事などでは互ひに競ふて箸や匙を出し、又は匙で吸ひ餘した殘りの汁を元の鉢へあけたり、嚙りかけの肉を皿の中へ投げ入れるなど、その亂雜さ加減、不潔さ加減は驚くの外ありません。

△煙草と阿片

煙草は日本のに比べると製法も違ひ、刻み方も粗く色も淡黃色です。煙管は煙が水又は菜種油の中を通つて來るやうな仕掛になつて居ます。此器は外出の際に輿車でなければ攜帶に不便なので專ら室內でのみ用ゐますが、雪隱へ行くにも持て行きます。富豪が煙草をのみます折には、腰掛に倚つて長い吸口を咥へて安座

して居ると侍童が、火皿に煙草をつめて火をつけ、吸ひ了れば吸殻を取捨てゝ新しく煙草をつめかへて又火をつけます。

支那人は阿片をのまなければ社會に顔を出されないものゝやうに心得て居りますが、のめば必ず酔つて眠りますから、先づ横になつて眠る支度をしてから喫みにかゝります。私の知人が或富豪の家に呼ばれた時、頻りに侑められて止を得ず一口吸ひましたところが、香氣は丁度煎豆のやうで頭痛がして堪りませんので止めたさうです。

△婚姻の風俗

支那人の婚姻には門地や血統をやかましく擇ぶといひますが、これは中流以上のことで、普通は日本ならば結納といつたやうな贈物の多少によるので、資産がありさへすれば、どんな美人でも娶ることが出來るのですから、此點から云ひますと婦女子は賣品も同様で男子の玩弄物のやうなものです。

支那人は資産さへあれば、幾人でも妻を持ちます。それには正妻、副妻の名はありますが、それも名目のみで實際は副妻でありながら正妻以上に幅を利かして居るのもあります。又人により正副の別を立てずに第一、第二と番號をつけて居るのもあります。ところが妻を遇するには甚だ苛酷を極めたもので、言語に斷へたほど束縛をするのです。婦人の足を小さく折曲げて置くものも、蓮歩搖々とか歩行を美しくする爲めだとは云ひますが、内實は婦人をあまり外出することの出來ないやうにして他の人と逢ふのを防ぐ爲めなのに違ひありません。それ故、醜い女は、足を折らずに、天然を全ふすることが出來ます。足を折られる美人は一朝火災や其他の變がある時に、逃げ果せることが出來ないで、非命の死を遂げるのが往々あります。

富豪は娘の容貌が醜くとも左まで心に留めないで、別に大金を投じて貧家の美女を買つて養ひ置き、自分の娘を嫁にやるとき養つて置いた美女を權妻として婿の方へやります。此權妻は一人に限りません二人も三

人も分限に應じて副へてやるのです。

婚姻の式は非常に鄭重を極めたもので、隨つてなかなか面倒くさいものですが、大體は新郎が新婦の家へ迎ひに行き、先導して家へ連れて來るのが例です。其時親戚や友人は家に待ち受けて、それから幾日も〳〵酒宴をしますから其費用は巨大なものです。支那では妻妾の多少が貧富の標準になるので、某は五人の妻妾があるから身代がよいだらうとか、某は妻妾一人きりしかないから、さまで金持ちではあるまいなどと云つて居ります。

△芝居と音樂

支那人の耳には、他國人がやかましくて堪らないやうな噪音が愉快に感ずると見えます。貴顯の人などが外出する折には、銅鑼や太鼓などを鳴らして行列を立てゝ歩きます。又劇場の囃子などは大抵の日本人などは頭痛や眩暈をするほど騒々しいのです。

狂言なども單純なあまいもので、一例を申しますと先づ樂屋でいろ〳〵の樂器を鳴らして耳もつんざけるほど囃やし立てますと、双方の花道から大勢の兵卒が手に〳〵槍や刀を振り廻して出て、舞臺で大合戰の體、一方はつひに敗けて逃げ出す、勝つた方は勢に乘じて何處までもと追ひかける此時又囃子が始まつて今度は兵亂を避ける老若男女がジロ〳〵と逃げて來るところへ惡漢が現はれて、其中の若い婦人を縛り上げて人買ひに賣渡さうとする、折しも一方の花道から、氣高き老人が出て來て此有樣を見て、仔細を訊ねると、女が斯樣〳〵といふに、如何にも不愍だといふので惡漢を說諭し、金錢を與れて、婦人を家へ歸す。是で一幕が濟んで、例の如くはやし立てると今度は婚禮の場、前の老人が吉日を擇んで女に良き婿を迎へ大宴會が始まつて、其席で大勢の客がさま〴〵の藝を演じ、目出度く婚姻の式が濟んで孫になる、最後の幕に、老人病氣になり養生いろ〳〵と手を盡しても効なく終に死去し親族愁傷する中にも、助けられた婦人は昔のことを繰返して泣き悲しむのです。夜が更けると、閻魔王や、

城隍などがあらはれて、下官を呼び出し、何故この老人の魂魄を冥府へ呼んだかと問ふと、下官は帳面を出して此者は何年の何月に生れて命數が盡きましたと答へる。すると城隍が此老人は兵亂の時、かやう／＼のことで人を助け、その上良緣をもとめて其人の世繼ぎのあるやうにした陰德があるとて閻魔王と相談の上、今から更らに幾年かの生命を與へると帳面に記し、下官に魂魄を取來させて死人の口中へ入れさせて、みな／＼消え失せると、死人はアッと叫んで生きかへり、家内の者これを見て大によろこび、俄かに盛なる宴會を開いて、いろ／＼の音樂を奏して、それでお了ひになるといつたやうなものばかりで、人情に感じて涙を流すやうな愁嘆場もなく、うつとりと見惚れるやうなよいところもないのです。芝居の囃しにかぎらず言葉には必ず胡弓が伴ひます。そのキー／＼する齒の浮くやうな音が支那人の耳に快くきこえるものと見えます。



支那にも羽子遊びをしますが、羽子は日本で正月女の子が翫ぶのよりも餘程大きく且つ重いもので、五人か十人が輪なりに居ならび、足で蹴て受け渡しをするのですが、なか〳〵巧いもので蹴損つて羽子の下へ落すことなどは稀です。支那人は喧嘩をすると手でなぐらずに足で蹴り合ひますが、これは、こんな遊戯で熟練されるのであらうと思はれます。

△市場の雑観

先づ通貨のことから申しますが、支那で日常使ひますは、永樂通寶、康熙通寶のやうな孔のあいた小さい錢と、金銀は蹄金とて馬蹄の形にした金の塊りで一個四五百兩のものや、碎銀とて大豆粒ほどの銀を紙に包んでその封じ目に富豪の封印を捺し封銀と稱して通用するのもあります買物に行くには、孔のあいた錢を長い絲にさして首のまはりでも肩へでも腰へでも體中卷きつけて出かけ、入用だけ片端から拔取つて使ふのです。

又市場へは必ず秤器を持つて行きます。碎銀は一粒何匁といふ定めがありませんから、買物をして直段が極まれば、腰から秤器を拔いて直段だけの銀を目方にかけて渡します。すると先方で碎銀の正物か贋物かを見定めた上に秤器を出して目方をあらためて受取ると云ふ手數のかゝつた商賣をして居るのです。

一體支那人は貨幣の目方をはかる風があつて、メキシコ銀でも日本の銀貨でも一々秤器で目方をあらためた上でなければ受け渡しをしません。或日本人が、香港の店で五十錢の買物をし一圓の銀貨を出しましたところが、丁度五十錢だけの釣錢でも無かつたものか、斧を取出して銀貨を眞つ二つに割り、双方を秤器にかけて見て重い方を返し、輕い方を取つて、大まけに負けて置きますといつたさうです。すべてそんな風なのです。

又聊かの買物をするのにも、日本で夜店の植木でも買ふやうな値切り方をするのです。或支那商人が骨董品を買ふところを見ましたが、百六拾圓といふ云ひ値

を買ふ方では五圓から値をつけ出し、凡そ三時間餘もかゝつて七十圓で買取つた双方の氣の長さ加減には驚きました。さうかと思ふと、中には一旦値をつけて見て負けない時には、自分が相當と思ふだけの金錢を投げ出し、品物を持つてズン／＼行つて了ふ者もあります。日本ならば、押買ひとか泥棒とか、いづれ交番へ持込むところでありますが、支那では元が法外の掛値でありますためか、負けない／＼と云ひながら、客の持つて行くのを追ひすがるでもなく、又別段立腹した風もなく置いて行つた錢をしまひ込んで平氣で居るなどは、不思議なものです。

市場は非常に雜沓するので、陶器を賣つて居る隣りに肉屋があつたり、野菜賣りの傍に靴屋があるといつた風に何でもかでもごた混ぜの有樣ですが、前に申しましたやうに、錢の勘定が面倒臭い故か、市場ではよく交易が始まります。米を持つて行て肉と取かへたり絹布を持つて行つて道具を買つたり。そんなことで市場はます／＼混雜します。茲に最も不便なのは、米穀などは、買手の方で是非共升を持つとか、砂糖のやうなものを買ふのならば必ず秤器を持つて行つてはかつて見なければならないのです。詐欺や不正は支那商人の常でありますから、賣手の秤器や升などは、一つとしてあてになるものはありません。空手で行つて買物をすれば、先方の不正な秤器や升で、價相當より不足に渡されるに決まつて居ります。

△茶店旅亭湯屋

茶店は何の市街にもあります。中には數百人の客を容れることの出來る大茶店もありますが、此處では茶を飲んで菓子を食ふだけで、酒食はしません。客は大抵商業の相談などに立寄る向が多いやうです。

旅店は、只だ房室を貸すのみで、食事を供するのは稀にしかありません。夜具はすべて自身のものを携帶しなければならないのでありますから、支那の內地を旅行するには、是非共驢馬を雇つて、これらのものを背はせなければならないのです。旅店に着けば、先づ

主人に會つて一室を借受けるのです。此時主人は鍵を渡します。支那は盗賊の多いところで、旅店の下女でも下男でも少しも油斷がなりませんから、出入ともに室の戸は嚴重に鎖ざして置かなければならないのです私の友人が支那の旅店で留守中に傘、手巾の類を、幾度も失ひました。其都度いくら吟味をしても外から賊の入つた形跡がないから必ず下女か下男の仕わざであらうと主人に吟味をして呉れと申しましたら、貴君は何の爲めに鍵を持つて居なさる、そんなことのないやうに戸締りをする爲めに御渡しをして置いた鍵ではありませんか自分の物が自分の不注意で失くなつたとてそれは御自身で私の知つたことではありませんと、却つて逆捻ぢを食はされたさうですが、他人の物をくすねる位のことは、下女や下男は申すまでもなく、主人だとてやり兼ねないから、支那内地を旅行する人は呉々も注意を怠ることができないのです。

湯屋も日本の構造と違ひ、湯場を小さく幾つにも仕切り其中に大桶を置いて熱湯を入れ、其上に板を渡し小さい手洗桶を載せてあります。客は其小さい桶で湯を汲んで體を洗ひ、大桶に入つて温まるのですが、支那人の風として男女に限らず、湯屋では顔を洗ひません。顔は毎朝洗ふから二重の手數をする必要がないとでも思つて居るのでせう。

△貴婦人の日常

支那の婦人は家政を治めることが上手で、大きな邸になると會計係があつて出納方をやつては居りますが多くは夫人自ら家政の整理をして居ります。

上流の夫人連は、質屋とか、小さな銀行とかを私有財産として持つて居ります。これは夫人の勝手にすることが出來るのですが、其大部分は令孃の嫁入支度に使はれるのです。支那は日本と違ひ時々の流行がはげしくないから、それからそれと衣裳を新調する必要はありませんけれども嫁入の支度はなか〳〵大層なもので高價な寶石などを澤山に用ゐますから、どうしても質屋とか銀行とかの私有財産を分けてやらなければな

らないことになるのです。

日本人は支那の婦人は常に家にばかり居るもの、殊に上流の婦人などは、いはゆる深窓に垂れこめて滅多に人に顔を合はせることもないやうに思ふて居ますが北京の上流婦人は、なかなかよく外出をします。誕生祝ひの芝居の時などは、夜半さまでもするほどで、實際外出が忙しい爲めに二日も三日も良人に逢ふ機會がないことさへあるのであります。又近來は外國の婦人とも交際して、外國婦人の訪問でも受けると非常に喜んでもてなしもしますし、自分から出かけて訪問もします。併し人に會ふには大概午後の二時から三時ときまつて居て、其時間外には決して會ひません。何處の國でも婦人が取亂した風で人に接するのは失禮としてありますが、殊に支那人は容儀を重んじますので朝早くから十一時頃までかゝつて念入りに化粧をします。而もそれが自分で滿足するまでに出來あがらなければ決して人に會ひません。



教育は古來の習慣で、今でも女學校へやるなどは稀で、大抵は家庭教師を聘つて置くか、又は時間を限つて先生を呼んで、家で勉強させます。學課は讀書、珠算、習字等で、中には西洋婦人を教師にして英語などを學ばせて居る向もあります。





水樓の曙

夢之華

ギイギイと船の音がする。――

海に臨んだ戸の隙間から、弱い、けれども何となく新らしい力を思はせるやうな風が吹き込んで來ます。宿の夜具はうるさいし、夜着だけではうら寒いものですから、鞄に入れて來た柔らか物を足先きの方へ被つてゐたのですが、やつぱり冷や〳〵した空氣が身に沁みます。私はいつの間にか眼を覺ましてゐたのです。

階下で勝手元にカタコト物の音が聞こえました。

「おや、茗荷はもうないの？」

綺麗なソプラノは赤い手絡の若い主婦さんでしやう。

「いえ、極く芽の小さいのだけしかありませんの。」

これは妹のやうな可愛い女中の聲です。

「さう、それは困つたわね、三番のお客さんがつかりなさるだらうに。」

「さうですわね、妾、ちよつと山浦さんとこのを伺つてきましやう。」

「じやあ、さうしてお呉れ。」

やがて、女の出てゆく輕い足音がしました。三番の客は私達なのです。この頃お魚ばかり食べるせいか、昨日の晝にあつさり茗荷の香の高いお露を添へて貰つて、大變おいしかつたものだから明朝もと賴んで置いたので特別に心配して呉れたのでしやう。

野菜の青い色！　茗荷の高い匂！

ほんとにこの頃は淡い、さつぱりしたものが懷かしいのです。私はついほゝ笑まれるやうな淡い、明るい情趣を感じて、にこ〳〵しながら起き上つて洗ひざしの浴衣にメレンスの細帶をさら〳〵と卷き締めにしました。指先きの靜脈まで、快く淡紅に漲り流れてゐるやうです。





「大層お早いお眼覺めですこと……」

とお葉ちやんと云ふ女が雨戸を開けに來て呉れました。一枚戸を繰ると、カツと強い白日が射し込んで、月明りには際立つて見えた蚊帳の緣も褪色に褪めてゐます。その中に妹はまだ懷かしいスキート・ドリームを見てゐると見えて、きちんと紅縮緬の夜具を被つたなりで、ほゝ笑みに充ちた白い顏だけクツキリ現はしてゐます。

「あら、お妹樣はまだお寢つて入らつしやいますのね。」

「あ、何卒そのまゝにしてやつてゝ下さいな。」

「はい。」

と云つてお葉ちやんは徐かに雨戸の殘りを開けました。町の方から微に鷄の啼く聲が聞えます。ほつれ髮の毛を掻き上げながら、私はまたいつもの癖で、綺麗に磨き込まれた露臺の欄干に凭れました。音もなく吹いてくる風が爽やかに、痩せた頬を撫でます。

暗碧な潮の色！　緩徐な波の音！

何と云ふ麗かな眺めでしよう。じつと見ると近くの磯の海草はか弱い美女のやうに、俯いたまゝ靜かに往來する波の力に任せて、しかもいつまでも姿勢を頽さずにゐます。その傍にはまた名も知れぬ黄色い花がひよつくり浮びました。――常からセンチメンタルな私は、早くも心の奥に囁く或る淋しさに誘はれて涙ぐみさうなうす暗い眸をはげまして、なほも遠い〳〵海面を眺めました。

平常は見えないK――山脈まで仄々と見える。まして、手近なT――山などは油畫の強い繪の具を施したものゝやうにけばけばしく見渡されます。いつもは淡靄や霧に掩はれて、孤島やら船影やらはつきりしない遠い島々にも今朝は早く狹霧が晴れました。島の嶮しい斷崖が見えます斷崖に直立し斜立する青松の細い針葉が煙のやうに見えます。それに貝殻でも葺いたらしいキラキラ人家の屋根の上には淡青い煙と、[illegible]のやうな白雲が幾條かの線をつくつて連つてゐます。――不思議なことには、却つて手近な漁船との間にほの白い靄らしいものが浮んで、瀬すり鳥めてゐます。鳥はどこともなく飛んで往つたり來たりします。或る船のマストに棲つてゐた小鳥の行衛を見守つてる中に私はいつか他所の方へ[illegible]りしてゐました。





「まあ綺麗だこと！」

「今にお日様が上つてよ。」

「千代さん、あの島御存じ？　あれ一昨日行つたＨ──島よ。」

突然、私の室から二つ距つた六番で雀の囀るやうにせはしい人聲がきこえました。若い女の方々の聲です。私はその方へ眼を移しましたが、その人達は座敷の中で話してゐるらしくよく見えませんでも、一番手前にゐる人のお髪と顔とが半分微かに見えました。油ぎつた新式のローマ、初夏のけしの花のピピッドな色彩を思はせるやうな片頰。

「私だつて何だか淋しくつて物足りないわ。」

斯う云つたのはその若い人です。

「それが私にはなみなみでないのよ、強い力を欲すると云つたやうな。……」

「さう云ひますと。」

またローマの人が斯う云つて、白い指さきを髪のほつれに擧げました。私も一緒になつた氣でじつと聞き耳を立てました。

「つまり、何ですれ。こんな清々しい朝は頭の底迄澄み渡つたやうに思へて、強い力が感じられるのです。私、まあ云つて見れば『私は自由を求めます』と云つて、夫や子を捨てゝ出奔する「人形の家」のノラのやうな勇ましい心になりますのよ。」

耳を傾けた私はそのまゝ注意をよそにしました。──六番の室からは間もなく輕い笑ひ聲が起りました。

ノラのやうな勇ましい心！

私は必ずしもノラの近代思想にかぶれてゐるものではありませんから、一概に勇ましいノラの心を耽美するわけにゆきませんでしたけれど、この場合ノラと云ふがひどくなつかしく、デリケートに聞かれました。理知に徹した明るい心！

眞紅に日がさし上ります。──





「みちさん、みちさん……」

私は漸しく妹を呼び起しました。見ると、みち子はもうきちんと朝の身支度をして、露臺の傍に立つてゐるのです。可愛い頰には美しくピンクの血潮が漲つてゐました。

「あら、K——山が見えますのね。」

「あゝ、さしてこちらにはN——町が見えるわ。私も今始めて氣付きました。」

「さう、何だか町の上に幟みたいなものも見えますわ。」

私達は思はず、頰と頰とを摩り寄せるやうにしました。みち子の廂の柔らかく私の顔を撫でた時、私は「ほゝ」と笑ひました。みち子も笑ひました。互ひの白い息……。

——町には豆腐屋のラッパの音が傳はりました。

「お茶を召し上れ。」

と、大ちやんの持つてきて呉れたお茶盆を一寸と見て、みち子は、

「難有う、けれど、姉さん今朝はすぐお散歩したくつて？」

「さうね、行きましやう。」

私達は輕装のまゝ直ぐと階下に下りました。白い沙路は宿屋の庭先きから遠く連つて見えるのです。カッと射す日に眼をしばたゝきながら、二人は赤い緒の空氣草履ザク〱と白沙の路に始めて歩きました。潮の香の漲る朝風を襟と頰に受けた途端、私は又云はぬ哀歎のスエートネッスを感じて、さつきのノラの話や若術のお汁のこと等を一緒に思ひ浮べました。

「好い景色ね、姉えさんはどんな心持ちがします。」

「さうね、……私恰度沖をゆく白帆のやうな氣がしてよ。」

「ほんとに秋ですわねえ……」

みち子はさも感に堪えたと云ふ風で斯う云ひました。私は妹の言葉が自分の云つたことに同感して云つたのだか何うだかよく解りませんでしたけれど、やはり淋しく歎息をしました。眼の前には今帆を上げる遠い船が一艘浮びました。色の赭黒い壓見を無造作に負つた半裸體の女！

八月の惣菜料理献立(一)

日	朝	晝	夕
一日(木)	すゐき、すまし汁	きうりもみ	いか、うまに
二日(金)	しそまきみそ	あぢ、につけ	まぐろ、ぬた
三日(土)	しゞみ、みそ汁	あぢ、しほやき	冬瓜、肉そぼろ
四日(日)	とろゝ汁	いぼたひ、につけ	なす、からしあへ
五日(月)	福神漬	牛肉なべ	かます、しほやき
六日(火)	とうふ、みそ汁	さば、みそ煮	豚肉、つけやき
七日(水)	冬瓜、すまし汁	きうり、なまり、三ばい酢	いわしフライ
八日(木)	きやら牛ばう	きうり、くずひき	ロース、ポーク
九日(金)	なす、すまし汁	あぢ、煮つけ	牛肉、つけやき
十日(土)	たうなす、につけ	いわし、フライ	ちくわ、はす、にしめ
十一日(日)	生姜みそ	いか、小いも、うまに	鯛、うしほ汁
十二日(月)	ねぎ、みそ汁	たひ、しほやき	なまり、わかめ、みそあへ
十三日(火)	小まつな、油あげ、みそ汁	きうり、なまり三杯ず	牛肉、うま煮
十四日(水)	なす、油あげ、にしめ	なす、山かけ	いわし、でんがく
十五日(木)	わかめ、みそ汁	いわし、しほやき	油あげ、につけ

八月の惣菜料理獻立（二）

日	朝	晝	夕
十六日（金）	やきのり、生玉子	かれい、しほむし	よせ玉子、三ツば、すまし汁
十七日（土）	小かぶ、みそ汁	まぐろ、てりやき	なす、しぎやき
十八日（日）	やき茄子	あゆ、フライ	すゞき、あらひ
十九日（月）	きやらぶき	いわし、ぢやがいも、につけ	とうふ、ゑび、すまし汁
二十日（火）	わかめ、みそ汁	あゆ、しほやき	なす、あげ出し
二十一日（水）	ずゐき、油あげ、にびたし	あぢ、につけ	なす、しぎやき
二十二日（木）	かうやとうふ、ふくめ煮	いか、つけやき	豚カツレツ
二十三日（金）	さといも、みそ汁	いわし、しほやき	きうりもみ
二十四日（土）	たうなす、煮つけ	あゆ、にびたし	つけやき、玉子
二十五日（日）	からあさり、みそ汁	やきなす	こんにやく、牛にくにしめ
廿六日（月）	なす、玉子とじ、すまし汁	あぢ、につけ	あんかけとうふ
廿七日（火）	富貴豆	したびらめ、につけ	赤がひ、すのもの
廿八日（水）	とうふみそ汁	あぢしほやき	冬瓜ごまみそかけ
廿九日（木）	ゑびつくだに	すゐきごますあへ	くぢらみそ汁
卅日（金）	しじみ、みそ汁	あゆすまし	いか、うま
卅一日（土）	ねぎ、みそ汁	ライスカレー	ふな、こぶまき

書榮えのある文章

宮田脩

近ごろ婦人向の雜誌が、非常に增加したので、之を機關として各自の苦悶、懷疑を誌上に發表する女子が尠くないやうである。又讀者の中にも、なか〱巧みな文章を書いて、普通の人々には思ひも及ばないほど複雜な思想を明瞭に表し、充實した感情を描寫して行くだけの才筆ある人が多いやうで、これは文運の進步として慶すべきことである。

文章は心に映じた閃き、思想、感情を發表すれば足りるので、何かの目的の爲めに書く、と云ふことは文章の精神でないかも知れない。けれ共文章に依て世道人心を導くとか、社會風敎の上に益すると云ふことは文章を綴る一の重要なる目的であらうと思ふ。尤も世間には「文はたゞ實用に足れば宜し」と云ふ僻見な論を唱へる人もあるが、多少は人心の肺腑を衝き、人心を動かす位の世間の効果を示すものであつて欲しいと思ふ。

然るに何れの婦人雜誌を見ても千篇一律、自己中心に囚はれて、書いてある範圍に映じて居る感情は何となく物足りない浮薄な感じがされるのである。尤も與へられた題の爲めに書く文は、自己の思想を束縛されて居るから止を得ないのであるが、無定見に女の解放を叫ぶとか、甕に詰め込まれたやうな家庭に對する不平を訴へる、と云ふことは興味としては、活動寫眞を見るくらゐの面白味があつても、まだ大なる藝術品として見ることも、大なる說敎として傾聽することも出來難いのである。唯、淺草の賑やかな活動寫眞の前を通り過ぎたと同樣な感に過ぎないので、各自の興味、娛樂としては差支ないが、若しもそれ以上に人の心裡に、光明を與へ人を嚮導することが成し得たならば、世間に對して効果あり、文章を書く上に於ても書榮えのあるものではあるまいかと思ふ。

たとへば彼の亞米利加の奴隷解放の爲めに盡力した

ストー夫人の如き、若しくは世界の平和の爲めにタスファヘンエードを書いた男爵夫人サトナーの如き著作を、少くも我國にも見たいと思ふ。ストー夫人の作は其の發行部數英國に於て百五十萬と稱せられ、又亞米利加に於ても之れに劣らないさうで、其の上、佛、獨等の各國語に飜譯されて、出版界の標準を覆へしたと謂はれて居るが、出版數は兎に角奴隷解放の爲めに注いだ熱誠のほどは大に賞讃せざるを得ないと思ふ。



又サトナーが全世界の全人類が、均しく理想として居る平和の爲めに、其の著作を以て理想を述べ、固い決心と、鋭敏なる感情とに依て斷じてこれが完成を期した熱誠は感歎の外はないのである。

其の結果は最近のことであるから、社會にどれ程の効果を齎したかは、今輕卒に判斷は出來ないがノーベル賞金を得たに依て見るも世道に貢獻した點が尠くないと思ふのである。斯くの如き作は同じ書いても、實

際に書榮えがあると思ふ。

我が國では、ストー夫人に觸れた事柄のやうな問題がないとしても、婦人間の同性の問題として、心ある婦人が看過することのできない問題があると思ふ。

公娼廢止問題などは、心ある婦人の助力す可き事柄であると思ふのである。

必しも多數の婦人が救世軍の運動と共になつて、太皷を叩いて、遊廓に亂入するやうな行動は望まない。悲慘な境遇にある同性の爲めに、筆を振ふて社會の悲慘極まる裏面を訴へるなどは、有益で且つ快心な事で小家庭の不平などを仰々しく並べるよりは、遙かに書榮えがあることゝ思ふ。併しそれは文才があるから直ちに出來ると云ふ問題でなく、相當の研究も要し、相應の條件も要するが、然し尠くとも多數の文章を書く人達の内には、恁かる問題の爲めに努力し、奮鬪を試みやうとする人があつて然るべきで、又是非有つて欲しいと思ふのである。

齒の注意

食物を咬む時には、左右雙方の齒を交るがく使つて、時々一方に休息させれば不好せん。齒齦は齒の根を損じ齲を落しますから、一週間に二回ぐらゐ明礬水で嗽ひをなさい。齒に挿まつた物を放棄つて置くと齒並を惡くしますから揚子で掘出すがよい。呼氣の臭いのは木炭の粉末を飲みますと一時は其の臭みが取れます、根本の治療は胃藥や消化劑を服用し濃厚な食物を廢さねばなりません。口中の不潔から起る惡臭には、食鹽か鹽酸加里水に少しばかり沃度を入れた水で度々吸入か、嗽ひをなさい、毎夜寢る前に齒を磨き嗽をする習慣をおつけなさい。



エスキモー乙女物語

佐々木邦

一

『申上げませうとも、御親切なればこそ斯う種々とお尋ね下さるのですもの、身の上の事は何なりとお話申上げませう。』

と娘は靜かな調子で言つて、正直さうな眼光を凝つと私の顔に浴せかけた。彼女は芳紀二十、エスキモーも此部落中第一の美人で、名をラスカと呼んだ。さうして斯く申す私は彼女の家の客となつてから、最早丁度一週間になる。

『私共の部落は矢張り他の部落と同じやうに凍つた海の上を彼方此方と彷徨ひ歩いて居りましたが、父は二年前に其に倦きて、凍つた雪塊で此の巨大な屋敷を建てました――御覧なさいませ、高さが七尺、長さは他の家の三四倍ムいますよ――此屋敷が出來てからは私共は最早一向他所へ參りません。父は此屋敷を大層自慢にして居りますが、全く道理だと思ひます。貴君も仔細に御覧なすつたら、乾度普通の家よりか立派で整つてゐるのにお氣がつきなすつたらうと存じます。若し未だでムいますなら、是非早速調べて御覧なさいませ。乾度他に類のない贅澤の仕掛にお氣づきでムいませう。

例へば貴君が客間だと被仰つた室の隅の一段高いところね――彼のお客様や家の人の御飯を戴く高座は何處の家にも見られない位の大さでムいますよ――ねえ然うでムいませう。』

『成程。然う承つて見れば成程然うでムいますな。』

ラスカさん。那麼大いのは實際見た事がムいません。彼の位のものはアメリカの一番立派な家へ行つても全く類がムいませんよ。」

此告白が得意と歡喜で彼女の眼を輝かさせた。私は直ぐ其に氣がついて、此娘に對する談話の手心が解つた。

「貴君は乾度喫驚なすつたらうと私は思つて居りました。それから御一つムいます。其は普通の家よりは毛皮が多く床へ敷込むである事で、種々の毛皮が海豹だの猟虎だの銀毛狐だの熊だの貂だの黒貂だの――有らゆる毛皮が數へ切れない程敷詰めてある事でムいます。貴君が寝臺だと被仰つた彼の氷塊で拵へた寝床にしても矢張り同じ事でムいます。お宅の高座や寝床は彼よりも好く出來て居りますか？」

「否、何う致しまして、ラスカさん。お宅のに較べては迚も足元にも追着く事ちやムいませんよ。」

此返答が又彼女を嬉しがらせた。さりながら彼女の胸中にあつたのは單に彼女の美い物好みなお父さんが骨を折つて集めた毛皮の數の事で、其價格の事ではなかつたのである。私は此の山程ある上等の毛皮が一財産である事を――否、私の國へ持つて行けば一財産になる事を數へてやりたかつたが、しかし言つたところで彼女には解らなかつたであらう。此種の品物は彼女の部落では財産と思つてゐないのである。又私は彼女の着てゐる毛衣若しくは此邊の最下級の人の平常着が二三百圓の金になる事並に故國では彼女のやうに二千五百圓もする衣裳を着けて釣魚に出掛けるやうな人には藥にしたくも相識がなかつた事を話したかつたが、矢張り解りさうにもなかつたから、控へて了つた。彼女が再び言ふやう、

「其から彼の水零しの桶がムいますが、私共には客間に二個と其外に二個ムいます。客間に水零しを二個置く家は滅多にムいません。お宅では何でムいますか矢張り客間に二個ムいますか？」

私は此水零し桶の事を思出してげつそりしたが、しかし相手が覺らぬ中に氣を取直して、又斯うおべんち

い、やらを言つた。

「ヲスカさん、自分の國の恥を晒すのは眞に辛うムいます。何本此事は此場限りに願ひますよ――至く貴嬢に丈けの打明話でムいますからね。實を申しますと、ニウヨーク一番の金持でも、應接室に水零しを二個は備へて居りません。」

彼女は忽ち嬉しさ餘つて、毛皮の手袋を箝めた手を拍いた、さうして斯う叫んだ。

「まあ！　御冗談ばかり！　ねえ、あなた、御冗談でムいませう？」



「否、眞面目でムいます。ヴンダービルトを御存知ですか？　ヴンダービルトは殆んど世界一の金持でムいますが、しかし若し私が今神さまの御前へ呼出されるとしても、彼が其應接室に水零しを二個備へてゐると申す事は出來ません。二個は愚か一個もない。若し嘘だつたら、此首を差上げても宜しうムいます。

彼女の愛らしい眼は驚駭の餘りに廣く睜つた。さうして其聲に一種の尊嚴を罩めて徐ろに言ふやう、

「妙ですわねえ――嘘のやうですわ――迚も想像がつ

きませんわ。ヴンダービルトさんは吝嗇なのでせうか？』

『否、然うぢやムいません。彼の氣遣ふのは費用ぢやムいません。が、しかし――さあ――何ですね、那麼事をすると外見を張るやうに思はれて世間體が惡いからなんでせう。然うです、其爲めです、或意味に於て質素な人ですからな。其で虚飾を避けるのでムいます。』

『成程、然ういふ謙遜は至極結構でムいます。尤も餘り極端に走つては困りますけれども――しかしヴンダービルトさんのお家は什麼風でムいますか？』

『さあ、水零しがなかつたりするものですから、自然淋れたやうな不設備のやうな樣子がムいますが、しかし……』

『何うも其に相違ムいますまい。能く想像がつきます。』

娘は少時默り込むで、蠟燭の殘屑を嚙りながら、見たところ頻りに何か考へ出さうとしてゐるやうであつた。竟に彼女は頭を輕く振り、決然として自分の意見を述べ始めた。

『能く底の底まで探つて見ますと、同じく謙遜と申しても其實一種の虚飾に外ならないやうな謙遜があるやうに思はれます。應接室へ水零しを二個置けるのは置かないお方は或は眞正に謙遜な人かも知れませんが、斯ういふお方が却つて其で世間の注目を惹かうとしてゐる事が隨分と多いやうでムいます。私の判斷によると、今のお話のヴンダービルトさんはナカ〳〵喰へないお方でムいます。』

此の水零し二個といふ標準は其本場に於てこそ差支なからうが、すべての人に適用すべき公平なものでないと思つて、私は此判決を改めさせようと努めたが、娘の確信は動かす可くもあらず、いつかな其所說を變へなかつた。

二

彼女は少時してから、

『お國の金持は矢張り私共のやうな上等の寢床を持て

お在で厶いますか――矢張り大きな氷塊で拵へた？」
「さあ、ナカ〳〵上等、否、大層上等のを持つてゐますが、氷塊で拵へてはありません。」
「其は又何ういふ譯で厶いませう？　何故氷塊で拵へないので厶いますか？」
私は其困難な事と氷の高價な事を說明した。すると彼女は、
「おやまあ！　お國では氷をお買ひになるので厶いますか？」
「買ひますとも。」
彼女は無邪氣な大笑ひをして、
「まあ、這麼馬鹿らしいお話は始めて承ります。此處には氷が澤山厶います。さうして一文にもなりません。唯今でも何百里といふ氷が見えます。しかし私は此丈け呉れると言はれても、魚の水胞一個出す氣になれません。
「其は貴孃には氷の價値が判らないからで厶います。ニウョークで夏の眞盛りに此丈けの氷を持つてゐたら、市場にある鯨が悉皆買へますよ。
彼女は合點の行き兼るやうに稍少時私の顏を瞶て、
「眞正で厶いますか？」
「眞正で厶いますとも。」
すると彼女は考へ込むで、間もなく溜息を吐きながら、
「私、ニウョークに生れゝば宜かつた！」
私は單に彼女が了解し得るやうな價格の標準を示す積りであつたが、私の目的は效を奏さなかつた。私は彼女にニウョークは鯨が多く且つ廉いといふ印象を與へ、彼女の口に涎を醸したに過ぎなかつた。自分の仕出來した間違は早く矯めるに若かないと思つて、私は
「しかしニウョークにお住みになれば鯨の肉なんかお好きにならないでせう、何人も好きません。」
「何と被仰います？」
「彼方の人は皆鯨を好きません。」
「何故好かないので厶いますか？」
「さあ、何故で厶いませうかな。喰はず嫌ひだらうと

思ひます。然うです。全く喰はず嫌ひなのです。何時の頃ともなく何處の某かゞ鯨は可けないものだといふやうな事を言觸らしたのでムいませう。斯ういふ評判といふものは一度ぱつと擴がると最早際限のないものでムいますからな。」

「其は實際でムいます。全く實際でムいます。」

と娘は何か思ひ當る事のあるやうに言つて、

「丁度此邊で私共が石鹼を嫌つたやうなものでムいます。私共の部落は最初は石鹼を喰はず嫌ひに嫌ひましたよ。」

私は彼女が正氣の沙汰か否かと思つて一寸彼女の顏を見た。傍目には彼女は眞面目であつた。そこで私は稍躊躇つて、それから愼み深い調子で斯う訊いた。

「失禮ながら部落のお方は喰はず嫌ひで石鹼をお使ひにならなかつたのでムいますか？」

「然うでムいます。しかし其は眞の最初の中の事で、其頃は何人あつて、石鹼を喰べる者がムいませんでした。」

「あゝ、然うでムいましたか。成程、今迄私は貴孃の被仰る意味が能く解らないのでムいました。」

彼女は倘ほ續けて言ふやう、

「實際食はず嫌ひといふものでムいました。始めて外國人の手から石鹼が渡つた時には何人も好きませんでしたが、其が流行だといふ事になりましたら、皆申し合せたやうに好きになりまして、唯今では石鹼を買へる生計の者で買はない者は一人もムいません。貴君石鹼お好き？」

「好きですとも、石鹼がなくては生命が續きさうもムいません——殊に此處へ參りましてからはね。貴孃はお好きでムいますか？」

「えゝ、大好きでムいますよ。貴君蠟燭お好き？」

「好きどころか、絶對的の必需品だと思つてゐます。貴孃もお好きでムいますか？」

斯樣な風で私達は少時の間　魚の腸だの鯨の油だの蜜蠟だの糖蜜だの其他此極地の食料品の名をお互に枚擧してゐたが、乙女は此理想的御馳走を胸中に描き、感

極つてか忽ち卒倒して了つた。私は彼女の顏に雲を掠込むで、正氣に返して。少時して彼女は興奮が治り、間もなく再び身上話に取掛つた。

「そこで私共は此處に此の立派な屋敷に住み始めました。しかし私は別段樂しい事もムいませんでした。其譯は斯うでムいます。私は愛情の爲めに生れて來たので、私には愛情がなくては眞正の幸福があり得ないのでムいました。私は私丈けの爲めに愛されたかつたのでムいます。私は此心を捧げる者が欲しかつたのでムいます。さうして其者から又其心を捧げて貰ひたかつたのでムいます。お互同志深く敬愛するといふ事でなくては私の熱情的な性質は滿足しないのでムいます。私には求婚者が大勢ムいました——頻いくらゐムいました。しかし何れも皆恐ろしい一缺點を持つて居りました。私は早晩其缺點を見つけ出しました——何誰一人匿し通す事は出來ませんでした——と申すのは彼等の欲しがつたのは私でなくて、私の財産でムいました。」



「貴孃の財産？」

「然うでムいます。と申すのは私の父が此部落一の——否、此地方の何の部落にも肩を並べる者のない金持だからでムいます。」

私は彼女の父の財産とは何ういふ物だらうか了解に

苦むだ。其は此家屋でありつこない——此位の家屋は何人でも建てる事が出來る。又毛皮でもありつこない——毛皮は元來有價品と認められてゐない。更に橇や犬、銛や舟、又は骨で拵へた釣針や縫針でも正歟あるまい——否、此種の物は財産でない。然らば此人を斯く資産家として重きを爲さしめ、腹の汚い求婚者を其門に群がらせる物は果して何であらうか。竟に私は其を知る一番の捷徑は訊いて見る事だと思つた。そこで訊いて見た。私の質問は忽ち彼女の相好を崩した。之によつて私は彼女が先刻から訊いて貰ひたくて悶えてゐたのに氣がついた。私が何うして知らうかと苦心したと同程度で彼女は何うして話さうかと苦心してゐたのであつた。彼女は密談でもするやうに私に寄添つて、

『父の財産が何程か當てゝ御覽なさい。決して當りません。』

　私は沈想默考を粧つた。娘は私の眉を嚬めた屈托顔を然も興ありげに見守つてゐた。而して私が到頭匙を投げて、何卒此極地のヴンダービルトの財産を敎へて胸の中の渴望を靜めて下さいと降參した時、彼女は私の耳元へ口を寄せ、聲に一種の力を罩て、斯う囁いた。

『釣針が二十二本——骨のぢやなくて外國の——眞正の鐵で拵いたの！』

三

　其から彼女は自分の言葉が私の上に如何なる効果を及ぼしたかを見る爲めに、芝居がゝりに飛退つた。私は彼女を失望させまいと思つて全力を盡した。卽ち私は顏色靑ざめて、斯う火息を吐いた。

『南無三寶！』

『あら、あなた、全くの眞正でムいますよ。』

『ラスカさん、貴孃は私をお瞞しになるのでせう？嘘でムいませう？』

彼女は喫驚して且つ急込むで、斯う叫んだ。

『全くの眞實でムいます——一言一句眞實でムいます。お信じなさい。お信じ下さい。もしお信じ下さいまんの？　信じると被仰つて下さい、ねえ、あなた

信じると被仰つて。」

「然樣、成程、信じます。今信じようとしてゐるところで厶います。しかし貴孃も餘り突然ぢや厶いませんか？　思ひもかけなかつたので、眩暈が致すくらゐで厶います。斯ういふ事は這麼に突然に被仰るものぢや厶いませんよ。さうして：：：」

「何うも眞にお氣の毒で厶いました。私、つい：：：」

「否、最早すつかり氣分が治りました。最早何にも苦情は申しません。貴孃は未だお若くてお氣がつかないので厶います。又無論貴孃の被仰る事が甚麼に私を愁かすか豫め御見當がつかないので厶いませうから：：」

「眞正に申譯が厶いません。もう少し手心をして申上げれば宜しう厶いましたのに：：：」

「然樣で厶います、最初に五本か六本ぐらゐの事を仰有つて、それから段々と：：：」

「分りました〳〵、それから段々と一本二本と殖して行つて、それから――あゝ、私、眞正に何故這麼に氣がつかなかつたのでせう！」

「否、最早お構ひ下さるな、御心配は御無用で厶います――大分快くなつて參りました――間もなく悉皆快復致しませう。しかし――少しも用意してゐず又餘り氣の強い方でもない者に突然二十二本全體を浴せかけなさるものですから：：：」

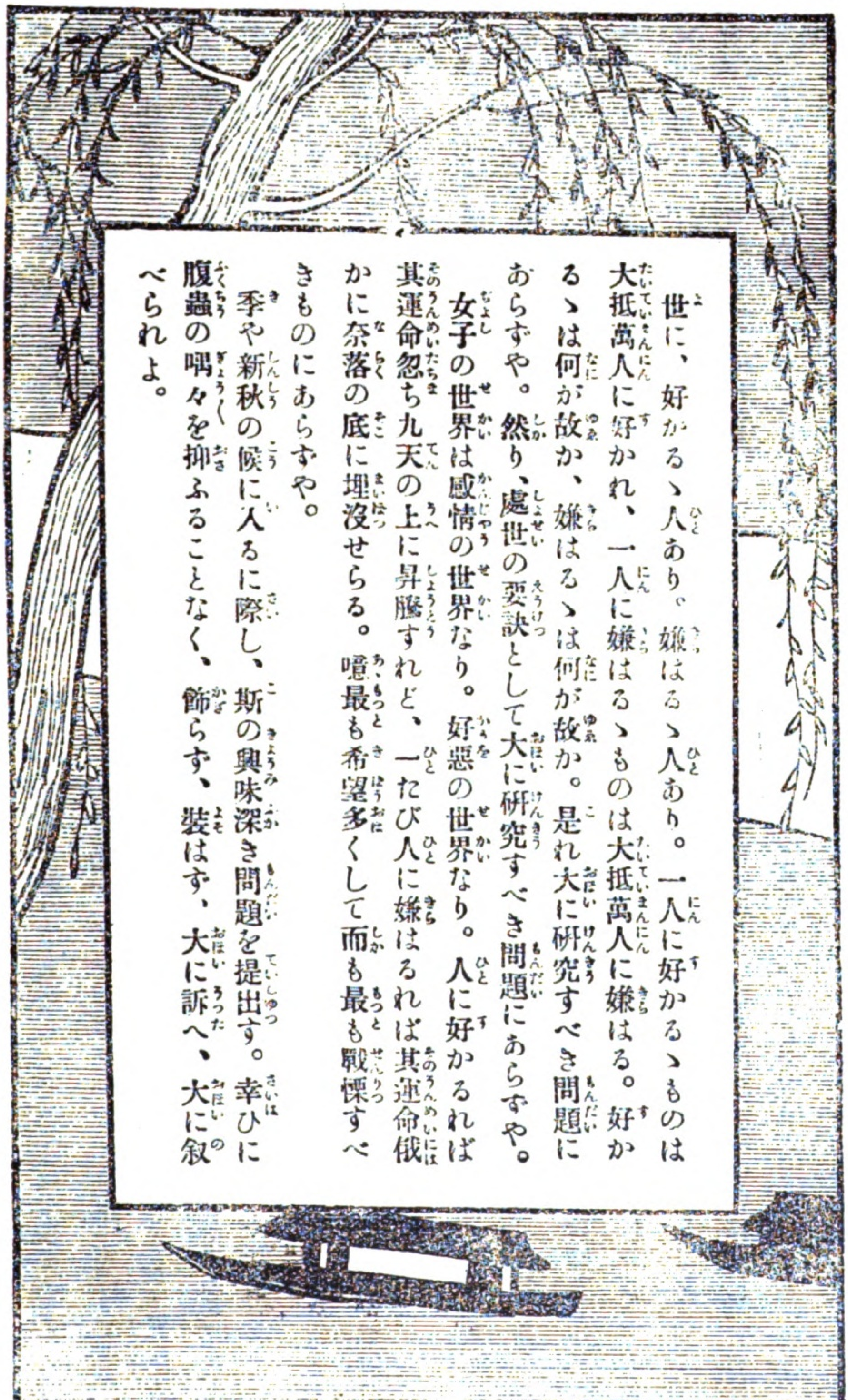
「御免遊ばせ、全く私は行き屆かない所爲で厶います。しかし何卒堪忍して頂戴！　堪忍すると被仰つて頂戴、ねえ、宜しう厶いませう？」

私は宥めさせたり賺させたり散々油を絞つてから、彼女を堪忍してやつた。そこで彼女は以前の通りに快活になり、次いで物語は再び進行し始めた。間もなく私は彼女の家寶に尚一種――其は寶石らしかつた――ある事と彼女が又私に腰を拔かさせぬやうにと思つて、遠廻しに其を話してゐる事に氣がついた。しかし私は其物品の事を聞きたかつたので、何卒何ですか教へて下さいと懇望した。彼女は未だ餘程懸念してゐた。けれども私は是非と責付いて、今度は四股を踏むで用意

女學世界秋季增刊

嫌はるれ人と

◎燈火親むべく、筆研愈ゝ佳なる好季節來らむとす！



世に、好かるゝ人あり。嫌はるゝ人あり。一人に好かるゝものは大抵萬人に好かれ、一人に嫌はるゝものは大抵萬人に嫌はる。好かるゝは何が故か、嫌はるゝは何が故か。是れ大に研究すべき問題にあらずや。然り、處世の要訣として大に研究すべき問題にあらずや。

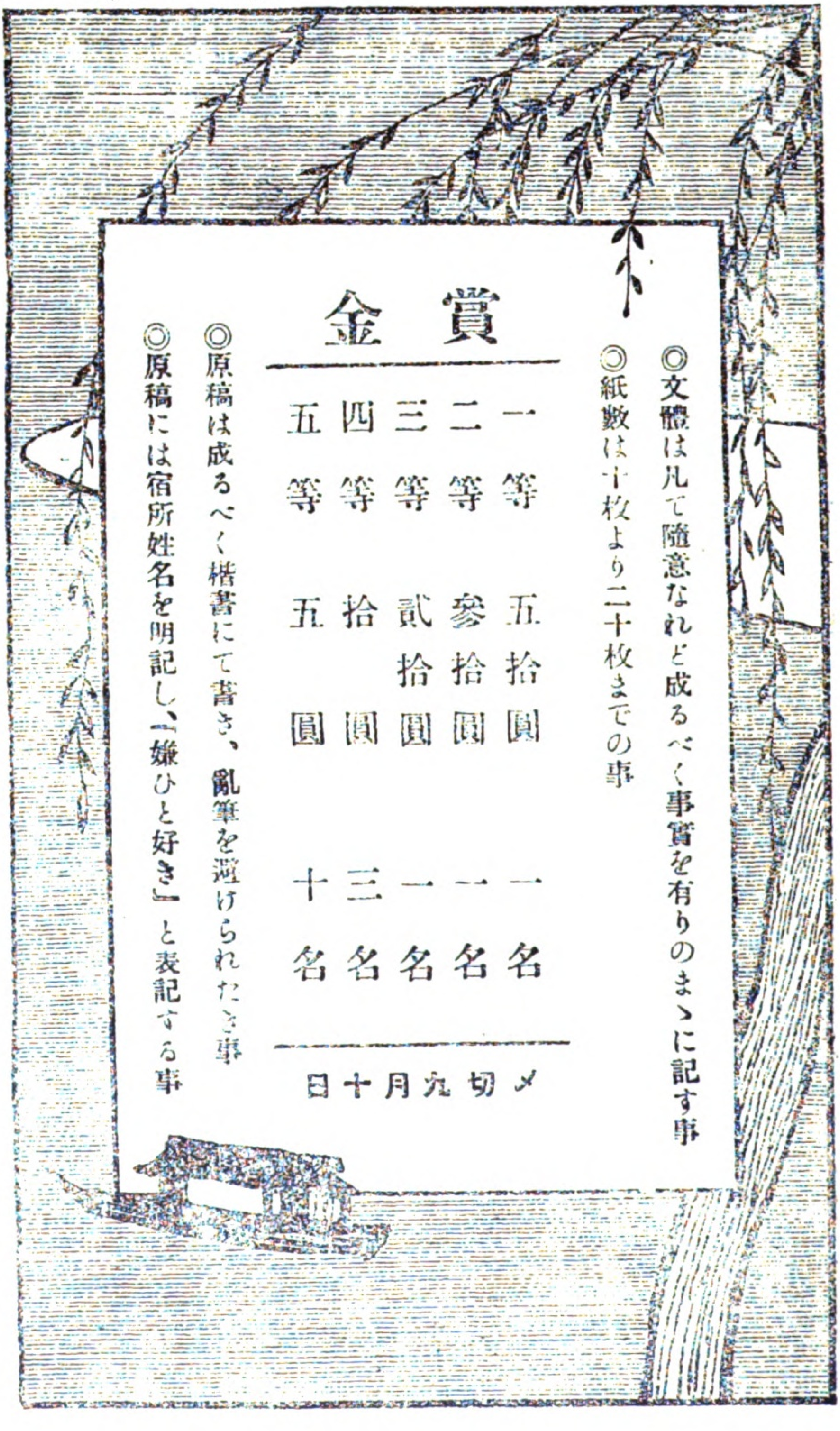
女子の世界は感情の世界なり。好惡の世界なり。人に好かるれば其運命忽ち九天の上に昇騰すれど、一たび人に嫌はるれば其運命俄かに奈落の底に埋沒せらる。噫最も希望多くして而も最も戰慄すべきものにあらずや。

季や新秋の候に入るに際し、斯の興味深き問題を提出す。幸ひに腹蟲の喝々を抑ふることなく、飾らず、裝はず、大に訴へ、大に叙べられよ。

好かれる人

懸賞募集

十月十五日發行



◎文體は凡て隨意なれど成るべく事實を有りのまゝに記す事

◎紙數は十枚より二十枚までの事

賞金

一等	五拾圓	一名
二等	參拾圓	一名
三等	貳拾圓	一名
四等	拾圓	三名
五等	五圓	十名

〆切九月十日

◎原稿は成るべく楷書にて書き、亂筆を避けられたき事

◎原稿には宿所姓名を明記し「嫌ひと好き」と表記する事

◎新秋玲瓏たると共に、願くば充實せる思想を傾倒せられよ！

してゐますからと言つた。彼女は矢張り不安心らしかつたが、此不可思議を洩して、私の驚愕と感歎を博したいといふ誘惑は彼女の抵抗出來ぬところであつた。そこで彼女は其品物を自分の身邊に携帶してゐると打明けた。さうして貴君眞正に大丈夫ですかと言ひ――尙ほ其上に念を押して――彼女は懷中に手を差入れ、心配さうに私の顏を打目戍りながら、潰れたやうな四角い眞鍮の一片を取出した。と見ると私は忽ち悶絶の樣を粧つて、彼女の上に倒れ罹つた。是が彼女の心を喜ばすと同時に殆んど顚倒せしめた。私が正氣に返り落着くのを待兼ねたやうにして、彼女は此寶物に關する私の意見を求めた。

「何う思召してムいますつて？　いやもう何とも申しやうのない見事な品と存じます。」

「眞正でムいますか？　能くお褒め下さいましたしかし實際何人でも夢中になるやうな品でムいます。然うぢやムいませんか？」

「然うですとも。私は世界中の富よりか其方が欲しうムいます。」

「私、屹度貴君が感心して下さるだらうと思つて居りました。眞正に立派だと存じますわ、さうして何處へ參つても此地方には全く類がムいません。北の極から遙々と之を見に參つた人が大勢ムいました。貴君這麼のを御覽になつた事がムいますか？」

「否、唯今始めて拜見の榮を得た次第でムいます。」

善意ながら斯ういふ嘘を吐くのは實に胸苦しかつたといふのは私は今迄に這麼のを數限りなく見てゐたからであつた――彼女の此寶石といふのはニウ、ヨーク中央線の古い手荷物合札の叩き潰されたのに外ならなかつたので。

「何うも驚きましたね。貴孃は斯ういふ金目の物を身につけて、犬一疋もお供に連れず、全くの獨り歩きをなさるのぢやムいませんか？」

「シッ！　まあ、お靜かに……何人も私が之を持つて步いてゐる事を知らないのでムいます。皆は矢張り父の寶藏に仕舞つてあると思つてゐるのでムいます――

平常は然うでございますから。」

「寳藏は何處でございますか？」

考へて見れば是は甚だ氣の利かない質問であつた。

彼女は暫少の間キヨチ〳〵として當方を疑ふやうな樣子であつたが、私は、

「もし〳〵、私を怖がつては可けませんよ。故國には七千萬の人間が居ります。さうして其の七千萬の人間の中で、私が其では困ると申しても、勘定しないで釣針は預ける位まで私を信用しない者は一人も厶いません。」

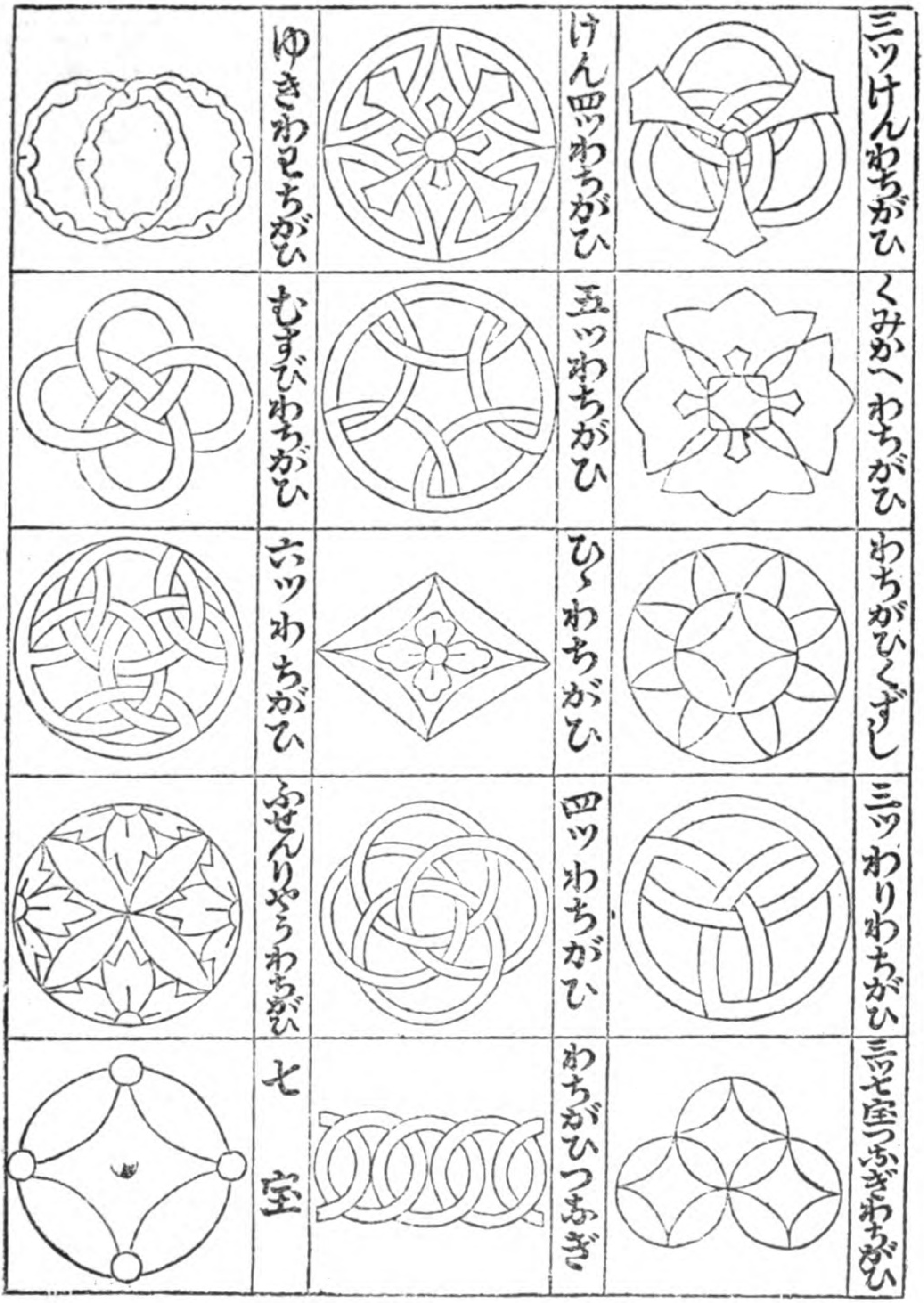
此言葉は安心して、彼女は家の何處に釣針が匿してあるかを語り、次いで屋敷の窓になつてゐる氷板の大きさを自慢して、這麼のを故國で見た事があるかと訊いた。私は巧く調子を合せて彼女を喜ばせた。彼女を喜ばせる事は眞に容易でもあり又愉快でもあつたから、私は彼女を又とない幸福な娘だと言ひ、且つ彼女の屋敷、寶石、財産を始めとし、有りと有らゆる物を褒めちぎつて、最後に彼女は全く此等の特權を悉く受けるに相應しい乙女であると結論した。(Mark Twain)

——次號完結——

帶の歴史

古事記の伊弉諾命の段にも、帶の事が見えて居りますし、又神代紀に記されて居ります、尤も其時代には、多分布や紐の樣な帶が用ゐられたことゝ思はれます奈良朝頃は、男女とも衣と裳とに服裝を別たれましたので、帶は餘り必要の無い物となりまして、裝飾に用ゐられた位で、禮式用には、大帶を用ゐましたが、是等は多く革製でありましたから、革帶と稱へて居た樣です。夫れから又帶の飾り金具を、銙と稱へまして、圓い物と角な物とがありました、而して革帶にも紋の有るものと無いのとがありましたけれど、後には革帶も主に石類で飾りを付けた物が行れましたので、石帶と稱へる樣になつたのださうです、又常服の時には絝帶とて、絲で組んだ物か、布帛で作つて其心に鳥の子紙を入れた物を用ゐ、總て前で結んで居た樣です、平安朝は、衣服の制度も一變しまして、上下別々でありました物が、一ツの着物となつて、其丈けも長くなり、帶は胴を折る爲に必要な物となつて來た樣ですが、裂地は、重に着物の裁餘りの布片で、凡そ二寸許りの幅に揃へて締めた樣で、其締方も左右何方かの脇で、ダラリと結下げて居た樣です。(三越中上氏談)

輪違ひの意匠


三ツけんわちがひ
けん四ツわちがひ
ゆきわ乙ちがひ
くみかへわちがひ
五ツわちがひ
むすびわちがひ
わちがひくずし
ひしわちがひ
六ツわちがひ
三ツわりわちがひ
四ツわちがひ
ふせんりやうわちがひ
三ツ七宝つなぎわちがひ
わちがひつなぎ
七宝



和歌

一等

○管絃の樂いまやみて蒼穹の星しづかなり夜るのあめ地　山口　卯花子

評　艶麗にして又森厳。

二等

○白けたる張板の衣剝ぎし跡泣きて涙の乾けるがこと　京都　長谷川まさ子

評　若き女は何人も此の感あるべし、悲むが如く、罵るが如く、自暴するが如く、自棄するが如く、いと面白し。

○相見しは成田の祭のみあれの日笛もどかしき夏の夜にして　成田　白梅幸子

評　詞調なめらかにして、何となく面白し。

三等

○池殿に青うすものゝ伶人が笛とる宵よ風かをり來る　京都　白桔梗

評　着想よけれど、詞調おだやかならず、殊に「風かをり來る」は無理に着けたるやうなり。

○月影に雨の名ごりの雫見えてなびくも涼し青柳の糸　石川　德久達子

評　美しき景色なれど、思想は古し。

○山の井に口そゝぎつゝ紫の榛名を仰ぐ夏の朝かな　群馬　藤田ふさ子

評　夏の朝のすが／＼しき景色よくあらはれたり。

秀逸

○赤松の林を透きて夏の空あをきかぎりを鷹の舞ひぬる　小石川　工藤初恵

評　よくある景色なり。

○ともすれば寂しきまゝにそのかみのそのひと言を口まねて見つ　淀橋　貝谷むら子

評　眞情流露たり。

○白鷺の立つ澤の邊は靜かにて藻の花かをる夏の眞晝日　伊勢　みさを

評　風さへ動かぬ暑さの中の景色よくあらはれたり。

○　麹町　佐々木菊枝

とふ人もなく荒れはてしおくつきの垣にまつはる晝顔の花

評　墓畔のひるがほ、あはれさ一入深し。

○　埼玉　清水たか子

洪水の跡をとゞめしこの街のひくき家並に夕日たゞよふ

評　洪水後の夕照はよき歌題にあらずや。

○　岩城　赤羽よし子

城あとのみほりに紅くかゞやける嵐の後の入日さびしや

評　嵐の後の落日、あか〳〵として城址の隙に沈まんとす、取材消白し。

○　大阪　竹本萌子

み社の前に額づく山伏をめぐり流るゝ岩清水かな

評　「岩清水」の一語、よく山伏に對せり。

○　横濱　田巻よし子

赤く青く花火あがれる夜の空を人なき丘にひとり眺むる

評　こは失戀の人か、さりとて花火を見むとの心更にいぢらし。

佳作

○　千葉　渡邊ちゑ子

いかにして語りあかさむ口なしの花にひめたる我がこゝろかな

○　遠州　伊藤朝江

水ぐろきめぐる音してふくろ夜の黒川づゝみ螢むれとぶ

○　神戸　白菊

夕空を眺めて一人もの思ふ眼にふといりぬ長き尾の星

○　北海道　小町郁子

夢のまに春すぎにしかうつせみの聲かしましの夏とはなりにき

○　本郷　横田佐久

靜けさの中より初夏の風うごき裾より明けぬ富士のあけぼの

○　長野　上條さや子

初夏のいさゝ小川のいさゝ石その石の上にせきれいの飛ぶ

○　廣島　清子

大比叡や小比叡の嶺にほゝゑめる色香なつかし白百合の花

○　[illegible]　坂本雛仙子

[illegible]褐色にふくらみ來たる夏潮よ少女の歌ふ歌のあかるさ

○　瀧の川　須本ふく子

夏の月はてなき海を白うてりて涼しき宿の枕邊に入る

○　下關　山本芳子

わが古き戀思はする撫子の花に糸より細き雨ふる

○　淺草　奥田松子

曉の海邊に立てば心地よし島紫に青嵐吹く

○　近江　月雲花子

彼の山を黒雲包みおどろ〳〵天地鳴らして夕立の來る

○　名古屋　波の花

紫の天のとばりの雲晴れてわだつみ廣く日はさしのぼる



俳句

天

關の松に日出づ暁や百合も榮ゆ　尾張　むくろ女

地

瀧壺の水溢れゐぬ夏の月　佐賀　池田櫻子

人

籠ぬけて草紙の上や這ふ螢　靜岡　北川和子

秀逸

男波ひけば來る女波磯馴松の蟬　京都　元生留子
佛性の蓮の花の白きかな　神戸　山村香枝
涼しさや草の葉わたる雨の蟲　茨城　岩田清香子
牧廣ゐに草咲けり梅雨の零い葉　愛知　鈴木よしの
入海晴の松間飛びかふ燕かな　大阪　吉田玉代

佳作

月見草眞廣き原や天の川　本所　大石たか子
花卯垣に鐵砲町となる馬場のあり　豐橋　高木けい子
登鯉や家鴨を飼ふ水車宿　大坂　中川よし子
夏菊に絹行燈の灯影かな　京都　むこう
コスモスの花に寢むたき机かな　近江　中川君子
雨晴の柳に淡き螢かな　神戸　闌
書にふけて夢見心や百合匂ふ　下谷　大上菊子
土塀崩れし社家のすたれや竹の秋　神戸　安達釉子
若竹や寫經の硯乾く緣　芝　小倉淑子
蟲干や蝶と化したる夢日記　牛込　福岡なつ子
銅像の面に輝く若葉哉　越前　山口靜枝
羊遊ふ山ふところの淸水哉　麹町　芳野春子
背戸に生ふる藏榮も虹の梅雨明り　愛知　近藤田鶴子
蘆風や夏の月川舟も遣る　愛知　海川しも
稻妻や川尻の水高鳴りに　下關　木本君子
黑猫の眠ろ病や柳散ろ　青山　森野英子
開拓の藪古非花茨の雨　愛知　後藤ふゆの
溫泉保養の紫陽花に初蟬も見ろ　三河　美枝
源氏よむ人ぞ欲しけり宵閑　石川　水野たまき
社參すや鹿の子媚びよる茶屋の橋　牛込　鈴山廣子
姫君に薄着まゐらす暑さかな　京都　谷川淸子
雲踏く拙き筆を夕立てり　北海道　齋藤すつ
猫出てゝ遊ぶ野寺や夏の草　京都　白桔梗

時鳥更けて苦屋の灯哉　神戸　石原加鶴子
白百合に山蝶狂ふ清水かな　横濱　大柴幹子
牧は塔を牛追へり村は若葉して　豐橋　本田せん子
髮多き人と生れて暑さかな　横濱　石川八重子
樓の舵をなつかしみ覩る鵜飼かな　甲斐　横谷みの
薫風や女護が島出る貢船　相州　赤星榮子
人住まぬ破れ樓、萩も亂れ垣　横濱　石川八重子
南極の土産話や燭涼し　瀧の川　榎本ふく子
牛若も思ひ出噺し夏の月　吳市　森靜子
日向葵の西向く頃や行々子　埼玉　清水たか子
紫陽花や法話崩れの雨となり　長崎　太田れき子
睡蓮に人待つ宵の灯かな　神田　八木みどり
牛の背に雲落ちかゝる夏野哉　北豐島　中川ふれ
唱歌きけば思ふ母校や百合白し　神田　太田修子
睡蓮の香に醉ふや水神の杜　山口　市川利子
花散つて園生曇りや時鳥　四谷　佐藤勁
湖にのぞむ關所や秋早し　本所　大石たか子
公孫樹青葉亭々として寺底し　基隆　伊藤朝江
夏の日や絲掛白き濱の院　東京　木村千代子
路樹根がへりして馬車止めや蟬の聲　小樽　進藤なみ子
御野立の雨となり夕顔の咲く　豐橋　平出靜子
打水や緣先近き紺行燈　水戸　小川野螢子
樹々活くろ雨後の園生や蟬涼し　小樽　高橋末子
青嵐帆任せ飼犬か丸寢かな　小樽　高橋富美子
釣干に魚乾からびる暑さ哉　彦根　村田政子

柵卓にや門行くや時鳥　神戸　渡邊榮
狹田百町な刈干す溜池蓮もあり　神戸　牧野操子
風鈴や簾に映る竹の影　淺草　奥田稔子
螢賣更けて戻ろや草の宿　名古屋　渡邊滿壽
牛の背に落日や茨の花白う　大阪　湯川しげ子
衣更へて若葉の寺を訪ふ日かな　奈良　谷村夏野
古墳掘れば露湧く珠や夏の草　旅順　山本やすゑ
一族に十戸の村や草茂る　肥前　隈部芳子
大沼に小沼續きや飛ぶ翡翠　肥前　隈部信代
心ゆくばかり涼風に君泊めて　肥前　隈部ふじ代
往年の悼み事栗の花頃や　横濱　齋藤壽子
風鈴のゆらぎ涼しき茶の間かな　本所　岡井久江
髮洗ふ女涼しや月の宿　京都　船木夢子
乳しぼる牛おとなしや今朝の秋　青山　森野英子
朝顔を徒然草に栞せん　淺草　山本せん
松涼し明石の別墅使ある　大阪　觀錦子
時鳥なく草戸今宵客もある　常陸　折戸雪子
淺草昔ながらの繪師住める　伯耆　戸張花子
葉柳や人馬遠きに豆の如し　下谷　松島鶴子
閑な木曾に筆とる客や雲の峯　京都　長谷川まさ子
日盛りや丁稚と見えて饅頭笠　對馬　中村花子
はれ橋の向ふ藪蔭夏の月　名古屋　渡邊昇榮
草の名のやさしさしさよ庭涼し　大阪　得田方千代
風呂落す藪家梅雨月淡うてる　愛知　花桐眞千
餌切れ鳴く鶏紫陽花の雨夕　大阪　京林花子

新刊紹介

○**註解古今名歌新選**（窪田空穗著）敷島の道は我國の國粹なり、されば神代の昔より始まりて今日に至るまで絶ゆることなく、これを詠じこれを誦して優美なる情操を養ひ來りぬ、然るに古來撰集及び家集の數はなはだ多きが故に、其等の中より名歌を撰ぶこと甚だ困難なりしが、此度斯道に造詣深き空穗氏よく古今の名歌を撰擇し、一册の中に集め且つ欄頭に其意を口語體にて解釋したれば、初學の者は勿論一般の人士の爲めに頗る便利たることを失はず（定價壹圓、博文館發行）

○**亂れ雲**（藤井瑞枝著）本書は湘南の一小漁村に僑居せる藤井瑞枝女史が生前の遺稿なりといふ、收むるところの文章二十有餘篇、事實を有りのまゝにすら〳〵と描寫したるあり、鋭き觀察を以て突込んで書きたるあり、沈思默想して人生の機微を穿ちたるあり、流石はさま〴〵な境遇を經來りたる女史の筆として面白きこと卷を掩ふ能はざらしむ、恩師村上博士の序文及び島地雷夢氏の女史に對する批評を添へたり。（定價八拾錢、丙午出版社發行）

○**家庭日用婦女寶鑑**（國分操子著）表題に示せる如く婦人に必要なる百科全書なり、第一編にはまづ我國の國體及び皇室を說き、次で教育、禮式、家政、衞生より和歌、文章、書畫、音樂、手藝、料理法に至るまで、なにくれとなく精しく說明したれば、本書だにあらば、婦人日用の事柄は愚か、大底のむつかしきことまでも間にあふべし、殊に紙質良好、印刷鮮明裝釘も亦た美し。（定價三圓五拾錢、大倉書店發行）

○**親鸞聖蹟**（安藤正純著）本書は著者が東は越後より西は京畿に至るまで一々歷訪して親鸞の一代記及びその舊蹟を記したるものなるが、筆致奔放にして快言ふべからず、恰も懸河急湍に臨むがごとき概あり。（定價壹圓五拾錢、金尾文淵堂發行）

○**學校の意味**（文學博士遠藤隆吉著）凡そ學校とは如何なるものぞ、單に或る種の技術、自然界の智識を得るを以て足れりとせば即ち罷まむも、更に一步を進めて之を修養的意義に解し、以て修身科に總括せしめざるべからず、著者は此の見識を以て具さに學校の意味を解けり、故に教育者と被教育者とを問はず、苟も文明的空氣を呼吸せんとする者は、深く本書を讀みて考へざるべからず。（定價七拾錢、博文館發行）

○**五々の春**（河岡潮風著）著者由來病弱なるにも拘らず赤手奮闘能く今日の名聲を得たり、併も年齡わづかに二十有五、即ち五々の春を迎ふるに際してその記念として本書を出す、論文あり、紀行文あり、隨筆あり、和歌あり、何れのページにも生氣躍るが如く、實に快男子の快著といふべし。（定價八拾五錢、博文館發行）

○**通俗トラホーム豫防法**（井上豐太郎著）トラホームは恐るべき眼病なり、ひと度これに患ふれば容易に根治することを得ず、本書はトラホームに就て極めて通俗にその病根、治療及び豫防法を說きたるものなり。（定價參拾錢、博文館發行）

○**追懷**（鮫島大浪著）別れるまでの女の煩悶を描きたる小說なり、寸珍も寸珍、極めてアッサリと氣の利いたる小冊子なり。（定價二十八錢、好文堂書店發行）

○**學校家庭兒童の應急手當法**（永井潜作氏著）幼き兒童等は俄に怪我したり或は病氣にろこと多し、この場合に處する應急手當法を述べたる書なり、醫師の少き山村僻邑に住める人は是非一讀して置くべき必要あり。（定價參拾錢、頁明堂書店發行）

懸賞惡文募集

締切　九月十日

今や滿天下の人艶麗花の如く嬌飾玉の如き美人に醉ふこと久し本誌は敢て期するところあり、今こゝに眞實なる**惡文**を募集す。文の内容は敢て問はず毒舌可なり、皮肉可なり、人身攻撃又尤も可なり、この如くして他の惡感情を買ふ亦更に可なり、願くは滿天下の惡文家よ、其蘊蓄せる**毒筆**を揮ひ、毒惡辛辣の語を縱まゝにして以て醜惡を天下に流すの文を寄せたまへ、蓋し**惡婦人**の惡行を攻撃し、**惡紳士**の惡德を筆誅して以て濁流社會に**血清療法**を施すの實を得ば蓋し又惡文家の存在を價するや大なるべし。

賞金			
一等	金參拾圓	一名
二等	金貳拾圓	一名
三等	金拾圓	三名
四等	金五圓	五名

◎原稿は十枚以上の事。
◎原稿には必ず宿所姓名を明記する事。
◎封書には惡文と朱書ありたき事。

誌友倶樂部



▲月宮殿の出ますのを待つ間に緣日で買つて來ました金蓮草も日毎目を樂しましてくれました紫蘭も枯れ果てました。斯くして待ち侘びて居りました月宮殿を手にしました時の自分の嬉しさは如何でしたでせう貞を進むる寫眞の中に自分の愛して居ます内藤千代子樣を見付けました時復自分の嬉びは如何でしたでせう。女學世界と申せば千代子樣と申されるそのお顏は實にこの方であると自分は叫びました。文章の才能觀察力の異才はそのお顏の眉に表はれて居ますが私の最も敬愛する千代子樣今後とも毎號お振ひ遊はす樣に偏ほ併せまして壯健の程を願ひます。(菊香)

▲飛ぶは螢ゆるは蜂、これを眺めて湖畔に高樓あり。御なつかしき千代子樣の御うつしゑ私はあかず眺めて居りますの、燒け石に水とは博文館發賣の廣告とは云へ素的ね千代子樣と全盛だわ、中央の第一高女の方は眠つて被入る樣だけどお妹樣は立派な方ね。(おかか子)

▲綠濃き宵闇を啼くや血をはく時鳥南へ一聲：：あゝ待ちに待つた月宮殿は出ましたね。取る手をそしと見ましてよ内藤さんの箱から出た女を：：彩樣つて、ヽ程の美人でせうね、併しよれよりも皆樣諸湖畔の一日を御讀遊ばして右に在すのは千代子樣で中が石内樣左が千代子樣の妹君ではないでせうか、そうだとすればやはり千代樣はお若いはね、千代樣この後もどうぞお振ひ遊ばして頂戴な。(月見草)

▲おなつかしいこま子樣、私は今故鄕とは云へ淋しい田舍町に語るべき友もなく送る、十八の處女でございます。鈴蘭の花が咲いたり、アカシヤの花の咲く、詩的な北國の空がなつかしいと仰しやる方がございますけれど、胸の血の高鳴る若い私にはたまらなく淋しいのですもの：四年間も他に學んで歸りました故里は、淋しうございました。こんな不束な私でもお差支なくば御交り下さいまし。筆たゝぬ私はお恥しうございますが。同じ思の方と心行く迄お話がして見たうございます。皆樣もお差支なくばお交り下さいましね。次に今年新發田高女出身の田中政子樣の御住所御存じの方は御知らせ下さい。(紅薔薇)

▲清涼樣、内藤千代子樣の御本體はK先生ではなかろうかと伺つて私はハツト思ひました、釣草物語、私何度よんだかしれませんのK先生にして内藤的な御文章を拜見して意外に思つて居つた所でしたからけれども私共敬愛して居りましたK先生は決してさういふお方ではないと存じますわ、私はK先生や千代子樣方は一の關係といふも變ですが倶樂部のやうなものになつて居つて千代子樣は釣草物語中のK先生方と一高紀念祭にいらしつたといふ姫子寮中のお一人でそして澄子さんと向陵の夜月の須磨子さんは勿論同じ人それをK先生と千代子樣が表と裏とからお書きになつたんではないでせうかと存じますが皆樣は如何。(宮城野萩)

▲私の一番好きな方は與謝野晶子先生と内藤千代子樣の御二方樣で御座います晶子先生は先日洋行遊ばさいました由陰ながら御健全の程祈り上ます。(岡部元子)

▲月宮殿ほんとうにいゝのね箱から出た女。萩香さんの書きぶりも大へん淋しい悲しい風になつた樣だ。やつぱり弱き者汝の名は女なりとか云ふんでせうネホヽヽ。それよりか萩香さんの寫眞、やつぱり同性の方ですのネ、今迄千代ちやんを男だの御年寄だのおつしやつてた方の顏色が拜見したくつてよ。向つて右に襷を掛けて本を見てらつしやる方が内藤さんだワネエ記者樣さうでせう。千代子樣どし／＼振つて頂戴よ在米千代子樣違つてゐつてね失禮致しました許して頂戴私しも十七の少女ですから以後御交際をねがひます。(名古屋美佐)

▲待ちに／＼た内藤千代子樣の御寫眞拜見いたしまして何より嬉しく御座います然し中なるはと皆々まよつて居ります記者樣次號で御知らせ下さいませ(大阪稚代)

▲紀念增刊月宮殿に(東京の世帶を田舍の友へ知らせる文)をお書き遊した登志子樣のよくといた御觀察には眞に敬服の他はございませんわ私も十四年前には貴女樣と同じ意見を持つた一人でございます此後とも益々お振ひ遊して誌上をお飾り下さいまし京都も漸次進んで參りましたのは誠に私等のやうなお國自慢の者には喜ばしい事でございます(玉筵)

▲金澤の一小女様先頃四月一日の女學世界に高柳孝子氏の色白くなる云々の事は先づ御見合せよろしく存升分析の結果は申ませんがあぶら類には多少効能が御座りますがそれより硼酸を三十倍にとかして氣ながに使ふとよいさうですそれにレモン油を二三滴化粧の手水のたらひの中に入れて使ふふと色白くなるに効能あるさうですこれは人様の實驗談で御座ります硼酸があまりにこき時はかへつてあれるさうです（名なしより）

▲愛讀者諸姉様の内に家庭教師御採用下さる方はありませんか、妾しは今田舎に教鞭を取てなる者ですなるべくは大阪の方に願ひます、妾し浪花に二十の春を向へまして今は淋しい／＼所にきて居ります何卒今一度浪花に暮したう御座いますから御力になつて下さいな誌友倶樂部に御知らせを乞ふ（谷間の白百合子）

▲私は父に死別母兄には遠くはなれて看護婦の身となり便りに思ふなは行先不明昔から變らじ變るまじと誓ひし友は歸らぬ國へ旅立たれまして語るべき友もなく淋しく暮して居ります只朝夕の慰は此の女學世界ばかり姉様方どうぞ御交際遊ばして下さい（栃木縣上都賀郡今井いく子）

▲誌友の皆様、私は三四年前からの愛讀者でございます、まだ一度も誌友倶樂部へ投書致した事はございませんが、以後御交際下さいませ、都合で私は東京の中流以上の家庭へ、行儀見習にあがりたいのですが、皆様の中で何卒御世話下さる方はございますまいか、年齢は二十歳で高等女學校二年まで、いつて居ります、お心あたりの方は何卒誌上で御知らせ下さいませ、主人に對しては忠實につかへる覺悟でございます。（紀伊の里一少女）

▲七五三五分まはしと云ふ縫方に後七寸前五寸與身三寸五分と云ふのと又七五三各々五分まはすのとどちらが本とうでございますか次號の誌友倶樂部にて御教示を願ひます（誌友一人）

▲記者様に伺ひます、私事東京にてよき歌の先生につき度く存じますが、誰様が宜しくございますか、又御禮といふ様なものは大低いかほど位りものですか、御たづね致します（千葉春雨）

　神田區小川町佐々木信綱先生、赤阪區榎町五阪正臣先生、赤阪區新坂町八十二三宅花圃先生など

▲いつも／＼御名は本誌にて拜見いたしまだ見ぬ君ながらはるかに御慕ひ申して居ります白菊様私の夫は神戸日本郵船會社に奉職して居りますのいつかは私も御地に参らねばならない身でございますの。誠にぶしつけなる御願ひ事ながら以後誌上にてなりと御交り下さい（東京白菊）

▲相州の一少女様御手の甲のイボどんなにお氣にかけていらしやることでせう御察し申ます實は私もあなたと御同様四年も前から出來はじめまして出入三年も治療いたしましたけれど後から／＼と出來ていまだになほらずほんとうに困つて居ります私ばかりと思つて居りましたにあなたも困つて居らしやいますね、私は今では家へかへつて自宅療治をして居りますが更に効が見えません若し御さしつかへがなくば御住所御姓名を誌上で御しらせ下さいませんか。（奥州の一少女）

▲なつかしき誌友の皆様私は昨年から本誌を唯一の友と致して居ります果敢なき女ですの此度初めて投書致しました誠に不束者ですが何卒永久に御交際下さいまし近江愛知川のホワイトローズ様琵琶湖西岸の露の玉様お差支つかへなくば御住所御もらし下さいな私くしは湖東の山奥で淋しき月日を送つて居ります者よ以後御心安く願ひます（近江湖東にて朝顔）

▲京の野菊様おなつかしうございますわ、私れ御地の名聞くとたまらなくなつてしまひますの：：故あつて去るやよひの末には母や妹と共に御地を訪ひ嵐山の櫻の未だ蕾かたきをうらみ聖護院町すぎて加茂川の邊に出ては柳の芽に春風そよぐを喜び、春雨を小傘にさけて清水寺に詣で雨中の都もかくべつなど咲じましたものあゝ今は去つて幾百里、豐後の浦に暮す身しかし巾のリボンとインゲリッシュリーダーははなしませんのよ、やつぱり高女がなつかしいのこれから別府灣はだん／＼暮れてまゐります、京の野菊さまますこかやにませ（別府にて月見草）

▲栃木縣の諸姉様初め誌友の皆様方に一方ならぬ御厚情を蒙つて居りました下野ヴイナス會も克く外界幾多の誘惑に打勝つて爰に目出度滿二ケ年の定期を何等失態もなく全く致しました之即ち會員諸子が節義を重んじ熱誠以て事に當つた故でもありませうが亦直接間接に會と關係して居られた先輩並に會友の方々もあづかつて力あるものがあつた爲であります。乃で本會内規に基きまして八月下旬を期し第四回總會を兼花々しき散會式を擧行致します。就ては今日迄會の事務所を經て會員と文通されて居られた御方は以後直接會員と御交際して戴きたう御座いま

す。爰に貴重なる誌友倶樂部の紙上を借りて一寸おことわりまで――(六月十七日 下野ヴィナス會幹部)

▲天の川水まさるらし、夏の夜は流るゝ月のよどむまもなし、とよまれし頃となりました折から、おなつかしい咲子様、東都にいらつしやる菊千様、同じ都の千賀子様には、御きげん美しく御すごしなさいますか、思ひまはせば互とせの永き年月を、同じ窓にてまなびし友も、今は西に東に別れておとづれする人も、少なく只一人の友とたのむ、母校の三年の忘れな草様御一人のみ……咲子様、菊千様、すぎし昔文の舍の裁縫物にて、かたみにかたくちぎりしを、御忘れなく、いついつまでも御見捨てなく、御交りた、追々と暑くなりますから皆様御身御大切に(京橋白バラ)

▲枯れ小草様私も貴女と同じ尼になりたうござゐますの私の外にもまだそんなお方がやつぱりあるのかと一人思ひますさぞ何かそれには深い事情のある事でございませうお互にとうですか打明してなぐさめ合ふてはおさしつかへがなかつたら是非次號で御住所お知せ下さいませんか私お手紙差上ますから(筑後操子)

▲私は今度始めて女學世界の愛讀者の一人となりました皆々様宜しく御交際を願ひます殊に安房の姉妹様と親密に私の故郷は安房館山町の片田舍の者ですが今は都です。私は俳句を好みます(京都の武田靜子様)(三河の梅田英枝子様)芝の遠山久子様)差支なくば御住所を誌上まで記名様俳句の題は毎月出ますか隨意ですか又締切は何日ですか誌上で是非共御知らせを願ます近江の延澤みゑ子様御住所を、下記まで日本橋餘木草文方稲島梓枝●題隨意、投稿隨時記者

▲琵琶湖の西岸にて濱の玉様、滋賀にて白い薔薇様、所はちがつても同じ滋賀縣まことにおなつかしく存じます、露の玉様、あなたは西江州ですつて、私のとなりの家も西江州からひつこしていらしつつたのです、なほ／＼おなつかしく存じます、御二人様とも以後よろしく御交りを御願ひ致します(彦根城下にて穗月)

▲五月號に三好梅子様のお書遊ばした繁雜に處する心の修養を拜見いたし何卒私も佛教に依て明なる煩悶を打消し精神の安靜を得度と存じます片田舍の事とて何かよき佛教の本でも拜見致し度と思ますが何の本が宜敷や何卒御敎示を願升(藤子)

▲本誌愛讀者のひさ子様に申上ます先日は御親切なる御手紙まことに有難く拜見致しました御敎へ下されし乳淡みなためしもせでか様な事を申上ては失禮ですが私にはもはやきゝめがなきかと思はれますのよなぜなれば私はにや産後ゆめの内に四五ヶ月經過してしまつたのですこの問世人のよいと云ふあらゆるまれを致しましたが何等のこう力もありませんこれが私のもつて生れた不幸なのでせう乳はもうあきらめました此上はミルクにて御養育なされた方々の御經驗話を承はりたいまゝに誌友倶樂部のはしを御借り申した次第です先は御禮まで申上ます。(千葉菊聞せつ子)

▲過ぎ去つた本誌女學世界に見えました忘草様令孃評判記を御書きなされて私感服致しました向後不束な私を御導き下さいよ其他文學など好愛なさる藤子、千代子、同國にましまする桑原白梅、幸子、よれ子、さく子様の諸姉益々御勉強なして投稿し玉はれよ海外の皆様もご機嫌よう(千葉縣印旛郡安食町酒直にて二二九後藤藏正子)

▲皆様の内で小說「女殿下」お持ちの方はありませんか「誌上でどうかおしらせを。今私の手許に和歌入門大和なでしこ十部と和歌俳句資料と不用につきどなたになりともおゆづり致します。又以前京橋の銀座讀賣新聞社で發行して居ました婦人雜誌ムラサキといふ書物の發行所御存じの方はおそれ入りますが誌上でお敎へ下さいまし。(伊勢津市永田ふで子)

▲五月號に一等なりし京都大阪たかし様、まことにお歌敬服いたしました。何とぞますます御振ひあそばせ。二等なりし赤坂のさくら姫様、あなた様、おうた何てまあ御上手なのでしやう私も和歌は大好きですけれど、ほんとうに拙ないのでお恥しいのです。どうぞ此上とも一しほお振ひ遊ばして下さいまし。誌友の皆様何とぞお交り下さいまし。(伊勢津市丸之内本植稻掛方實枝子)

▲紀念増刊月宮殿にはほんとに名家諸先生の有益な記事且つ諸姉様方の御高作實に面白い事限りなしでした其から後の妻お出し遊ばした葉がくれ様私も貴女と同じ境遇にある一人ですが拜見致しまして私泣きましたよ葉がくれ様何も角も運命／＼とあきらめるより外ありませんのね何とぞ此後紙上で御交り下さいまし(異郷の月)

募集（八月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以內の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲短　文（一人一種）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲誌友俱樂部

△短文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館內女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△短　文

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢　郵稅一册二錢

四册（三ヶ月分）…前金七十五錢

八册（半ヶ年分）…前金一圓四十五錢

十六册（一ヶ年分）…前金二圓八十錢

定刊數…十二册（內増刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

廣告料

廿四字詰	一行	四半頁	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	……	五十五圓
一等	……	……	廿三圓	四十五圓
二等	……	十圓	十九圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓五十錢	十四圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず

●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す

●郵劵代用には一割増にて五厘一錢の切手に限る

●從日號御入用の方は二錢分相添申込あれ

不許複製

明治四十五年七月廿三日印刷納本

明治四十五年八月一日發行　第拾貳卷第拾壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　市川七作

印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

博通社 (博) 特賣品

博通社の商品は如何に善良安價確實でありますか

ホーム蓄音器 破天荒の提供

器械堅牢精巧音聲高調明瞭銷夏の好適物避暑の好伴侶として又家庭の娯樂用商店の廣告用歌曲の練習用として最適なれば此際大奮發大廉賣を致行するものなり

ホーム號蓄音器
ニッケル製喇叭

特價十四圓五十錢

奈良丸呂昇メ治等の十吋音譜盤

特價八十五錢

目錄無代進呈

荷造料五十錢
運賃は先拂にて送ります



八日持純銀側懷中時計

一回卷けば八日間は卷く必要なく時間正確にして優美なる事は圖に示す如く非常に好評博しつゝある



純銀側兩蓋付衛石入器械最優等
アンクル十六形　特價九圓八十錢

純銀側片硝子寶石入器械最優等
アンクル十六形　特價九圓三十錢

送荷料内地十二錢海外卅錢

衛生消毒濟敷島すき毛

一般の御婦人方の用ひられるーすき毛の中には最も恐るべき黴菌が寄生して居ちのであるが今般本社の賣出しましたのは衞生を重じ充分洗滌消毒せしものにして今や各女學校ー衞生を重ずる家庭等に於て盛に賞讃を博して居ます、衞生上缺いてはならない品である

五十玉分一箱

特價五十錢

送料内地拾錢海外卅五錢

衞生汗止

熱い夏御婦人方の御腰に卷かるゝ汗止用帶は數多くあるが此度本社で賣出した此衞生汗止は完全無缺として大に江湖に推奨せらる

一具特價五十五錢

送料内地海外共に四錢



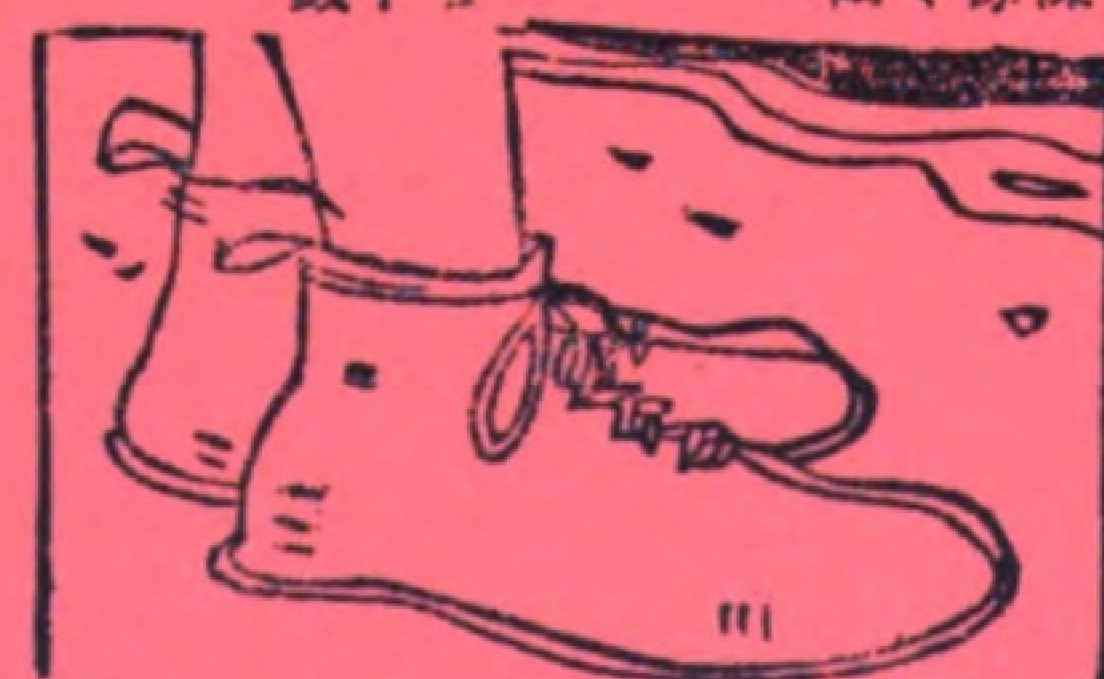
海水浴靴

熱い砂の上を裸足で歩くのは難岩の上を歩るくには痛くない衞生上缺けない

九文—十一文半　特價一圓十錢
七文—八文半　特價七十五錢
五文半—六文半　特價六十錢

御注文の節は袋の文數御知らせを乞ふ

送料内地



奥樣も御孃樣も博通社の賣品を一度御試し下さい

東京日本橋區本町一丁目　博文館代理部　博通社　電話本局六百四十番　振替口座東京五十番

（後付の二）

創刊七十叢書の一

文學博士　本居豊穎先生
文學博士　井上頼圀先生
文學博士　萩野由之先生
文學博士　關根正直先生
文學博士　池邊義象先生

校訂及註解

藤島武二畫伯
橋口五葉畫伯
意匠裝幀

空押及金
模様摺込
天金綴製
本頗瑰麗

菊判總クロース上製
口繪及密畫挿入
本文ー新鑄十ポイント組
註解ー六號活字組

校註 國文叢書

第一期刊行十二冊（凡隔月一冊發行）毎巻（七百五十頁乃至千餘頁）

□第一巻　七月中發行

總紙數約壹萬頁

■正價一冊金壹圓（小包料内地十二錢）

□特價十二冊金拾圓（外に小包料を要す）

一國の富强、文明は國民の自信力に原因す。自信力無き國民は富强の民たる能はず、文明の俗たる能はず。自信力は己を知りて彼を知るに起る、己を知るは我が歴史に通曉するに在り。我が文學を精究するに在り。此の如くにして、初めて我が國情明かに、その長所は愈々之に培ひ、その短所は速に之を補ひ、以て己を完うせむとするに至るべきなり。これ實に國民の本分たらむ。弊館創業以來、夙に心血を此に濺ぎ、この種の事業に向つて、世に貢獻せしこと鮮少ならずと信ず。就中曩に一般に紹介せし『日本文學全書二十四編』の如きは、蓋し久しく棄られたりし我が歴史的文學の復興普及に先鞭を著けしものにして國文復興、國文獨立の聲はこれによりて喚び起されたることは世人も均しく認めらるゝ所ならむ。

東京博文館

創刊七大叢書の一

文學博士 幸田露伴先生
饗庭篁村先生
塚原澁柿先生 校訂

藤島武二畫伯
橋口五葉畫伯 裝幀

文藝叢書

第一期刊行（凡隔月發行）十二册——紙數約壹萬頁（毎巻七百五十頁乃至千餘頁）

■正價一册金壹圓（小包料内地十二錢）■特價十二册金拾圓（外に小包料を要す）

空押及金模様摺込
天金縁製本頗瑰麗

菊判總クロース上製
毎巻挿繪數十個挿入
新鑄十ポイント活字 十七行、四十八字詰
□第一巻 七月中發行

本書は時代の有理なる熱烈の要求に應せんが爲めに出でたり時代は威力の絶大なるものを求む。本叢書の具する威力が絶大にして効果の雄偉なるは、廉價と良質と精確と優麗とを提げて精神上及び物質上の大勢力を背後に有しつゝ、本書の巨軀を江湖に現出するの日に於て直に分明せん。見よ、見られん。比較

饗庭篁村先生 校訂

忠臣藏文庫

紙數九百頁
挿書數十個

□いろは文庫（小説）全十八編五十四巻 爲永春水作
□忠臣水滸傳（小説）全十編 山東京傳作
□假名手本忠臣藏（淨瑠璃）全十一幕 竹田出雲作
□四十七石忠矢計（脚本）全十幕 河竹默阿彌作
一名 忠臣藏十二時（十九場）

東京博文館

創刊七大叢書の一

せよ、比較せられん。審重に判斷せよ。判斷せられて而して後是認せられ採擇せられんことを欲するは進歩せる時代の出版界の最善最正の商理なることを信じて本書を新刊す。文藝の價値の如きは江湖既に知る復贅説を要せざる也。

文藝叢書（第一期刊行）書目

卷	書名	著者
第一卷	忠臣藏文庫	饗庭篁村
第二卷	椿説弓張月・俊寛僧都島物語・頼豪阿闍梨怪鼠傳	幸田露伴
第三卷	西鶴文集	幸田露伴
第四卷	道中膝栗毛全集	饗庭篁村
第五卷	俠客全集	塚原澁柹
第六卷	演劇脚本集	饗庭篁村
第七卷	忠義復讐傳	塚原澁柹
第八卷	南總里見八犬傳（前編）	幸田露伴
第九卷	南總里見八犬傳（中編）	幸田露伴
第十卷	南總里見八犬傳（後編）	幸田露伴
第十一卷	世話浄瑠璃名作集	饗庭篁村
第十二卷	紀行文編	幸田露伴

赤穗四十七義士の事蹟は、我日本武士道の精華なり。千載の後、猶ほ人をして感奮興起自ら禁ぜざらしむ。『忠臣藏文庫』は實にその事蹟に由りて創作せられたる古來幾多の傑作中の傑作を蒐集編纂したるなり、中に脚本あり小説あり、浄瑠璃あり、紅紫絢爛交々眼前に迫るの慨あり。大方の士君子は論無し、婦女子と雖も、猶ほこれに由つて、忠臣義士の苦衷、烈婦節女の志操、輿丁走卒の義烈を識り、殆んど卷を擱くに堪へざらしめんとす。聞説く古來「忠臣藏」を上場して大入を博せざる劇場なしと『忠臣藏文庫』は實に其稗史也、其脚本也、乞ふ一讀せられよ

東京博文館

福岡秀猪君校閲
前田越嶺君
前田雪子女史　共著

新式 中等佛語獨修

四六判脊クロース製
紙數三百廿餘頁　正價八十錢　郵税八錢

世には英語獨修書に乏しからざれども、佛語獨習書は甚だ尠し、本書は既刊の『初等佛語獨修』に次で今回新たに發刊したるものにして、各種の佛文章（讀本、傳記、物語、歷史、訓言等）と初等佛文典とを師に就かずして獨修し得るやう、讀方をも意味をも丁寧親切に致へたる最近の中等佛語獨習書なり『初等佛語獨修』の讀者は勿論、多少佛語の素養ある者には無二の師、好恰の友なり。

四版

新式 初等佛語獨修

四六判背クロース百八十頁
正價四十錢
郵税六錢

東京本町　博文館

□新らしき時代に適應の新らしき獨修書□

陸軍大學校教官五十嵐清先生校閲
前陸軍通譯山口虎雄君著

新式實用露語獨修

四六判總布上製
紙數三百八十餘頁　正價壹圓　郵税八錢

日露兩國民の交渉が、通商、産業其他諸方面に亙り繁劇ならんとする際、其の語學を修めんとするに良書なきは一大恨事なり。本書は此の必要に應ぜん爲め著者が多年の經驗に基き編纂せしものにして初めて露語を學ばんとする人に解し易き樣極めて詳細、平易且つ懇切に解說せりと雖又以て既に學修せし人々の爲めにも唯一の最も良き參考書たるべし。

此の書收むる所は發音、文字の綴方、讀方等の初歩より順次簡易なる文法の解說、日常、旅行等に必要なる會話――飛行機及び飛行船に就て等の新專項あり――及び書簡其他の各種文例を例擧し附するに陸海軍用術語を網羅せる兵語集を以てする等社會各方面の人士に有用なる最新式のもの也。

東京本町　博文館

女（後付の七）

新時代の要求に應じて出でたる
婦女教訓の活文字!!!

堀内新泉君著

常識讀本 現代女大學

●花嫁の卷…………（紙數二百八十頁 正價五十五錢 郵税八錢）

和装菊判 装幀優美

◎他人の家庭に入り新時代の花嫁として成功せんと欲する滿天下の處女は先づ本書を讀め！

◎新時代の良妻を娶り内顧の憂ひを一掃し揮身業務の人と爲り一大奮闘を試みんと欲する滿天下の青年は先づ本書を讀め！

◎我が最愛の娘をして他人の家庭に賞讃すべき花嫁として大成功せしめんと欲する滿天下の父母は先づ本書を讀め！

◎我が子に良妻を娶り一家子孫の大繁榮を期せんと欲する滿天下の舅姑は先づ本書を讀め！

◎既に他人の家庭に入りて人の妻となり未だ家風に通せず家事に馴れず日夜徒らに煩悶せる滿天下の花嫁は特に直ちに本書を讀め！！

■在來の女大學は直ちに以て今日の時代に適用すべからず著者之を憂ひて茲に新時代の女大學を作る先づ婦女の本分より筆を起して花嫁生活、常識の應用、花嫁と心情、花嫁の品位、速に夫の家族と同化せよ、速に夫の家風に馴れよ、急進主義の花嫁、家庭と老人、夫に事へる道、舅姑に對する事へ方、小舅小姑に對する心得、親類並に世間の交際、心の持方、花嫁日常十則等總て易皆現代を表準として何れの家庭にも直ちに之を適用して其效果を收め得べき空前の活文字！若夫れ現代處女にして本書一冊を携へんか如何なる複雜なる家庭に入るも新時代的花嫁として成功せん事疑ひ無し苟くも現代社會に婦女として大成せんと欲する者は須らく時勢に疎き死書を抛つて千山萬岳日の將に發せんとする如き此の一大活書を讀め!!!

東京 博文館 本町

女（後付の八）

PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND-CLASS MAIL MATTER.

女學世界 第拾貳卷第拾壹號 (毎月一回廿三日印刷納本)

明治四十五年七月廿三日印刷納本